

京都市内遺跡発掘調査報告

平成17年度

2006年3月

京 都 市 文 化 市 民 局

ご あ い さ つ

京都市は、794年の平安京の建都以来、日本独自の華麗で繊細な文化を育て、今も文化的創造力を失わない都市であり、世界に誇る数多くの文化遺産に恵まれた歴史都市であります。市内には多くの埋蔵文化財包蔵地があり、古代から近世までの時代ごとに積み重なった遺跡は、わが国の歴史や文化を教えてくれる国民共有の貴重な財産であり、将来にわたって日本文化を発信していくうえでその基礎を成すものです。

一方、都市機能を維持し、市民生活を向上させるために不可欠である開発行為は増加傾向にあり、埋蔵文化財の保護に重大な影響を与えかねない状況にあります。本市では、現代に生きる私たちの生活の向上を図りつつ、先人が残してくれた貴重な埋蔵文化財を後世に伝える責務があると考え、「保存」と「開発」の調和を図る中で、埋蔵文化財の保護に取り組んでおります。

この度、平成17年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査結果の報告書を作成致しました。試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターが実施し、発掘調査、立会調査及び分布調査は財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施したものです。

各調査の実施に当たり、御理解、御協力を賜りました市民の皆様と御指導、御助言を賜りました関係機関の皆様に深く感謝申し上げますとともに、本報告書が京都の歴史と文化財に対する理解を深めるためにお役に立てば幸いです。

平成18年3月

文化市民局長 柴田重徳

例 言

- 1 本書は、京都市文化市民局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した文化庁国庫補助事業による平成17年度の京都市内遺跡発掘調査報告である。
- 2 調査地は、下記のとおりである。
 - I 平安宮中務省跡 上京区竹屋町通千本東入主税町1127番地4
 - II 北白川廃寺跡 左京区北白川大堂町55-1の一部、55-2
 - III 上京遺跡 上京区小川通寺之内上る本法寺前町613
 - IV 山科本願寺跡（1） 山科区西野左義長町13番地2
 - V 山科本願寺跡（2） 山科区西野山階町30
 - VI 山科本願寺跡（3） 山科区西野山階町30
 - VII 山科本願寺跡（4） 山科区西野山階町28-5、28-6
- 3 本書の執筆分担は、下記のとおりである。
 - I 南出俊彦
 - II 1～4：布川豊治、5：北野信彦（当所客員指導研究員 ぐらしき作陽大学助教授）
 - III 長戸満男
 - IV 小檜山一良
 - V 清藤玲子
 - VI 柏田有香
 - VII 1～4：柏田有香、5：北野信彦
- 4 整理作業および本書の作成には、上記の執筆者のほかに以下の者が参加した。
出水みゆき（遺物彩色）、村上 勉（遺物復元）、本田憲三、竜子正彦（保存処理）
- 5 本書に使用した写真の撮影は、主に村井伸也・幸明綾子が担当し、遺構の一部は現場担当者が行った。
- 6 本書で使用した土壌名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。
- 7 測量基準点は、京都市遺跡発掘調査基準点を使用した。調査における測量基準点の設置は宮原健吾が行った。本書中で使用した方位および座標の数値は、日本測地系（改正前）平面直角座標系VIによる。また、標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。
- 8 本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の京都市都市計画基本図「船岡山」「田中」「聚楽廻」「山科」を調整したものである。
- 9 本書の編集は、前田義明・柏田有香・児玉光世が行った。

本文目次

I 平安宮中務省跡

1. 調査経過	1
(1) 調査経過	1
(2) 遺跡の位置と環境	2
(3) 周辺の調査	3
2. 遺構	3
(1) 層序	3
(2) 遺構	6
3. 遺物	10
(1) 土器類	10
(2) 瓦類	11
4. まとめ	13

II 北白川廃寺跡

1. 調査経過	15
2. 遺構	17
(1) 基本層序	17
(2) 第1面	17
(3) 第2面	17
3. 遺物	24
(1) 瓦類	24
(2) 土器類	32
(3) 金属類	32
4. まとめ	33
5. 軒平瓦(8)に付着した赤色顔料に関する調査	36
(1) はじめに	36
(2) 調査方法	36
(3) 調査結果	37

III 上京遺跡

1. 調査経過	39
---------	----

2. 位置と環境	40
3. 遺構	41
(1) 基本層位	41
(2) 遺構の概要	43
(3) 室町時代の遺構	43
(4) 江戸時代の遺構	43
4. 遺物	45
(1) 遺物の概要	45
(2) 室町時代の遺物	46
(3) 桃山時代の遺物	47
(4) 江戸時代の遺物	48
5. まとめ	51
(1) 室町時代	51
(2) 桃山時代	51
(3) 江戸時代	51

IV 山科本願寺跡（1）

1. 遺跡の位置と環境	53
(1) 位置と地理的環境	53
(2) 歴史的環境	53
(3) 周辺調査	59
2. 調査経過	60
3. 遺構	62
(1) 基本層序	62
(2) 遺構の概要	62
(3) 室町時代の遺構	62
(4) 桃山時代の遺構	69
4. 遺物	69
(1) 遺物の概要	69
(2) 平安・鎌倉時代の遺物	69
(3) 室町時代の遺物	69
(4) 桃山時代の遺物	72
(5) 江戸時代の遺物	72
5. まとめ	73

V 山科本願寺跡（2）

1. 調査経過	78
2. 遺構	78
(1) 遺構の概要と層序	78
3. 遺物	81
4. まとめ	82

VI 山科本願寺跡（3）

1. 調査経過	83
2. 遺構	84
(1) A区	84
(2) B区	90
3. 遺物	90
(1) 土器	90
(2) 瓦類	95
(3) 金属製品・壁土・その他	97
4. まとめ	97

VII 山科本願寺跡（4）

1. 調査経過	101
2. 遺構	102
(1) 基本層序	102
(2) 遺構	102
3. 遺物	111
(1) 土器類	111
(2) 埴	118
(3) 玉類	118
(4) 金属製品	119
(5) 木製品	120
(6) その他	121
4. まとめ	122
(1) 建物について	122
(2) 輸入陶磁器類について	124
(3) ガラス玉について	125

5. ガラス玉の定性分析結果報告	128
(1) はじめに	128
(2) 調査方法	128
(3) 調査結果	129

図 版 目 次

図版 1	山科本願寺跡 (4)	遺構	1 調査区前景 (東から)
			2 土壌 3 焼土堆積状況 (北から)
図版 2	山科本願寺跡 (4)	遺物	1 玉類
			2 多彩磁器
図版 3	山科本願寺跡 (4)	遺物	1 青磁外面
			2 青磁内面
図版 4	山科本願寺跡 (4)	遺物	1 染付外面
			2 染付内面
図版 5	山科本願寺跡 (4)	遺物	1 白磁
			2 焼締・施釉陶器
図版 6	山科本願寺跡 (4)	遺物	1 鉄釉陶器外面
			2 鉄釉陶器内面
図版 7	山科本願寺跡 (4)	遺物	蒔絵
図版 8	山科本願寺跡 (4)	遺物	堆黒・漆製品
図版 9	平安宮中務省跡	遺構	1 1区平安時代建物全景 (北から)
			2 1区平安時代前期土壌群 (北から)
			3 2区平安時代遺構面全景 (東から)
図版10	平安宮中務省跡	遺物	出土遺物
図版11	北白川廃寺跡	遺構	1 第1面全景 (東から)
			2 南面回廊北端検出状況 (東から)
			3 礎石据付穴検出状況 (北から)
図版12	北白川廃寺跡	遺構	1 第2面全景 (手前は未掘、東から)
			2 南拡張区全景 (東から)
図版13	北白川廃寺跡	遺構	1 礎石根固め検出状況 (北から)
			2 東壁断割断面 (北西から)
			3 セクション断面D-D' (西から)

図版14	北白川廃寺跡	遺構	1 北壁西半断面（南東から） 2 北壁西面回廊基壇断割断面（南東から）
図版15	北白川廃寺跡	遺構	1 南壁南面回廊・西面回廊基壇断割断面（北東から） 2 南壁南面回廊・西面回廊基壇版築状況（北から）
図版16	北白川廃寺跡	遺物	軒丸瓦・軒平瓦
図版17	北白川廃寺跡	遺物	軒平瓦
図版18	北白川廃寺跡	遺物	軒瓦の技法・平瓦の叩き
図版19	北白川廃寺跡	遺物	丸瓦・土器類・金属類
図版20	北白川廃寺跡	自然科学分析	
図版21	上京遺跡	遺構	1 調査区全景（西から） 2 溝9（北から） 3 土壙5土器出土状況（東から）
図版22	上京遺跡	遺構	1 石組43（西から） 2 石室6（北東から） 3 落込1土器出土状況（南東から） 4 埋納遺構7土器出土状況（東から）
図版23	上京遺跡	遺物	出土遺物
図版24	上京遺跡	遺物	出土遺物
図版25	山科本願寺跡（1）	遺構	1 1区全景（北東から） 2 2区全景（北から）
図版26	山科本願寺跡（1）	遺構	1 1区堀8断面（東から） 2 1区堀9断面（北から） 3 1・2区堀7断面（西から） 4 1区堀22（西から）
図版27	山科本願寺跡（1）	遺構	1 1区建物23（北西から） 2 2区堀9断面（北から） 3 2区礎敷き92（南東から）
図版28	山科本願寺跡（1）	遺物	出土遺物
図版29	山科本願寺跡（2）	遺構	1 調査区全景（南西から） 2 土塁（北西から） 3 断割り北壁断面（南西から）
図版30	山科本願寺跡（3）	遺構	1 A区第1面全景（南西から） 2 A区第2面全景（東から）
図版31	山科本願寺跡（3）	遺構	1 泉状遺構6（東から） 2 土器集中部7（北から）

			3 排水溝 8 (西から)
図版32	山科本願寺跡 (3)	遺構	1 B区暗渠 (西から) 2 B区暗渠内部 (西から)
図版33	山科本願寺跡 (3)	遺物	土師器・陶器
図版34	山科本願寺跡 (3)	遺物	埴・道具瓦
図版35	山科本願寺跡 (3)	遺物	1 陶磁器 2 鉄釘 3 壁土
図版36	山科本願寺跡 (4)	遺構	1 焼成土壙 1 (西から) 2 倒れこんだ壁土 (北西から) 3 柱列179布掘掘形 (西から) 4 柱列179布掘掘形掘り下げ (西から)
図版37	山科本願寺跡 (4)	遺構	1 庭園遺構全景 (東から) 2 石敷き163 (北東から) 3 石敷き163下層 (南西から)
図版38	山科本願寺跡 (4)	遺構	1 井戸27 (北から) 2 集石125 (北から) 3 集石12 (西から)
図版39	山科本願寺跡 (4)	遺物	瓦質土器・土師器・埴
図版40	山科本願寺跡 (4)	遺物	金属製品・石製品・その他

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 2,500)	1
図 2	調査区配置図 (1 : 200)	2
図 3	調査前全景 (北から)	3
図 4	周辺の調査位置図 (1 : 1,000)	4
図 5	1区北壁・東壁断面図 (1 : 80)	7
図 6	遺構実測図 (平面図 1 : 100、断面図 1 : 80)	8
図 7	建物 1 柱穴実測図 (1 : 50)	9
図 8	遺物拓影・実測図 (1 : 4)	12
図 9	平安時代遺構平面図 (1 : 150)	13
図10	調査地位置図 (1 : 2,500)	15
図11	調査区配置図 (1 : 400)	16

図12	調査前風景（東から）	16
図13	第1面遺構平面図（1：80）	18
図14	第2面遺構実測図（1：80）	19
図15	礎石据付穴平面および断面実測図（1：40）	21
図16	断面実測図1（1：50）	22
図17	断面実測図2（1：50）	23
図18	柱穴列実測図（1：40）	24
図19	軒丸瓦拓影および実測図（1：4）	26
図20	軒平瓦拓影および実測図（1：4）	27
図21	1980年調査出土軒平瓦	28
図22	素文軒平瓦拓影および実測図（1：4）	29
図23	丸瓦・平瓦拓影および実測図（1：4）	30
図24	平瓦拓影および実測図（1：4）	31
図25	出土土器実測図（1：4）	32
図26	金属類実測図（1：4）	32
図27	主要遺構配置図（1：200）	35
図28	赤色顔料分析グラフ	38
図29	調査前全景（南西から）	39
図30	調査位置図（1：2,500）	39
図31	調査区配置図（1：400）	40
図32	遺構実測図（1：80）	42
図33	個別遺構実測図（1：40）	44
図34	溝9遺物実測図（1：4）	46
図35	遺物実測図（1：4）	47
図36	輸入陶器実測図（1：4）	48
図37	石室6遺物実測図（1：4）	48
図38	銭貨拓影（1：2）	50
図39	石造物拓影（1：6）	50
図40	周辺遺跡分布図（1：25,000）	54
図41	既往調査位置図（1：4,000）	56
図42	山科古図（一部、京都府立洛東高校所蔵）	58
図43	昭和初期の山科西野地区（昭和11年製版）（1：5,000）	58
図44	航空写真（南から 1997年撮影）	59
図45	調査位置図（1：2,500）	60
図46	調査区配置図（1：400）	61

図47	調査前全景（南から）	61
図48	調査区平面図（1：200）	63
図49	調査区断面図（1：100）	64
図50	堀断面図（1：50）	66
図51	柵列平面図・断面図（1：50）	67
図52	柱穴5平面図・断面図（1：50）	68
図53	土壇6平面図・断面図（1：50）	68
図54	遺物実測図（土器1：4 石仏1：6）	71
図55	遺構の変遷（1：400）	74
図56	調査前全景（南西から）	78
図57	作業風景（南から）	78
図58	地形測量図（1：300）	79
図59	断面図（1：50）	80
図60	遺物実測図（1：4）	81
図61	調査前全景（南から）	83
図62	B区暗渠写真撮影風景	83
図63	A区第1面遺構平面図（1：150）	84
図64	A区第2面遺構平面図（1：100）	85
図65	A区試掘トレンチ北壁および北壁断面図（1：80）	86
図66	泉状遺構6断割断面図（1：40）	87
図67	泉状遺構6・排水溝8平面図および景石立面図（1：50）	88
図68	B区暗渠平面図および東壁断面図（1：50）	89
図69	土塁1構築土出土土器実測図（1：4）	90
図70	排水溝8・泉状遺構6出土土器実測図（1：4）	91
図71	土器集中部7出土土器実測図（1：4）	92
図72	土壇3・炉跡4・土取り穴群5出土土器実測図（1：4）	94
図73	B区暗渠掘形出土土器実測図（1：4）	95
図74	雁振瓦・輪違い使用例	95
図75	埴・道具瓦拓影および実測図（1：6）	96
図76	鉄釘実測図（1：2）	97
図77	調査前全景（南から）	101
図78	調査区配置図（1：400）	101
図79	調査区遺構平面図（1：100）	103
図80	西壁および南壁断面図（1：50）	104
図81	土壇3・土壇17実測図（1：40）	105

図82	焼成土壙1実測図（1：20）	105
図83	柱列179・180・181実測図（1：40）	107
図84	溝15・溝16・池14・石敷き163実測図（1：50）	108
図85	井戸10・27実測図（1：40）	109
図86	集石12・125実測図（1：20）	110
図87	焼成土壙1出土土器実測図（1：4）	117
図88	各遺構出土土器実測図（1：4）	117
図89	埴拓影および実測図（1：6）	118
図90	ガラス玉拡大写真	119
図91	鉄釘実測図（1：2）	119
図92	堆黒顕微鏡写真	120
図93	金属滴顕微鏡写真	121
図94	1974年調査地合成平面図（1：200）	122
図95	『法然上人絵伝』卷十四（二十紙）の一部（知恩院所蔵）	123
図96	土師器皿（110）蛍光X線分析グラフ	131
図97	ガラス玉蛍光X線分析グラフ	132

表 目 次

表1	調査一覧表	5
表2	遺構概要表	6
表3	遺物概要表	11
表4	遺物概要表	25
表5	遺構概要表	41
表6	遺物概要表	49
表7	山科本願寺関係略年表	55
表8	既往調査一覧表	57
表9	遺構概要表	62
表10	整地層他の遺物の時期	69
表11	遺物概要表	70
表12	遺構概要表	80
表13	遺物概要表	81
表14	土器集中部7出土土師器形態分類表	93
表15	遺物概要表	94

表16	出土遺物概要表	111
表17	土器種別破片数・出土比率	112
表18	陶磁器概要表	113
表19	出土玉類分類表	119

I 平安宮中務省跡

1. 調査経過

(1) 調査経過

調査地は、京都市上京区竹屋町通千本東入主税町1127番地4であり、この地に小規模共同住宅が建設されることになった。京都市埋蔵文化財調査センターの国庫補助事業として財団法人京都市埋蔵文化財研究所に発掘調査を委託し、実施することになった。

今回の調査地は、平安宮中務省跡と推定される箇所である。中務省跡の発掘調査は他の宮内に比べて調査が進んでおり、これまでに20箇所ほどで行われ、それぞれに大きな成果を上げている¹⁾。中でも平成元年度（1998）に行われた調査は当調査地に東接しており、その際に平安時代の建物跡や土壌などを検出している²⁾。

今回の調査では、平成元年度調査で検出した2棟の建物跡、土壌の全容を明らかにすること、中務省西面築地跡の検出、さらに古墳時代の集落跡である聚楽遺跡の確認などを目的とした。

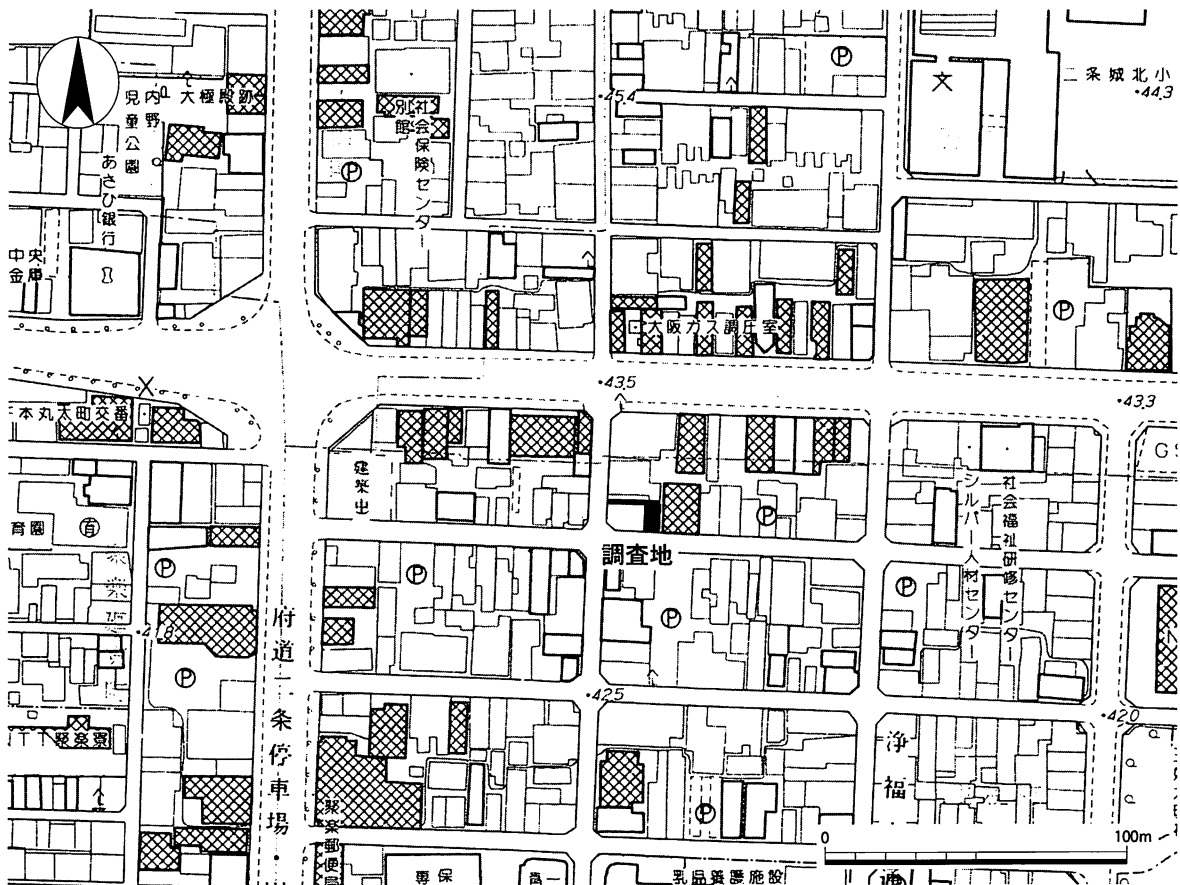


図1 調査位置図 (1:2,500)

(2) 遺跡の位置と環境

調査地は、千本丸太町交差点の東側に位置し、周辺は木造家屋とコンクリートビルが混在した市街地である。調査地周辺の標高は42.8～43.0mである。調査地は北から南に緩やかに下がる地形を呈している（比高差約40cm）。

調査地周辺は、縄文時代から古墳時代の集落遺跡である聚楽遺跡の範囲に含まれ、竪穴住居・溝などの遺構が検出され、土師器・須恵器・石器などが出土した。

平安時代になると当地域は平安宮域となる。平安宮の復元によると、調査地は平安宮南東官衙群の内、中務省正庁域の南西部にあたる。この区画（図4）は、北を中御門大路延長（現樫木町通）、東を壬生大路延長（現美福通・旧智恵光院通）、南を春日小路延長（現北郁芳門通）、西は朱雀大路延長（現千本通）と坊城小路延長との中間を通るラインで囲まれる。『陽明文庫』「宮城図」によると、区画の南半部西側に中務省正庁、その北側西寄りに内舎人があり、北側東寄りに監物、監物の東隣に鈴鑰、鈴鑰の南に陰陽寮が配されている。

中務省を含む諸官衙は平安時代後期から鎌倉時代頃には廃絶し、中世にはこの地域は「内野」と呼ばれる地域となっていた。当地域が再び開発されるのは江戸時代になってからで、慶長五年（1600）に「二条御城」の北側に京都所司代下屋敷が造られる。調査地はその敷地の東部にあたる。屋敷の跡地は、明治3年（1870）には京都監獄となり、昭和6年（1931）に山科に移転し、これ以降当地域は町屋となり現在に至っている。

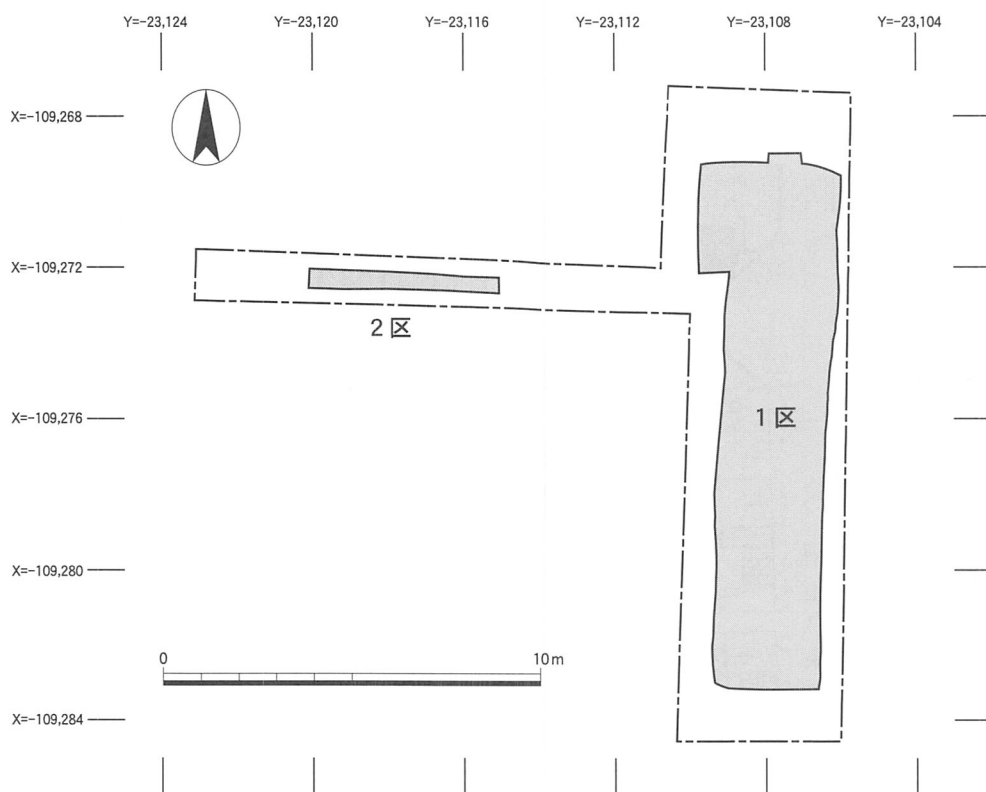


図2 調査区配置図（1：200）

(3) 周辺の調査 (図4、表1)

調査地周辺で行われた、これまでの発掘調査・試掘立会調査は一覧表(表1)のとおりである。ここでは、今回の調査に関連の深い平成元年度、3年度、6年度の調査について以下に概略を述べておく。

平成元年度の調査地(調査9)は今回の調査地の東に隣接する調査地である。標高42.5mで平安時代中期の整地層、42.2mで平安時代前期の建物跡2棟とそれに先行する祭祀的な性格をも



図3 調査前全景(北から)

つとされる土壌を検出した。中期の整地層は昭和53年度の調査でも検出していることから、この時期に整備されたことが窺える。

平成3年度の調査地(調査15)は千本丸太町交差点の東北、住宅街の一角である。この調査は標高43.0mで中務省西面築地跡と西側側溝、暗渠、北面築地跡と南側側溝などを検出した。西面築地は座標値 $Y=-23,117$ 付近をとおり。北面築地心は $X=-109,207.5$ 付近をとおり。また、西面築地跡が極めて良好に遺存していたため、築地細部の様子を具体的に知ることができた。とくに、築地塀そのものの幅(210cm)をほぼ確定することができた。この調査は中務省の北西隅を確定することができ、平安宮の実態を知る大きな手がかりとなった。

平成6年度の調査地(調査19)は中務省西面築地に該当する。この調査では部分的にはあるが、西面築地の基底部とそれに伴う外溝を検出した。築地心想定線は $Y=-23,118$ 付近をとおり、外溝は $Y=-23,120$ 付近をとおり。

2. 遺 構

(1) 層 序 (図5)

調査地の基本層位は、1区では厚さ20~30cmの盛土以下、にぶい黄褐色砂泥(10YR4/3)の近現代整地層、灰黄褐色砂泥(10YR4/2)、暗褐色砂泥(10YR3/3)、黒褐色砂泥(10YR3/2)などの平安時代中期とみられる整地層、黄褐色粘質土(10YR5/6)、褐色砂泥(10YR4/6)、褐色砂泥(10YR4/4)などの基盤層(地山)となっている。今回の調査で検出した遺構は、標高42.5mで平安時代中期整地層上面、その整地層を除去した標高42.3mの地山上面に成立している。遺構には柱穴、土壙などがある。

2区は塩化ビニール製および陶製の管理設により地山面直上まで攪乱を受けていたが、標高約42.6mで土壙や溝状遺構などを検出した。

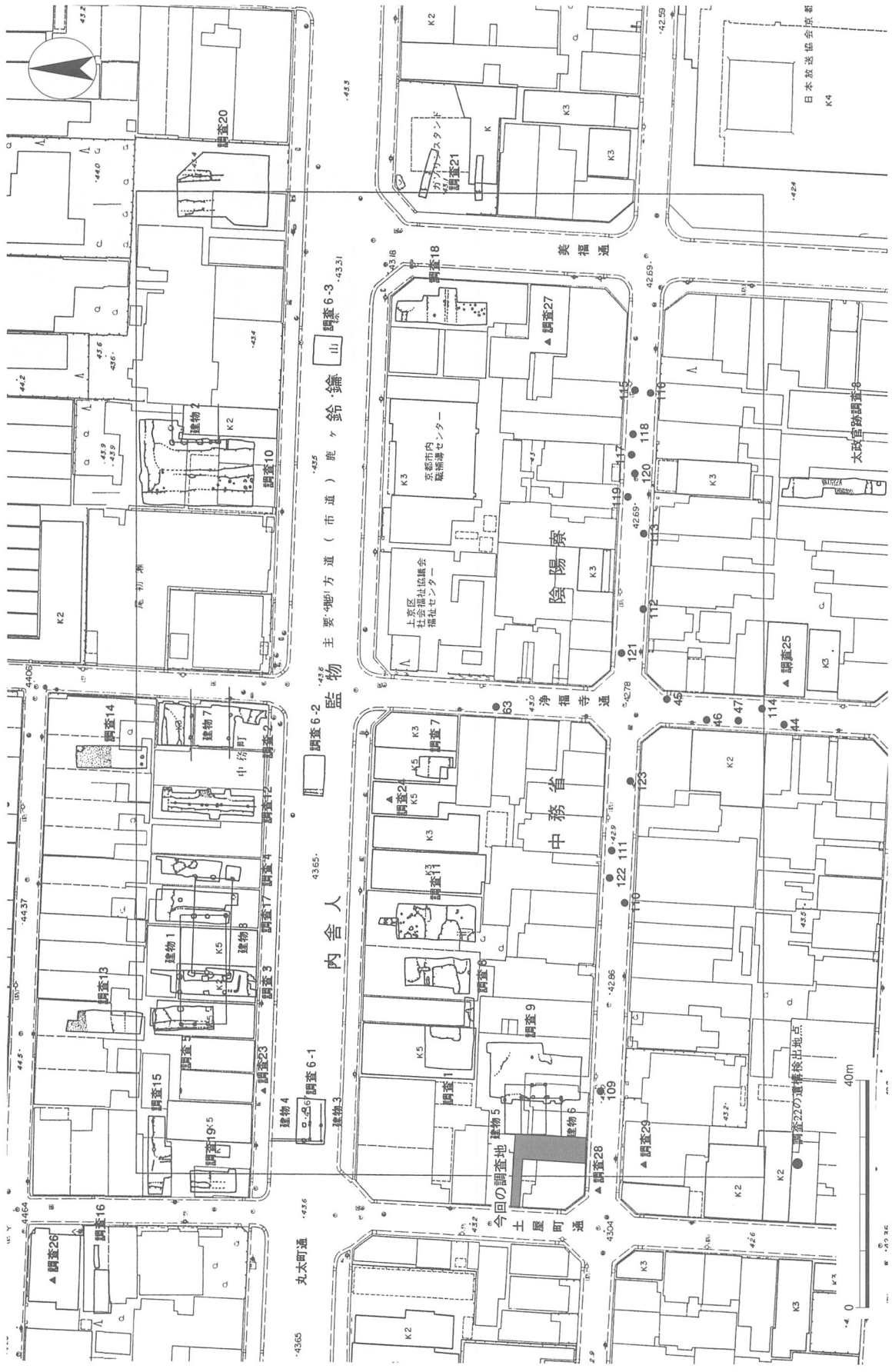


図4 周辺の調査位置図 (1:1,000)

表1 調査一覧表

調査番号	調査種類	調査年度	調査推定地	主要遺構	主要遺物	引用文献
1	発掘	1978	正庁域	土壌	平安時代の一括土器	1
2	発掘	1978	監物	礎石建物、溝		1
3	発掘	1979	内舎人	掘立柱建物、礎石建物		2
4	発掘	1995	内舎人	礎石建物、溝、土壌	墨書土器「内舎人」	19
5	発掘	1980	内舎人	北面築地内溝	墨書土器「口省」、緑釉陶器火舎	3
6	発掘	1995	内舎人・監物・鈴鑰	柱列、溝		19
7	発掘	1983	正庁域	溝		4
8	発掘	1987	正庁域	土壌、溝	平安時代前期の一括土器	9
9	発掘	1990	正庁域	掘立柱建物、土壌		11
10	発掘	1994	鈴鑰	北面築地内溝、南北築地、掘立柱建物	瓦多量	17
11	発掘	1990	正庁域	溝、土壌	瓦多量	11
12	発掘	1991	内舎人・監物	北面築地内溝、南北築地、暗渠		13
13	発掘	1992	北面築地	築地、外溝、道路敷		14
14	発掘	1992	北面築地	築地基底部、道路敷		14
15	発掘	1992	内舎人	北面・西面築地、溝、暗渠		14
16	発掘	1992	中務省隣接地	整地層		14
17	発掘	1993	内舎人	北面築地内溝・建物		15
18	発掘	1994	陰陽寮	柱穴、溝		16
19	発掘	1995	西面築地	西面築地、外溝		18
20	発掘	1995	東面築地	東面築地・内外溝		19
21	試掘	1991	東面築地	南北溝		12
22	立会	1995	朝堂院、太政官、中務省	南面築地外溝、基壇状遺構、柱穴、溝		19
23	立会	1995	内舎人	遺物包含層		19
24	立会	1984	正庁域	遺物包含層		5
25	立会	1985	南面築地	遺物包含層		6
26	立会	1986	中務省隣接地	遺物包含層		7
27	立会	1987	陰陽寮	南北溝		8
28	立会	1994	西面築地	築地外溝		17
29	立会	1991	西面築地	土壌		10

(2) 遺 構

1 区の遺構

1 区の調査は重機を用いて平安時代中期とみられる整地層上面まで掘削を行い、第 1 面として遺構検出を行った。この面では近現代の攪乱の他、柱穴・土壙などを検出した。

厚さ約20cmの整地層を除去した後、第 2 面での遺構検出を行い、建物跡、土壙などを検出した。

建物 1 は東西 1 間分（柱穴13・14）、南北 3 間分（柱穴14～17）を検出した。それぞれの柱間は2.4mである。柱穴13は東半部が調査区外となっている。掘形の復元径は55cm、隅丸方形になるものとみられる。柱痕跡の直径は20cm、深さは約30cmである。柱穴14の西半部は調査区外となっている。掘形の復元径は70cm、柱痕跡の直径は20cm、深さは約45cmである。柱穴15の掘形は長径50cm、短径40cmの方形、柱痕跡の直径は20cm、深さは30cm。柱穴16の掘形は長径65cm、短径50cmの方形、柱痕跡の直径は20cm、深さは約20cm。柱穴17の掘形は直径45cmの円形を呈している。柱痕跡の直径は20cm、深さは約30cmである。柱穴14・16の底には平瓦が据えられていた。なお、平成元年度調査で検出した建物跡SB 3 と今回検出した建物 1 を座標上でみると、2 間×3 間の南北棟の建物に復元することができた（図 9）。また、同じく元年度調査で検出した建物跡SB 2 の西半部は本調査では検出できなかった。

土壙 7 は調査区の中央部にある東西に長い遺構である。現存長は東西2.5m、南北2.3m、深さは20cmである。遺構の東半部は調査区外へ展開する。遺物は土師器、須恵器等の土器類や瓦類が多く出土した。なお、この遺構は元年度調査では確認されておらず、当調査地との境界付近で終束するものと考えられる。

土壙20は調査区の北端部で検出している。大半が調査区外へ展開する。現存長は東西約 3 m、南北約 4 mである。深さは70cmである。この遺構からも土壙 7 同様に土器類や瓦類が多数出土している。なお、元年度の調査でこの土壙の東肩と考えられる遺構を検出している（SK 1、図9）。

柱穴23は土壙20を掘り下げている過程で検出した。掘形の大きさは50cm、深さは20cmである。柱痕跡の直径は20cmである。柱痕跡の埋土の主体は褐色泥土であるが、灰白色粘質土が多く含まれていた。

表 2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代前期	柱穴13～17・23、土壙 7・20	柱穴13～17を建物 1 としている。
平安時代中期	整地層	
江戸時代以降	柱穴・土壙	

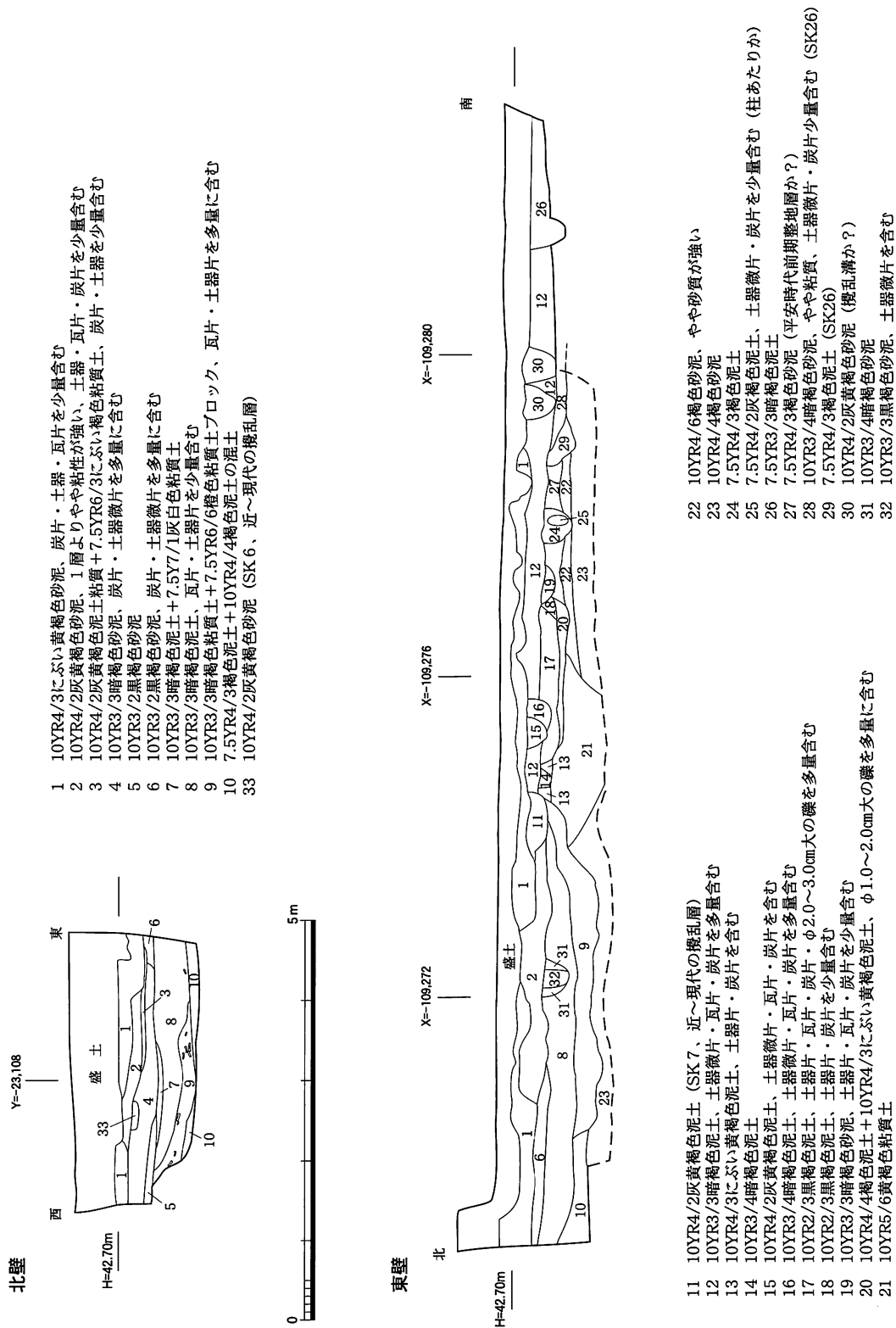


図5 1区北壁・東壁断面図 (1:80)

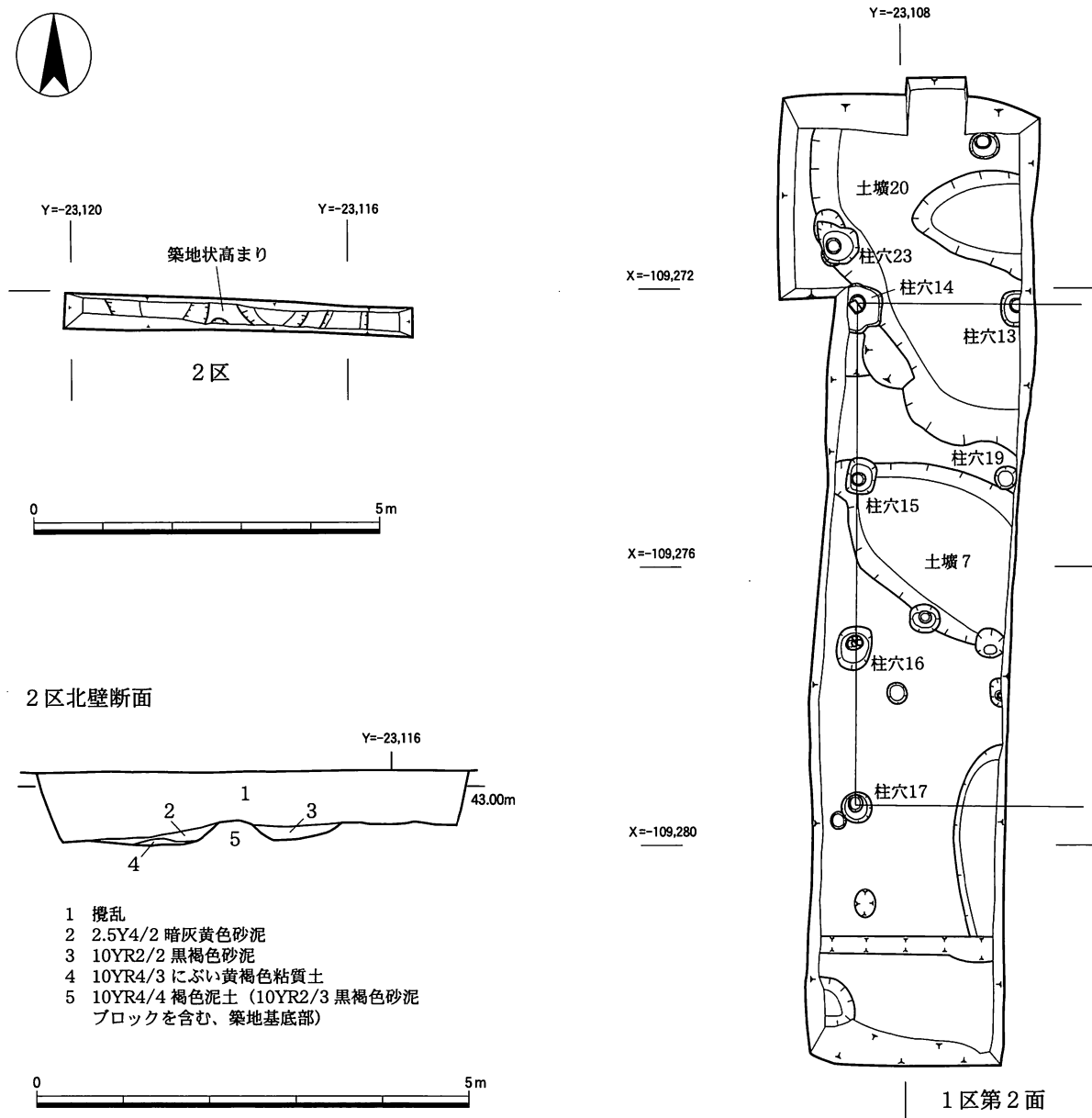


図6 遺構実測図（平面図1：100、断面図1：80）

2区の遺構

2区の調査は、長さ5m、幅40cmの東西に長い調査区を設定し、すべて手掘りで掘削を進めていった。掘削途中で塩化ビニール製の管、その下層も陶管の埋設により攪乱を受けていたが、現地表面下約60cmの標高42.6m付近で遺構面を検出した。

調査区のほぼ中央で高まりを検出した。築地基底部と想定しその内溝と外溝の検出に努めたが、後世の攪乱によって確認できなかった。高まりの位置は、ほぼ西面築地心⁴⁾想定線上となるため、この高まりを中務省西面築地跡と考えた。

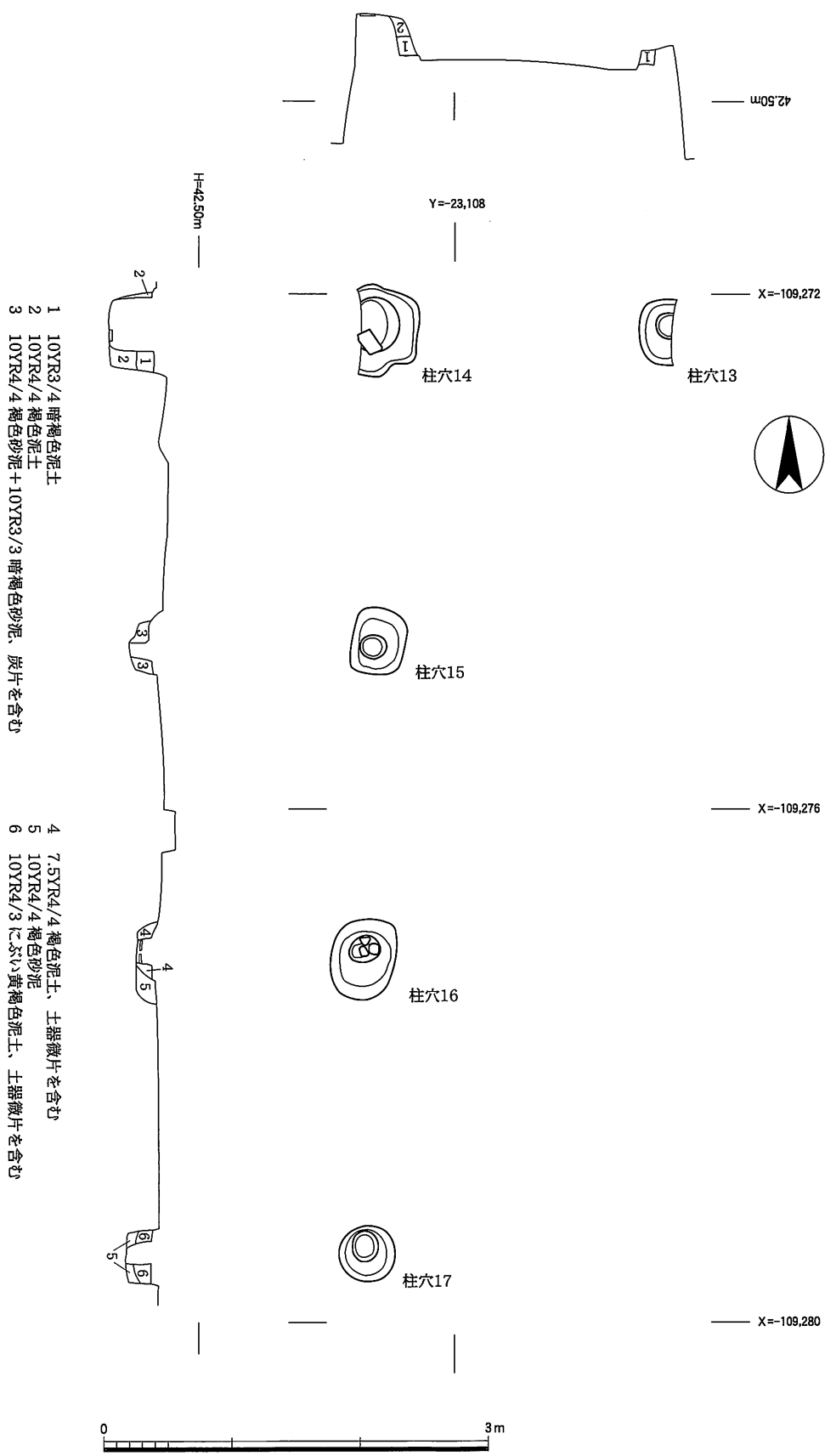


图7 建物1柱穴実测图 (1:50)

3. 遺物

今調査で出土した遺物は土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦類でそれらは土壙などを中心に整地層からも出土している。

(1) 土器類 (図8)

土師器皿(1)は体部が外反気味に立ち上がり口縁端部は若干肥厚する。口縁部を横方向のナデ、底部外面はオサエである。土師器皿(2)は体部が内弯気味に立ち上がり口縁端部が若干肥厚する。器表面が磨滅して不鮮明であるが口縁内外面は横方向のナデ、底部から体部にかけてはケズリとみられる。土師器甕(3~5)は体部上方から口頸部が残存している。いずれも口縁端部を内側に肥厚させている。甕(3)は口頸部内面をハケメ、口縁部は横方向のナデ、体部外面をハケメ調整している。甕(4)は口縁内面をハケメ、頸部から体部内面をハケメ調整の後ナデを施している。甕(5)は口縁部内面をハケメ、外面を横方向のナデ、体部外面をハケメ調整している。内面は磨滅して調整痕跡は不明である。

須恵器杯(6)は高台を有する杯身である。体部はやや外弯しながら立ち上がり、端部を丸くおさめる。底部外面は無調整で、その他は内外面共にナデ調整を施している。焼成は堅緻。色調は灰白色を呈している。須恵器杯(7)高台を持つ杯身である。体部はやや外反しながら立ち上がり口縁端部は丸くおさめる。体部内外面と底部は横方向のナデを施している。(6・7)は土壙7から出土した。(8)は須恵器杯身である。平らな底部と外弯気味に立ち上がる体部をもつ。口縁端部はまっすぐに伸び丸くおさめる。底部外面は調整を施していない。体部内面は横方向のナデを施している。(9)は須恵器杯身である。体部から口縁部にかけてわずかに内弯しながら外上方に立ち上がる。体部内外面共横方向のナデ調整している。焼成はやや不良。色調は灰白色を呈している。(8・9)は土壙20から出土した。(10)は須恵器杯蓋である。天井部はふくらみが少なくゆるやかに成形している。口縁はほぼ直角に下方へつまみ出す。端部は丸くおさめている。天井頂部に宝珠つまみを持つ。外面の調整はヘラケズリと口縁端部にかけては横方向のナデを施している。内面は不定方向のナデが認められる。外面に火禱の痕跡がみられる。また内面には朱とみられるものが付着している。土壙7から出土している。(11)は須恵器杯蓋である。天井は平坦で比較的明瞭な稜をもって口縁部へ屈曲する。端部は下方へつまみ出す。天井部はヘラケズリ、他は横方向のナデを施している。焼成は堅緻。色調は表面は灰色(内部は赤灰色)を呈している。(12)は須恵器杯蓋である。天井部は平坦で比較的明瞭な稜を口縁部へ移行する。口縁端部は下方につまみ出す。天井部はヘラケズリ、他は横方向のナデを施す。焼成は堅緻。天井部頂部に扁平な宝珠つまみが付く。色調は灰色を呈している。(13)は須恵器壺蓋である。天井部はゆるやかにふくらみ、口縁部は下方へ折れ、その境は屈曲している。天井部はヘラケズリを施し、屈曲している箇所から口縁部および内面は横方向のナデを施している。天井部には自然釉がみられる。

緑釉陶器火舎(14)は胴部下半を欠損する。肩部に稜をもち、頸部は短く口縁部にいたる。胴

部側面には縦方向に直下して沈線が2条みられる。透しを設ける。透しは2本以上が1単位と考えられる。外面はナデ調整を施している。淡緑色の釉薬を外面と透し側面に施釉する。内面にはススが付着する。内面は磨滅して調整は不明である。緑釉陶器火舎（15）は胴部上半を欠失する。胴部中央付近に火入れ口を設ける。底部に断面「ハ」の字状の高台を貼り付けている。高台端部は外側へつまみ出している。淡緑色の釉薬を施す。（11～15）は土壙20から出土した。（16）は緑釉陶器底部である。高台はケズリ出しである。底部外面中央部に糸切り痕を残す。底部内面はナデを施した後、ヘラミガキしている。釉薬は淡緑黄色で底部内外面共に施されている。整地層から出土した。

（2）瓦 類（図8）

瓦類は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などが土壙20や整地層から出土している。他に平瓦凹面に文字を押印した瓦も出土している。

軒丸瓦（17）は瓦当面のほとんどが剥離しているが、複弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当裏面の調整はオサエの他は表面が磨滅していて不明である。整地層から出土した。

軒平瓦（18）は均整唐草文軒平瓦である。表面は磨滅していて調整痕は不明である。瓦当文様は平成元年度調査出土例に類似している。顎は直線顎である。土壙20から出土した。軒平瓦（19）は均整唐草文軒平瓦である。瓦当面は中心部が残存している。瓦当外周は横方向にヘラケズリしている。平瓦凹面には細かい布目が認められる。ヘラケズリと布目の境界辺りでは縦方向のナデを施している。顎は曲線顎で外周は横方向のナデを施している。平瓦凸面は縦方向の縄タタキを施している。文様の特徵から平城宮式6663型式とみられる。土壙20から出土した。軒平瓦（20）は均整唐草文軒平瓦である。表面は磨滅していて調整痕は不明である。顎は曲線顎である。文様の特徵から平城宮式6721型式とみられる。土壙20から出土した。

文字瓦（21）は凹面に『理』銘を正字で押印している。凹面はていねいなナデ調整。端部は横方向のナデを施している。凸面は縦方向の縄タタキと離れ砂の痕跡が認められる。土壙20から出土した。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代前期	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器	19箱	土師器6点、須恵器10点、緑釉陶器3点	1箱	17箱
	瓦、軒瓦		軒丸瓦1点、軒平瓦4点、文字瓦1点		
鎌倉・室町時代	瓦器		0箱	少量	
江戸時代以降	土師器、染付、磁器、施釉陶器	1箱		0箱	1箱
合計		20箱	25点（1箱）	1箱	18箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物をランク分けしたため、出土時より2箱多くなっている。

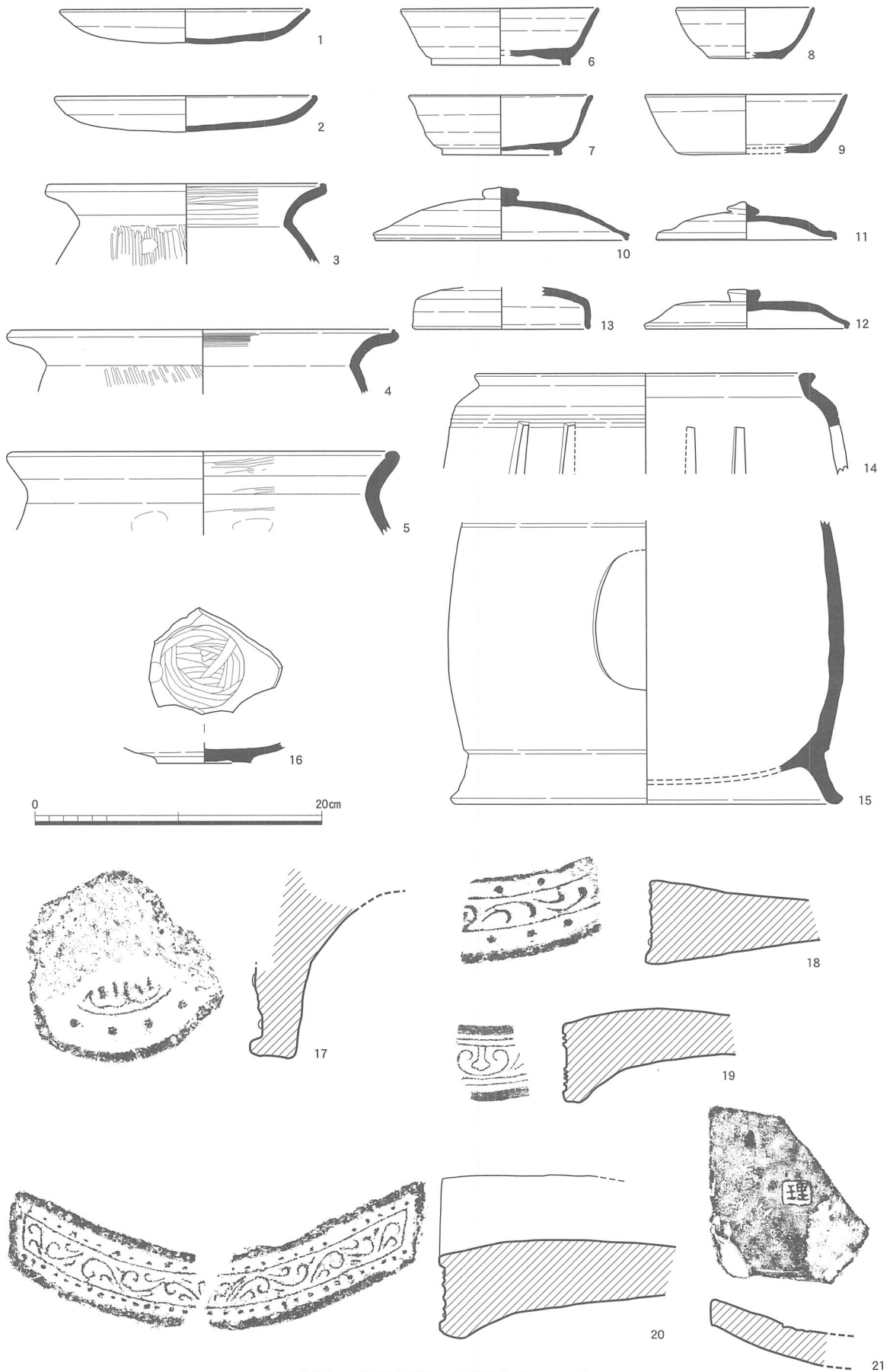


图8 遺物拓影・実測図 (1 : 4)

4. まとめ

これまで述べてきたように今回の調査では建物跡と中務省西面築地跡とみられる遺構を確認することができた。今回検出した建物跡と元年度調査で検出された建物跡（SB3）を座標上で合わせると2間×3間の南北棟として復元することができた。同じく元年度調査で検出された建物跡（SB2）はみつめることができなかった。また土壙20は元年度調査の土壙（SK1）と一連の遺構とみることができる。2区で検出した築地跡基底部分とみられる遺構は座標Y=-23,117付近をとる。既調査で検出された築地心とほぼ一致することを確認した。復元できた建物西面から西面築地心想定線までの距離は8.6m、約29尺をはかる。これまでに得られた成果から築地幅7尺とし、犬走り幅各2.5尺、溝幅を各3尺とした場合、築地は18尺の数値が得られる。仮に築地心から内側へ9尺のところの内溝東肩があったとして、建物と築地の間は18尺の空閑地が展開していると考えられる。この空閑地の評価については類例の増加を待ちたい。平安時代中期の整地層は周辺の調査でも検出されており、平安時代中期に何らかの整備がなされたことを示している。以上のように狭い面積の調査にもかかわらず、成果を挙げることができた。平安宮内の調査は小規模とはいえ、このような調査を積み上げることが平安宮の研究に大きな役割を果たすものといえる。

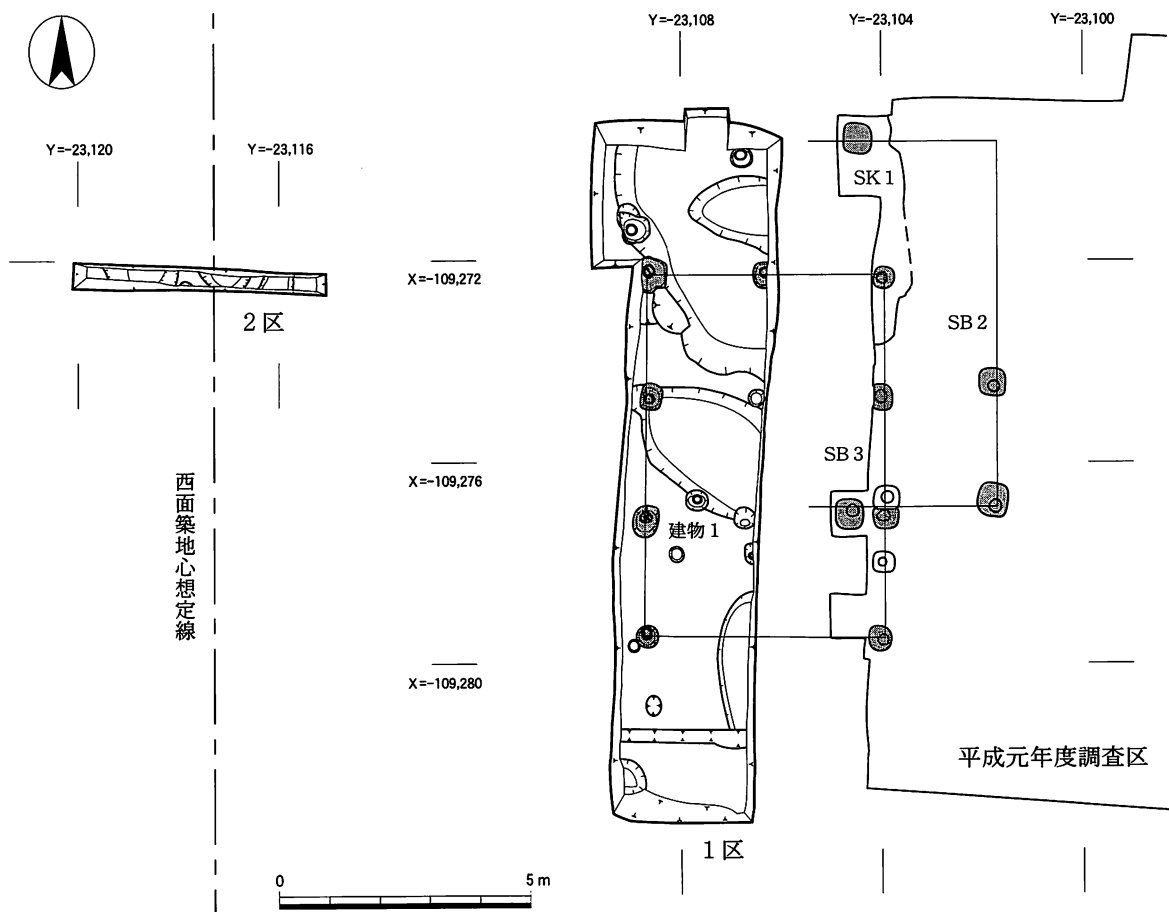


図9 平安時代遺構平面図（1：150）

註

- 1) 近藤知子「平安宮中務省(1)」『京都市内遺跡発掘調査概報』平成6年度 京都市文化観光局 1995年
 - 2) 網 伸也「平安宮中務省(1)」『平安京跡発掘調査概報』平成元年度 京都市文化観光局 1990年
 - 3) 辻 裕司「平安宮中務省跡」『杉山信三先生米寿記念論集 平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集刊行会 1993年
 - 4) 網 伸也「平安宮中務省(1)」『平安京跡発掘調査概報』平成元年度 京都市文化観光局 1990年
- 辻 裕司「平安宮中務省(2)」同上
- 両調査とも本調査とほぼ同レベルで整地層を検出している。

引用文献

- 1 『平安京跡発掘調査概要』京都市埋蔵文化財概要集1978 京都市文化観光局 1979年
- 2 『平安京跡発掘調査概要』1979年度 京都市文化観光局 1980年
- 3 『平安京発掘調査報告』昭和55年度 京都市埋蔵文化財センター 1981年
- 4 『平安京発掘調査報告』昭和57年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 5 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和58年度 京都市文化観光局 1984年
- 6 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度 京都市文化観光局 1985年
- 7 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度 京都市文化観光局 1986年
- 8 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
- 9 『平安京跡発掘調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
- 10 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成元年度 京都市文化観光局 1990年
- 11 『平安京跡発掘調査概報』平成元年度 京都市文化観光局 1990年
- 12 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成2年度 京都市文化観光局 1991年
- 13 『平安京跡発掘調査概報』平成2年度 京都市文化観光局 1991年
- 14 『平安京跡発掘調査概報』平成3年度 京都市文化観光局 1992年
- 15 『平安京跡発掘調査概報』平成4年度 京都市文化観光局 1993年
- 16 『平安京跡発掘調査概報』平成5年度 京都市文化観光局 1994年
- 17 『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 18 『京都市内遺跡発掘調査概報』平成6年度 京都市文化観光局 1995年
- 19 『平安宮 I』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年

II 北白川廃寺跡

1. 調査経過

今回の発掘調査は、小規模共同住宅新築工事に伴うものである。北白川廃寺は、京都盆地の北東部、東方の瓜生山から延びる丘陵先端付近に位置し、東から西へ下がる地形となっている。東方と西方との標高差は、現在も約4m近くみられ、調査地の西端にも約1mの段差が南北方向に続いている。

北白川廃寺の発見は、1934年（昭和9）、当地の北東約40mにおいて、京都市が実施した土地区画整理工事中に大量の瓦包含層が偶然発見され、京都府により緊急調査¹⁾が行われた。調査で検出された遺構は、周囲を瓦で化粧した瓦積基壇で、その規模は、東西119尺（約36m）、南北75尺5寸（約23m）の建物基壇（東方基壇）であった。地名を冠して「北白川廃寺」と名付けられた。また1974・75年（昭和49・50）には、北白川廃寺発掘調査団により、この基壇から西へ約80mの地点で調査²⁾が行われ、一辺が約14m方形の基壇が検出された。さらに1995年（平成7）、京都市埋蔵文化財研究所により再度調査³⁾が行われ、基壇が瓦積から石積へと改修されていることなどが再確認された。現在、これらの基壇は、西側のものが塔、東方基壇が金堂であろうと推定⁴⁾されて

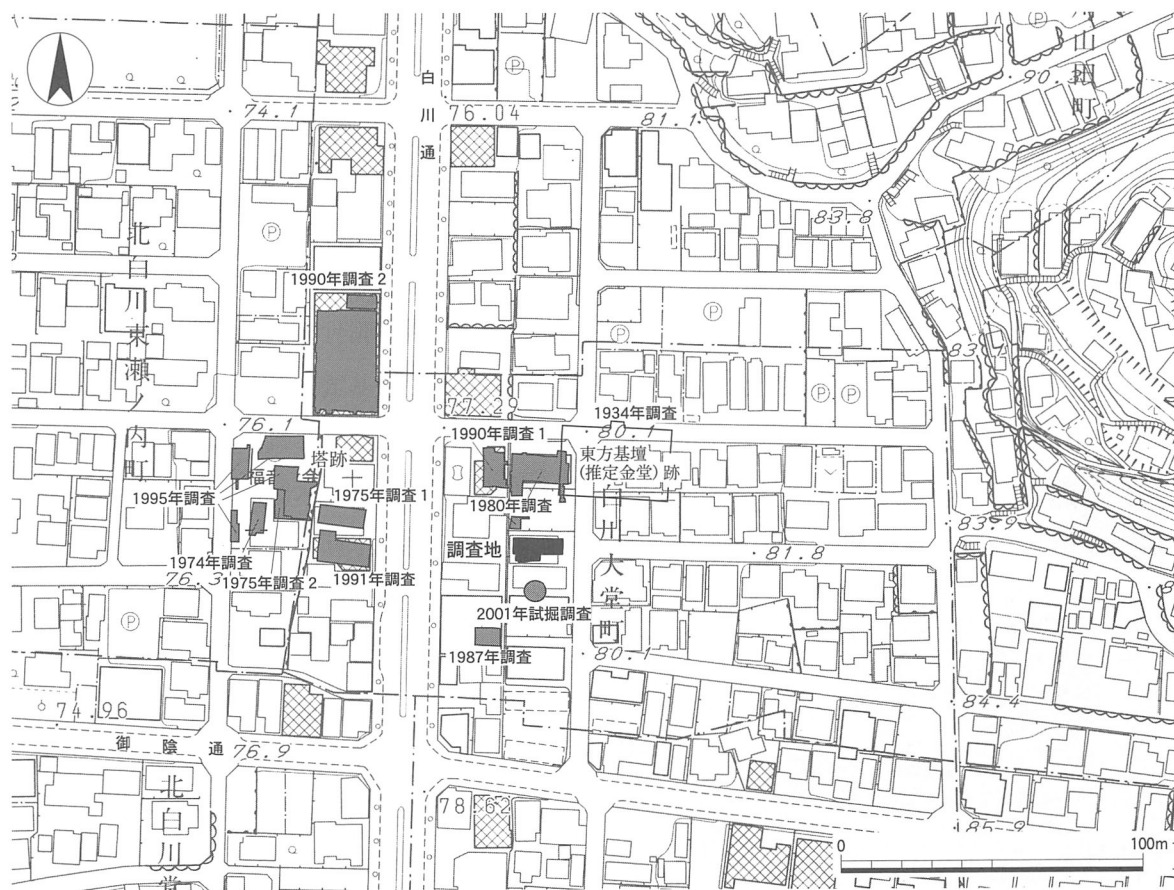


図10 調査地位置図（1：2,500）

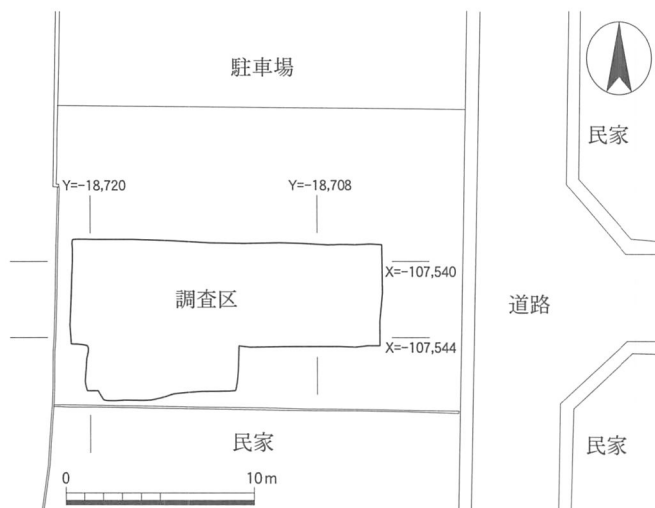


図11 調査区配置図 (1 : 400)

いる。

北白川廃寺の調査は、上記以外にも実施されている。調査地北隣の1980年(昭和55)調査⁵⁾では、東方基壇西端部とその西側で回廊跡を検出した。調査地南西約30mの1987年(昭和62)調査⁶⁾では、平安時代以前の南北溝を検出した。東方基壇西端から西約20mで実施した1990年(平成2)調査⁷⁾では、1980年の調査で検出した回廊跡西側で南北溝を検出した。塔跡北東約20mの1990年(平成2)調査⁸⁾

では、東西溝と塔を囲むと考えられる柵を検出した。塔跡南東約20mの1991年(平成3)調査⁹⁾では、飛鳥～平安時代の瓦が多量に出土した。廃寺の造営時期は、既往の調査から7世紀後半から8世紀初頭に、廃絶時期については平安時代中期とみられる。

今回の調査地は、北白川廃寺東方基壇の南西、1980年調査地の南隣にあたり、既に検出している回廊の礎石列や、その基壇の南延長部の確認を目的として実施した。また、調査地の南隣接地で京都市埋蔵文化財調査センターが実施した2000年(平成12)試掘調査¹⁰⁾では、基壇などの顕著な遺構を検出しなかったことから、回廊が調査地付近で折れ曲がる可能性も考えられた。

調査は2005年11月10日、器材搬入と並行して機械掘削を開始した。まず計画建物範囲を基礎深の地表下約0.3mまで掘り下げたが、盛土であった。そこで京都市埋蔵文化財調査センターの指導を受け、1.5×5.5mの長方形試掘坑を2ヶ所掘り下げ、深さ約0.5mで遺構面が確認できたことから、さらにその面まで全面掘下げることとなった。調査面積は、残土を場内処理するため、計画建物範囲より南北各1mを狭めた約89㎡となった。当日中に機械掘削を終了し、翌日より手作業による調査に入った。その結果、回廊基壇とみられる土層や礎石据付穴、瓦が堆積した遺構などを検出し、それらの検出状況の全景写真撮影を行った。検出した基壇下部までを確認するためには、瓦の堆積を掘下げる必要があった。そのため建築関係者と京都市埋蔵文化財調査センター



図12 調査前風景 (東から)

との協議が行われ、現状保存を勧案し、調査区の西半分のみ掘り下げ、東半については部分的な断割を行い、断面観察で確認することとなった。その結果、調査区南西部で回廊は折れ曲がり、これに沿って溝のあることが明らかになった。これらの写真撮影、実測などの記録を行ったあと、礎石据付穴の延長部を確認するため、調査区の南西約19㎡を拡張したが、明瞭な遺構は検出できなかった。拡張部の写真撮影、実測

などの記録を行ったのち、埋戻し・器材搬出を終え、12月8日に調査を終了した。

なお12月1日報道発表、3日に北白川小学校をお借りし、現場と合わせて現地説明会（参加人数約220名）を実施し、成果を公表した。

2. 遺 構

(1) 基本層序 (図16・17)

付近の地形は北東から南西になだらかに下がる傾斜面である。調査地は、ほぼ平坦に整地され、現地表は、標高80.1m前後である。基本層序は、調査区北壁で厚さ0.3～0.5mの盛土と厚さ0.1～0.2mの暗灰黄色砂泥が重なる。これより下層の上面を第1面とした。調査区西端では、この下層、標高約79.6mからは基壇土となり、厚さ0.15m前後の砂泥と泥砂が重なる厚さ約0.4mの版築土である。さらに下層は、黒褐色砂泥を主体とする厚さ0.5～0.6mの整地土になる。この整地土は、厚さが薄くなりつつ調査区北壁Y=-18,711付近で消滅する。整地土より下層は、厚さ約0.6mの黒褐色砂泥である。この層からは数点であるが、弥生時代前期の土器と小片で摩滅して明瞭ではないが縄文時代と思われる土器が出土した。これより下層、標高約78.0mからは灰黄褐色砂泥になり、地山と考えられる。調査区北壁東端では、第1面の標高は、約79.8mである。その下は厚さ約0.4mのにおい黄褐色砂泥や暗褐色砂泥などの整地土である。それより下層の標高約79.4mからは、弥生土器が出土した層に対応する黒色砂泥層である。

(2) 第1面 (図13)

北白川廃寺廃絶後の遺構である。

落込み5 調査区中央部北寄りで見出した遺構である。大きさは、東西約10.5m、南北4m以上あり、調査区外の北に広がる。深さは約0.2m前後の暗灰黄色泥砂層など(図16北壁の8～10層)が堆積する。

溝6 調査区西側で見出した南北溝である。長さは、南北約5m以上、幅0.4～0.8mあり、調査区外の南に伸びる。深さは0.1～0.2mである。埋土は黒色～黒褐色砂泥などである。溝底の標高から、南から北へ流れていたと考えられる。溝の北側は攪乱されているため不明であるが、落込み5に流れ込んでいた可能性がある。

(3) 第2面 (図14)

北白川廃寺に関する遺構を第2面とした。当調査の最も大きな成果は、西面回廊および南面回廊を検出し、東方基壇(金堂)を囲む回廊の西南隅が確定できたことである。西面回廊については、既に北隣の調査でその位置や構造が判明しているが、南面回廊については今回が初めての検出となる。

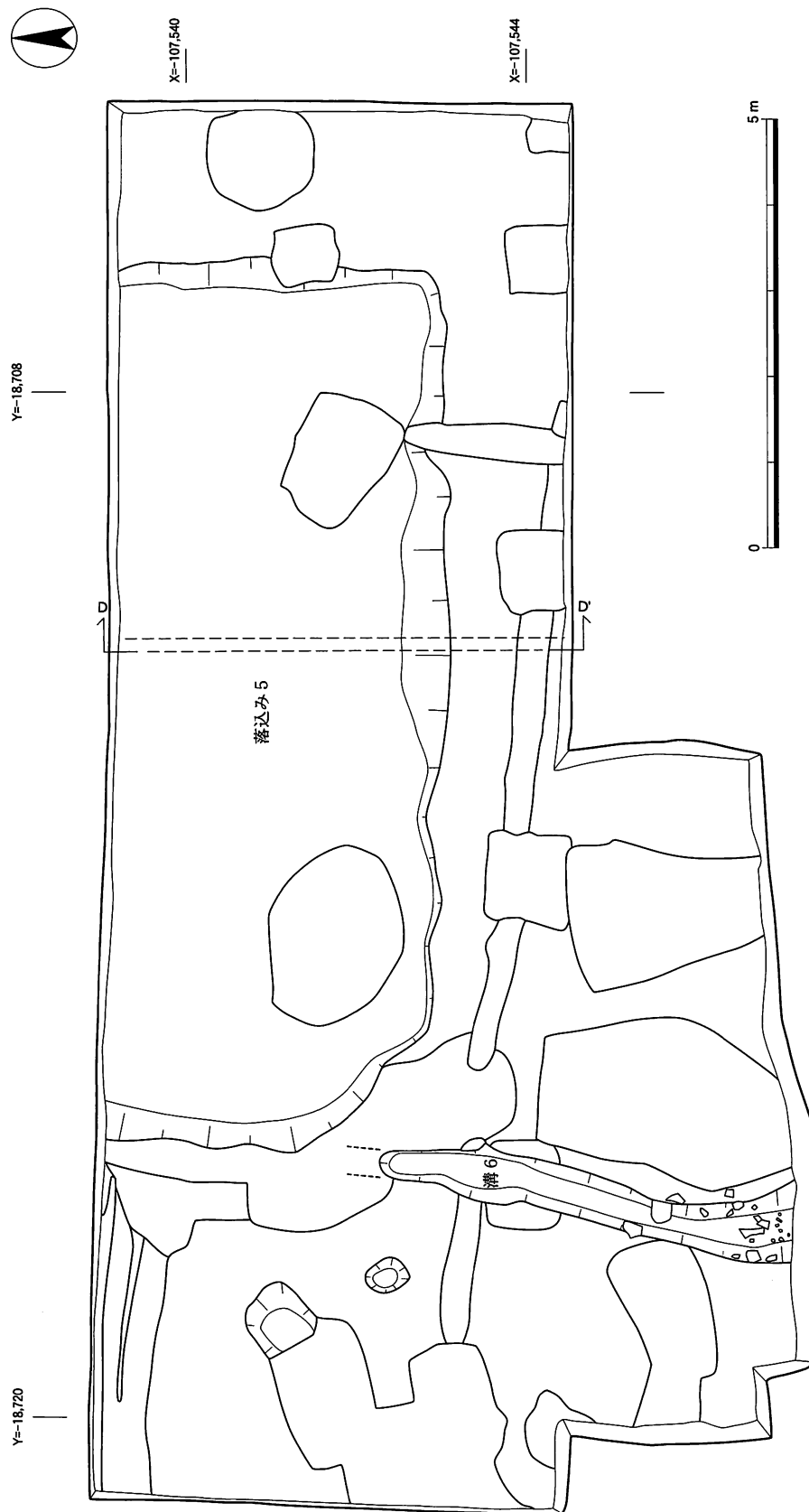


図13 第1面遺構平面図 (1 : 80)



图14 第2面遺構実測図 (1 : 80)

西面回廊 先述した1980年調査・1990年調査1から、西面回廊は瓦葺き単廊の礎石建てであることが既にわかっている。基壇幅は、明確ではないが、ほぼ7mであることがわかる。回廊の梁間寸法は約3.8m、桁行寸法が約3.2mであることも残存礎石より判明している。

今回検出した西面回廊の遺構は、これらに続くもので、基壇および礎石据付穴を2箇所と基壇内溝を検出した。基壇の幅については、検出面で約3mを確認したが、西端は調査区外となる。確認した南北長は、約8mで調査区外に続く。

基壇化粧に関係する遺構は、礎石据付穴の心から約1mで東肩になるが、北隣の調査同様認められなかった。

基壇の構築状況は、北壁断割断面から、東から西へ傾斜する地形を平坦にし、基壇中央部では厚さ約0.4mの版築、東肩部約1m幅では版築とは異なる土を積み上げていることがわかる。この東肩部の基壇構築土には、多くの瓦を含み、検出した2箇所の礎石据付穴はこの基壇土上に築かれている(図16 X=-107,542ライン断面図)。回廊南端部のこの基壇構築土には特に多量の瓦を含んでいた。

この構築土は、この部分が地形からみて、回廊で囲まれる区域の中でも最も雨水が集中する箇所であることが予想されることから、修復によるものとみられる。ただ、基壇化粧に関係する遺構がみられないことから、当初からこうした瓦を多く含む構築土で基壇肩部を固めていたとも考えられるが、後述する内溝以下の整地土にも瓦を少なからず含むものの、これほどの多くの瓦はみられず、修復によるものと判断した。

基壇検出面上面から礎石据付穴(図15、7・8)を検出した。礎石据付穴7の大きさは、直径約1.5mの隅丸方形で中に直径約1.0mの礎石抜取穴がある。深さは、検出面から約0.2mである。抜取穴には直径0.1~0.2mの根固め石が残る。礎石据付穴8は、礎石据付穴7の南で検出した。大きさは、直径1.3~1.6mの隅丸方形である。深さは、検出面から約0.2mである。明瞭な根固め石は検出しなかった。両者の心々間は、約3.2mである。またこれらの礎石据付穴は、修復層を掘り込んで成立している。

南面回廊 東西方向の基壇を調査区南部で検出した。検出した長さは約15m、幅は約4m分を確認した。基壇検出面の標高は79.6m前後である。

基壇の構築状況を見てみると、セクション(D-D')断面(図17)では、基壇北端から0.8mまでの構築土は、厚さ約0.4mの黒色砂泥土である。これに対し、南拡張区南壁断面(F-F')では、基壇上面から約0.6m下まで厚さ0.05~0.1mの黒褐色砂泥とオリーブ褐色泥砂が重なる版築で構築されている。それより下層は、厚さ0.3mの黒色から黒褐色の整地土である。

この基壇構築の違いは、前述した西面回廊でみた、基壇中央部を版築で築き上げている状況と同じである。ただ、西面回廊南端部の多量に瓦を含む構築土とは、明らかに異なることから、この構築土は、南面回廊造営当初のものである可能性が大である。

また、南拡張区南壁断面では、版築の境(図17南壁の10層)を明瞭に検出した。先後関係から、南面回廊が西面回廊基壇より先行して造営されたことがわかる。

南拡張区の南端南面回廊基壇上面で土壌（19・20）を検出した。土壌19は、直径約0.9m、深さ約0.3mである。埋土は黒褐色砂泥である。土壌20は、土壌19の東側約3mで検出した。直径約0.8m、深さ約0.3mである。埋土は黒褐色砂泥である。土壌19・20は、検出状況や埋土が類似し、前述の礎石据付穴と比較すると、大きさは小さいが、底の標高は、ほぼ同じである。

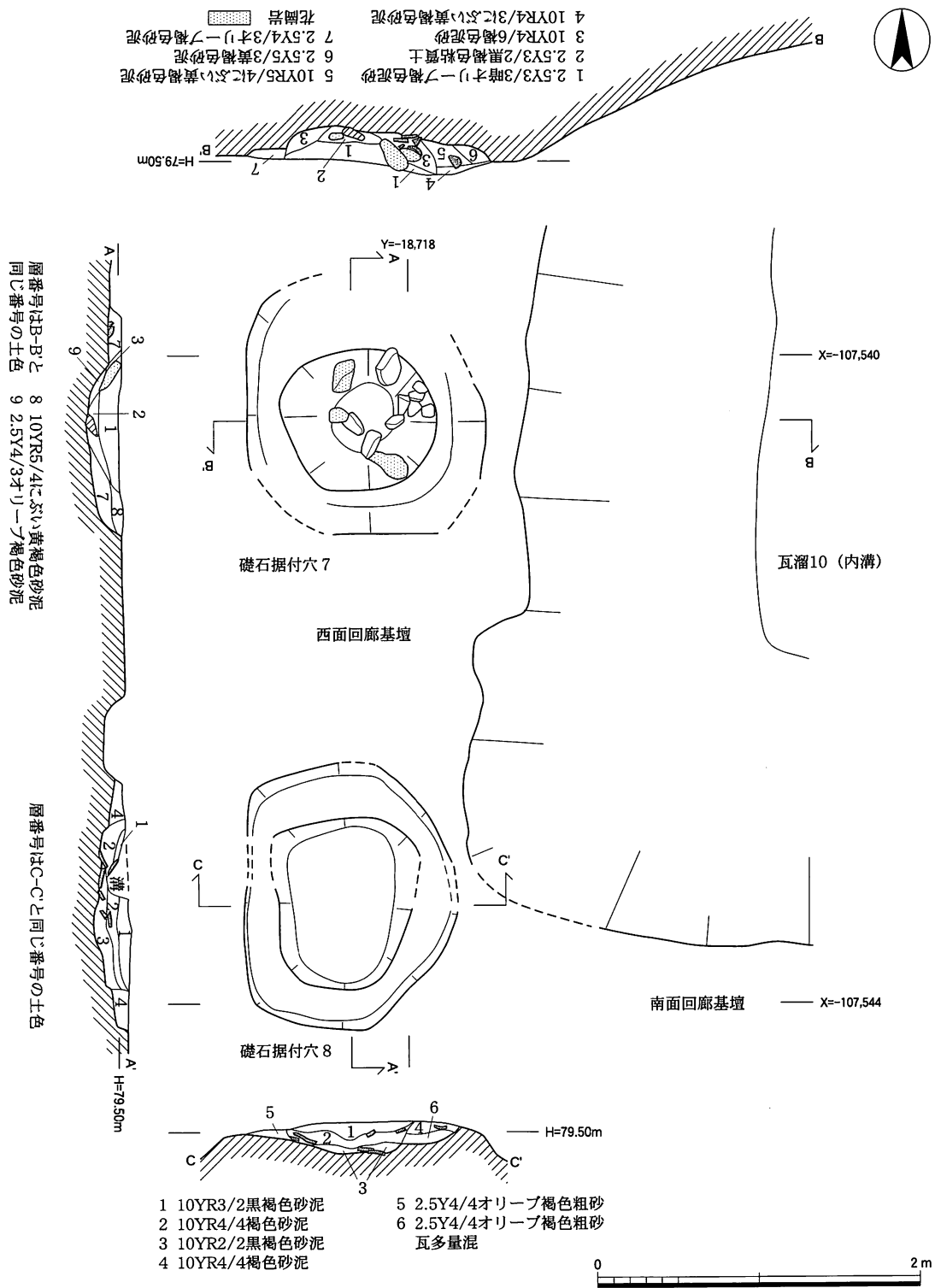
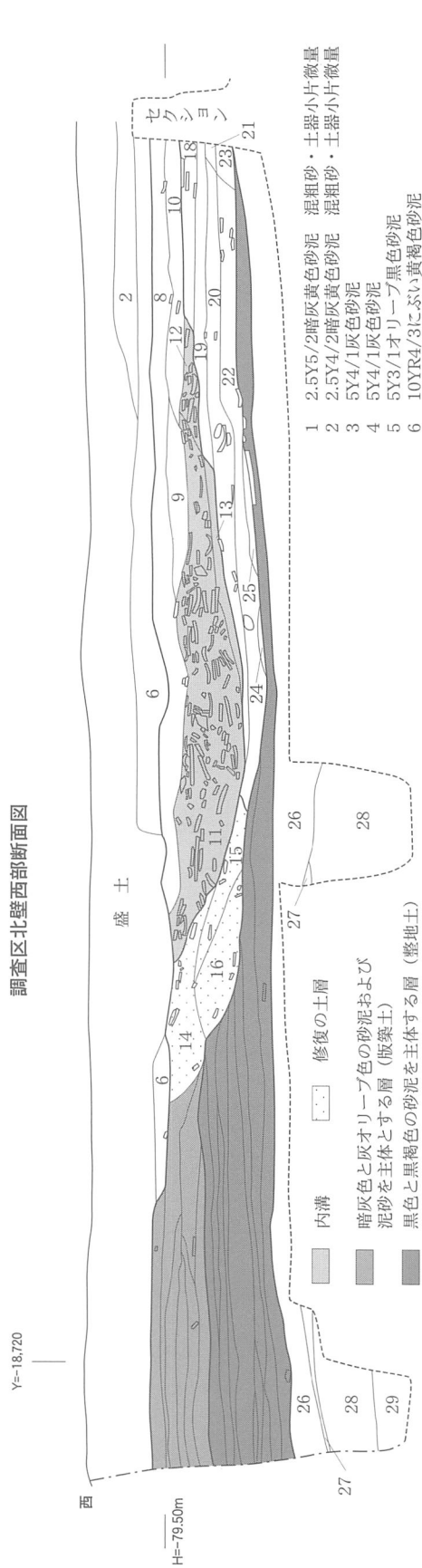
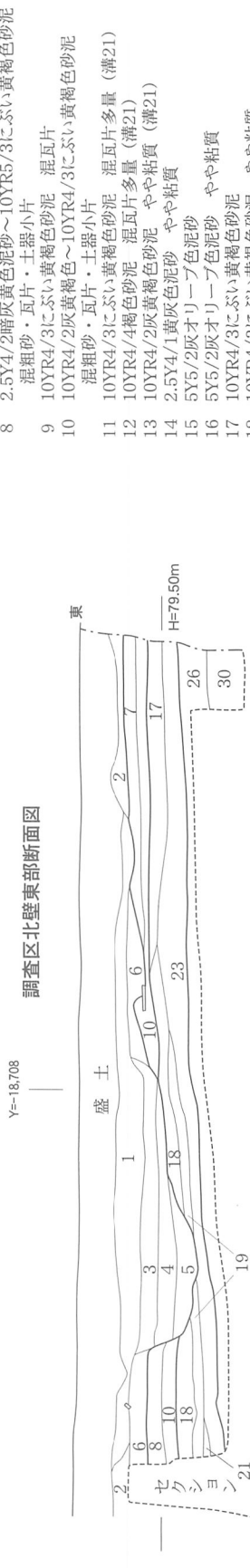


図15 礎石据付穴平面および断面実測図（1：40）

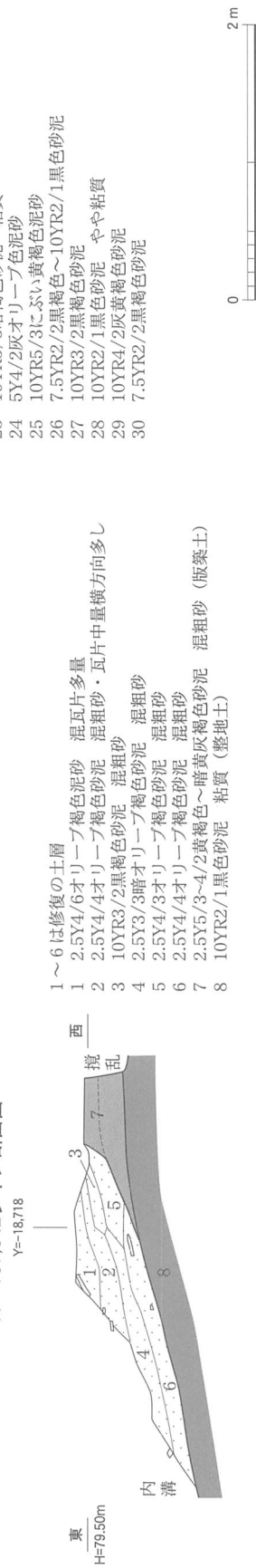
調査区北壁西部断面図



調査区北壁東部断面図



X=-107,542ライン断面図



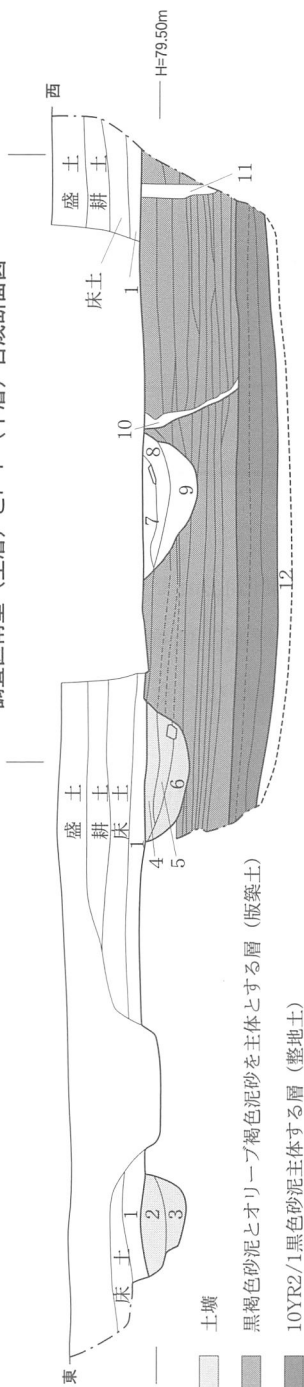
- 1 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 混粗砂・土器小片微量
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 混粗砂・土器小片微量
- 3 5Y4/1灰色砂泥
- 4 5Y4/1灰色砂泥
- 5 5Y3/1オリーブ黒色砂泥
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 やや粘質
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 やや粘質
- 8 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂～10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
- 9 混粗砂・瓦片・土器小片
- 10 10YR4/2灰黄褐色～10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 11 混粗砂・瓦片・土器小片
- 12 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 混瓦片多量 (溝21)
- 13 10YR4/4褐色砂泥 混瓦片多量 (溝21)
- 14 2.5Y4/1黄褐色砂泥 やや粘質 (溝21)
- 15 5Y5/2灰オリーブ色泥砂
- 16 5Y5/2灰オリーブ色泥砂 やや粘質
- 17 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 やや粘質
- 18 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 やや粘質
- 19 10YR4/2灰黄褐色砂泥 混瓦片・土器小片
- 20 2.5Y5/3黄褐色砂泥 混瓦片・土器小片
- 21 10YR4/6褐色砂泥
- 22 10YR3/3暗褐色砂泥 混瓦片・土器小片
- 23 10YR3/3暗褐色砂泥 粘質
- 24 5Y4/2灰オリーブ色泥砂
- 25 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
- 26 7.5YR2/2黒褐色～10YR2/1黒色砂泥
- 27 10YR3/2黒褐色砂泥
- 28 10YR2/1黒色砂泥 やや粘質
- 29 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 30 7.5YR2/2黒褐色砂泥

- 1～6は修復の土層
- 1 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥 混瓦片多量
- 2 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 混粗砂・瓦片中量横方向多し
- 3 10YR3/2黒褐色砂泥 混粗砂
- 4 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 混粗砂
- 5 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 混粗砂
- 6 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 混粗砂
- 7 2.5Y5/3～4/2黄褐色～暗黄灰褐色砂泥 混粗砂 (版築土)
- 8 10YR2/1黒色砂泥 粘質 (整地土)



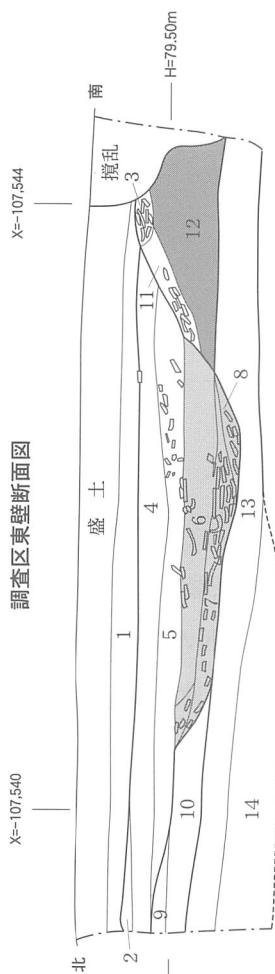
図16 断面実測図1 (1:50)

Y=-18,716 調査区南壁 (上層) とF-F' (下層) 合成断面図



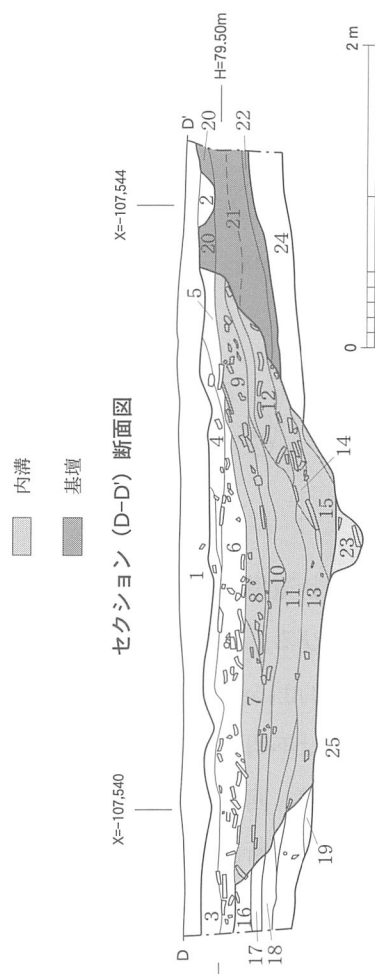
- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
混粗砂・土器小片
- 2 10YR2/1黒色砂泥
混粗砂・瓦片・土器小片 (土壘20)
- 3 10YR2/2黒褐色砂泥 混粗砂多量 (土壘19)
- 4 10YR2/2黒褐色砂泥 混粗砂 (土壘19)
- 5 2.5Y3/2黒褐色砂泥 混粗砂 (土壘19)
- 6 10YR2/1黒色砂泥 混粗砂 (土壘19)
- 7 10YR2/1黒色砂泥 混粗砂 (溝6)
- 8 10YR2/2黒褐色砂泥 混瓦片少量 (溝6)
- 9 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
混粗砂・瓦片・土器小片 (溝6)
- 10 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 11 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 12 10YR1.7/1黒色砂泥

調査区東壁断面図



- 1 2.5YR4/2暗灰黄色砂泥 混粗砂・土器小片
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 やや粘質
- 3 10YR3/2黒褐色砂泥 混粗砂・瓦片
(溝状遺構23)
- 4 10YR4/2灰黄褐色砂泥 混粗砂・土器小片
- 5 10YR3/3暗褐色砂泥
混粗砂・瓦片・土器小片
- 6 10YR3/2黒褐色砂泥
混粗砂・瓦片・土器小片 (溝22)
- 7 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
混瓦片多量 (溝22)
- 8 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
- 9 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 10 10YR3/3暗褐色砂泥
- 11 10YR3/2黒褐色砂泥
混粗砂・瓦片多量
- 12 7.5YR2/1黒色砂泥 (南面回廊基礎)
- 13 10YR2/1黒色砂泥 混粗砂
- 14 7.5YR2/2黒褐色～10YR4/4褐色砂泥

セクション (D-D') 断面図



- 15 7.5YR4/2灰褐色砂泥
混マンガン多量 (溝22)
- 16 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 混瓦片多量
- 17 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 18 10YR4/6褐色砂泥
- 19 10YR3/3暗褐色砂泥
- 20 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 (南面回廊基壇)
- 21 7.5YR2/1黒色砂泥
混瓦片・土器少量 (南面回廊基壇)
- 22 7.5YR2/1黒色砂泥 (南面回廊基壇)
- 23 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
混瓦片少量・マンガン多量 (柱穴15)
- 24 10YR3/1黒褐色砂泥
- 25 7.5YR2/2黒褐色～10YR2/1黒色砂泥
- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 2 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 3 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
混瓦片中量
- 4 10YR4/2灰黄褐色砂泥 混瓦片中量
- 5 10YR2/3黒褐色砂泥 混瓦片多量
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (溝22)
- 7 2.5Y6/3にぶい黄色砂泥
- 8 2.5Y5/3黄褐色砂泥 混瓦片多量 (溝22)
- 9 7.5YR4/2灰褐色砂泥 混瓦片多量 (溝22)
- 10 10YR3/2黒褐色砂泥 混瓦片少量 (溝22)
- 11 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (溝22)
- 12 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
混瓦片多量 (溝22)
- 13 10YR4/6褐色砂泥 (溝22)
- 14 2.5Y6/4にぶい黄色～10YR3/2黒褐色砂泥
混瓦片多量 (溝22)

図17 断面実測図2 (1:50)

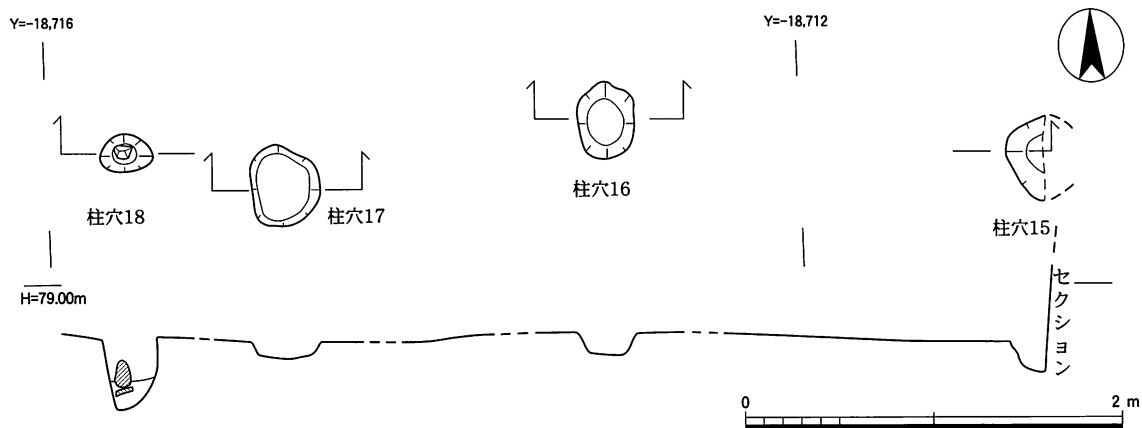


図18 柱穴列実測図 (1 : 40)

溝状遺構23 (図14) 南面回廊基壇の東端で検出した。その長さは、東西1.2mで東は調査区外へ延びる。幅約0.5mで瓦を敷き詰めた東西の溝状遺構である。調査区東壁断面 (図17) では、深さ約0.15mあり、黒褐色砂泥に瓦片が多量に混じる。時期は、出土土器がないため不明である。性格は不明であるが、基壇に伴う遺構であろう。

内溝 回廊基壇を除く回廊内側には大量の瓦がほぼ全面に堆積 (瓦溜10) していた。この大量の瓦は、断面観察の結果、回廊に沿って設けられた内溝および基壇内側に広く堆積したものであることがわかった。西半のみを全体的に掘り下げた。内溝の規模は、西面回廊に沿う南北溝21、南面回廊に沿う東西溝22とも、幅約4.5m、深さ約0.5mである。両溝とも調査区外に延びる。溝の最下層より奈良時代末期の土器が1点出土した。

柱穴列 (図18) 調査区中央部、南面基壇の北下がり際の内溝底面に並ぶ4基を検出した。大きさは、直径0.3~0.4m、深さ0.1~0.4mである。埋土は柱穴15・18が暗オリーブ褐色砂泥、柱穴16・17が黄褐色砂泥である。柱穴18は、下層より瓦と根石と考えられるものを検出した。各々の間隔は、不揃いであるが回廊造営時の足場穴であるとみられる。

3. 遺物

出土遺物は、整理箱にして101箱であるが、その大半は、瓦溜10より出土した瓦類である。それら以外には、少量の土器類と数点の金属製品が出土している。ここでは、出土遺物の大半を占める瓦類についてまず報告し、そのあとに土器類と金属類について述べる。瓦については、軒瓦などを優先的に取上げた。

(1) 瓦類 (図19~24)

瓦類は整理箱で99箱出土した。その大半は丸瓦と平瓦であるが、軒瓦も出土している。軒丸瓦は3種8点、軒平瓦は6種21点あり、それらのうち残存状態の良いものと特徴のあるものを図示した。平瓦凸面の叩きは大半が縄叩きであるが、異なる多種の叩きも少数ながらみられた。ここ

では確認できる限り図示した。また丸瓦・平瓦は残存状態の良いものを図示した。なお軒平瓦については、分類のため、後ろに英字をAから付した。

単弁八葉蓮華文軒丸瓦（1・2） 瓦溜10（内溝の合流部）から2点出土した。北白川廃寺創建瓦と考えられている、いわゆる山田寺式軒丸瓦である。中房には1+6の蓮子がある。蓮弁は、子葉がある重弁で、間弁がある。内区と外区の間には、細い界線がある。焼成はあまく、色調は灰白色である。高い周縁には5本の重圈文がある。（2）は（1）と同範であると考えられる。範キズが多く、残存する丸瓦部には釘穴がある。これらと同文のものが、東方基壇と回廊跡、塔跡から出土している。

単弁八葉蓮華文軒丸瓦（3） 瓦溜10中層（内溝の合流部）から1点出土した。中房は小さく、蓮弁とつながらず、1+4の蓮子がある。蓮弁は、間弁があり、ともに先端が尖り、高く稜線をつくる。外区は外縁が高めの周縁であり、内縁には線鋸歯文が巡り、八個の珠文が蓮弁に対応して配される。胎土には長石が多く混じり、色調は灰褐色である。この軒丸瓦は、北白川廃寺では初めての出土瓦であり、技法的には瓦当部が厚いこと、文様も荒く粗雑気味であることなどから、後述する雷文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦以降のものであると思われる。

雷文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦（4～6）（4）は西面回廊基壇の修復土から、（5）は攪乱から、（6）は瓦溜10最下層（内溝の合流部）から、その他に小片が2点出土している。中房は高く、3+7の蓮子がある。蓮弁には間弁があり、花弁は厚めの輪郭線で囲まれる。この軒瓦は、外区内縁に雷文と圈線が巡る。雷文は内外区を分ける界線に基部が接し、29箇所を数える。胎土は、砂粒を含み、色調は黄橙色から灰白色である。また中房周辺に割れ目が一周する。このことから、軒丸製作は、範にまず中房部分の粘土を先詰めしている。（5）は中房が剥離したものである。さらに（4）は瓦当と丸瓦部の接合技法の痕跡が残る。その技法は、丸瓦先端部をナデで調整し、先端面、凸面、凹面にヘラで0.5～1cmくらいの間隔で刻みを入れる。接合し、粘土を補充している。なお（6）は、胎土に砂粒が目立ち、焼成はあまく、色調は灰白色であり、瓦当外周下部

表4 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	土器	104箱		4箱	0箱
弥生時代	土器		弥生土器1点		0箱
飛鳥～奈良時代	土師器、須恵器		土師器2点、須恵器3点		92箱
	軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦		軒丸瓦6点、軒平瓦13点、丸瓦2点、平瓦6点		
	金属類	鉄釘2点、鉄滓1点			
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器	1箱	土師器皿1点、須恵器2点、灰釉陶器1点		0箱
合計		105箱	40点（9箱）	4箱	92箱

※整理箱数は、整理後、遺物をランク分けしたため、出土時より4箱多くなっている。

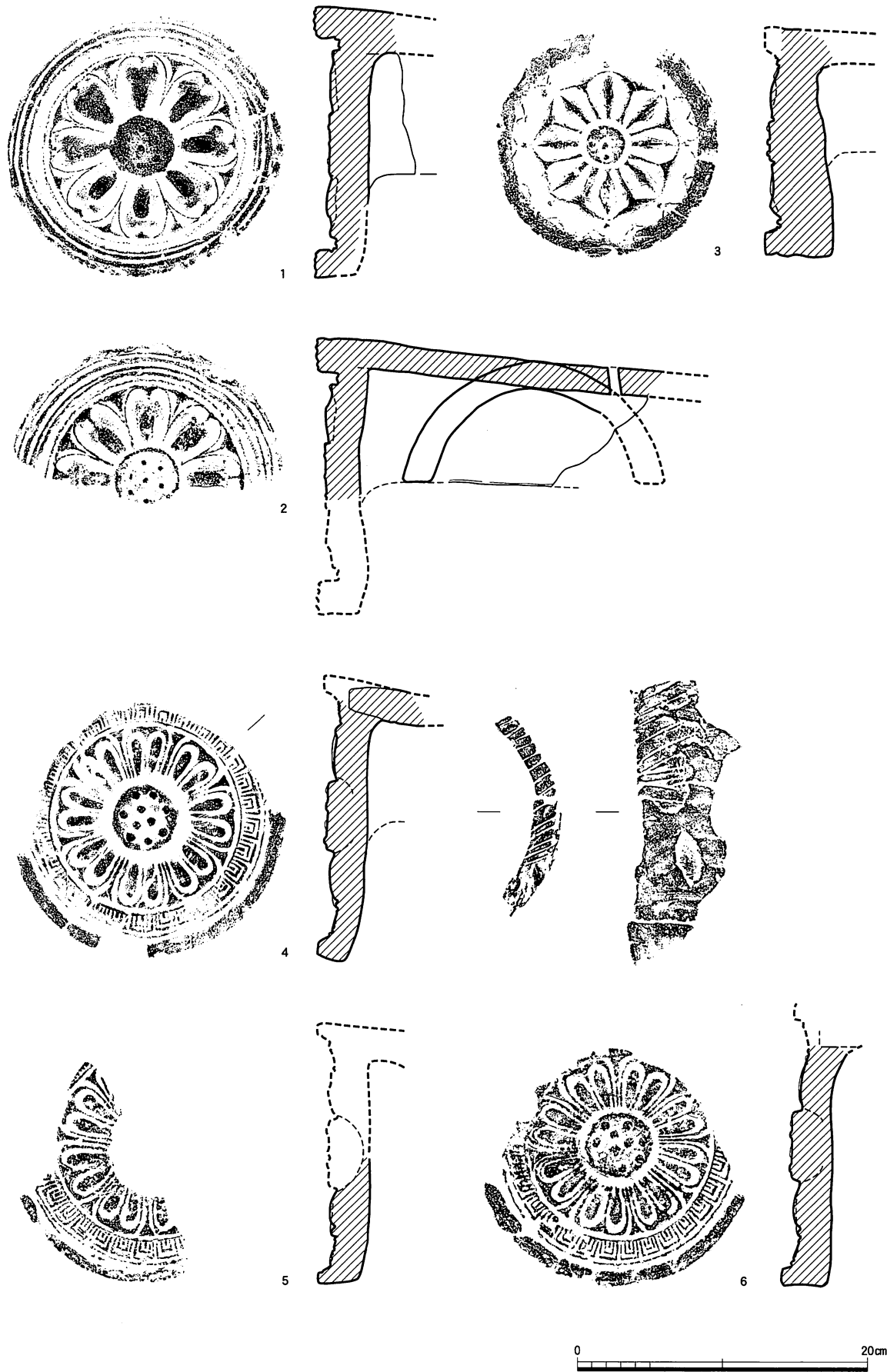


図19 軒丸瓦拓影および実測図（1：4）

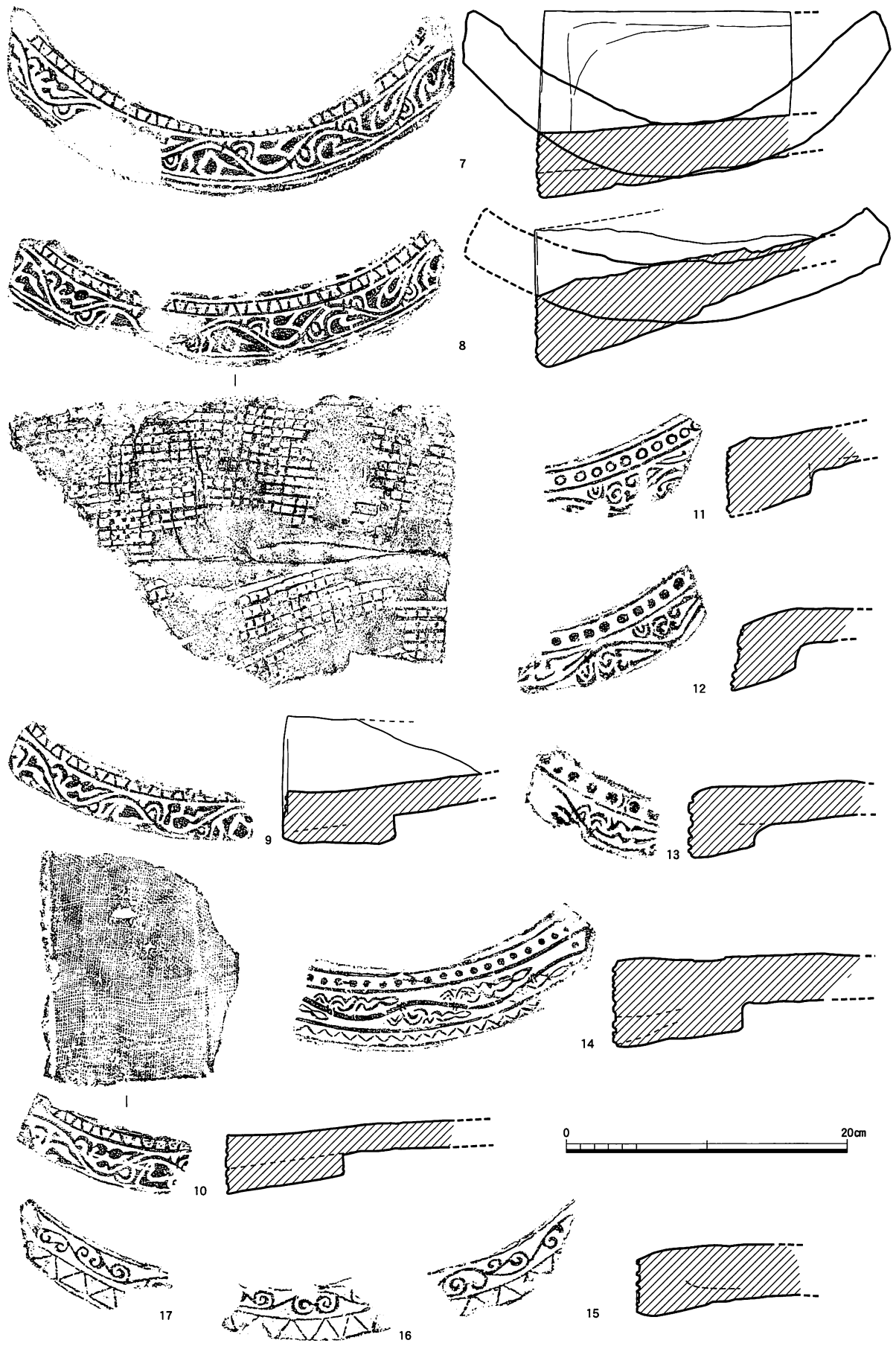


図20 軒平瓦拓影および実測図 (1 : 4)

の成形に違いがあるので図示した。以上の同文瓦が、東方基壇と回廊跡、塔跡から出土している。

偏行忍冬唐草文軒平瓦 A類 (7~10) 瓦溜10から出土した。唐草文は肉厚である。上外区は上下が途切れる線鋸齒文である。下外区は3条の凸線とないものがある。(7)は瓦の反りが大きく、瓦当中央部は鋸齒文帯が途中で切れる。下外区は3条の凸線である。凹面には布目と模骨痕が残り、凸面には所々に格子叩きが残る。桶巻き作りであろう。焼成はややあまく、色調は褐灰色である。(8)は唐草文の盛り上がりが少ない。下外区は3条の凸線である。凹面は布目と模骨痕が残る。凸面は格子叩きがほぼ全面に残り、瓦当面から奥へ約12cmの所に浅い段を設け段顎としている。さらに瓦当面から奥へ約16~17cmの所にベンガラを塗布した痕跡が残る。桶巻き作りだろう。焼成は少しあまく、胎土は砂粒が混じり色調は緑灰色~褐灰色である。また平瓦部左を人為的に斜めに割る。このことからこの軒平瓦は、屋根の隅に葺かれたものであろう。(9・10)は下外区が殆どない。(7・8)と異なり明確な段顎であり、凸面は縄叩きである。また(10)の凹面左端は、平瓦を切り離す目安となる分割突帯が認められることから、桶巻き作りである。(9・10)の瓦当部の成形は、平瓦の端面を貼り付けて瓦当を作り段顎としている。同範と思われるものが、東方基壇、回廊跡、塔跡から出土している。

偏行忍冬唐草文瓦 B類 (11) 西面回廊基壇から出土した。文様は端正である。上外区は環状の珠文である。下外区は欠損しているが、1980年調査出土軒瓦(図21)から楕円形の環状の珠文であろう。凹面は布目と模骨痕が、凸面には縄叩きが明瞭に残る。段顎で瓦当裏面を強くナデる。桶巻き作りであろう。焼成は良く、色調は黄橙色である。同範と思われるものが、東方基壇、回廊跡から出土している。

偏行忍冬唐草文瓦 C類 (12・13) 瓦溜10より出土した。これらの他に第1層や落込み5などから3点出土している。文様はB類と類似する。上外区は珠文である。下外区はなく、凹面は布目をナデ消し、模骨痕が残る。凸面は縄叩きである。焼成はあまく、色調は灰白~黄橙色である。顎は段顎で縄叩きが残る、瓦当裏面を強くナデる。このことから、瓦当部の成形は、平瓦の端面を張付けて瓦当を作り、段顎とし、瓦当裏面に補足粘土を付けてナデたと考えられる。同範と思われるものが、東方基壇、回廊跡より出土している。また、これらの軒平瓦とB類(11)を比較すると、文様が類似し、珠文の位置も一致する。さらに回廊跡から出土した環状珠文のB類軒平瓦(図21)とも比較すると、文様や環状珠文と珠文の位置が一致する。これらのことから、C類



図21 1980年調査出土軒平瓦

はB類を環状珠文から珠文へと改刻したものと考えられる。

偏行忍冬唐草文軒平瓦 D類 (14) 瓦溜10から出土した。文様は端正であるが、範キズが左上から右下へ走る。上外区は珠文、下外区は線鋸齒文である。凹面は布目と模骨痕が残り、右端には分割突帯が認められる。桶巻き作りである。凸面は縄叩きである。顎は、段顎でナデ消

す。瓦当裏面は強くナデる。焼成は良く、色調は黄橙色である。同範瓦が回廊跡から出土。

偏行唐草文軒平瓦E類(15~17) 溝6、攪乱、南拡張区から出土した。図示した3点でほぼ全体が復元できる。文様は端正である。上外区は界線のみで、下外区は線鋸歯文である。凹面と凸面は丁寧なナデ消しと面取りをほどこす。直線顎である。焼成は少しあまく、色調はにぶい黄橙色である。この軒平瓦は、北白川廃寺では初めての出土瓦である。

素文軒平瓦F類(18・19) 落込み5から出土した。瓦当面は横ケズリを施し、文様はない。(18)の凹面は縦のナデで布目を消す。凸面は縄叩きであるが、幅約4.5cmの縦の段差が幾つかある。この段差は凹型台の圧痕と思われる。直線顎である。焼成は少しあまく、色調は青灰~灰白色である。その他に3点出土している。(19)は、(18)と比較すると、調整はやや粗雑であり、焼成はやや悪く、胎土は白色粒が目立ち、色調は褐灰色である。また(18)同様に凸面には縦の段差があることから、凹型台を用いている。他に1点出土した。素文軒平瓦は、東方基壇、塔跡、回廊跡より出土している。

丸瓦(20・21) (20)は落込み5から出土した全長のわかる行基式丸瓦である。全長は約41cm、狭端幅11.5cm、厚さ約2cmである。凸面は縦の丁寧なナデで叩きを消す。凹面は布目が残る。焼成はややあまく、色調は浅黄~褐灰色である。(21)は瓦溜10から出土した全長が推定できる玉縁丸瓦である。全長は推定40cm、厚さ約2cmである。凸面は縦の丁寧なナデで叩きを消す。凹面は、布目と7つの指痕が残る。焼成はあまく、胎土には砂粒がめだち、色調は灰白~黒褐色である。

平瓦(22~27) (22)は、瓦溜10から出土した。広端幅約27cm、長さは25cm以上、厚さ約2cmである。凹面は、布目と模骨痕が残る。凸面は縄叩きである。焼成はややあまく、胎土は砂粒や礫がめだち、色調は灰白~褐灰色である。(23)は、北壁断割りの上層より出土した。凸面の叩きは、0.5cm前後の凸線で作る格子である。凹面は布目と模骨痕が残る。桶巻き作りだろう。焼成はあまく、色調は灰白色である。(24)は、北壁断割りで出土した。凸面の叩きは、0.2~0.5cmの凸線が、約0.5cm間隔で縦縞になる、やや斜めの叩きである。凹面は布目と模骨痕がのこる。

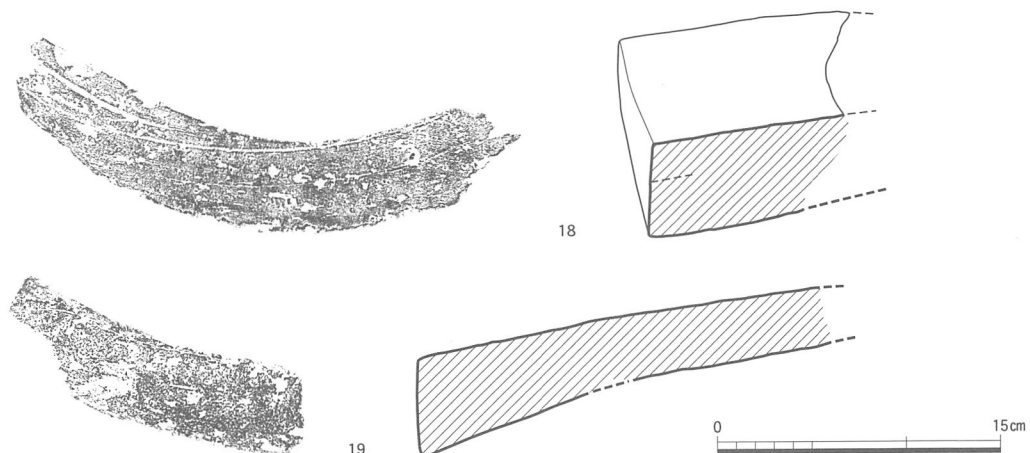


図22 素文軒平瓦拓影および実測図(1:4)

桶巻き作りだろう。焼成はあまく、色調は浅黄橙色である。(25)は、北壁断割りで出土した。凸面の叩きは、まず(24)の叩きを施し、その上に格子叩きをする。縦縞の叩きは同じものであろうが、格子叩きは他のものよりやや格子目が大きい。凹面は布目が残る。焼成はややあまく、胎土は密で色調は浅黄橙色である。(26)は南拡張区から出土した。凸面の叩きは、数条の凸線が交差し、V字が重なるものである。この叩きは塔跡で出土した特異な叩きと同じである。凹面は布目と糸切り痕が残る。焼成は良好であり、胎土は密で色調は浅黄色である。(27)は礎石据付穴7から出土した。凸面の同心円状の叩きは、日輪文と称されている、塔跡で出土した特異な叩きである。凹面は、布目と模骨痕がのこる。桶巻き作りだろう。焼成は良好である。胎土は緻密で硬質であり、色調は青灰～緑灰色である。

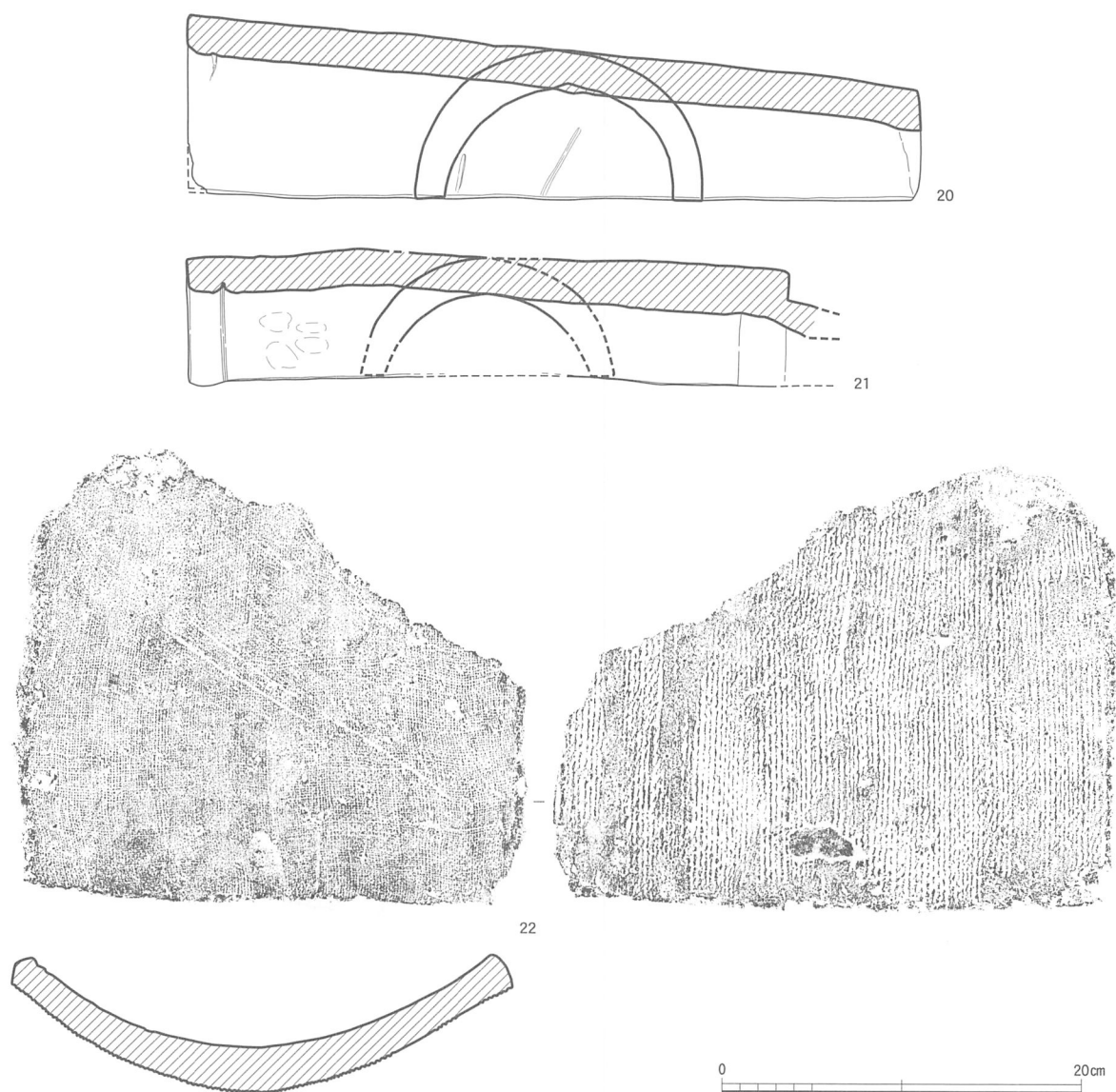


図23 丸瓦・平瓦拓影および実測図（1：4）

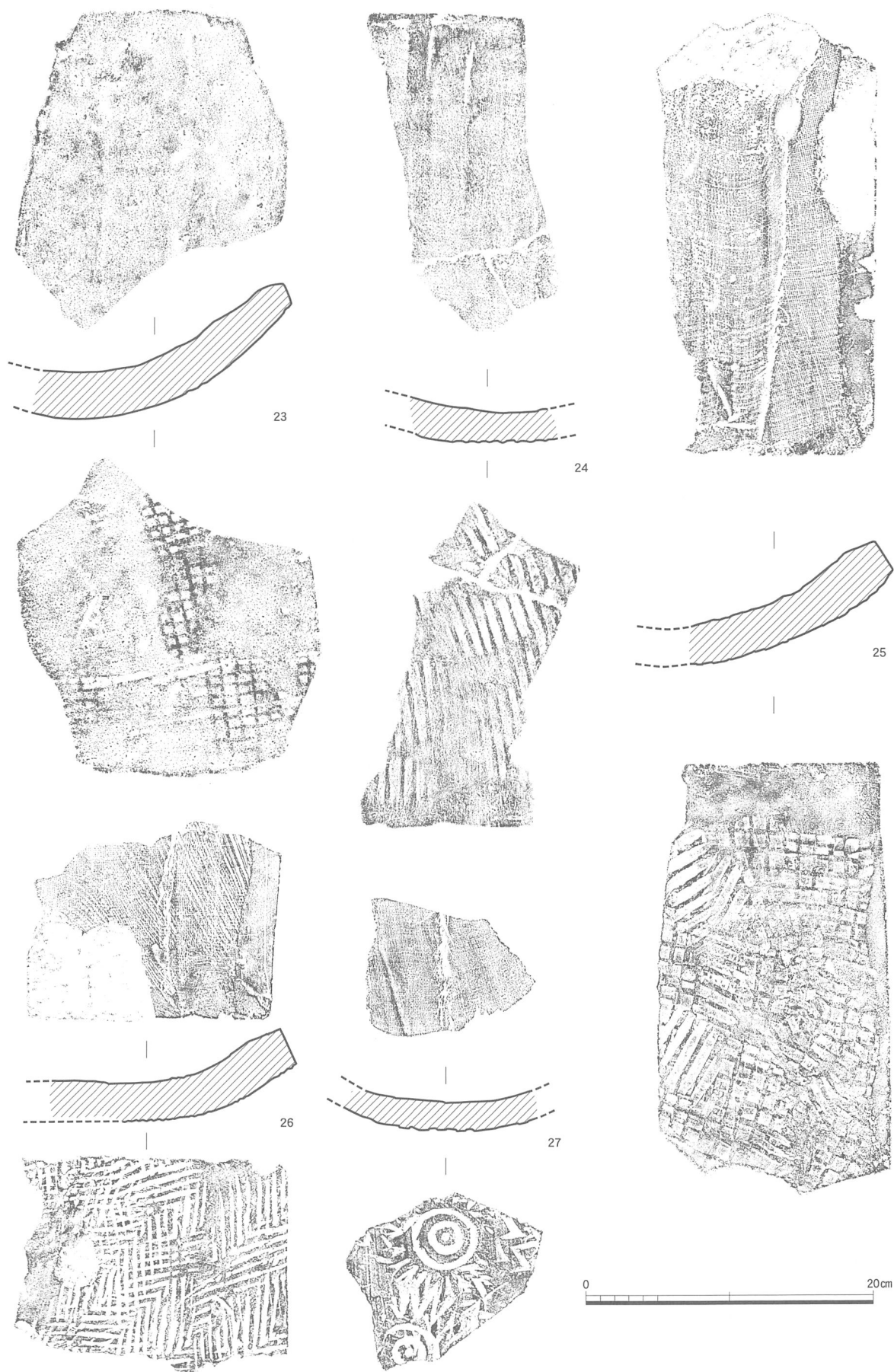


図24 平瓦拓影および実測図 (1 : 4)

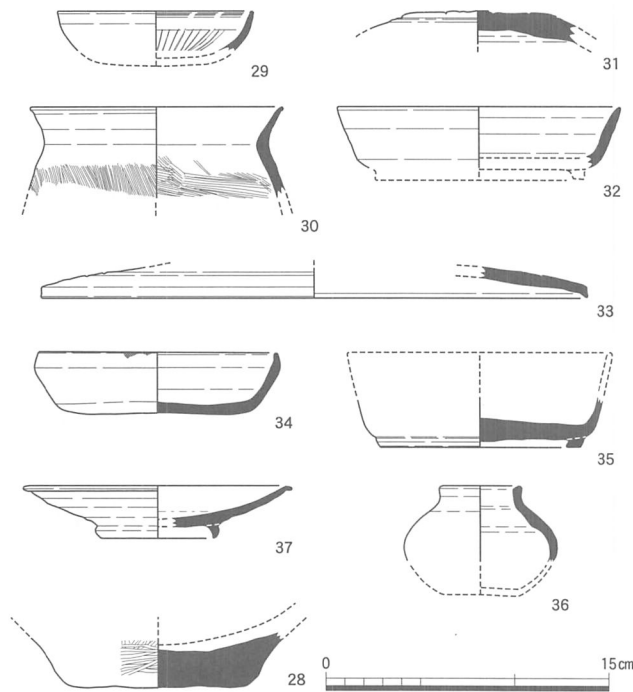


図25 出土土器実測図（1：4）

（2）土器類（図25）

土器類の出土は少なく、数点の縄文土器や弥生土器をのぞくと、7世紀から10世紀頃までのものが出土している。そのなかでは7世紀後葉から8世紀前半のものが比較的多い。種類は、ほとんどが土師器と須恵器であるが、灰釉陶器、緑釉陶器と思われるものも数点出土している。土師器は、甕と放射状の暗文をもつ杯がある。須恵器は杯、壺、甕がある。これらのなかから残存状態の良いもの図示した。なお土器の年代については、平安京・直前期¹¹⁾～京XIV編年に準拠した。

(28) は弥生土器の底部である。胎土には砂粒が多く混じる。弥生第I様式であろう。北壁断割・西面回廊基壇の整地土より下層の黒色砂泥層から出土した。(29) は土師器杯の口縁部である。内面に放射状の暗文をもつ。7世紀後半から8世紀初頭のものであろう。瓦溜10（南北溝21）より出土した。(30) は土師器甕の口縁部である。内面・外面ともにカキ目がある。7世紀後半から8世紀前半のものであろう。西面回廊基壇の整地土より出土した。(31) は須恵器杯の蓋であらう。表面に自然釉がある。7世紀後半であらう。南壁断割・基壇の整地土最下層より出土した。(32) は須恵器杯の口縁部である。7世紀後半から8世紀前半であらう。北壁断割・基壇の整地土より出土した。(33) は須恵器杯の蓋であらう。年代は不明瞭であるが、8世紀あたりのもと思われる。柱穴16より出土した。(34) は土師器杯である。砂粒が多く混じる。器形および技法には地域色がうかがえる。8世紀後半頃であらう。内溝（南北溝21）最下層より出土した。(35) は須恵器杯の底部である。貼り付け高台である。8世紀後半から9世紀前半であらう。瓦溜10上部より出土した。(36) は須恵器壺の上半部である。表面の一部に黒斑がある。8世紀後半から9世紀前半であらう。南拡張区から出土した。(37) は灰釉陶器の皿である。貼り付け高台である。9世紀後半～10世紀前半であらう。

(28) は弥生土器の底部である。胎土

瓦溜10（東西溝22）より出土した。

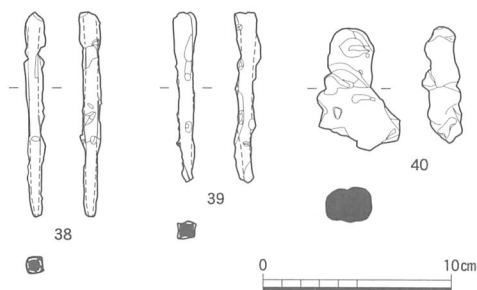


図26 金属類実測図（1：4）

（3）金属類（図26）

3点出土した。すべて鉄であり、釘と鉄滓である。(38) は鉄釘である。長さは11.7cm、断面は方形で、元の一辺は0.5cm前後であらう。重さは約19gである。瓦溜10下層（南北溝21西肩）より出土した。(39)

も鉄釘である。長さは8.9cm、断面は方形で、元の一辺は0.6cm前後であろう。重さは約20gである。瓦溜10下層（内溝の合流部）より出土した。(40)は鉄滓である。1990年調査1で小鍛冶の遺構を検出している。調査地近辺でも小鍛冶がなされたものか。内溝（南北溝21）最下層より出土した。

4. まとめ

今回の調査地北隣、1980年の調査で、東方基壇（金堂）とされた建物基壇の南西部、この西側で版築を施した南北方向の基壇跡を検出した。さらに、1990年の調査では、この基壇跡の西で南北溝を検出したことから、この基壇跡が回廊であることがわかった。今回の調査では、その西面回廊が東に折れ曲がり、この回廊が東方基壇（金堂）を囲む回廊であることを明らかにすることができた。以下、検出した遺構について要約する。

西面回廊 1980年の調査で梁間約3.8m、桁行約3.2m、方位は北に向かって東へ1.7度前後振れる成果を得ている。この内側の柱列を南へ延長すると、今回検出した2基の礎石据付穴は、検出している柱列の北端から10番目と11番目となる（図27）。検出した南北溝も1980年調査の内溝の延長にあり、基壇東端の位置、内溝底部からの基壇高（約0.7m）ともほぼ同じである。

南面回廊 西面回廊から東へ折れ曲がる基壇を検出した。また、検出した土層から、この基壇が西面回廊より先行して造営されたと考えられる。

これら検出した遺構の時期については、調査経過で述べた時期と矛盾はない。

また今回の調査でいくつかの課題が残った。

1 両回廊が取付く礎石据付位置を明らかにできなかったこと。

回廊南西にあたる調査区の南を拡張し、調査したが、明瞭な遺構は検出しなかった。南面回廊基壇でも土壌は検出したが、これが南面回廊の礎石に関係するものであるかどうかは明確でない。

2 回廊で囲まれる中でも、最も低い場所と考えられるものの排水施設を検出しなかったこと。現状では調査地の北側に排水施設があると考えざるを得ない。排水が滞り、回廊基壇が損傷を受けやすく、修復が必要になったと考えられる。

3 南面回廊の基壇幅が西面回廊より広くなるとみられること。

両回廊が取付く礎石据付位置は不明だが、西面回廊の内側の柱列との取付き関係から、南面回廊の内側の柱列が検出した基壇北端からかなり内側に想定されることとなる。このため、南面回廊基壇は、西面回廊基壇より幅広くなることがわかる。

4 金堂院の復元

東方基壇（金堂）を囲む回廊の南西隅が明らかとなり、金堂院の推定が可能な状況となってきたが、北面回廊の位置が不明で、現状では規模を明確にできない。

以上のような課題があるが、これらの解明は、北白川廃寺寺域や伽藍構成の問題とともに、今後の調査を待ちたい。

註

- 1) 梅原末治「北白川廃寺址」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第19冊 京都府 1939年
- 2) 梶川敏夫ほか『北白川廃寺塔跡発掘調査報告』北白川廃寺発掘調査団・京都市文化観光局文化財保護課 1976年
- 3) 吉村正親「北白川廃寺塔跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成7年度』京都市文化市民局 1996年
- 4) 網 伸也「北白川廃寺の伽藍復原」『杉山信三先生米寿記念論集 平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集刊行会 1993年
- 5) 辻 純一『北白川廃寺跡発掘調査概報 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
- 6) 家崎孝治「北白川廃寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概要 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
- 7) 網 伸也ほか「北白川廃寺 第6次調査」『北野廃寺・北白川廃寺発掘調査概報 平成2年度』京都市文化観光局 1991年
- 8) 網 伸也「北白川廃寺2」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 9) 鈴木廣司ほか「北白川廃寺」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 10) 表・図のみ「番号65」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
- 11) 小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房 2005年

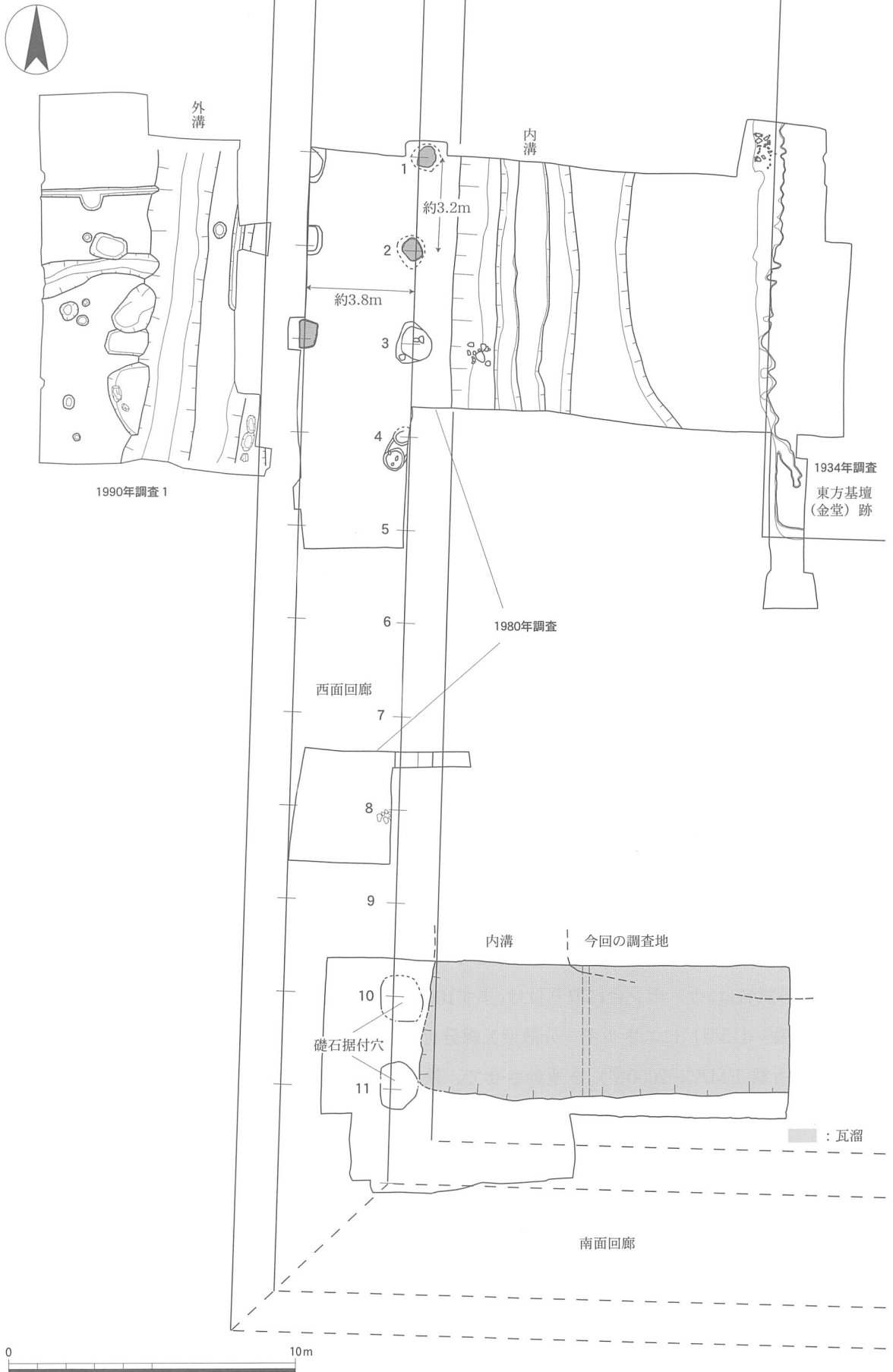


図27 主要遺構配置図 (1 : 200)

5. 軒平瓦（8）に付着した赤色顔料に関する調査

（1）はじめに

今回の北白川廃寺跡の発掘調査では、東方基壇を取り巻く回廊に相当すると考えられる西面および南面回廊とともに瓦溜遺構が検出され、ここからは白鳳期（7世紀後半）の軒丸瓦や軒平瓦などが大量に出土した。このような創建期頃の軒平瓦（8）には、赤色顔料の痕跡が付着した状態で確認された。今回、この赤色顔料について文化財科学的な調査を行ったので、その結果を報告する。

（2）調査方法

分析対象試料の採取

瓦溜遺構から検出された赤色顔料の付着が明確に観察される軒平瓦（8）について、まず瓦表面の土壌をエタノール液を用いてクリーニングした後、残存状態が良好な部分3箇所から1～2mm角の赤色顔料の剥落片を注意深くサンプリングし、これを電子顕微鏡観察およびEPMA分析用のカーボンテープ上に固定して分析試料として供した。

無機元素の定性分析

試料の成分分析は、あらかじめ分析用カーボンテープに固定した分析試料を（株）堀場製作所 MESA-500型の蛍光X線分析装置に装着し、電子線（X線）を照射して特性X線を検出した。設定条件は以下の通りである。分析設定時間は600秒、試料室内は真空状態、X線管電圧は15kVおよび50kV、電流は240 μ Aおよび20 μ A、検出強度は50,000cps、定量補正法はスタンダードレス。

赤色顔料の粒子形態の観察

赤色顔料の粒子形態の観察には、サンプリングした分析試料のなかで赤色顔料が良好に残存した部分を実体顕微鏡および金属顕微鏡で確認した後、走査型電子顕微鏡で画像（SEM画像）観察した。各試料は、カーボン台に取り付け、まず100倍～2,500倍の低倍率観察を走査電子顕微鏡（日立製作所製S-415型）にエネルギー分散型X線分析装置（EPMA・電子線マイクロアナライザー・堀場製作所製 EMAX-2000型）を連動させて、鉄（Fe）元素がマッピング検出される部分を中心に画像観察した。分析設定時間は600秒である。

次に、個々の顔料の粒子形態を詳細に観察するために（株）日立製作所分析センターにおいて、30,000～50,000倍の高倍率画像観察を、日立製作所製S3000型およびS3200N型走査電子顕微鏡を用いて行った。各試料は、先のカーボン台に取り付けた試料を、実体顕微鏡および金属顕微鏡観察で赤色顔料の集積が良好であり、かつ低倍率の電子顕微鏡観察では鉄（Fe）元素がマッピング検出された部分を中心に観察した。

(3) 調査結果

まず、軒平瓦に付着した赤色顔料の構成無機元素を蛍光X線分析した結果、いずれの試料からも鉄(Fe)元素の特性X線が強く検出され、水銀(Hg)および硫黄(S)や、鉛(Pb)元素のピークは検出されなかった(図28)。そのため、本試料は朱(辰砂もしくは水銀朱;HgS)や鉛丹(四酸化三鉛;Pb₃O₄)顔料ではなく、ベンガラ(酸化第二鉄;Fe₂O₃)顔料であることがわかった。

次に、金属顕微鏡を用いて200~400倍の低倍率でこのベンガラ顔料を観察した結果、良好な赤色を呈する中空円筒状(パイプ状)の形状集合体が多数確認された(図版20-1)。さらに、電子顕微鏡によるSEM画像でも、0.1マイクロメートル前後のベンガラ粒子が一定の規格性(らせん状)をもって1マイクロメートル程度の直径を有する中空円筒状(パイプ状)の形状を呈する集合体が明瞭に観察された(図版20-2)。これらは、直径1マイクロメートル、長さは長いもので約20マイクロメートルにおよぶ中空円筒状の形状を有することから、通称「パイプ状ベンガラ」と呼称される酸化鉄系のベンガラ顔料の一種である。これまでの一連の研究成果では、このようなパイプ状ベンガラは少なくとも縄文時代前期の赤彩土器から古墳時代の装飾古墳壁画の使用顔料に至るまで、比較的古い年代に全国各地で広範に用いられていたことが報告されている。このベンガラの特徴である中空円筒状を呈する形状は、自然界に広く分布する二価の鉄イオンを三価の鉄に替える力をエネルギーとして生息する鉄バクテリア(Leptothrix Ochraceae)の鞘状殻の形状に由来している。鉄バクテリアは、主に停滞水が豊富な湿地の環境下で赤褐色もしくは黄褐色を呈して沈殿もしくは綿屑状に浮遊して密集生息するが、それ自体の鞘状殻には鉄酸化物の沈着物質が豊富であるため、通常、沼鉄鉱とも呼称される(図版20-3, 4, 5)。このような純度の高い鉄イオンの集合体物質を回収して原材料とし、酸化促進剤(硫酸物質である強酸性の温泉水など)を添加して700℃ほどの設定温度で加熱すると、極めて良好な赤色を呈するベンガラ顔料を獲得することが可能である。しかし、鉄バクテリアの回収量自体が少なく量産化には不向きであるため、古い年代の赤彩土器や赤色漆、装飾古墳の使用顔料などの少量使用には対応できても、古代寺院伽藍群や宮殿建造物群などの木造建造物の外観塗装材料としては、安定的な供給が困難であるため不適であると、これまで考えられてきた。文献史料によると、『延喜式』には「赭石」と記述される赤鉄鉱原石を原材料とした天然ベンガラに相当する「赤土ベンガラ」が、『豊後風土記』には「赤湯泉(あかゆ)」の温泉沈殿物である「赤泥ベンガラ」が木造建造物の外観塗装材料として用いられたことが管見される。各地で検出される廃寺跡などの寺院関連遺跡や宮殿跡出土瓦の付着ベンガラの分析結果では、天然赤鉄鉱を原材料とする「赤土ベンガラ」の使用が確認された事例は平安京朝堂院跡出土瓦(平安前期)の事例のみであり(図版20-6)、実際には赤色顔料としての赤い色相は若干劣るものの、量産が可能な鉄分の含有量が多い黄土を加熱して赤色顔料としての赤い呈色を獲得し、これを粉砕して作成する「丹土ベンガラ」が中心であった(図版20-7)。

これまで本試料と同様な歴史時代の赤色顔料の分析結果においてパイプ状ベンガラが検出され

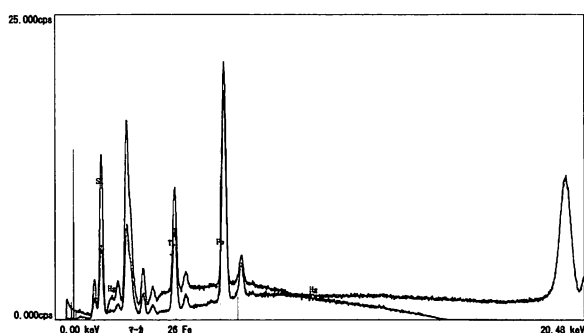


図28 赤色顔料分析グラフ

た事例は、奈良県香芝市の尼寺廃寺塔跡心礎直上から検出された赤色顔料と、正倉院宝物の一つである彩絵仏像幡の幡脚塗装赤色顔料の2報告例のみである。このうちの尼寺廃寺跡出土資料の場合、純度が高く良好な赤色を呈するパイプ状ベンガラの使用は塔跡心礎直上に限定されており（図版20-8, 9）、本試料同様の出土瓦付着のベンガラ顔料は赤土ベ

ンガラの鉱物粒子がさらに粘土鉱物などの不純物を多く含みながら不定形に細分化した不定形の集合体物質であった。この点からは同じ寺院内の建造物伽藍群でもそれぞれの外観塗装材料としてのベンガラ顔料には品質差があり、特にパイプ状ベンガラ顔料の稀少性が想定される。

いずれにしても北白川廃寺跡出土瓦付着の赤色顔料に形態的に特徴があるパイプ状ベンガラが確認されたことは、この軒平瓦が使用された建造物自体の意義の高さが推測された。

引用文献

- 1 吉田裕 訳『風土記 東洋文庫145』平凡社 1969年
- 2 国史大系編集会『新訂増補 国史大系（普及版）延喜式 後篇』吉川弘文館 1972年
- 3 西山巖「べんがら」『改訂増補 最新顔料便覧』p.448-451 日本顔料技術協会編 誠文堂新光社 1977年
- 4 永嶋正春「漆と赤色顔料」『保存科学研究集会 1997研究発表要旨集』奈良国立文化財研究所 1997年
- 5 岡田文男「パイプ状ベンガラ粒子の復元」『第14回大会日本文化財科学会 発表要旨集』1997年
- 6 八賀晋「古代の鉄生産について - 美濃金生山の鉄をめぐって-」『学叢 第21号』京都国立博物館 1999年
- 7 北野信彦・朽津信明・肥塚隆「赤色顔料の生産と流通に関する基礎的調査」『日本考古学協会第68回総会 研究発表要旨』日本考古学協会 2002年
- 8 北野信彦「尼寺廃寺出土遺物に付着した赤色顔料に関する調査」『尼寺廃寺跡 I』香芝市教育委員会 2003年
- 9 成瀬正和「正倉院宝物に用いられた無機顔料」『正倉院紀要 第26号』宮内庁正倉院事務所 2004年
- 10 朽津信明「古代建築塗装の赤色顔料」『日本文化財科学会第22回大会 研究発表要旨集』日本文化財科学会 2005年
- 11 北野信彦「丹土ベンガラの製法に関する基礎的調査」『研究紀要vol. 38-1』くらしき作陽大学 2005年

Ⅲ 上京遺跡

1. 調査経過

本調査は、上京遺跡内に位置する個人住宅の新築工事に伴う発掘調査であり、京都市埋蔵文化財調査センターより委託を受け、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。調査地点は、京都市上京区小川通寺之内上る本法寺前町613番地に所在し、寺之内通の北方約130m、小川通に西面する裏千家今日庵の敷地内北西部に位置する。調査は平成17年7月11日から8月8日まで実施した。調査区は既存の井戸施設が北接

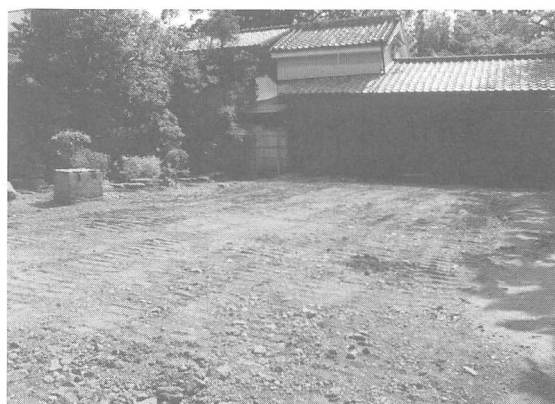


図29 調査前全景（南西から）

して位置することから北側に控えを残して南北6.5m、東西14.8mで設定した。ただし建物設計の都合から西南隅部の4.2㎡を欠いており、調査面積は92.0㎡である。調査では表土および盛土を機械掘削で除去し、以下を調査面として人力掘削に転換した。遺構や遺物が出土した際には慎重に掘削し、状況に応じて写真撮影や実測図面などの記録作成を行い調査を進めた。

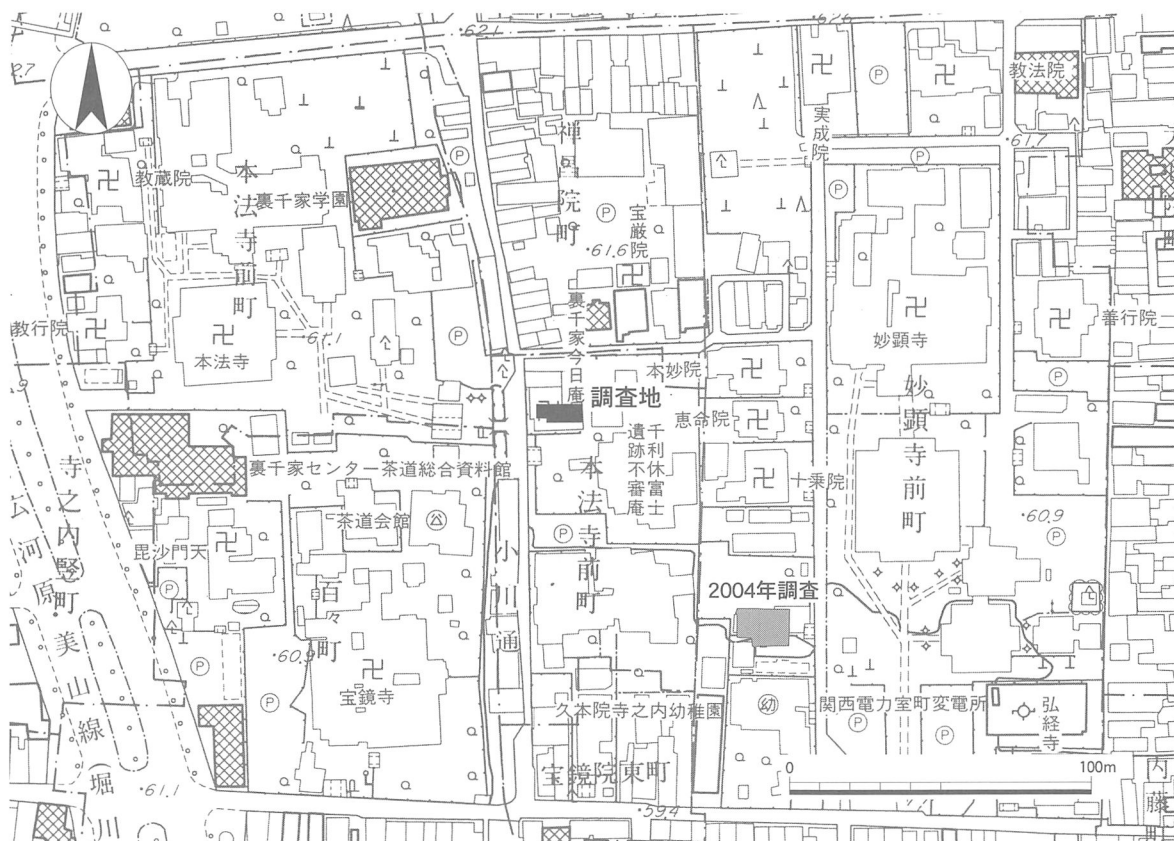


図30 調査位置図（1：2,500）

2. 位置と環境

上京遺跡は、平安京の北辺に隣接する中世の都市遺跡であり、上御霊前通以南、烏丸通以西、一条通以北、智恵光院通以東を境として、約1km四方に広がる遺跡である。近年進展してきた中世京都の研究によりその歴史的重要性が再認識されつつあること、また既往の調査例から周辺遺構の残存状態が良好と判断されたことから平成15年（2003）に登録された新たな遺跡である。遺跡内では将軍家や公家の邸宅跡など既登録の著名な中世遺跡が数多くみられる。

主な遺跡は、鎌倉時代では寛元3年（1245）に九条道家が一条家始祖となる四男実経のために造営した一条室町殿跡、室町時代では同じく五摂家の一つである近衛家の屋敷跡で「桜の御所」とも呼ばれた近衛殿跡（同志社大学新町校地遺跡）、また室町幕府3代将軍足利義満が永徳元年（1381）に造営した「花の御所」とも称される室町殿跡、天文5年（1536）の天文法華の乱に際して焼討された日蓮宗本満寺の構え跡などが挙げられ、中世京都を代表する歴史的地域の一つに数えられる。

また、遺跡内には平安時代の寺院跡である草堂跡（行願寺）が含まれ、遺跡周辺では東に相国寺旧境内や出雲寺跡、北に悲田院跡や紫野齋院跡、西に世尊寺跡など奈良時代から室町時代にかけての寺院跡や邸宅跡なども接しており、各時代を通じて遺跡が比較的密集した地域でもある。これらのことから、上京遺跡を含む地域は今後とも京都の歴史を考古学的に解明する上で重要な地域になる可能性が高いといえる。

調査地点は、上京遺跡の北部中央に位置し、室町時代後期の町田家旧蔵本『洛中洛外図屏風』

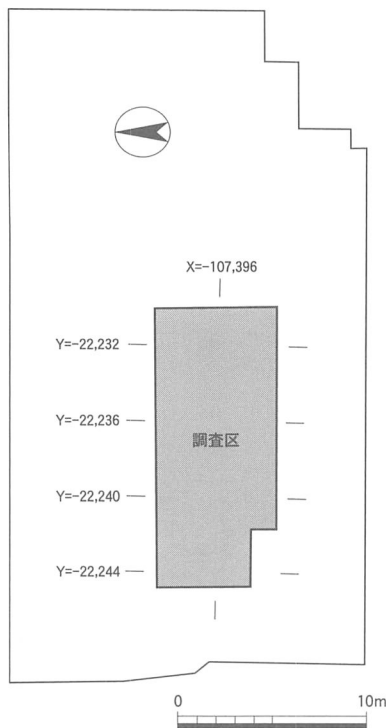


図31 調査区配置図（1：400）

によれば、大永5年（1525）に室町幕府12代将軍足利義晴が造営した柳原御所（柳の御所）の中央部西辺付近と推定される。柳原御所は、御霊前通以南、西洞院通以西、寺之内通以北、油小路以東の区画に位置し、義晴が荒廃した室町殿（花の御所）を修築して移徙する天文11年（1542）までの17年間存続した。町田家旧蔵本の景観年代についてはその根拠の一つに柳原御所などの所在を挙げ、上限は大永5年（1525）、下限は享禄4年（1531）が妥当とされる。

これに続く上杉家本『洛中洛外図屏風』ではほぼ同じ位置に禅昌院が描かれており、調査地点は柳原御所と同様、禅昌院の中央部西辺付近に推定できる。上杉家本の景観年代については諸説が挙げられるが、各々の建築を綿密に考証した今谷明氏の説によれば天文16年（1547）と推定される。禅昌院は細川典厩家2代政国の院号であり、文明19年（1487）の政国没後にその邸宅が禅宗寺院

とされ、柳原御所の故地に移転してきた可能性がある。典厩とは律令制下に官馬の飼育などを司った左右の馬寮とその頭の唐名である。典厩家は細川庶流の中でも宗家（京兆家）を補佐しつつ、將軍の御供衆を任じられた筆頭の家格であり、町田家旧蔵本では柳原御所の南に典厩細川尹賢邸、さらに南に管領細川高国邸（細川殿）が描かれている。禪昌院は中世末期に廃絶したとされる¹⁾。

桃山時代には、調査地点の東側では天正11年（1583）に豊臣秀吉の城塞整備に伴い日蓮宗妙顕寺が二条西洞院から移転して妙顕寺城が建立され、油小路（現小川通）を隔てた西側では天正18年（1590）に秀吉の洛中整理により日蓮宗本法寺が一条堀川から現在地に移転してきた。

調査地点の北側では、上記の禪昌院が豊臣秀吉の恩顧により再興された。その位置と規模については、当時の史料ではないが、江戸時代前期の中井家旧蔵本『洛中絵図』によると上御霊前通に近い北寄りの位置に禪昌院がみられ、再興された時期には寺地が縮小された可能性がある。禪昌院は宝巖院とも称され、現在では臨済宗天龍寺の一塔頭として嗟峨に移転している²⁾。

また、調査地点の南側では、天正19年（1591）の千利休自刃後、会津の蒲生氏郷に預けられた千家2代少庵が文禄3年（1594）に許されて帰洛し、本法寺前に屋敷を構え、千家が再興された。その規模については南北41間（約74.5m）、東西16間（約29.1m）、南方では14間（約25.5m）とされ、ほぼ現在の千家敷地内に収まるとみられるが、詳細な位置は明らかではない³⁾。

江戸時代前期には、千家3代宗旦が正保3年（1646）に隠居して茶室今日庵を造るが、天明8年（1788）の天明大火により焼失した。その後再建されて現在に至る。茶室・路地を含む今日庵裏千家庭園は昭和32年（1957）に国の名勝に指定されている。

なお、上京遺跡における最初の発掘調査は平成16年（2004）に本調査地点の南東約80mに位置する寺之内通新町西入ル妙顕寺町において当研究所が実施し、室町時代後期の柵列・堀・井戸などの遺構群を検出している⁴⁾。

3. 遺 構

(1) 基本層序（図32）

現地表は標高60.3～60.4mで宅地造成面であることからほぼ水平の状態である。表土は層厚0.1m前後を測り、以下には江戸時代以降の堆積層が層厚0.1～0.4mで認められるが、そのほとんどは土壌の埋土が連続した様な攪拌状態であり、明瞭な整地層は極く一部のわずかな部分に限られ

表5 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
室町時代後期	溝9、井戸27、土壌5・28・45・47、ピット群	
江戸時代	石室6、石組43、埋納遺構7・12、井戸3・24・38・48、土壌39・40・41・44・50、柱穴21、落込1、ピット	

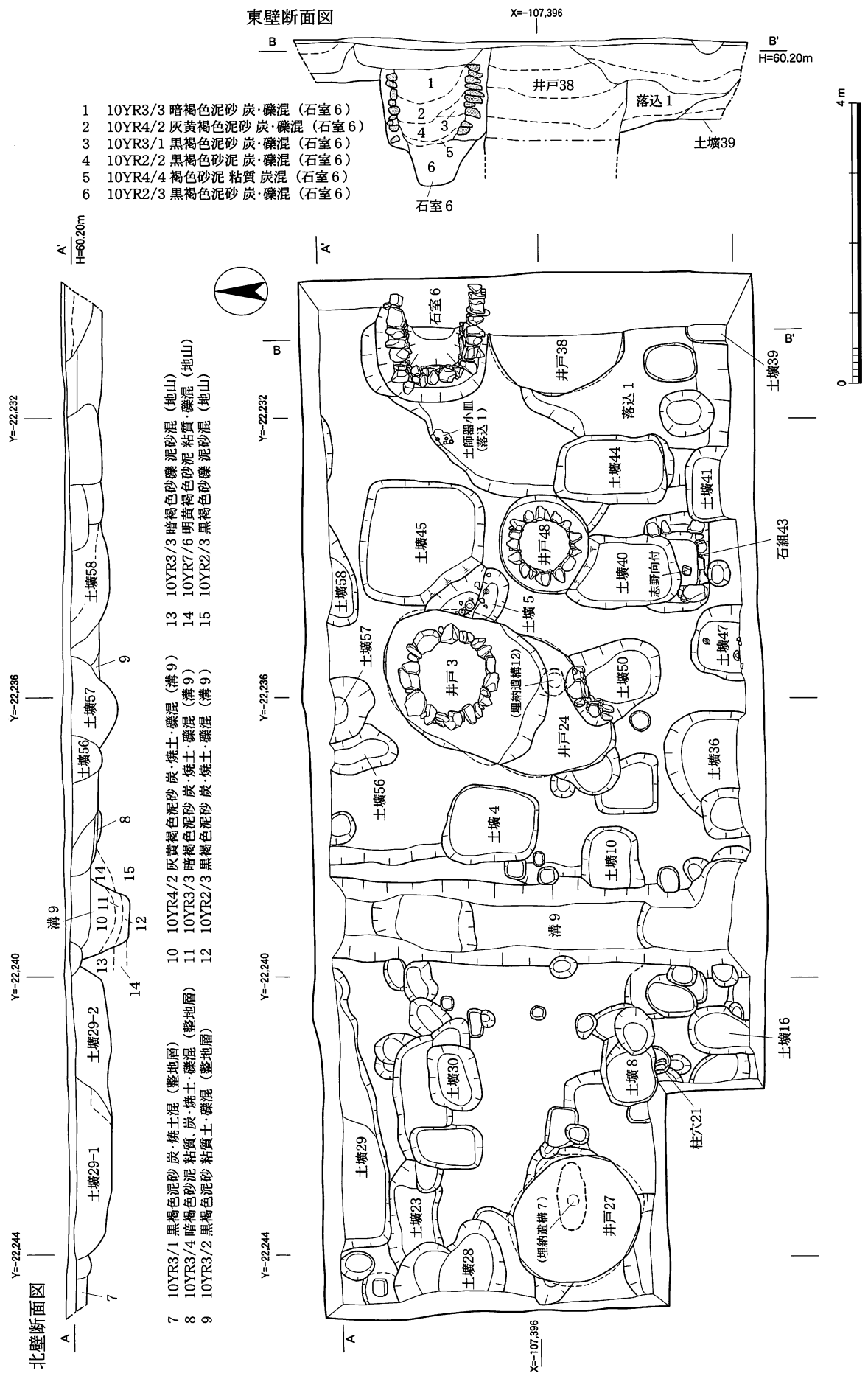


図32 遺構実測図 (1 : 80)

た。現地表下0.2～0.5m（標高59.8～60.1m）には自然堆積（地山）の暗褐色砂礫層および黒褐色砂礫層が西下がりには緩く傾斜して堆積し、調査区西半の一部では明黄褐色粘質土層が間層状に堆積していた。

（2）遺構の概要（図32）

調査前段階では周辺の調査成果から中世の遺構が多数を占めると予想されたが、今回の調査では中世よりも近世の遺構が多数を占め、合わせて87基を検出した。室町時代の遺構は何れも後期に属すると推定される溝1条（9）、井戸1基（27）、土壙4基（5・28・45・47）、ピット群などを検出した。江戸時代の遺構は石室1基（6）、石組1基（43）、埋納遺構2基（7・12）、井戸4基（3・24・38・48）、土壙（39・40・41・44・50）、柱穴（21）、ピットなどを検出した。

（3）室町時代の遺構

溝9 調査区中央部西側で検出した南北方向の素掘り溝である。検出規模は延長6.1m、肩幅1.2m、底幅0.6m、深さ0.7mを測り、断面形は逆台形状を呈する。調査区南壁側の延長0.8m程では東肩部が屈曲して肩幅1.7mと拡幅し、調査区外に延びる。溝の方位は1度前後東偏する。溝底面の比高は南北共に標高59.4m前後を測り、本調査区内では傾斜は認められない。溝底部には北部と南端部の2箇所に深さ0.2m、長さ1.3～1.5mのやや大きな窪みが認められる。埋土は大別して2～3層に分層されるが、溝が機能していた時期の堆積土は認められない。埋土上層の一部では土師器皿などを中心に整理箱1箱強が集中して出土した。

井戸27 調査区西端部で検出した素掘り状態の円形井戸であり、石組などの井戸側は確認していない。検出規模は長径2.0m、短径1.7mを測るが、壁面の砂礫層は脆くて崩壊し易く、本来はもう少し小規模であった可能性が高い。深さについては人力掘削により検出面下1.8m、調査終了段階での断割りではさらに検出面下2.7mまで掘り下げたが、底部は未検出である。

土壙 土壙5・45・47は調査区中央東寄り、土壙28は調査区西端で検出した。各土壙は何れも全形が明らかでないが、平面形は不整形な楕円状あるいは方形状を呈するとみられ、検出規模は各々1.0m前後を測る。土壙5・47では土師器皿が重なる様に集中して出土した。

ピット ピットは出土遺物も少なく、遺構時期を推定することが困難であるが、溝9の両脇で検出したピット群については並びが未確認であるが溝9に伴う遺構の可能性が高いと考えられる。

（4）江戸時代の遺構

石組43 調査区東部の南壁寄りの位置で検出した。遺構は北側を土壙40に切られており完全な状態ではない。検出状況は平面「コ」字状を呈して石組1段が遺存しており、各石上面の高さがほぼ揃っている。復元すると平面長方形を呈する小規模な石囲い状の遺構になると考えられる。検出規模は石組内面の南北長0.5m、東西長0.75m、掘形の南北長0.9m、東西長1.4m、深さ0.3mを測る。時期は江戸時代初頭（17世紀前半から中頃）と推定される。

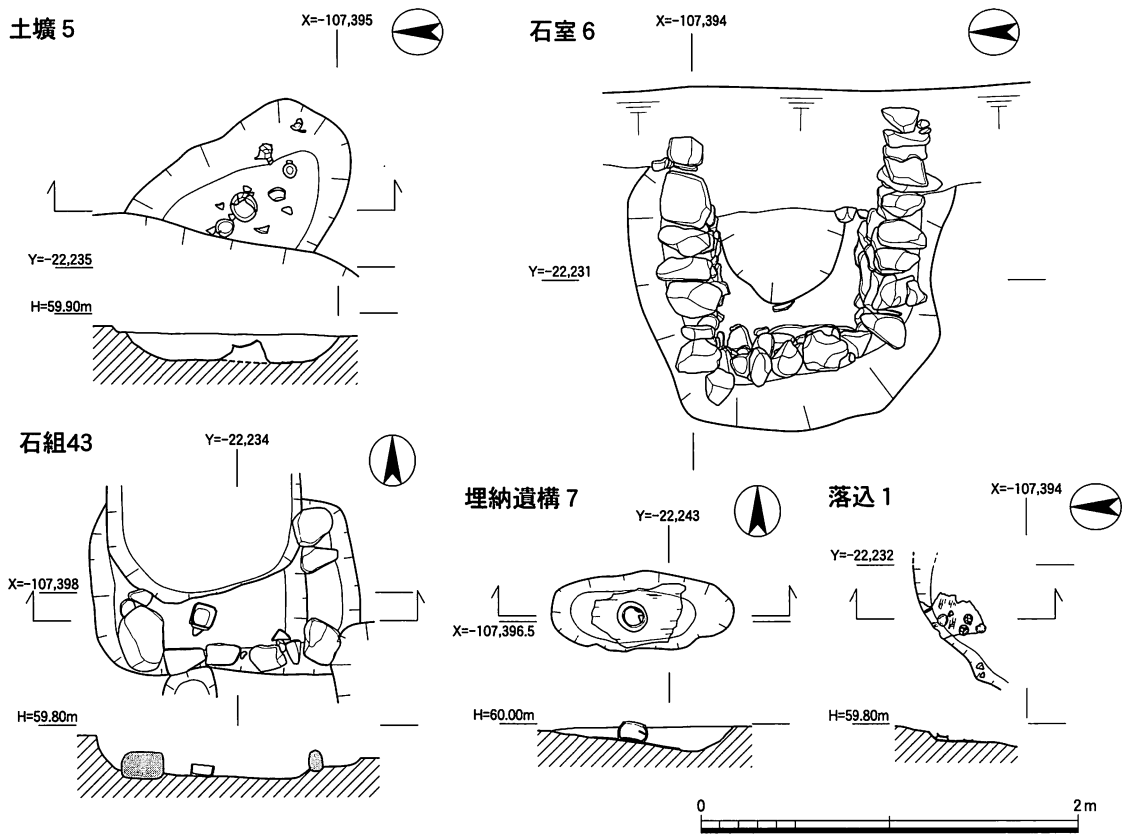


図33 個別遺構実測図（1：40）

石室 6 調査区東壁際で検出し、遺構はさらに調査区外に続くことから全体の形状は明らかでない。検出規模は石組内面の南北長0.7～1.0m、東西長1.2m以上、深さ約1.0mを測る。石組下面の内部では褐色粘質土の薄い堆積が環状に窪んだ状態で認められ、一時期の底部とみられる。掘形は南北長が上場最大1.7m、東西長1.7m以上、深さ1.7mを測る。掘形底部は石組の下方0.7m程に位置し、石組より以下は深鉢状を呈する。この遺構はやや小規模であることや、石組が途中で付け加えられた形跡が認められることなどから通例の石室遺構とは若干異なる点がみられ、遺構性格についてはさらに検討が必要である。時期は江戸時代前期（17世紀中頃から後半）と推定される。

埋納遺構 埋納遺構 7・12は調査区西端部と中央部東寄りで検出した。胞衣壺が埋設された土壙である。遺構時期は江戸時代中期から後期（18世紀後半から19世紀中頃）とみられる。

井戸 井戸 24・38は素掘りの井戸、井戸 48は石組の井戸側を伴う井戸である。井戸 24は調査区中央部で検出した。検出規模は井戸 3に半分以上が切られていることや、掘り下げ過程での部分的な壁面崩壊などもあり、全体の規模が明らかでないが、検出当初は径約1.0mを測った。井戸 38は調査区東壁際で検出し、遺構全体の約半分が調査区外に位置する。遺構規模は径1.9m前後になるものと考えられる。井戸 48は調査区東部のほぼ中央で検出した。検出規模は石組内径0.7m、掘形径1.3～1.5mを測る。石組の石材は20cm大前後を測る河原石が使用されている。これら江戸時代の井戸 3基については調査区に北接する現存井戸の深さ（現表土下3m以上）を参考に調査期間と安全性を考慮して時期を確認できる程度の掘り下げにとどめており、底面は確認していな

い。井戸38は江戸時代前期（17世紀中頃から後半）、井戸48は江戸時代中期から後期（18世紀後半から19世紀中頃）、井戸24は江戸時代後期（19世紀中頃）の遺構と推定される。

井戸3は調査区中央部やや東寄りで検出した石組井戸である。石組は検出面下0.8m以下に残存しており、内径1.0mを測る。石材は河原石で、10×20cm大の石を主体にして30×40cm大のやや大きい石も含まれている。掘形は不整な楕円形を呈し、長径2.2m、短径1.8mを測る。掘形全体には10×20cm大の河原石が詰め込まれており、砂礫質の壁面が脆くて崩壊し易かったことを示す状況である。掘形の出土遺物は認められない。時期は埋土上層の遺物から近代以降と考えられるが、井戸の存続期間を考慮すると江戸時代後期に遡る可能性がある。

土壙 土壙40・44・50は調査区南東部で検出した。何れも平面形が隅丸長方形を呈し、直立した壁面、深く平坦な底面など遺構特徴に共通点が認められる。土壙39・41についても特徴が共通する。土壙41・44・50が江戸時代中期（18世紀）、土壙39・40が江戸時代後期（19世紀初頭から中頃）の遺構と推定される。遺構性格については不明な点があり、同様の検出例からさらに検討する必要がある。

柱穴 柱穴21は調査区南西部で検出した。礎石を検出したが対応する遺構は確認していない。

落込 落込1は調査区東南部で検出した。南側の肩部斜面では小礫群を洲浜状に検出しており、池の可能性がある。深さ0.6mを測る。また北側の肩部では薄板上にはほぼ完形の土師器小皿4点を検出した。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

出土遺物は、室町時代から江戸時代のもものが整理箱にして約21箱分出土した。その内容は土器・陶磁器類が大半で、瓦類は少ない。その他には石造物2点がある。

室町時代の遺物は、土師器（皿）、須恵質土器（鉢）、瓦器（鍋、火舎）、焼締陶器（播鉢、甕）、施釉陶器（皿）、輸入陶磁器（白磁、青磁、染付）、瓦（丸瓦）、銭貨などである。これらは室町時代後期の遺物で、主に溝9、井戸27、土壙5・28・45・47などから出土した。各遺構での遺物組成は土師器皿が中心的傾向を示し、その他の遺物は少量が認められる。

桃山時代の遺物は、施釉陶器（志野・鳴海織部向付、高取鉢、伊賀皿）、輸入陶器（南蛮系壺）などが江戸時代前期の石室6や石組43に混入して出土した。

江戸時代の遺物は、土師器（皿）、土製品（壺壺、塩壺）、焼締陶器（播鉢、甕）、国産陶磁器（碗、皿、鉢、壺、合子）、瓦（軒丸瓦）、銭貨、金属製品（釘、金具、装飾具）、石製品（砥石）、石造物（供養碑、台座）、文字・墨書資料など江戸時代の前期から後期を通じた各時期のもものが認められる。

(2) 室町時代の遺物

溝9出土遺物(図34) 整理箱にして3箱分以上の出土量があるが、そのほとんどが土師器(皿)である。他には須恵質土器(鉢)、瓦器(火舎)、古瀬戸(皿)、焼締陶器(播鉢)、輸入陶磁器(白磁、青磁)、銭貨が出土しているが、何れも小片で少量である。銭貨は小破片であり、銭文は不明である。

現地調査では溝内堆積土の上下層にわずかながら土質の違いが認められたことから遺物の取上げに際しては上層と下層に区別した。しかし、整理過程ではこれら上下層の遺物に同一器形の古瀬戸皿がみられ、また共通した器種構成の様相が確認されたことから、溝9出土の遺物群は一括して廃棄されたものであると判断した。

土師器皿は、図に示した様にほとんどが白色系皿Sの小口径から大口径のもの(3~43)で、最小口径の底部中央が突出するいわゆるヘソ皿(1)と赤色系の皿N(2)がわずかに含まれる。白色系皿Sの3~43を口径で分類すると概ね6群に分けられ、1群:8.2~8.5cm(3~5)、2群:9.0~9.8cm(6~12)、3群:10.5~11.8cm(13~23)、4群:12.7~14.2cm(24~36)、5群:14.7~15.7cm(37~42)、最大口径の6群:16.9cm(43)となる。各群を隔てる口径差は0.5~1.2cmと僅差のものを含み、それ程分散した分布傾向を示さない。全体に占める各群の比率は、図示した41点に限れば1群:7%、2群:17%、3群:27%、4群:32%、5群:15%、6群:2%となる。

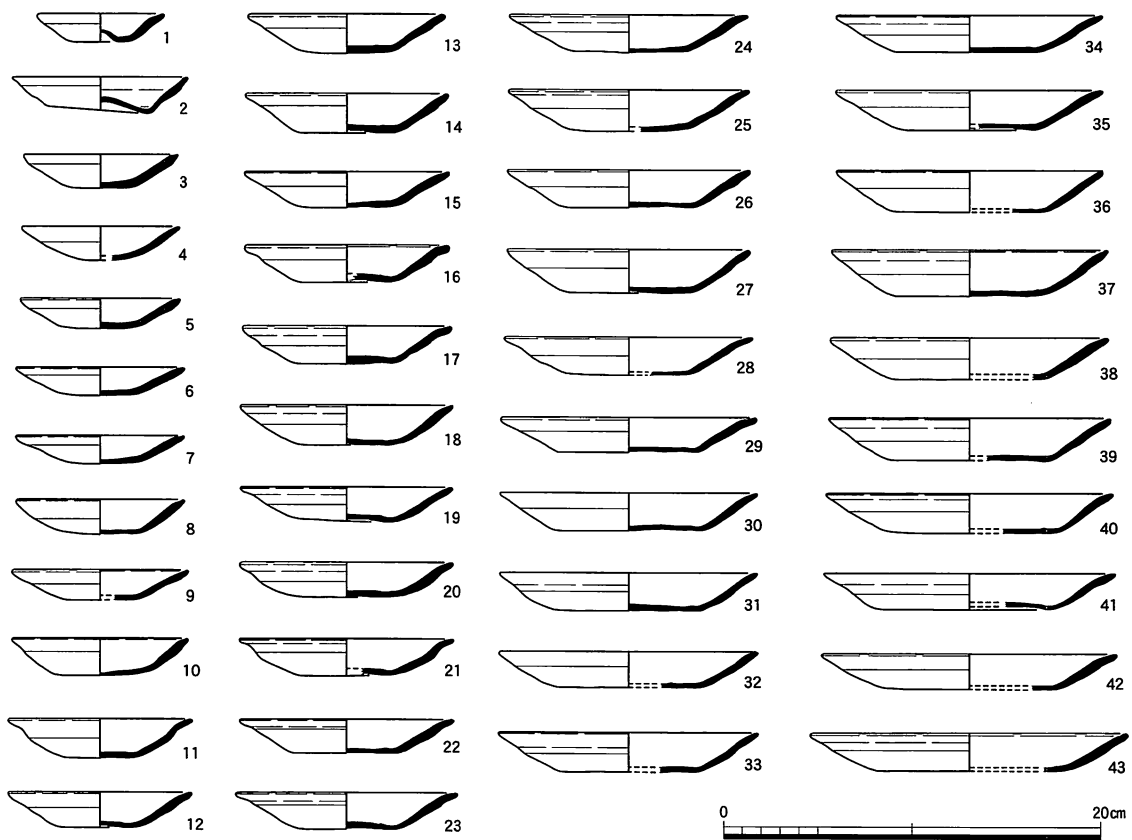


図34 溝9遺物実測図(1:4)

り、4群の12.7～14.2cmのものが最も多く、次に3群の10.5～11.8cmのものが続く。

この土器群の特徴としては、土師器の白色系皿Sが圧倒的に多数であること、いわゆるヘソ皿と赤色系皿Nをわずかに含むこと、口径の中心的な分布傾向に変化が少ないことなどが挙げられる。年代については、土師器皿の型式が京都中心部出土の土師器編年案のX期中、もしくは少量ながら古い型式の土器がみられることからX期古を含む時期に比定され、16世紀初頭から中頃のやや時期幅を有する土器群として位置付けておきたい。⁵⁾

(3) 桃山時代の遺物

施釉陶器(図35) 志野向付の1点(44)は、江戸時代初頭の石組43底部に上向きに置かれた状態で出土した完形品である。器形はロクロ成形の後に型打ちして入隅四方形に整形される。底部は丸味に成形し、高台は中央部を円形に削り込んで碁笥底とする。法量は口径12.3cm、高台径6.3cm、器高6.5cmを測る。対面する2方には各々一對の山水文と柳文を描く。44の類似例としては柳文を同様の筆致で描く同一器形の志野向付が大坂城跡に西接する城下町跡(船場地域)の発掘調査に於て16世紀末から17世紀初頭と推定される土層から出土している。⁶⁾

他の内1点(45)は、江戸時代前期の石室6最下層から出土した。器形は型を用いて扇形に整形された平向付で、側面はほぼ垂直に立ち上がる。平らな底部には半環状の脚が三方に付く。法量は口径13.5cm(縦)×18.9cm(横)、器高4.1cmを測り、約90%が遺存する。文様は外側面に縦縞文、内側面に列点文を巡らし、見込には芒文を中央に配して梅花様の花文を周囲に散らして描いている。志野の中では扇形平向付は希少例であり、類似例は管見による限りわずかに伝世品の1点のみである。45およびこの伝世品は法量や文様構成の上でも極めてよく類似する。⁷⁾

また、石室6最下層では45と同一器形の側面から底部にかけての破片(46)が小片ながら共伴して出土しており、石室6では志野扇形平向付が2個体出土したことになる。その他にも鳴海織部向付(47)、高取鉢(48)、伊賀皿(49)が共伴しており、これらについては図版23に示した。

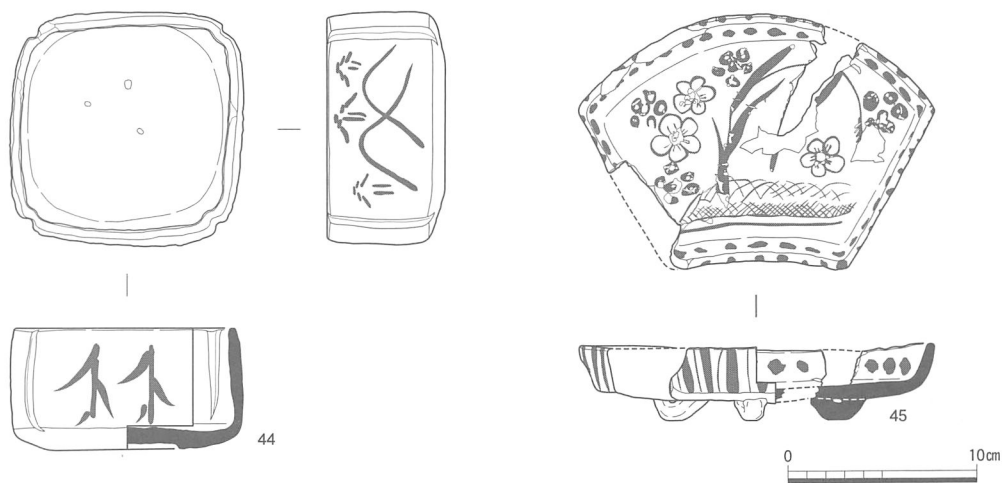
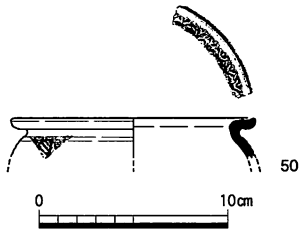


図35 遺物実測図(1:4)



輸入陶器（図36）南蛮系壺（50）は、石室6の最下層から出土した。口縁部から体部にかけての小片であるが、器形は壺形で14世紀後半から17世紀にタイで生産されたハンネラと俗称される土器である。ハンネラには土師質のものから陶器質のものまでみられるが、当該資料は暗褐色を呈し後者の部類に属する。

図36 輸入陶器実測図（1：4） 法量は口径12.8cmを測る。口縁部内面に印刻を巡らしており、同様の印刻を肩部外面にも施している。ハンネラはタイでは日常容器として生産されたが、日本では主に茶道具の水指や建水として用いている。出土例は少なく京都の他、沖縄、博多、堺などにも認められるが少量である。また伝世品として茶道具の中にわずかに認められる。⁸⁾

（4）江戸時代の遺物

石室6出土遺物（図37）整理箱にして約1箱分の出土量である。その内容は土師器（皿）、土製品（壺壺、塩壺）、焼締陶器（播鉢、甕）、国産陶磁器（椀、皿、鉢）、瓦（軒丸瓦）、石製品（砥石）などの他、先述した桃山時代の施釉陶器、輸入陶器が混入して含まれる。

土師器皿は、図に示した様に、大半が白色系皿Sの小口径から大口径のもの（53～76）であり、赤色系皿Nr（51・52）がわずかに含まれる。白色系皿Sの（53～76）を口径で分類すると概ね3群に分けられ、1群：9.4～9.6cm（53・54）、2群：10.2～11.4cm（55～75）、3群：11.7cm（76）となる。各群を隔てる口径差は0.3～0.6cmと僅差であるが、1群と2・3群では内面底部に施された凹状圏線の有無で区別される。そして2群は11cm前後を含む10cm代のもの、3群は12cm前後に収まるものと捉えられる。全体に占める各群の比率は、図示した24点に限れば、1群：8%、2群：88%、3群：4%となり、2群の10.2～11.4cmのものが圧倒的に多い。年代については、先述した土師器編年案によると、古い要素の土器を含むことを考慮してXI期新からXII期古までの時期に比定され、17世紀中頃から後半に位置付けられる。

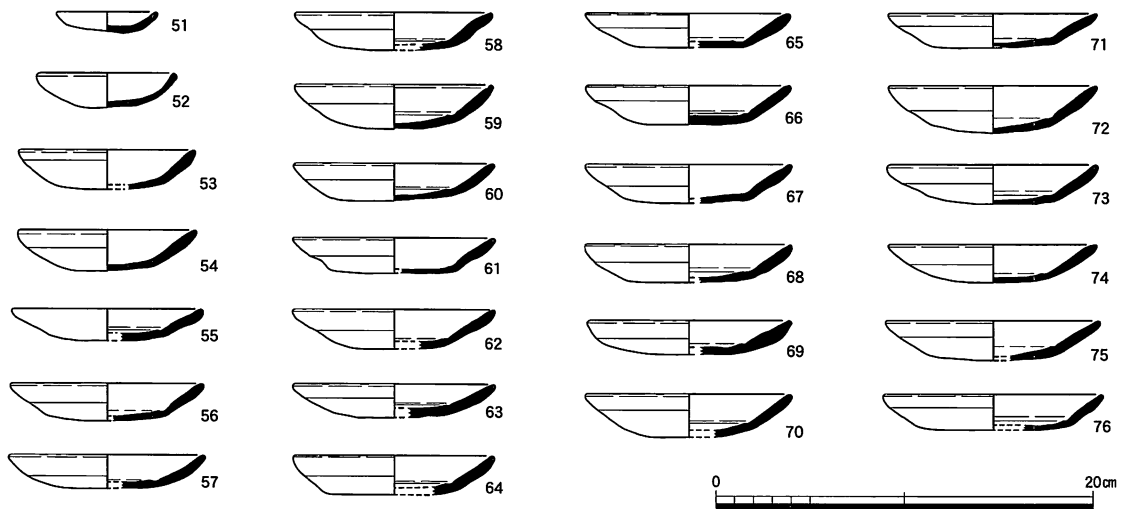


図37 石室6遺物実測図（1：4）

土壙44出土遺物（図版24） 合子（77）は、法量が口径4.6cm、残存高2.5cm、底径2.4cmを測る。器形は口縁端部を断ち切り、肩部をやや膨らませ、底径を狭くする小型の鉢形であるが、合子の身と考えられる。口縁端部の外面には上方に0.6cmほど突出する幅0.7cm前後の突起が1箇所貼り付けられている。4.0cm程離れた位置に同じく剥離痕が認められ、同様の小さな突起が対になっていた可能性がある。体部外面は全体を五角形から六角形の亀甲文状に面取りし、口縁端部外面には鉄釉で1条の線を巡らす。二次的な火を受けて全体が損傷しているが、内面の一部に淡緑白色の釉が残る。底部に剥離痕が認められ、高台が付いていた可能性がある。用途としては茶道具の香合の可能性が挙げられる。土壙44では他に土師器皿、陶磁器類、瓦類、埴埴、砥石、鉄釘、銅線、木炭、貝殻なども出土した。

埋納遺構7出土遺物（図版24） 胞衣壺（78）は、法量が口径11.8cm、胴部最大径16.1cm、底径13.3cm、高さ8.4cmを測る。胞衣納めは産後に胞衣（後産）を桶または壺に納めて吉方の土中に埋める儀式で、史料によると室町時代からみられる様であるが、18世紀後半から19世紀にかけては（78）の様な専用の胞衣壺が用いられたことから遺存する例が頻出し、京都市内の建物跡では主に玄関先や庭先の軒下で検出される例が多い。埋納遺構7では（78）の直下に白炭化した薄い板状製品が敷かれていたが、この様な検出例については類例も乏しく何を意味するのか今のところ明らかではない。

銭貨（図38） 永楽通寶1点、寛永通寶7点、文久永寶1点、銭文不詳2点の計11点が認められる。井戸24から永楽通寶1点（79）、寛永通寶3点（80）、文久永寶1点（84）、銭文不詳2点、土壙29から寛永通寶2点（81）、土壙23・50から寛永通寶各1点（82・83）が出土した。永楽通寶は室町時代の渡来銭で明の永楽6年（1408）初鑄とされるもの、あるいは桃山時代の天正15年（1587）頃に豊臣秀吉が模鑄したものが知られているが、当該資料は判別が難しく、ここに一括して図示した。土壙23出土の寛永通寶（82）には背に「文」が認められ、寛文8年（1668）以降

表6 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
室町時代後期	土師器、須恵質土器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器	4箱	土師器43点	3箱	0箱
	瓦				
	銭貨				
桃山時代	施釉陶器、輸入陶器	1箱	施釉陶器6点、輸入陶器1点	0箱	0箱
江戸時代	土師器、土製品、焼締陶器、国産陶磁器	20箱	土師器26点、土製品1点、国産陶磁器3点	17箱	1箱
	瓦				
	銭貨、金属製品、石製品、石造物		銭貨9点、石造物2点		
合計		25箱	91点（4箱）	20箱	1箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、ランク分けしたため、出土時より4箱多くなっている。

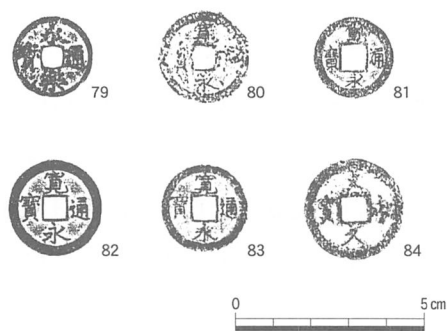
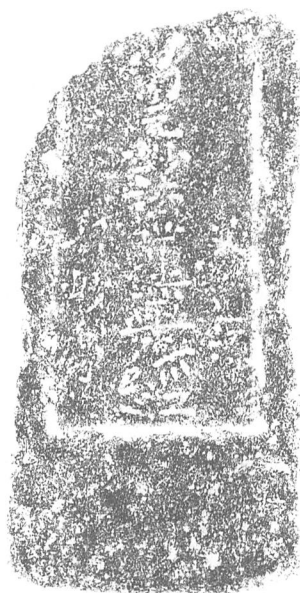
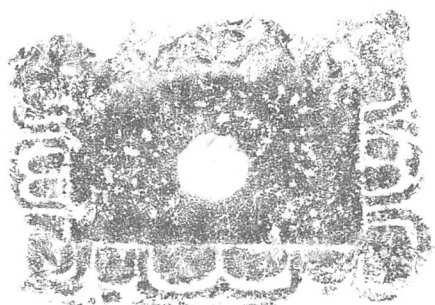


図38 錢貨拓影 (1 : 2)



85



86



図39 石造物拓影 (1 : 6)

に鑄造された錢貨であることが分かる。文久永寶は文久3年(1863)の鑄造とされる。なお、寛永通寶の内、井戸24出土の2点は銹の付着が多く、土壙29出土の1点は磨滅により錢文が不鮮明であることから図示を控えた。

石造物(図39) 供養碑1点(85)と台座1点(86)で、井戸3石組内中央の埋土中間で2点が裏向きに伏せた様な状態で出土した。(85)は法量が残存高45.5cm、幅22.8~23.6cm、厚さ12.9~15.3cmを測る。中央には「南無妙法蓮華經」の題目七字が刻字され、題目の右側下方に「□□□」、左側下方に「□妙□」の各3文字の刻字が認められる。両側の刻字については判読が難しいが、右3文字の字数から判断して生前につくられた逆修供養碑である可能性が考えられる。(86)は法量が幅31.5~31.8cm、奥行18.8~19.7cm、高さ10.4~11.3cmを測る。この台座は石碑に伴う蓮華座の一種であり、上面端辺の3方に反花を巡らしている。

文字資料(図版24) 江戸時代末期の白磁皿(87)で、調査区南東部の包含層から出土した。内面中央に大きな「壽」、外面高台内の半分程に「□□」銘および花押が毛筆で記されている。文字は皿を表裏反転しても正位置で読める様に配置されており、上絵付けの技法を用いて記されたものと考えられる。白磁皿の法量は器高2.7cm、口径12.6cmを測り、約75%が遺存する。「□□」銘は「米翁」と判読できる可能性があり、花押については江戸時代後期の徳大寺の僧侶で、和歌や茶の湯に通じ千家とも親交の厚かった大綱宗彦(1772~1860)の花押に類似例が認められる。

墨書資料(図版24) 土製品の壺壺(88)で、土壙40から出土した。法量が口径2.6cm、胴部最大径3.2cm、底径2.1cm、高さ1.9cmを測る。器形は口縁が狭く、体部がやや膨らみ、底部は平坦である。口縁内面はやや肥厚し、底部内面の中央ではナゲ回した胎土がわずかに突出する。底部外面には花蕊と4弁の花弁で構成した花文を墨描している。壺壺の初出例は文献史料では室町時代後期の俳諧連歌集である山崎宗鑑編『新撰犬筑波集』に「わらはべの縁にて狂ふ薬師堂、もてあそびぬる瑠璃の壺壺」とあるが、出土資料の壺壺は素焼きの無釉土製品であり、施釉したものあるいはガラ

ス製のものは認められない。また室町時代および桃山時代にその出土例はなく、京都市内の例では江戸時代のものが頻繁に認められる。壺壺の用途は一般的に子供の玩具とされているが、茶道具としても利用されており、この様な墨書された壺壺はその用途を考える上で興味深い資料である⁹⁾。

5. まとめ

今回の調査では主な目的とした上京遺跡関連の室町時代の遺構を検出できたことが大きな成果として挙げられる。また江戸時代の遺構では前期から後期を通じた各種の遺構を検出したことは、本遺跡の様相やその変遷を具体的に考察していく上で貴重な成果として挙げられる。以下、時代を追って調査成果を概述し、まとめとしたい。

(1) 室町時代

調査区中央部西側で検出した室町時代の南北溝9の性格について検討しておきたい。

先述した様に、調査地点は室町時代後期の『洛中洛外図屏風』によると12代将軍足利義晴の柳原御所、その後の典厩家2代細川政国の昭堂禅昌院の中央部西辺付近に位置すると推定される。また、調査地点が接する現小川通については、油小路が「こ川」を中心とした東西両岸に幅員を保つ道路として描かれている。

南北溝9は、断面逆台形状を呈し、幅1.2m、深さ0.7mの一定規模を有した中規模の溝であることから、戦国時代に特徴的な断面V字状を呈する防御目的の濠ではなく、敷地境界などを示す区画溝であろうと判断される。溝9の遺構時期は土師器皿の編年型式から16世紀初頭から中頃と位置付けられる。また、溝9の東西両側の遺構面を比較すると、西側の高さが0.3m程高く、宅地と道路という土地利用の相異から生じた高低差であろうと考えられる。

これらの史料および調査結果を勘案して、南北溝9は大永5年(1525)から天文11年(1542)まで存続したとされる柳原御所の西限を画する溝であると推定され、現小川通および小川の各幅員を考慮すると室町時代の油小路東側溝である可能性が高いといえる。

(2) 桃山時代

史料によると桃山時代の文禄3年(1594)に千家2代少庵が本法寺前屋敷を構えたとされるが、その位置については明らかではなく、調査では桃山時代の遺構を検出していない。遺物では江戸時代前期の石室6と石組43で出土した古い時期の混入品である桃山時代の茶陶類(44~50)は、千家に所有されて伝世していた可能性がある。

(3) 江戸時代

江戸時代前期から後期に至る各種の遺構と遺物について検討しておく。

石組43の遺構性格としては、その構造からみて茶室庭園の露地に設けられた蹲居もしくは砂雪隠の可能性が考えられる。石室6の遺構性格については今後の課題であるが、石室6の遺構成立面が厚さ0.1m前後の表土直下であることから考えて、現況の宅地面は江戸時代前期の今日庵建造当初からほとんど変化していないといえる。

江戸時代中期から後期の遺構とみられる埋納遺構7・12は、他の事例からみても町家の通り庭の入口と裏庭の軒下付近に埋納されたものと考えられることから、一時期、小川通に面して小規模な住居が建てられていた可能性がある。またこれの延長線上に位置する石組井戸48は位置関係や遺構時期などからみて一連に関連するものと考えられる。

江戸時代後期に遡る可能性のある井戸3については、今日庵文庫所蔵の裏千家古図に記された梅糸庵の井戸の位置とほぼ一致している。梅糸庵は千利休250回忌に際して天保10年（1839）に裏千家の大規模な増築が行われ、調査地点の位置する場所に建てられた茶室である。

遺物では、井戸3出土の供養碑（85）や台座（86）は妙顯寺あるいは本法寺など東西に隣接した日蓮宗寺院に関連するものと考えられる。また花押を伴う「壽」銘の白磁皿（87）、花文を墨描した壺壺（88）などは茶家千家との関連を反映するとみられる遺物である。

この様に、今回の調査では江戸時代の特徴的な遺構および遺物を通じて、上京遺跡が中世の遺構・遺物の検出だけに留まらず、連続した歴史の積み重なる複合的な都市遺跡の様相を呈することも判明した。

註

- 1) 川上 貢「上杉家蔵洛中洛外図屏風と京の町家」『日本屏風絵集成 巻11』講談社 1978年
今谷 明「上杉本洛中洛外図の作者と景観年代」『文学 52巻3号』岩波書店 1984年
石田尚豊・内藤 昌・森谷尅久監修『洛中洛外図大鑑—町田家旧蔵本・上杉家本・舟木家旧蔵本—』小学館 1987年
今谷 明『京都・一五四七年—描かれた中世都市—』平凡社 1988年
なお、通り名称は『洛中洛外図大鑑』解説による。現在の通り名称と対照すると、御霊前通—現上御霊前通、西洞院通—現在不詳、寺之内通—現寺之内通、油小路—現小川通である。
- 2) 京都大学附属図書館蔵・中井家旧蔵・川上貢解説『洛中絵図—寛永後・万治前—』臨川書店 1979年
- 3) 『特別展覧会 四百年忌 千利休展』京都国立博物館 1990年
- 4) 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-9 上京遺跡』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 5) 小森俊寛・上村憲章「京都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 6) 『特別展 桃山の華 大坂出土の桃山陶磁』土岐市美濃陶磁歴史館 1993年
- 7) 『日本の陶磁2 志野』中央公論社 1988年
- 8) 『平成14年秋季特別展 東南アジアの茶道具 わび茶が伝えた名器』茶道資料館 2002年
- 9) 堀内寛昭「土製小壺と茶の湯の“つぼつぼ”」『つちの中の京都2』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2001年

Ⅳ 山科本願寺跡（1）

1. 遺跡の位置と環境

（1）位置と地理的環境

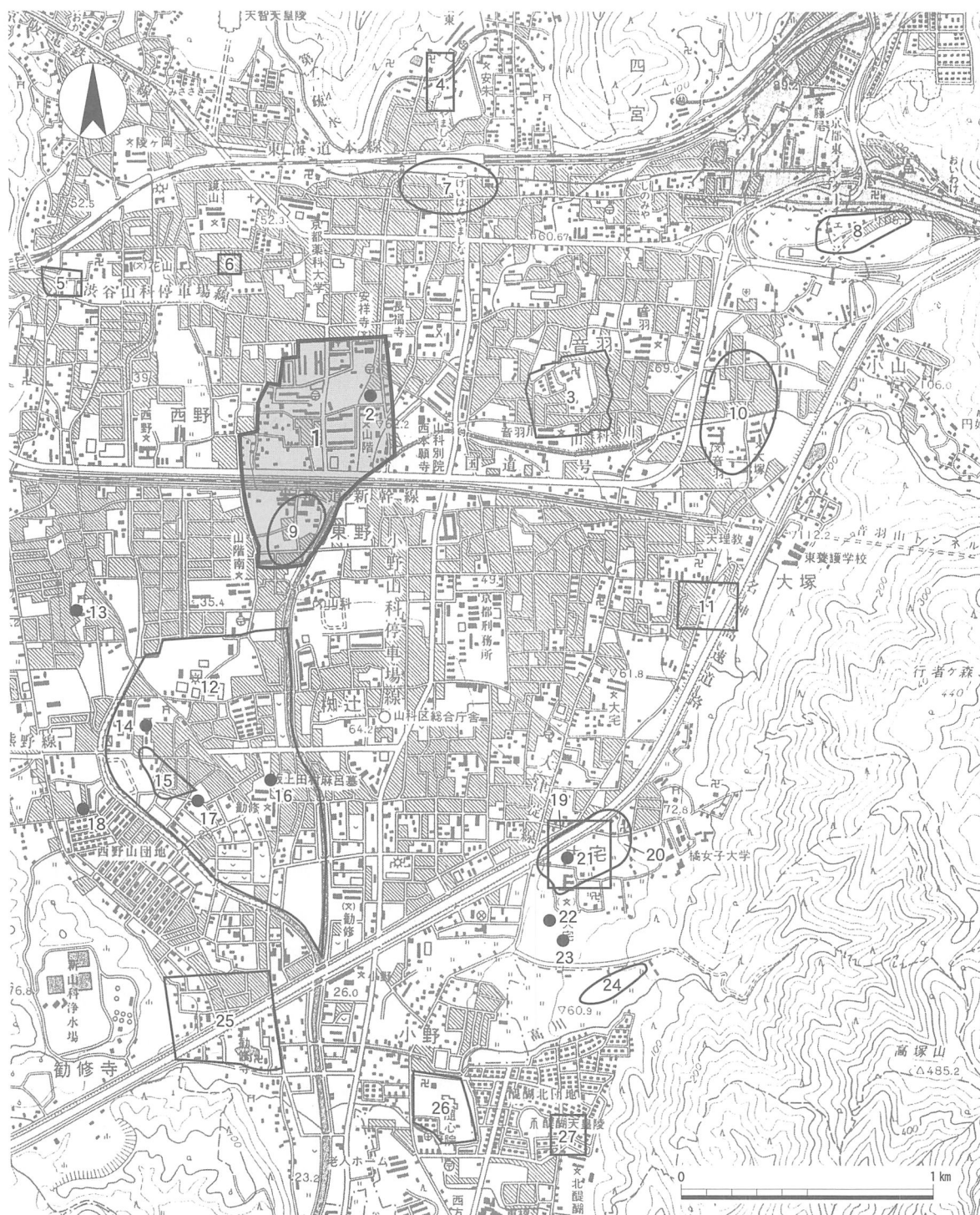
山科本願寺は、文明10年（1478）から造営が開始され、6年近くの歳月をかけて建設された。その位置は、山科盆地の中央やや西寄り、四ノ宮川と山科川の合流点の西側一帯で、山城国宇治郡山科郷内野村といわれた地域である。この地は両河川によって形成された扇状地の先端部にあたる。扇状地は水田開発が困難な場所で、当時は未開発の地域であった。寺域に広い敷地を必要とした山科本願寺には、絶好の場所だったと考えられる。

さらに山科は、東山を挟んで京都盆地に近く、東海道・東山道・奈良街道が盆地内を通る、交通・物流の要所であったことも、選地の大きな理由であったとみられている。

（2）歴史的環境（図40～44、表7）

山科盆地には、山科本願寺が成立する以前の遺跡も数多く分布する（図40）。旧石器時代の遺構は確認されていないが、中臣遺跡ではナイフ形石器や石核などの遺物が出土している。縄文時代になると、中臣遺跡で早期の押型文土器が出土している。やや南に離れるが日野谷寺町遺跡では中期～後期初頭の竪穴住居や土器・石器などが、晩期では、中臣遺跡や安朱遺跡で掘立柱建物や土器棺墓が出土している。また、中臣遺跡では晩期の土器棺墓と弥生時代前期の土器が同じ地区で見つかっている。弥生時代に入ると、中期に中臣遺跡で方形周溝墓が見られる。さらに、後期～古墳時代初頭にかけて中臣遺跡の規模が拡大し、多数の竪穴住居や土器が出土している。山科本願寺と重複する左義長町遺跡でも、弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての竪穴住居と土壙が見つかっている。古墳時代前期～中期にかけては遺跡の存在が希薄であるが、中期後半になり、中臣遺跡では木棺直葬の方墳が築かれる。後期になると台地の斜面に沿って、中臣十三塚や稲荷塚古墳、宮道古墳、中鳥井古墳などの群集墳が築かれる。また、盆地を挟んだ東側の山裾にも大宅古墳、向山古墳、醍醐古墳群などの群集墳が存在する。それと関連して、古墳時代後期から飛鳥時代にかけては中臣遺跡で竪穴住居の数が増加する。奈良時代には、奈良街道に沿うように遺跡が形成され、金堂や講堂などが見つかっている大宅廃寺が建立される。大塚遺跡では集落跡が見つかっている。平安時代になると、山科は東海道と東山道が通る交通の要衝となり、中臣遺跡で集落跡が見つかっているほか、安祥寺下寺、元慶寺、勸修寺、随心院などの寺院が建立される。鎌倉時代には安朱遺跡や中臣遺跡で集落跡が見つかっているが、規模は小さく、これ以降、山科本願寺が造営されるまでの遺跡は希薄である。

その中で山科本願寺は、文明10年（1478）に本願寺八世蓮如上人によって造営が始められた。次々



- | | | |
|---------------------|----------------------|-------------------|
| 1 山科本願寺跡 (室町) | 11 元屋敷廃寺跡 (奈良後期) | 21 大宅古墳 (古墳後期) |
| 2 蓮如上人墓 (室町) | 12 中臣遺跡 (縄文～室町) | 22 向山古墳 (古墳後期) |
| 3 山科本願寺南殿跡 (室町) | 13 花山神社古墳 (古墳後期) | 23 大宅廃寺瓦窯跡 (奈良前期) |
| 4 安祥寺下寺跡 (平安) | 14 稲荷塚古墳 (古墳後期) | 24 醍醐古墳群 (古墳後期) |
| 5 元慶寺境内 (平安) | 15 中臣十三塚 (古墳後期) | 25 勤修寺境内 (平安中期) |
| 6 四手井城跡 (室町) | 16 坂上田村麻呂墓伝承地 (古墳後期) | 26 随心院境内 (平安) |
| 7 安朱遺跡 (縄文、飛鳥～鎌倉) | 17 宮道古墳 (古墳後期) | 27 小野廃寺跡 (奈良前期) |
| 8 芝町遺跡 (縄文、弥生、奈良) | 18 中鳥井古墳 (古墳後期) | |
| 9 左義長町遺跡 (弥生～古墳前期) | 19 大宅廃寺 (奈良前期～平安) | |
| 10 大塚遺跡 (奈良前期～平安前期) | 20 大宅遺跡 (縄文) | |

図40 周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)

表7 山科本願寺関係略年表

応永22年 (1415)		七世存如の嫡子として蓮如が生まれる。
長祿元年 (1457)		蓮如、本願寺八世宗主となる。
文明3年 (1471)		蓮如、越前吉崎に坊舎を構える。
7年 (1475)		蓮如、越前吉崎御坊を去る。
9年 (1477)		応仁、文明の乱一応終わる。
10年 (1478)	1月	蓮如、野村柴の庵に居す。馬屋新造。(この年、大津近松にて越年。) (山科本願寺の造営始まる。)
11年 (1479)	1月	整地と作庭を始める。
	3月	向所を新造。
	4月	堺の古坊を移し、寝殿をつくりはじめる。
	8月	庭できる。
	12月	御影堂建設用材柱50余本など、山科につく。
12年 (1480)	1月	三帖敷の小御堂を作る。
	2月	御影堂造作事始め。
	3月	御影堂、棟上の祝。
	8月	ひわだ大工をよんで御影堂の檜皮葺はじめる。 仮仏壇を設けて、絵像の御影をうつす。 整地。
	11月	大津にあった根本御影を野村にうつし、山科ではじめて報恩講を催す。
	12月	吉野で阿弥陀堂用大柱20余本をあつらえる。
13年 (1481)	1月	寝殿の大門柱立。
	2月	阿弥陀堂の事始め。
	4月	阿弥陀堂棟上。
	6月	仮仏壇をつくって、本尊をすえる。
14年 (1482)	1月	御影堂大門の事始め。 阿弥陀堂の橋隠の柱を用意。 阿弥陀堂の四方の柱も立つ。 大門の地形をならす。 四壁の内に排水用の小堀を南北に掘る。 門前の両所に橋をかける。
	4月	冬のたき火所だった四門の小棟を改築。
	5月	寝殿の天井をはる。
	6月	阿弥陀堂の仏壇をつくりなおす。
	7月	仏壇に奈良塗師をやとってぬらせる。
	9月	仏壇ぬり終る。
15年 (1483)	5月	河内誉田の野中之馬という瓦師をよんで、大葺屋をつくり、 西山の土で瓦を焼く。
	8月	阿弥陀堂瓦葺きおわる。
長享2年 (1488)		加賀一向一揆おこる。
延徳元年 (1489)		山科南殿を造営する。
明応6年 (1497)		大坂石山坊舎造営。
8年 (1499)	2月20日	蓮如大坂から山科南殿に戻る。
	3月25日	蓮如没す、85歳。
大永5年 (1525)		九世宗主実如没す。証如、十世宗主となる。
天文元年 (1532)	8月24日	法華宗・延暦寺・六角氏の攻撃により焼亡。山科本願寺陥落。
2年 (1533)		証如、石山坊舎を本寺と定める。本願寺大坂へ移転。
5年 (1536)	7月	天文法華の乱。
元龜元年 (1570)		織田信長との石山合戦開始。
天正8年 (1580)		本願寺顕如、信長と和睦。石山本願寺退去。 その後、紀伊鷺森・泉貝塚・大坂天満と移転を繰り返す。
14年 (1586)		豊臣秀吉の朱印状をもって山科に寺領を回復する。
19年 (1591)		本願寺、京都七条堀川(現西本願寺)へ移転。
慶長7年 (1602)		東本願寺別立。このときから東西本願寺となる。
享保年間 (1716~1736)		東西本願寺がそれぞれ山科別院を建立。

(西川幸治「都市史の中の中世寺院」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 1985年を一部改変)

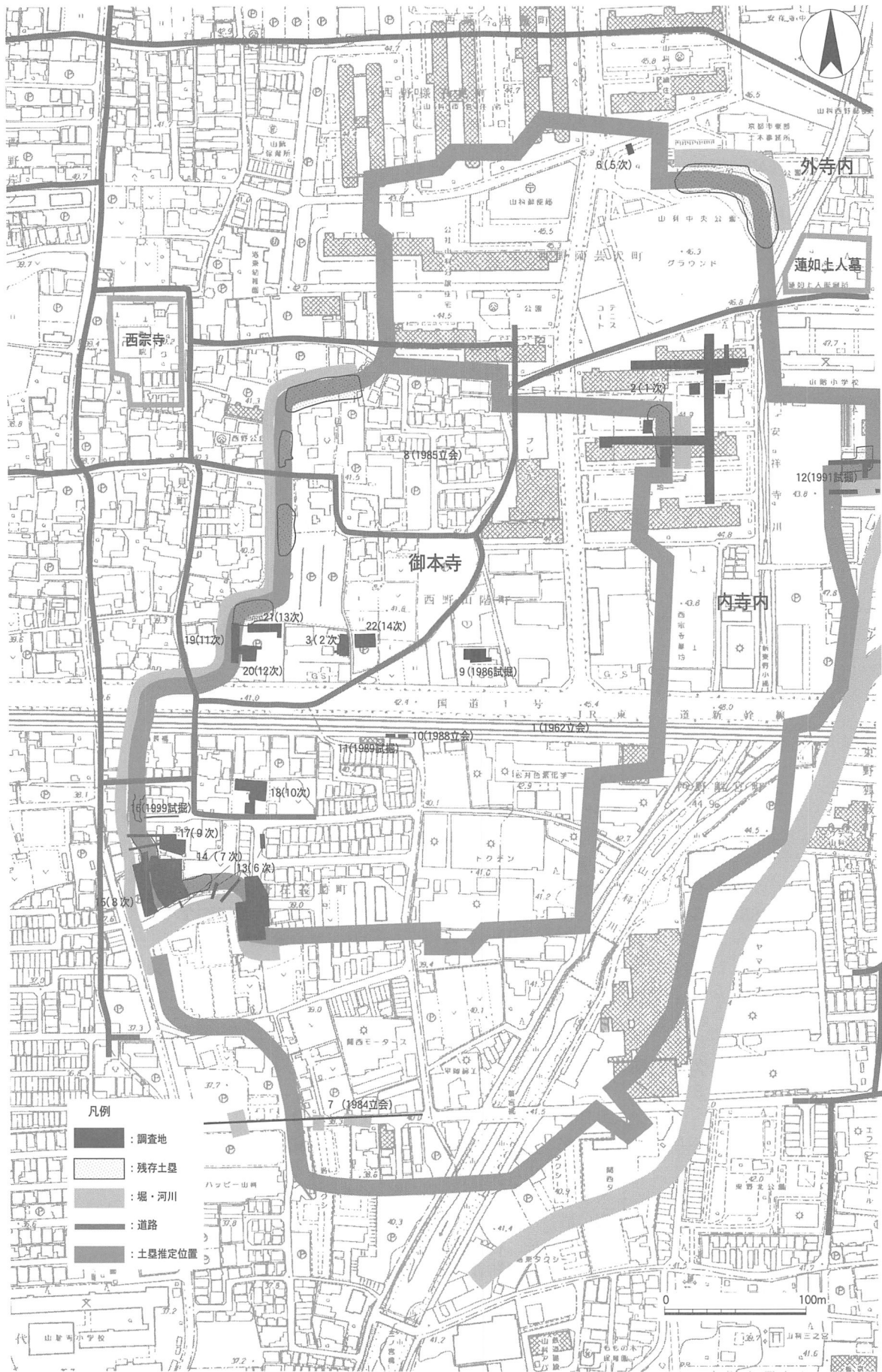


図41 既往調査位置図 (1 : 4,000)

表8 既往調査一覧表

No.	調査名・回数	所在地：山科区	調査期間	方法	概要	引用文献
1	新幹線立会	西野左義長町・山階町・離宮町	1962.8.9 ～11.11	立会	南北方向の石組溝、暗渠、南北方向の土塁	1
2	山科寺内町遺跡第1次	西野阿芸沢町・山階町・離宮町	1973.5.21 ～8.4	発掘	建物・鍛冶場、石垣、柵、南北方向の堀・土塁、	2
3	山科寺内町遺跡第2次	西野山階町	1974.10.9 ～11.3	発掘	石組溝、石室、庭園の一部	2
4	76RT-YG001第3次	西野今屋敷町9 (安祥寺中学校)	1976.11.17 ～11.30	発掘	旧耕土	3
5	76RT-YG002第4次	西野大手洗町20 (山階小学校)	1977.2.14 ～3.5	発掘	整地層	4
6	78RT-JN001第5次	西野阿芸沢町 (山科中央公園)	1978.10.30 ～11.13	発掘	攪乱	5
7	83RT-SW061	西野左義長町・東野舞台町ほか	1984.3.6 ～11.17	立会	東西および南北方向の堀、土壇群	6
8	85RT-SW054	西野大手洗町・今屋敷町ほか	1986.4.1 ～1987.5.16	立会	南北方向の堀と土塁、土壇	7
9	86BB-RT010	西野山階町12番地	1987.1.27 ～1.30	立会	東西方向の石組溝	8
10	88BB-RT005	西野山階町29	1988.5.30 ～6.2	立会	東西方向の石組溝	9
11	89BB-RT021	西野山階町29	1989.10.2 ～10.14	試掘	東西方向の石組溝	10
12	91RT-AH001	西野大手先町20 (山階小学校)	1991.8.2 ～10.18	試掘	土塁と堀の屈曲部	11
13	96RT-HG001第6次	西野左義長町16ほか	1997.4.20 ～7.10	発掘	東西および南北方向の堀、東西方向の土塁、暗渠、建物、井戸	12
14	97RT-HG002第7次	西野左義長町23	1997.7.16 ～9.18	発掘	鉤型に曲がる土塁と堀、建物、井戸、鍛冶場	13
15	98RT-HG003第8次	西野左義長町23-1、23-4	1998.8.17 ～11.9	発掘	南北方向の堀と土塁、暗渠	14
16	センター No.60	西野左義長町19-1ほか	1999.10.28	試掘	南北方向の土塁を測量	15
17	00RT-HG004第9次	西野左義長町19-1ほか	2000.5.10 ～6.30	発掘	建物、溝、暗渠、土塁基底部	16
18	04RT-HG006第10次	西野左義長町13-2	2005.1.17 ～3.18	発掘	東西および南北方向の堀、塀、柵	本報告(1)
19	04RT-HG007第11次	西野山階町30	2005.3.1 ～3.15	発掘	土塁基底部の構築状況を調査	本報告(2)
20	05RT-HG008第12次	西野山階町30	2005.5.11 ～5.25	発掘	土塁内側斜面と暗渠を検出	
21	05RT-HG009第13次	西野山階町30	2005.5.30 ～7.2	発掘	土塁屈曲部、泉状遺構、炉、土取穴、暗渠を検出	本報告(3)
22	05RT-HG010第14次	西野山階町28-5、28-6	2005.11.11 ～12.16	発掘	焼成土壇、庭園遺構、柱列を検出 大量の輸入陶磁器、ガラス玉出土	本報告(4)

と「向所」「寝殿」などの諸堂が築造され、同12年には「御影堂」が落成している。同13年の「阿弥陀堂」の落成をもって、中心部分はほぼ完成をみる。その後も造作は続き、同15年に主要な施設を完成させている¹⁾。寺域は、御影堂・阿弥陀堂・寝殿など主要建物のある「御本寺」、有力末寺の坊舎のある「内寺内」、門徒の居住区などがある「外寺内」の三つの郭から構成されていた。また、寺域外周に土塁や堀をめぐらす防御施設を備えた環濠城塞都市であった。その規模は、南北1km、東西0.8kmに及ぶと推定されている²⁾。

山科本願寺は、寺内町の経済的発展に支えられ、大いに繁栄した。しかし、その隆盛も長くは続かず、造営52年後の天文元年（1532）8月に、管領細川晴元率いる法華宗徒・近江守護職六

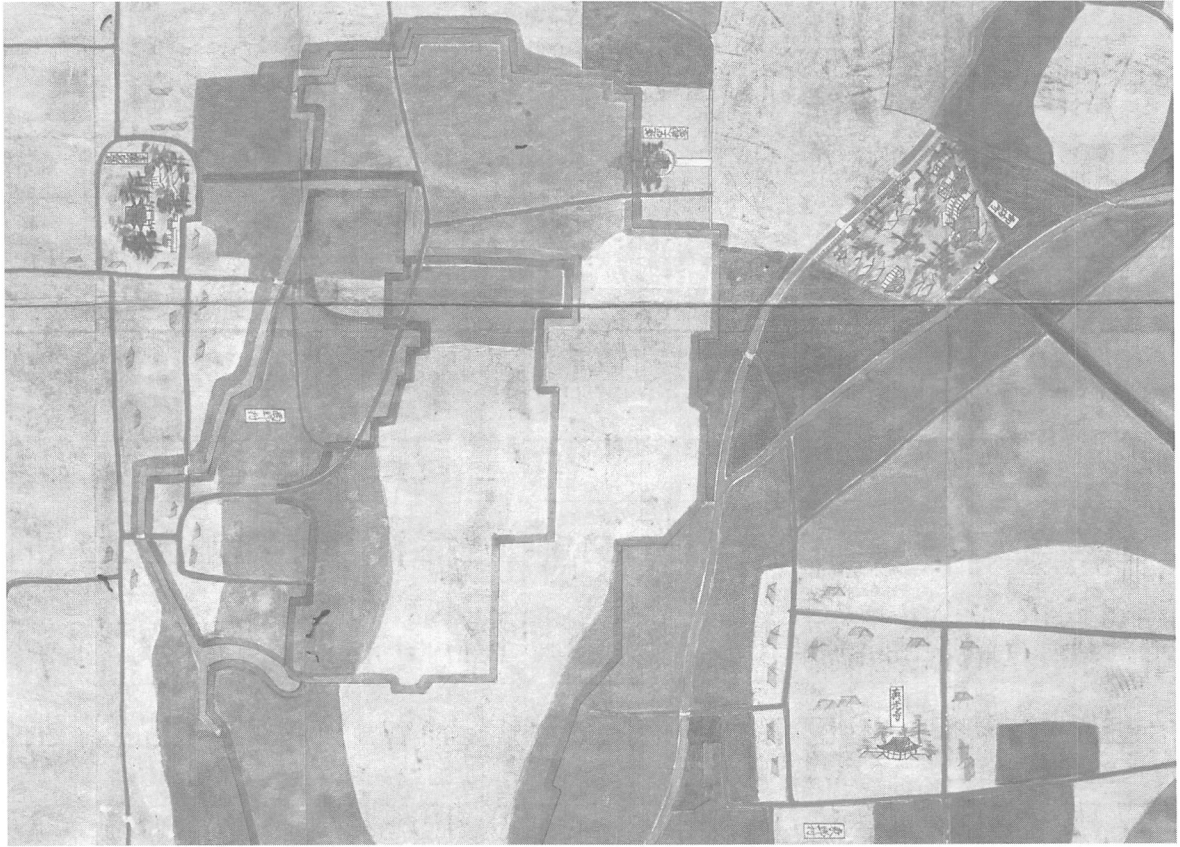


图42 山科古図（一部、京都府立洛東高校所蔵）



图43 昭和初期の山科西野地区（昭和11年製版）（1：5,000）



図44 航空写真（南から 1997年撮影）

角定頼等の連合軍によって攻撃され焼け落ちた。³⁾

現在でも国道1号線の北側には土塁や堀の一部が残り、2002年に「山科本願寺南殿跡 附山科本願寺土塁跡」として国史跡に指定されている。

(3) 周辺の調査（図41、表8）

山科本願寺跡では、これまで多くの調査が行われている。初めての考古学的な調査は、京都府教育庁による1962年の新幹線建設に伴う立会調査⁴⁾であった。その結果、遺構が良好に遺存していることが判明した。さらに、本格的な発掘調査が、市営住宅建設に伴って1973年から山科寺内町遺跡調査団によって実施され⁵⁾、多くの遺構や遺物が出土し、発掘調査の必要性が強く認識された。

以降、各所で継続的に発掘調査のみならず試掘・立会調査なども行われている。この結果、建物・石室・井戸・溝・鍛冶場など、寺域内の生活や生産活動に関連する施設の存在が明らかになってきた。また、堀や土塁・暗渠排水路の構造を確認することができたことにより、山科本願寺が計画的に造営されていたことが明らかになっている。各調査の概要を表8にまとめた。なお、今回は山科本願寺南殿跡の調査については触れない。

2. 調査経過

今回の調査は、個人住宅兼共同住宅建設に伴う山科本願寺跡10次調査で、山科区西野左義長町に位置する。この地点は、江戸時代に描かれた絵図『野村本願寺古御屋敷之図』⁶⁾によれば、山科本願寺の内寺内跡の「佛光寺帰尊地」あたりに推定される場所である。また、『山科古図』⁷⁾(図42)によれば、山科本願寺御本寺跡の南西部に推定される地点である。さらに、弥生時代から古墳時代前期の集落跡である左義長町遺跡の範囲内でもある。

近年まで国道1号線以南の当地周辺においても、山科本願寺跡の土塁の一部が遺存していたが、1997年以降の宅地開発によって全て消滅してしまった。それらの開発に伴い実施された調査では、鉤形に曲がる土塁や堀、石組暗渠排水溝、土塁内側では貯蔵庫などの複数の建物や井戸、鍛冶関連遺構など重要な遺構が確認されている。

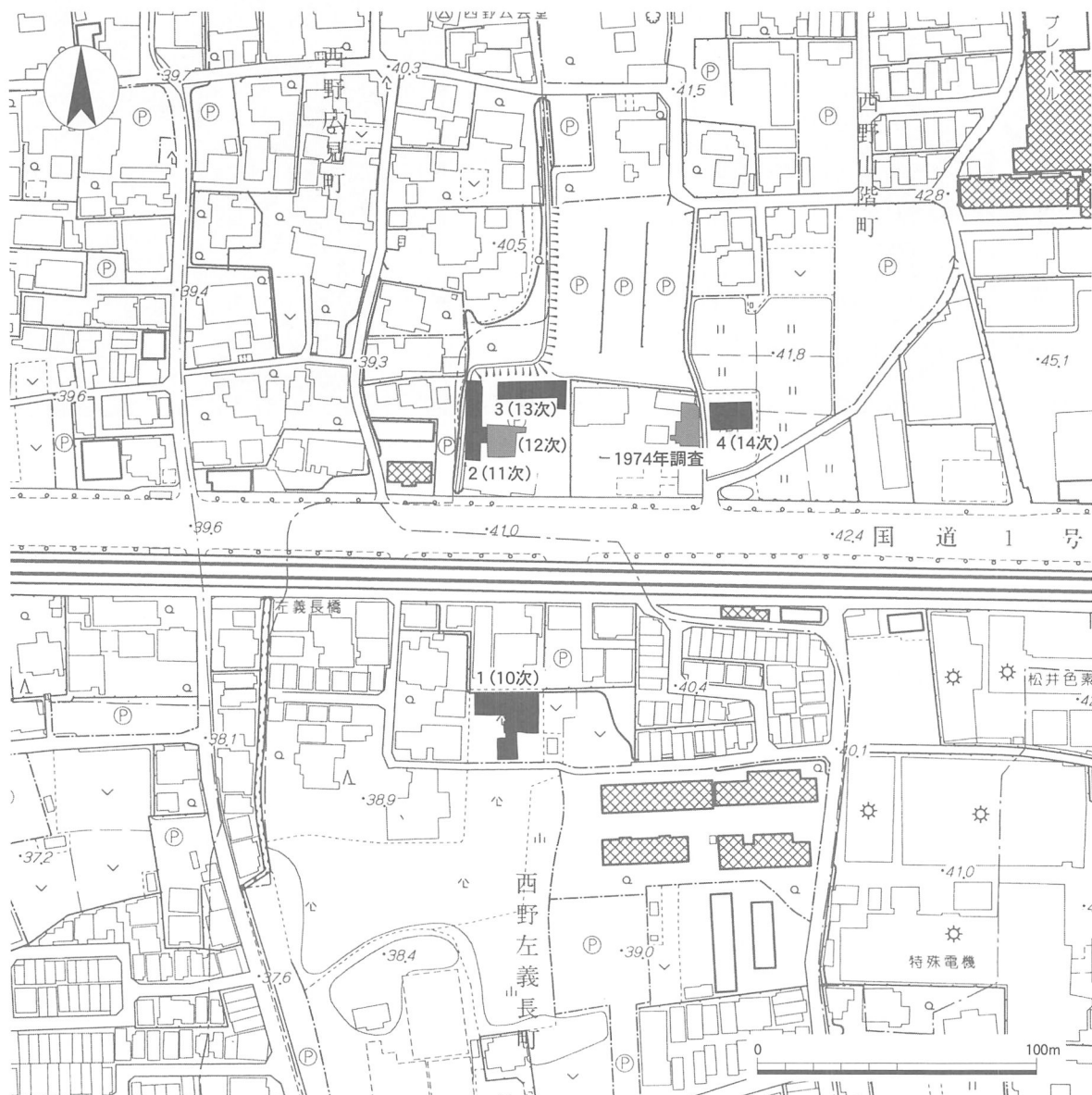


図45 調査位置図 (1 : 2,500)

今回の地点は、調査直前まで竹藪となっており、地表面が南接する道路より0.5mほど盛り上がる地形であった。調査に先だって竹の伐採後、地下の遺構面を破壊しないよう注意しながら残った竹の根を抜く作業を行った。発掘調査は、京都府教育庁教育委員会文化財保護課および京都市埋蔵文化財調査センターの指導の下、(財)京都市埋蔵文化財研究所が担当した。

調査は、まず対象地の北側に東西方向に長い調査区(1区)を設定した。ここでは大規模な複数の堀を検出した。この1区を埋め戻した後、堀7の南肩部と南北方向の堀9の南延長部を明らかにするために、南側

に調査区(2区)を設定した。ここでは排土置き場面積との関係から、大量の埋土がある堀9の掘り下げは対象地南端部のみとし、堀周辺の状況を確認する事に主眼を置くこととした。最後に、新たに検出した礫敷き遺構との関係で堀9の東肩部分を確認するために、調査区西に接して若干の拡張区を設けた。なお調査期間の関係上、2区については、可能な限り重機を用いた。今回の調査では、開発工事に伴う掘削深が浅いため、整地層以下の掘り下げは行わないこととし、遺構面の保存を行った。

1区の調査中に、山科本願寺跡に関連する堀7・8・9などの遺構が良好な状態で検出できたので、これを報道発表し、調査中の2月20日に現地説明会を実施し、その成果を近隣住民や市民に公開した。

また、2月17日には、文化庁および京都府教育庁教育委員会文化財保護課、京都市埋蔵文化財調査センターに調査成果を報告した。

なお、調査終了後には、京都市埋蔵文化財調査センターの指導により、深度の深い掘削部の埋戻しに際しては地盤改良を施し、全体を整地した。



図46 調査区配置図(1:400)



図47 調査前全景(南から)

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図49)

調査区西壁南部での層序は、上から竹藪の盛土0.2~0.3m、部分的に江戸時代の耕作土と思われる暗褐色砂泥層 (10YR3/3) 0.1~0.4mと続き、その下に山科本願寺造営時の整地層であるにぶい黄褐色砂泥層 (10YR4/3) や粘質の強いにぶい黄褐色砂泥層 (10YR5/3) が0.5~1.4mある。この下層に本願寺以前の旧表土として、にぶい黄褐色砂泥層 (10YR4/3) や褐色砂泥 (7.5YR4/3) がある。その下が灰黄褐色砂礫層 (10YR5/2) や褐灰色砂礫層 (10YR4/1) の地山である。

(2) 遺構の概要

今回の調査で検出した遺構は、土壙1以外はおもに室町時代後期のものが中心である。室町時代後期のものは山科本願寺関連の遺構と考えられ、整地層上面で検出した。旧地形は凹凸があるものの全体的には、北東から南西に緩やかに傾斜している。室町時代後期の遺構面は傾斜が少ないことから、山科本願寺造営に際しては大規模な整地を行い平坦面を確保したと推定できる。

今回は、整地層の掘り下げは行わなかったが、本願寺整地層や旧地形の状態に関しては、堀の底部が地山層にまで達していたため、堀の壁面を観察して下層遺構の有無や堆積土の状態を確認した。

以下、主要な遺構についてその概略を記す。

(3) 室町時代の遺構

室町時代の遺構には、堀・土壙・塀・建物・井戸などがある。

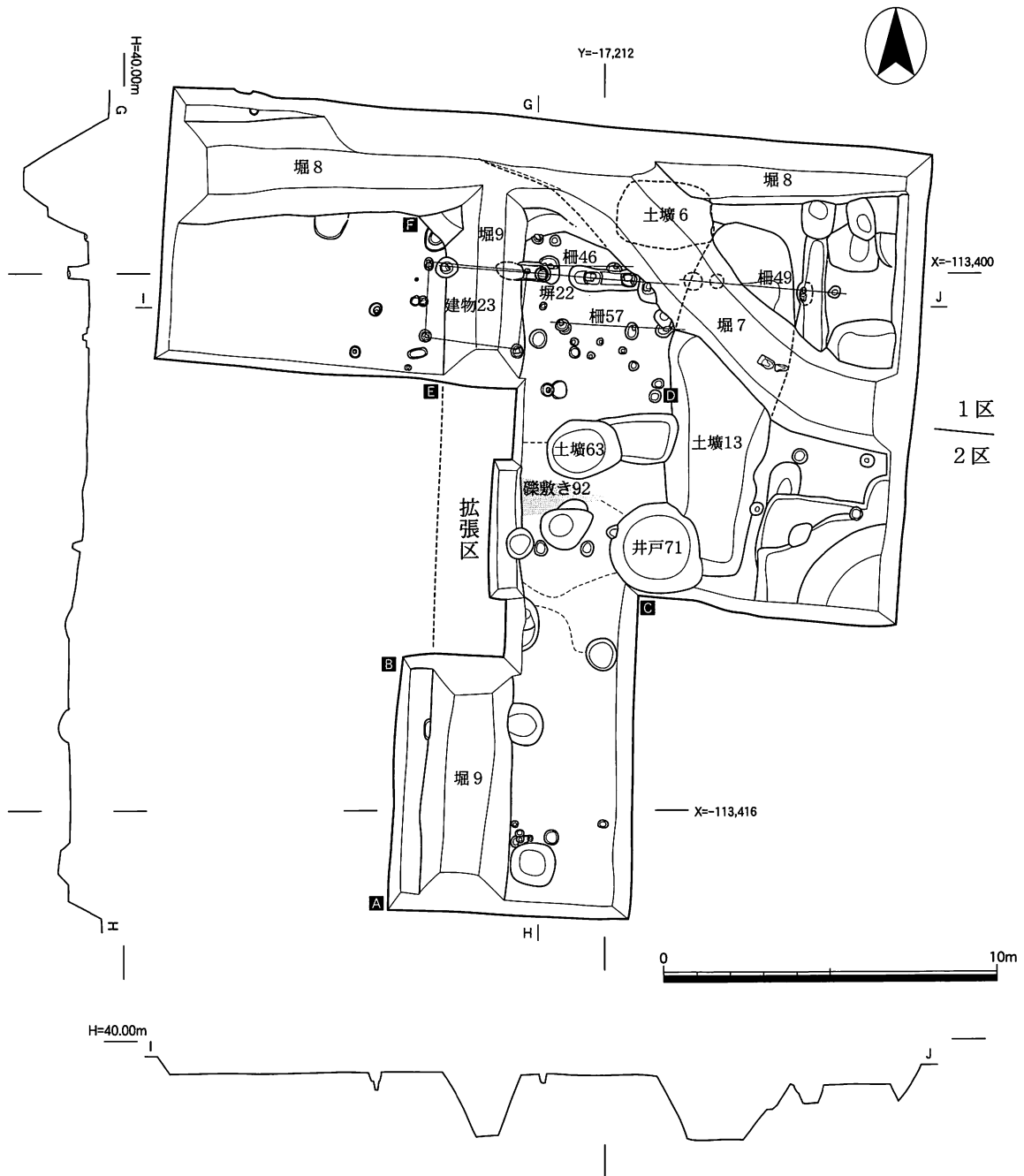
堀9 (図50) 1区中央部で検出した南北方向の堀で、2区と併せて約22m分を検出している。この堀は造り替えられて2時期あり、のちに規模が縮小されている。当初は幅約2.4m、深さ約2.1mの規模で、断面形状は逆台形 (堀9b) である。後に、幅約1.8m、深さ約1.2mで、V字形断面 (堀9a) に造り替えている。堆積土は褐色および灰黄褐色の砂泥などが主体で、土器・瓦類などの遺物や礫の混入が少なく、均一な土砂で短時間で埋め戻されたとみられる。また常時水が流れたり溜まっていたような痕跡はない。遺物はⅨ期新~Ⅹ期古段階に該当するとみられる土師器が少量出土した。他には平安時代末期の土師器も出土しており、量的には古いものの方が多い。

表9 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
室町時代後期	堀7・8・9、柱穴5、土壙6・13・63、建物23、塀22、柵46・49・57、井戸71、礫敷き92、整地層	
桃山時代	土壙1	

堀が埋め戻されたときに整地層の土砂に含まれていたものと考えられる。北側で、後述する堀8に連続している可能性もある。

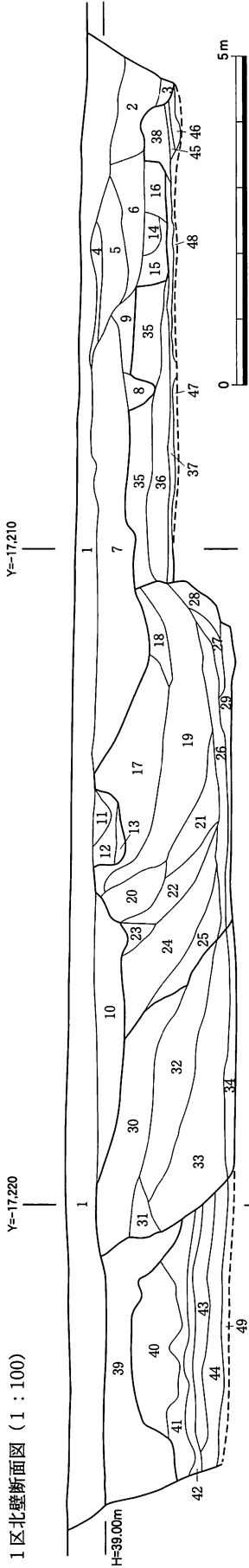
堀8（図50）1区北壁沿いに検出した東西方向の堀で約22m分を検出している。西半部は幅約3.0m、深さ約2.1mである。東半部は深さ約0.7mと浅くなっている。堀の断面形状は逆台形である。堆積土は、にぶい黄褐色および灰黄褐色の砂泥などが主で、土器・瓦類などの遺物や礫の混入が少ない。水が常に流れていた痕跡は認められない。遺物はⅨ期新～Ⅹ期古段階（15世紀末～16世



アルファベットは断面図との対応を示す。
白抜きA-Fは、図49 調査区断面図（2区南半西壁・井戸71-土塙13西壁・堀9西壁断面図）を参照。

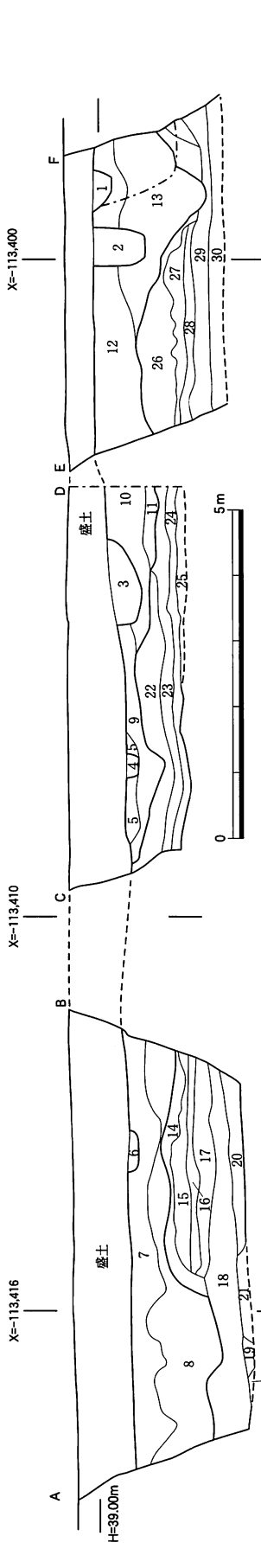
図48 調査区平面図（1：200）

1 区北壁断面図 (1 : 100)



- 1 10R3/3 暗褐色砂泥
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥、φ~7cmの礫混
- 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (溝10埋土)
- 4 7.5YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ5~12cmの礫多量混
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 6 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ7cmの礫混
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ7cmの礫混
- 8 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ~3cmの礫と粘土少量混
- 9 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 10 10YR4/4 褐色砂泥、礫混
- 11 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 12 7.5YR3/2 黒褐色砂泥、桃山土器、貝殻混
- 13 2.5Y5/3 黄褐色砂泥、良く締まる
- 14 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、礫、粘土少量混
- 15 10YR4/4 褐色砂泥
- 16 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥、炭、焼土少量混
- 17 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥、土師器片少量混
- 18 10YR4/3 オリーブ褐色砂泥、焼土少量混
- 19 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
- 20 2.5Y4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ3cmの礫混
- 21 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥、φ2cmの礫混、鉄片少量混
- 22 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥、φ1cmの礫混
- 23 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、極小さい礫混
- 24 10YR5/2 暗灰黄色砂泥、φ3cmの礫混、鉄片少量混
- 25 10YR5/2 灰黄褐色砂泥、やや粘質
- 26 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
- 27 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 28 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥、7.5YR4/4 褐色粘土ブロック混
- 29 10YR4/1 褐色砂泥、砂礫混
- 30 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ5~12cmの礫混
- 31 10YR4/4 褐色砂泥、良く締まり、焼土少量混
- 32 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ~7cmの礫少量混
- 33 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、7.5YR5/3 にぶい褐色粘土ブロックを部分的に含み、底部に砂礫多量混
- 34 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
- 35 10YR4/4 褐色砂泥
- 36 7.5YR4/3 褐色砂泥
- 37 10YR5/2 灰黄褐色砂泥、礫少量混
- 38 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 39 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 40 7.5YR4/2 灰褐色砂礫 (φ~5cm)
- 41 7.5YR4/4 褐色砂泥、粘質強い
- 42 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥、やや粘質
- 43 7.5YR3/2 黒褐色砂泥、かなり粘質、砂礫混
- 44 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、砂礫多量混
- 45 7.5YR3/3 暗褐色砂泥
- 46 7.5YR2/3 暗褐色砂泥
- 47 7.5YR4/4 褐色砂泥
- 48 7.5YR2/1 黒褐色砂泥、砂礫混
- 49 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂礫 (φ~5cm) 砂泥混 (地山)

2 区南半西壁・井戸1-土塚13西壁・堀9西壁断面図 (1 : 100) (図48 調査区平面図にA-Fの位置を示す)



- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥、炭、焼土混 (土塚3)
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (柱六22)
- 3 10YR3/3 暗褐色砂泥 (土塚64)
- 4 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 (柱六82)
- 5 2.5Y5/3 黄褐色砂泥、良く締まる
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (土塚81)
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 8 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥、かなり粘質
- 9 2.5Y5/4 黄褐色砂泥
- 10 10YR4/4 褐色砂泥
- 11 7.5YR4/4 褐色砂泥、10YR4/4 褐色ブロックと砂礫混
- 12 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 13 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ3~7cmの礫混
- 14 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ1~8cmの礫少量混
- 15 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥、かなり粘質
- 16 7.5YR 4/3 褐色砂泥
- 17 7.5YR3/1 黒褐色砂泥、φ~12cmの礫混
- 18 10YR5/2 灰黄褐色砂礫 (φ~15cm)
- 19 10YR4/2 灰黄褐色砂礫 (φ~3cm)
- 20 10YR4/1 褐色砂泥、やや粘質
- 21 2.5Y6/4 にぶい黄色粘土
- 22 10YR5/2 灰黄褐色砂泥、φ~5cmの礫多量混
- 23 10YR4/4 褐色砂泥
- 24 7.5YR4/4 褐色砂泥
- 25 7.5YR2/2 黒褐色砂泥、φ1~5cmの礫混
- 26 7.5YR4/2 灰褐色砂泥、φ~5cm)
- 27 10YR4/4 褐色砂泥、やや粘質
- 28 7.5YR4/4 褐色砂泥、かなり粘質
- 29 7.5YR3/2 黒褐色砂泥、かなり粘質、砂礫混
- 30 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂礫 (φ~5cm)

図49 調査区断面図 (1 : 100)

紀初頭)に該当するとみられる土師器が少量出土している。平安時代後期から南北朝時代の土師器が混入しており、ここでも量的には古いものの方が多い。調査区内では最も幅が広い堀である。埋土最下層の暗灰黄色粘質土は堀9の最下層と酷似しており、同時に存続していた可能性もみられる。

堀7(図50) 1区東部で検出した北西から南東の斜め方向の堀で、南側で方向を変えて東に延びるとみられる。約14m分を検出している。幅約2.4m、深さ約1.9m。堀の断面は逆台形をしている。堆積土はにぶい黄褐色および灰黄褐色の砂泥などで、土器・瓦類などの遺物や礫の混入が少ない。また水が溜まっていた痕跡は認められない。調査区北壁での観察では堀8を切り、さらに北西方向に延びるとみられる。遺物はⅨ期新～Ⅹ期古段階の土師器が少量出土している。南部の屈曲点付近で石仏が2体出土した(図54)。埋土には平安時代中期から鎌倉時代初期の土師器が混入しており、量的には古いものの方が多い。

土壙13 1・2区の東寄りで検出した南北方向に長い土壙で、北側では堀8の手前で止まっており、南は調査区内に収まる。南北長約12mで、幅約3.6m、深さ約1.4mの規模である。土壙の断面は浅い台形をしている。埋土は暗褐色泥砂や暗オリーブ褐色砂泥で、土師器皿や礫を多く含む部分がある。遺物はⅩ期古～中段階の土師器が出土している。また他の堀と同様に平安時代後期の土師器が混入している。堀7が埋められた後に作られている。

堀22(図51) 1区中央部で検出した。東西方向の複数の布掘り溝で構成される堀で、約6m分を検出している。布掘り溝は2基あり、幅約0.7m、深さ約1mで、長さは2.2mほどである。底部の両端に根石を据え、根石の間隔は約1mである。西端では根石を1基のみ検出した。根石は20cm大である。Ⅸ～Ⅹ期の土師器が少量出土している。堀9や堀7が埋め戻されてから作られた堀である。堀9の西肩の位置から西側へは延びない。位置的には、既に埋められた堀8の南側で、堀8と同様の方向である。

柵46(図51) 1区中央部で検出した東西方向に並ぶ2基の柱穴で構成される柵で、約2.5m分を検出している。柱穴は0.5～0.6mの規模。柱穴には20cm前後の根石が据えられる。堀22を切って成立する。

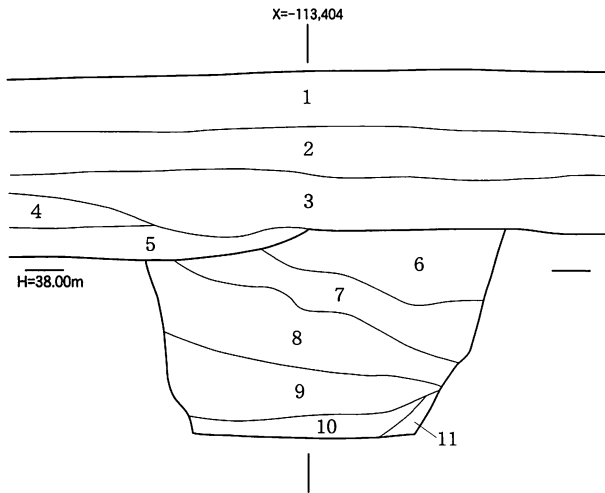
柵49(図51) 1区中央部で検出した。東西方向に並ぶ4基の柱穴で構成される柵で、約4.7m分を検出している。柱穴は0.4～0.6mの規模とみられる。柱穴には20～30cm大の根石が据えられる。堀7を切って成立する。堀22に連続する可能性もある。

柵57(図51) 1区中央部で検出した東西方向に並ぶ3基の柱穴で構成される柵で、約3.5m分を検出している。柱穴は0.4～0.6mの規模。柱穴には20～30cm大の根石が据えられる。

建物23 1区の南部に位置する。西側には北から礎石23・24・25の3基が約1.1m間隔で並ぶ。東側では北から礎石27・28の2基が約2.4m間隔で並ぶ。礎石の大きさは約20～25cmである。東列と西列の間隔は約3.5mである。堀22が廃棄された後に建てられる。

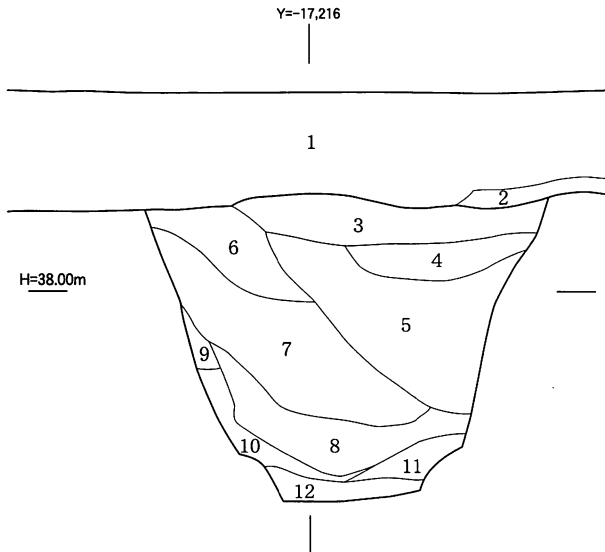
土壙63 2区の北側で検出した土壙である。東西約2.5m、南北約1.8m、深さ約0.5mの規模。瓦類を多量に含む。埋土は灰黄褐色砂泥。Ⅹ期に該当する土師器皿が出土した。他には瓦器火鉢、

堀7 (1区東壁) 断面図 (1 : 50)



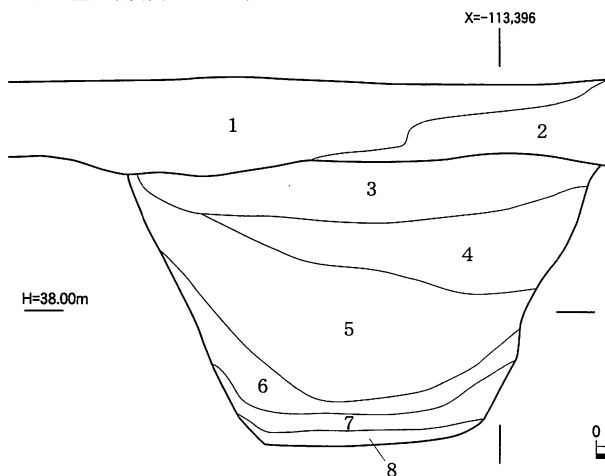
- 1 10R3/3 暗褐色砂泥
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ~5cmの礫少量混
- 3 10YR3/2 黒褐色砂泥、φ~15cmの礫多量混
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ~7cmの礫混
- 5 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥、φ~7cmの礫混
- [堀7埋土]
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 7 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 8 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 9 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
- 10 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
- 11 2.5Y5/3 黄褐色砂泥、かなり粘質、良く締まる、礫混

堀9 (2区南壁) 断面図 (1 : 50)



- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥、やや粘質
- [堀9a埋土]
- 3 10YR4/4 褐色砂泥
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ~4cmの礫混
- 5 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ3cmほどの礫少量混
- [堀9b埋土]
- 6 10YR4/4 褐色砂泥、φ4cmほどの礫少量混
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、砂礫が多量混
- 8 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥、かなり粘質
- 9 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥、粘質
- 10 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥、かなり粘質、φ6cmの礫混
- 11 2.5Y5/3 黄褐色砂泥、φ~5cmの砂礫多量混
- 12 5Y6/1 灰色粘質土、φ~10cmの砂礫少量混

堀8 (1区西壁) 断面図 (1 : 50)



- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ~10cmの礫混
- 2 10YR4/2 灰褐色砂泥
- [堀8埋土]
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、
底部は10YR5/2 灰黄褐色砂泥
- 4 7.5YR4/2 灰褐色砂泥
- 5 10YR5/2 灰黄褐色砂泥、φ15cm程の礫混
- 6 7.5YR4/2 灰褐色砂泥、密度やや粗い
- 7 10YR3/4 暗褐色砂泥、粘土混
- 8 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土



図50 堀断面図 (1 : 50)

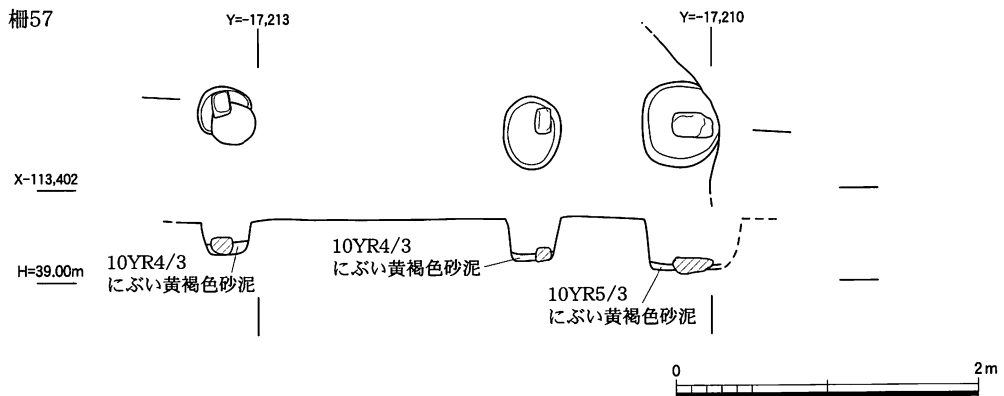
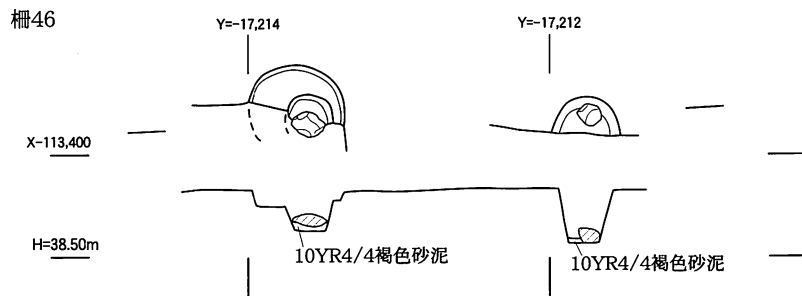
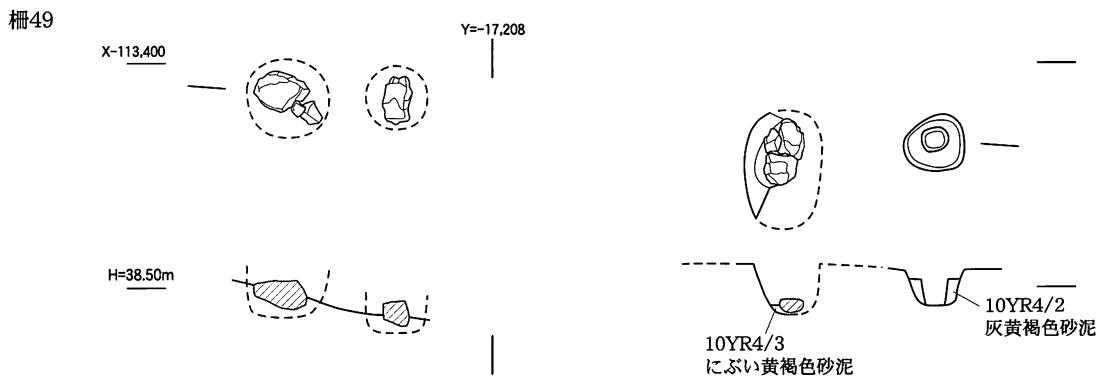
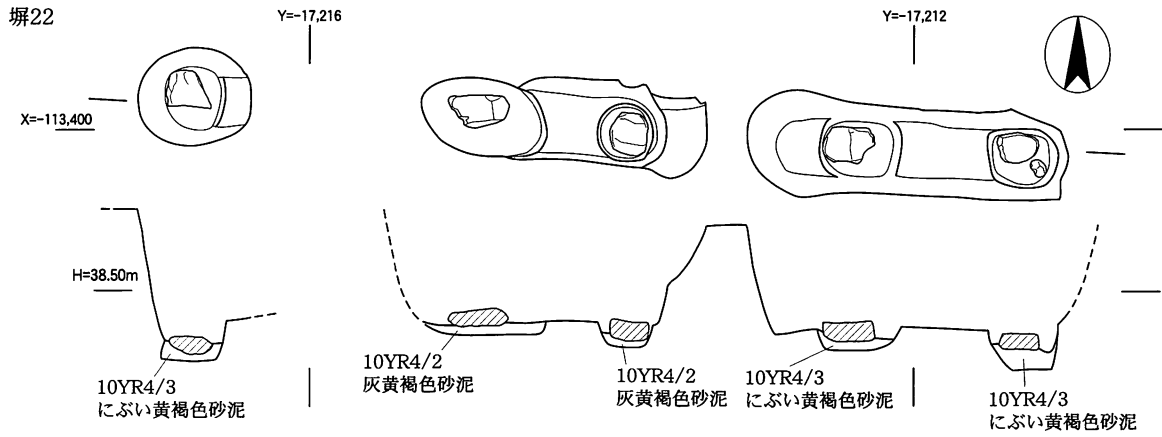


図51 柵列平面図・断面図 (1 : 50)

瀬戸美濃系鉄釉碗・灰釉皿、信楽産甕などがある。瓦類には丸瓦・平瓦、鬼瓦が出土している。

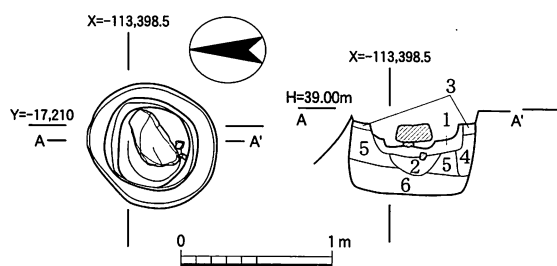
礫敷き92 2区の北側西端で検出した地業である。東西約2.5m、南北約1.2mの範囲に径1～5cm大の小礫を敷き詰めている。北側の標高の高い整地面南端に位置しており、北側と南側の平坦面を繋ぐ位置にある。礫敷きの周り4.4mの範囲には黄褐色泥砂の整地層がある。西側は堀9に切られている。

井戸71 掘形は直径約2.8mの円形である。検出面から約3mの深さで石組の一部を確認した。石組は約40cmの河原石を使用していた。上部の石は抜き取られたとみられる。深く危険なため、埋戻しの際に重機で確認した。X期の土師器が少量出土している。

整地層 おもににぶい黄褐色砂泥層(10YR4/3)や粘質の強いにぶい黄褐色砂泥層(10YR5/3)で、旧表土層の上におよそ0.5～1.4mの厚さで堆積する。礫はほとんど含まない。1区と2区北部、2区南部の2つの平坦面があり、礫敷き92でつながる。整地面の標高は、1区が39.0mで、2区では38.6m⁸⁾である。遺物は16世紀頃の土師器に混じり平安時代中期～鎌倉時代前半の土器類が3割程度混入している(表10参照)。

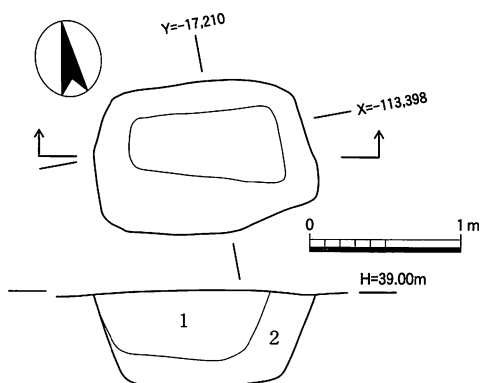
土壙6(図53) 1区の北側で検出した土壙である。東西約2.9m、南北約2.1m、深さ約1.3mの規模である。埋土は大きく2層に分かれ、内側の第1層の埋土は小礫を多く含んだ褐色砂泥で、第2層はにぶい黄褐色砂泥である。埋土の状態は大きく異なるが、第1層・第2層の遺物の時期差は認めがたい。X期中～新段階の土師器皿が出土した。他に第1層から信楽産の播鉢、第2層からは瓦器火鉢、鉄釘などが出土した。遺物の時期からは、数少ない山科本願寺廃絶後まもなく成立した遺構である。

柱穴5(図52) 1区の北側で検出した柱穴である。東西約0.9m、南北約0.8m、掘形の深さは約0.6m。中には礎石が据えられる。礎石は焼けた痕跡がある。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、焼けた壁土や炭化物を多く含む。X期中段階の土師器が少量出土している。土壙6を切り込んだ遺構である。



- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、焼土多量混、炭少量混
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、焼土・炭少量混
- 3 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥、かなり粘質、焼土・礫混
- 4 10YR4/4 褐色砂泥、やや粘質
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 6 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ～5cmの礫混

図52 柱穴5平面図・断面図(1:50)



- 1 10YR4/4 褐色砂泥、礫多く含む
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥

図53 土壙6平面図・断面図(1:50)

(4) 桃山時代の遺構

この時代の遺構は少数である。調査区北側で土壙1を検出している。

土壙1 1区の北端で検出した土壙である。東西約1.2m、南北0.4m以上、深さ0.35mの規模。北に延びる。埋土は暗褐色砂泥で炭化物・焼土が混じる。内部には板を立てていた痕跡がみられた。X期新段階の古相の土師器皿が出土した。他には釘・貝殻などがある。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

調査で出土した遺物は、整理箱に8箱である。土器類が大半を占め、ほかには瓦類・金属製品・石製品・壁土などがある。瓦類は少量の出土であり、塼や鬼瓦がわずかに含まれている。出土した遺物総量は、周辺での調査と比較すると少量である。

時期別には、室町時代後期の遺物が主体であるが、量的には平安時代中期から鎌倉時代前半以前のものが1/3以上出土している。桃山時代以降の遺物は、わずかである。また、古墳時代の土師器も少量であるが出土した。当該期の遺構は確認していないが左義長町遺跡に関連するものとみられる。

(2) 平安・鎌倉時代の遺物

平安時代中期から鎌倉時代前半の遺物には土師器、須恵器、緑釉・灰釉陶器、黒色土器、瓦器、施釉・焼締陶器、輸入白磁・青磁・褐釉陶器などがある。

これらの土器類は、この時代の遺構に伴うものではなく、すべて堀などの室町時代後半の遺構から出土している。いずれも細片となっており、断面などに損傷が進んだ小片が多いことが特徴である。

(3) 室町時代の遺物 (図54、図版28)

室町時代後期の遺物は、土師器皿・羽釜、瀬戸美濃産(大窯製品)灰釉皿・鉄釉碗、瓦器火鉢、常滑産甕、信楽産播鉢・壺・甕、備前産盤・壺・甕、輸入青磁碗、平瓦、丸瓦、鬼瓦、塼、石鍋、砥石などが出土している。

土師器皿は、ほとんどが白色系の皿Sで、赤色系の皿Nはごくわずかである。皿Sは口径に

表10 整地層他の遺物の時期

遺構	時期	当該時期の土器類	より古い時期の混入土器類	計
IX期以降の層・遺構		1,829	1,172	3,001
		60.9%	39.1%	
堀8	IX期新～X期古	64	511	575
堀9	IX期新～X期古	1	54	55
堀51	X期古	96	138	234
土壙13	(X期古～) X期中	474	49	523

より小型・中型・大型の3種類に分類できる。おもに堀7・8、土壙6・13などから出土した。以下主要な遺構毎に遺物の概略を記す。

堀8 ここでは中型皿(1・2)を図示した。(1)は体部が緩やかに外反して外上方へ延びる。口縁部は尖り気味に収める。器高が低く扁平な皿形である。口径9.0cm。(2)は体部が緩やかに外反して開き、口縁部は丸みを持って立ち上がり、先端は丸く収める。内面の底部から体部の立ち上がり部に凸状の圏線をもつ。口径9.7cm。ともに底部・口縁部外面下位はオサエ、底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデで仕上げる。京都の土師器の編年でⅨ期新～Ⅹ期古段階⁹⁾に該当するとみられる。

堀7 中型皿(3)、大型皿(4・5)を図示した。(3)は体部が緩やかに外反して開き、口縁部は丸みを持って立ち上がり、先端は丸く収める。口径8.7cm。(4・5)は体部は緩やかに外反して外上方へ延びる。(5)は口縁端部が丸く立ち上がる。口径11.6cm。(4)の口縁端部は尖り気味に収める。口径10.2cm。内外面に煤が多く付着し、灯明皿として使用されたとみられる。土師器の編年でⅨ期新～Ⅹ期古段階に該当するとみられる。石仏(39・40)は、ともに阿弥陀如来像である。2体とも造りが粗いため、衣や表情などの様子が不明瞭である。脚部は側面までしか表現せず、光背・側面および背面も未調整である。ともに花崗岩製で、(39)の下部には矢跡が残り、(40)は風化が進んでいる。像下部を埋めて立てる形式である。石仏は97年調査(6次)¹⁰⁾でも出土例がある。

土壙13 小型皿(6・7)は、口縁部が底部から緩やかに屈曲して外反気味に開き、端部が立ち上がる。底部中央が上方に突出するいわゆるヘソ皿である。底部・口縁部外面下位はオサエ、底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデで仕上げる。口径6.4・6.6cm。図示していないが、小型皿は底部が平坦なものも含まれる。大型皿(8～13)は底部が平らで、体部は上方へ外反気

表11 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器	2箱		0箱	2箱
鎌倉時代	土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器				
室町時代後期	土師器、施釉陶器、焼締陶器	8箱	土師器33点、焼締陶器1点	1箱	4箱
	瓦類、		瓦1点		
	釘、石仏		石仏2点		
桃山時代	土師器、瓦器、焼締陶器	1箱	土師器4点	0箱	1箱
江戸時代	施釉陶器、磁器				
	銭貨				
合計		11箱	41点(3箱)	1箱	7箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理の過程で出土時より3箱増えた。

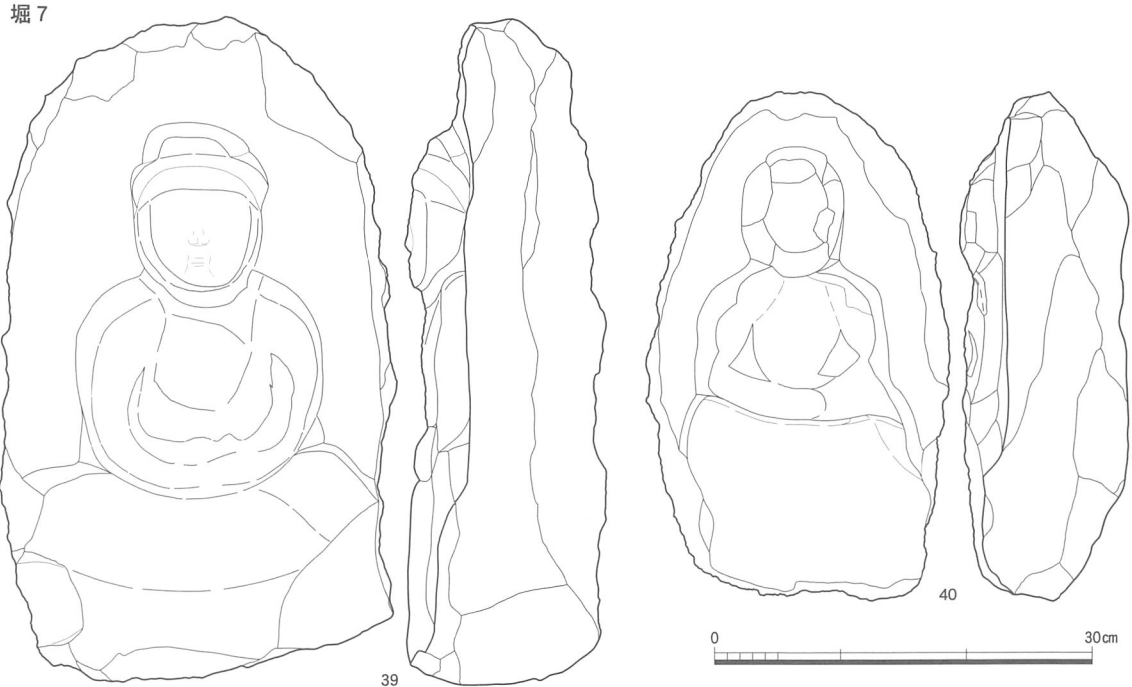
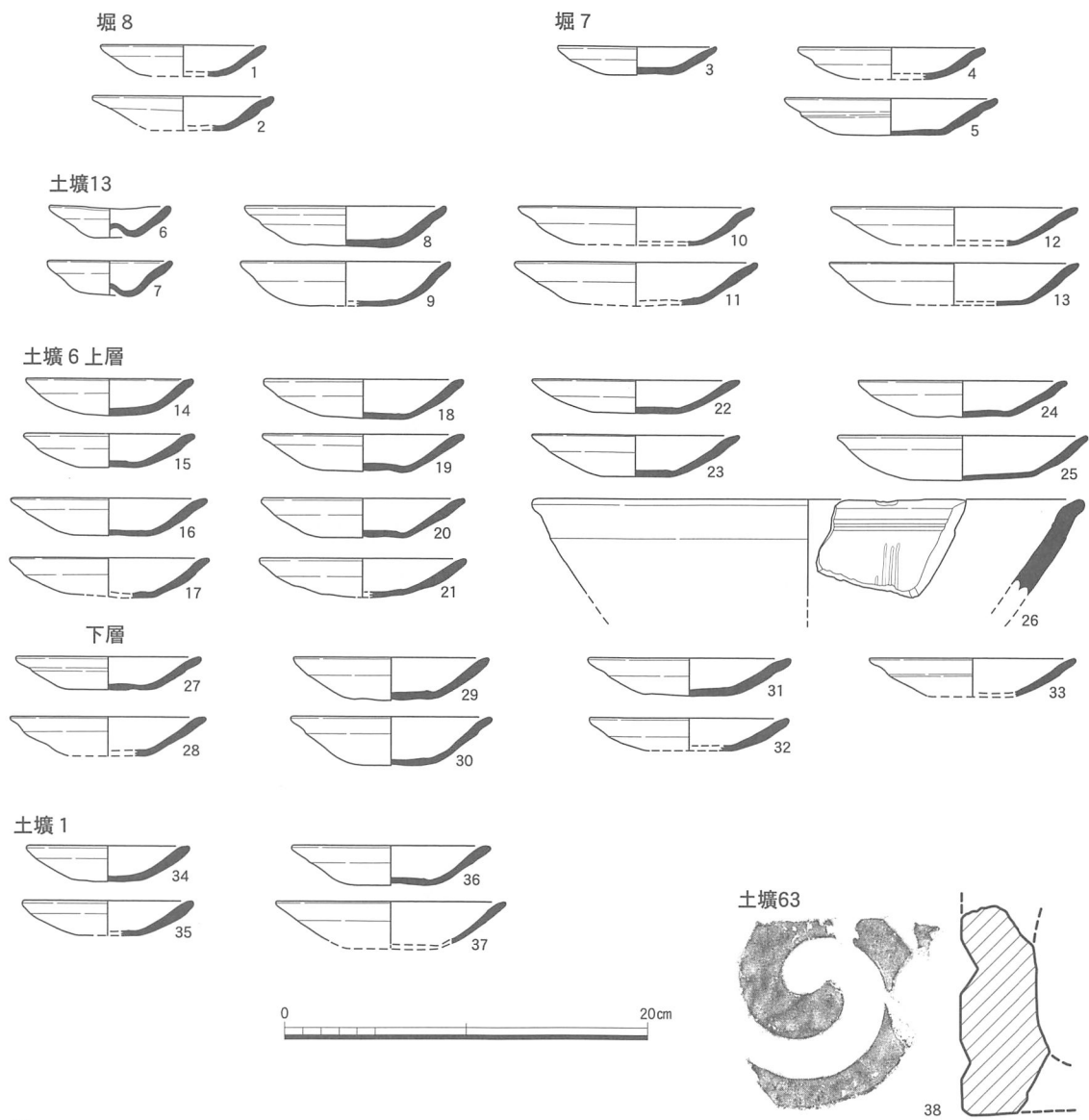


图54 遺物実測図(土器1:4 石仏1:6)

味に立ち上がる。10・13など口縁端部の内側は内傾する面を持つものがみられる。底部の内面にはごく浅い凹線状の圈線がみられる。底部・口縁部外面下位はオサエ、底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデで仕上げる。口径10.9～13.6cm。土師器の編年でX期古～中段階に該当するとみられる。

土壙63 (38) は鬼瓦の一部である。鬼面の両脇に付く蕨手状の巻き込み部分とみられる。巻き込み紋はヘラで切り込んで施し、表面には丁寧なヘラミガキを施している。外周は面取りを施し、稜の部分をヘラナデで調整する。裏面は指ナデ調整する。胎土は0.5～2mm大の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。2000年の調査¹¹⁾(9次) で同様のものが出土している。

土壙6 第1層出土(14～26)と第2層出土(27～33)のものがあり、分けて記述する。第1層出土の中型皿(14・15)には丸底風の(14)と内面に浅い凹線状の圈線がみられる15がある。口径9.0・9.1cm。大型皿(16～25)は底部が平らで、体部は上方へ外反気味に立ち上がる。18～20・22・23など口縁端部の内側に端面を持つものが多くみられる。底部から体部の立ち上がり部には浅い凹線状の圈線がみられる。口径10.5～13.6cm。信楽産播鉢(26)は口縁部のみである。口縁端部は外反し、内傾する面がある。播り目は4本まで確認できる。胎土は淡黄色で、3～4mm大の砂粒を少量含む。焼成はやや軟質である。図示していないが、埴は厚さ42mmで、下面を除く他の3面がナデ調整される。淡灰色を呈する。第2層出土の中型皿(27・28)は口径9.0・9.1cm。大型皿(29～33)は口径9.9～11.1cm。(31～33)など器高が低く、口径が小さい個体が多くなる。第1層と同じくX期中～新段階に該当するとみられる。山科本願寺が廃絶した後につくられた土壙である。

(4) 桃山時代の遺物 (図54、図版28)

この時期の遺物は少量である。土師器皿、瓦器火鉢、信楽産播鉢、釘、砥石、貝などが出土している。土師器皿は白色系の皿Sで、赤色系の皿Nは含まれない。皿Sは口径により小型・中型・大型の3種類に分類できる。

おもに土壙1から出土した。

土壙1 中型皿(34・35)は口径8.7・9.2cm。大型皿(36・37)は口径10.5・12.6cm。(36)は底部の内面に明瞭に凹線状の圈線がみられる。(37)の口縁部は外上方へ直線的に立ち上がり、内側に内傾する端面がある。ともに底部・口縁部外面下位はオサエ、底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデで仕上げる。X期新段階に該当するとみられる。胎土の色調は褐色がかかるものが多い。

(5) 江戸時代の遺物

耕作土層などから少量の出土がある。肥前系の陶磁器、寛永通寶などである。

5. まとめ

今回の調査では、山科本願寺に関連する新たな複数の堀を検出した。これらの堀が山科本願寺のなかにおいて御本寺を取り囲む他の堀や土塁とどのように関連するか今後の課題となるが、ここでは主に整地層・堀・遺構の変遷の3点について述べたい。

整地層について 本来当地の自然地形は、凹凸があるものの全体的には、北東から南西の方向に緩やかに傾斜している。一方、調査で検出した室町時代後期の遺構面は傾斜が少ないため、山科本願寺造営に当たっては大規模な整地を行い、平坦面を確保していることがわかった。

整地土は、旧表土層の上に、にぶい黄褐色砂泥などをおよそ0.5~1.4mの厚さで積み上げている。この整地層から出土する遺物には、16世紀頃の土器器皿が多くを占めるが、そのうちの約1/3が平安時代中期から鎌倉時代前半の混入した古い土器類である。一方、前述したように堀の埋土中からは圧倒的に古い時代の遺物の方が多岐にわたる状況がみられる。また、混入している土器類は、いずれも細片で断面等に損傷が進んだ小片が多くみられることから、山科本願寺造営時の整地作業では、付近の鎌倉時代以前の遺物を含む土砂が運ばれたものと考えられる。

次に、2区では北と南に平坦面があり、両者には0.4mの標高差があることが確認できた。北平坦面の南端には、礫敷きがなされており、両平坦面をつなぐスロープと考えられる。南平坦面の標高は、97年調査¹²⁾(7次)で検出した生産関係の遺構がある南部地域の整地層上面と同じ高さであり、この南平坦面は南北70mの広さがあったことになる。広い平坦面を確保しながら、北側の御本寺中心部に向かって徐々に高くなる整地がなされていることがわかった。

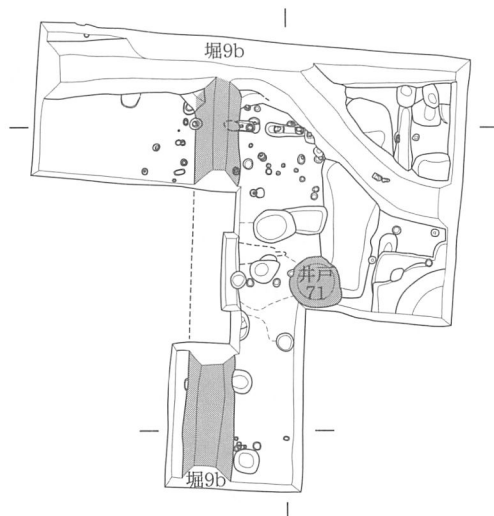
堀について 今回検出した堀は、すべて幅に対して深く掘られており、その断面形は逆台形やV字形を呈しており、防御的な性格が強いとされるものである。この堀に類似する例としては、本圀寺、京都御苑内、相国寺旧境内、室町殿などで検出されている。さらに大型のものには、本遺跡6次調査、山科本願寺南殿、洛央小学校などでの検出例がある¹³⁾。

堀底部付近の堆積土の状況からは、常時水が流れたり、溜まっていたような痕跡はないことから、空堀であったと考えられる。また、どの堀も中間層に腐植土層や廃棄物を多量に含む層などは認められず、埋土質は均一であるため、短期間で埋め戻されたと考えられる。さらに、これらの堀は、切り合いからは先後関係の判断がつけられるが、埋土から出土する遺物は、時期差がないため、ほぼ同時期のものとみられ、短期間の中で造り替えがあったものと考えられる¹⁴⁾。

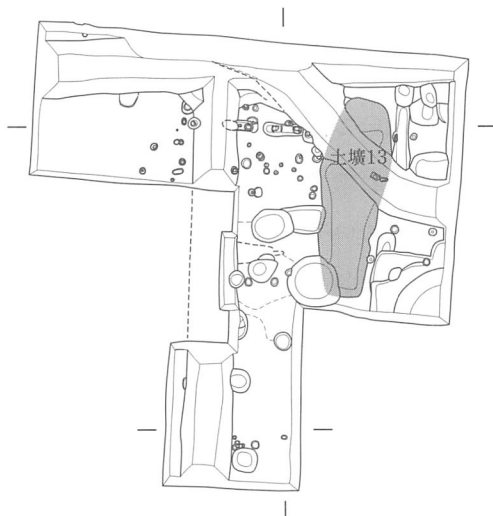
これらの堀の位置を2種の古図で検討すると、「光照寺本」では、内寺内の南西隅にあたっており、内寺内と外寺内を区切る東西方向の土塁が存在する地点に近いとみられ、一方、「山科古図」(図42)では御本寺内の南西部にあっているとみられる。以前からの研究によれば「光照寺本」の方が、より古い時期の状況を示していることが指摘されている¹⁵⁾。堀の開削されている状態は「光照寺本」にちかく、一方堀が埋められた後は「山科古図」の段階のように御本寺の範囲が拡がり、当初の内寺内南西部を取り込んでいったことがみてとれる。

絵図からは、広い面積を持つ御本寺内では、御影堂や阿弥陀堂などのある中心部分の防御を強

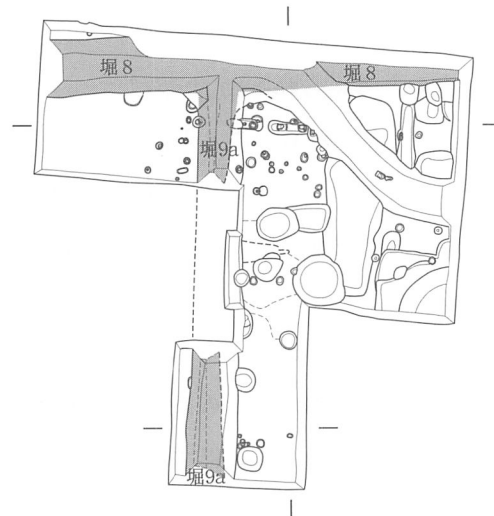
堀1期



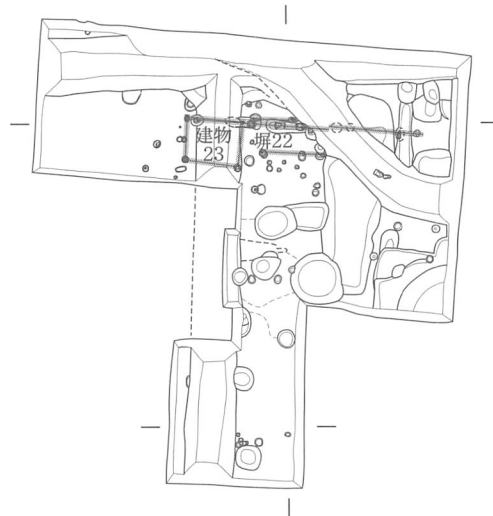
埋没後1期



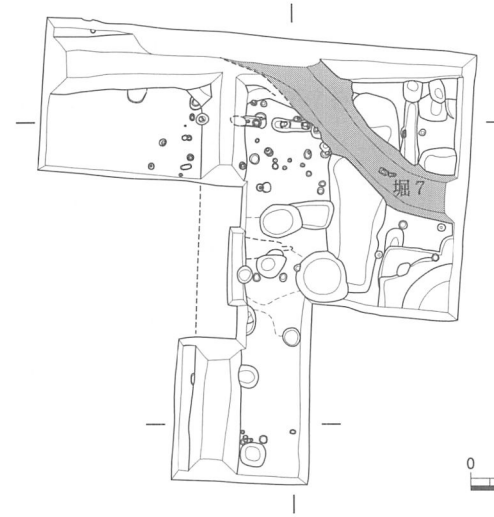
堀2期



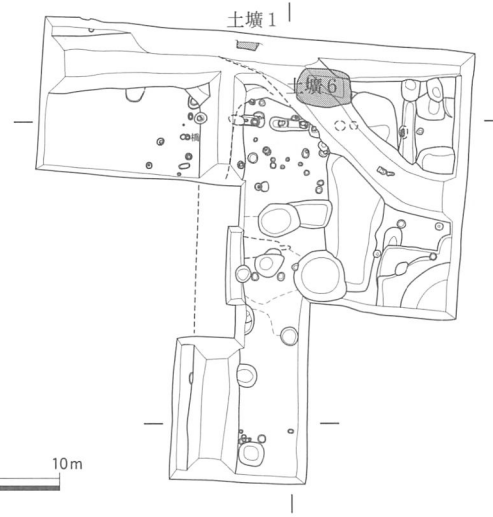
埋没後2期



堀3期



埋没後3期



0 10m

図55 遺構の変遷 (1 : 400)

化するため御本寺を中心として、二重三重に土塁と堀を巡らしている様子がみえていたが、調査によって内部にはさらに堀がめぐらされていたことがわかった。これらの堀は、外部の戦国領主や他宗派との緊張関係の高まりなどによって適時増設されたとみられる。

堀周辺の遺構密度について 今回の調査では、堀以外の室町時代後半の遺構分布密度は低く、当該期の遺物の出土量も極めて少ないことがわかった。これらから、この場所は居住や生産施設に利用された地域ではないと考えられ、空閑地的な状態にあることから、ここに、たびたび東西および南北方向の堀が造り替えられたと考えられる。

また、東西方向の堀8が埋没した後に、南肩部分に堀22や柵46・57などが相次いで構築されており、この地点が常に何らかの境界線としての認識がもたれていた可能性が推測できる。この位置は、寺院中心部と生産関係の遺構がある南部地域とを区切る地点に想定することができ、また、堀8の北側には、堀の掘削時の排土を盛り上げて構築した東西方向の土塁が存在した可能性も考えられる。

遺構の変遷について 主要な遺構の変遷について検討した結果、堀を3期とそれ以降を3期に分けた(図55)。

堀1期 平坦な整地層を掘り込んで、調査区の中央部に南北方向の堀9bが掘られ、東西に分割される。堀の方位は、北側でやや東側に振れる傾きをもち、西側の堀や土塁とほぼ併行している。

堀2期 次いで、堀9bに直交する形で東西方向の堀8が掘られ、北側にある中心部と南側の生産地域を分離する。この堀8は堀9bと接続し、併存する時期があったとみられる。のちに、この堀8は埋められ、堀9は規模を小さく造り替えられている。

堀3期 その後、堀9も埋められ、北西から東方向に延びる堀7が掘削される。御本寺内での新たな区画がなされる。

埋没後1期 堀7が埋め戻され、区画がなくなり、土壙13が作られる。

埋没後2期 土壙を埋め戻し平坦にして、東西方向の大規模な堀22を築く。のちに小規模な柵46・57などが作られ、再度南北に分割される。

埋没後3期 土壙6・1が作られる。この時期以降の遺構密度は非常に低い。

なお、堀1期以前の遺構には、本願寺造営時の整地層がある。埋没後1・2期は、遺構の切り合いから分離したが、ほとんど時間差がないと考える。

また、埋没後3期は、山科本願寺廃絶後から桃山時代にかけてと考えられる。土壙6は16世紀第2四半期後半に属するとみられるため、山科本願寺廃絶後に成立したと考えられる。文献によれば天文法華の乱(1536年)後に信徒が戻り、一時再建を始めるが、その後の建設は継続していないとされ、¹⁷⁾文献の内容と遺構の状況とが合致することがわかった。その後、桃山時代以降の遺構は稀薄なことから、当地の土地利用は少なかったと考えられる。そのため、つい最近まで遺構の遺存状態が良いままに保たれたとみられる。

註

- 1) 草野顕之「創建時山科本願寺の堂舎と土塁について」『中世の寺院体制と社会』吉川弘文館 2002年
- 2) 西川幸治「都市史の中の中世寺内町」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 1985年
- 3) 『私心記』天文元年八月二四日条
- 4) 杉山信三・堤圭三郎「山科本願寺」『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』日本国有鉄道 1965年
- 5) 岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 1985年
- 6) 『野村本願寺古御屋敷之図』（光照寺本）京都市 光照寺所蔵
- 7) 『山科古図』（洛東高等学校本）京都府立洛東高等学校所蔵 天明元年（1781）以降か。
- 8) 南に位置する97年調査（引用文献12）の遺構面と同じ標高である。
- 9) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 10) 石仏は柱穴内に背面を上に向けて据え付けられ、礎石として転用されている。（引用文献12）
- 11) 前掲註19に同じ
- 12) 前掲註16に同じ
- 13) 京都市内で、これと同様の堀の検出例が多数ある。堀の時期は応仁・天文年間に集中しており、この時期の京都周辺の緊張感の高まりを示すものとなる。
 - a 山本雅和「中世京都の堀について」『研究紀要』第8号（財）京都市埋蔵文化財研究所 2002年
 - b 本圀寺（幅2.5m・深さ1.5m）、1979年調査。『平安京資料選（二）』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994年
 - c 洛央小学校（堀1-3、幅6.5m・深さ2.0m）「平安京左京五条四坊」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
 - d 相国寺旧境内（堀14-1、幅3.5m・深さ2.0m）、「相国寺旧境内」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
 - e 山科本願寺（幅12m・深さ4m）「山科本願寺跡1」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1999年
 - f 山科本願寺南殿（幅5.0m・深さ2.2m）、「山科本願寺南殿跡」『平成14年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2003年
 - g 京都御苑内（堀G2630、幅2.8m・深さ1.9m）、『平安京左京北辺』第1分冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 14) 堀の改築については、相国寺旧境内で短期間に造り替えがなされている（引用文献2）。また、土塁の例には本遺跡で、南北溝を埋めて土塁西壁を拡幅している（引用文献11）。
- 15) 草野顕之「山科本願寺・寺内町の様相－蓮如の時代とその後－」『戦国の寺・城・まち 山科本願寺と寺内町』
- 16) 「山科在京衆」『天文日記』天文6年1月1日の条
- 17) 「山科野村之屋敷は既不可令還住之由申上候間、草之一本も不引之候」『天文日記』天文7年11月5日の条

引用文献

- 1 杉山信三・堤圭三郎「山科本願寺」『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』日本国有鉄道 1965年
- 2 岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8

集 1985年

- 3 堀内明博『山科本願寺跡 安祥中学校校舎新築に伴う発掘調査の概要 昭和51年度』51-4
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1977年
- 4 堀内明博『山科本願寺跡 山階小学校校舎改築に伴う発掘調査の概要 昭和51年度』51-33
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1977年
- 5 前田義明『山科本願寺跡 山科中央公園内防火用貯水タンク建設に伴う発掘調査の概要 昭和53年度』53-47 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1980年
- 6 平方幸雄「山科本願寺跡」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 7 百瀬正恒・吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
- 8 百瀬正恒「山科本願寺跡」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 9 久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
- 10 久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年
- 11 本弥八郎「山科本願寺跡」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 12 永田宗秀・近藤知子「山科本願寺跡1」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 13 近藤知子「山科本願寺跡2」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 14 吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成10年度』京都市文化市民局 2000年
- 15 長谷川行孝「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 2000年
- 16 吉崎 伸「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年

参考文献

- 1 西川幸治「寺内町の形成—吉崎と山科—」『仏教芸術』第66号 毎日新聞社 1967年
- 2 井口尚輔「中世城郭伽藍“山科本願寺”」『日本歴史』第265号 吉川弘文館 1970年
- 3 西川幸治『都市の思想』NHKブックス 1973年
- 4 森 龍吉『蓮如』講談社 1979年
- 5 西川幸治「都市史の中の中世寺内町」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 1985年
- 6 後藤 靖・田端泰子編『洛東探訪 山科の歴史と文化』淡交社 1992年
- 7 山科本願寺・寺内町研究会『戦国の寺・城・まち 山科本願寺と寺内町』法蔵館 1998年
- 8 草野顕之「創建時山科本願寺の堂舎と土塁について」『中世の寺院体制と社会』吉川弘文館 2002年
- 9 山科本願寺・寺内町研究会『掘る・読む・あるく 本願寺と山科二千年』法蔵館 2003年
- 10 京都国立博物館『蓮如と本願寺 —その歴史と美術—』1998年
- 11 近藤知子「山科本願寺の発掘調査」『リーフレット京都 No.114』(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 1998年

V 山科本願寺跡（2）

1. 調査経過

今回の調査は、駐車場の擁壁工事に先立ち、山科本願寺関連の遺構を確認するために実施した国庫補助事業による11次発掘調査である。

調査地は、京都市山科区西野山階町に位置し、国道1号線に面した書店北側駐車場の西端斜面部分である。そのすぐ西側には、同方向に堀の痕跡と推定される水路が走る。室町時代に築かれた山科本願寺「御本寺」の西辺にあたり、駐車場北側には、当時築かれた土塁が東西方向に約25m程残存している。その部分から南に延びる南北方向の土塁の下半部分がこの斜面である。対象地の土塁は、上部がすでに削平され駐車場となっているが、駐車場西端から水路までの標高差約3m、南北長約30mの土塁法面が残存している。

調査は、2005年3月1日から開始し、まず土塁の表土層を除去後、構築された当時の土塁下半部西面を検出した。その上で、土塁の遺存状況を把握し、記録するために地形測量を実施した。また土塁の構築方法を理解する目的で、調査対象地北部に断割りを入れた。調査終了後は擁壁工事までに期間が空くこともあり、土塁斜面を埋め戻し、整地を行い、3月15日に終了した。

2. 遺 構

（1）遺構の概要と層序（図58、59）

今回検出したのは、山科本願寺西辺に築かれた南北方向の土塁下半部西斜面である。調査地の北側には、東方向に曲がる土塁のコーナー部分が残存しており、その土塁はすぐ北方向に曲がって延びていく。また南側は西方向に曲がるコーナー部分にあたっており、構築時にはクランク状を呈していた部分である。ちょうど出隅（北側コーナー部）・入隅（南側コーナー部）間の土塁



図56 調査前全景（南西から）

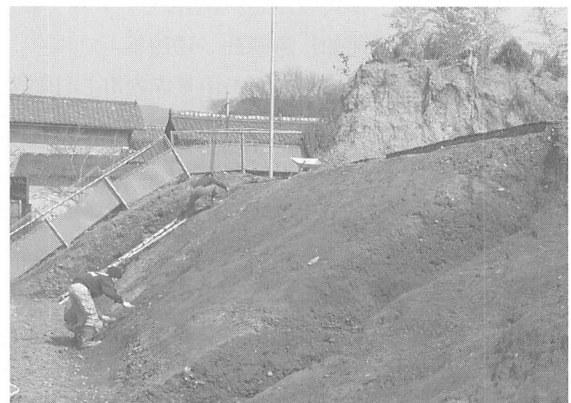


図57 作業風景（南から）

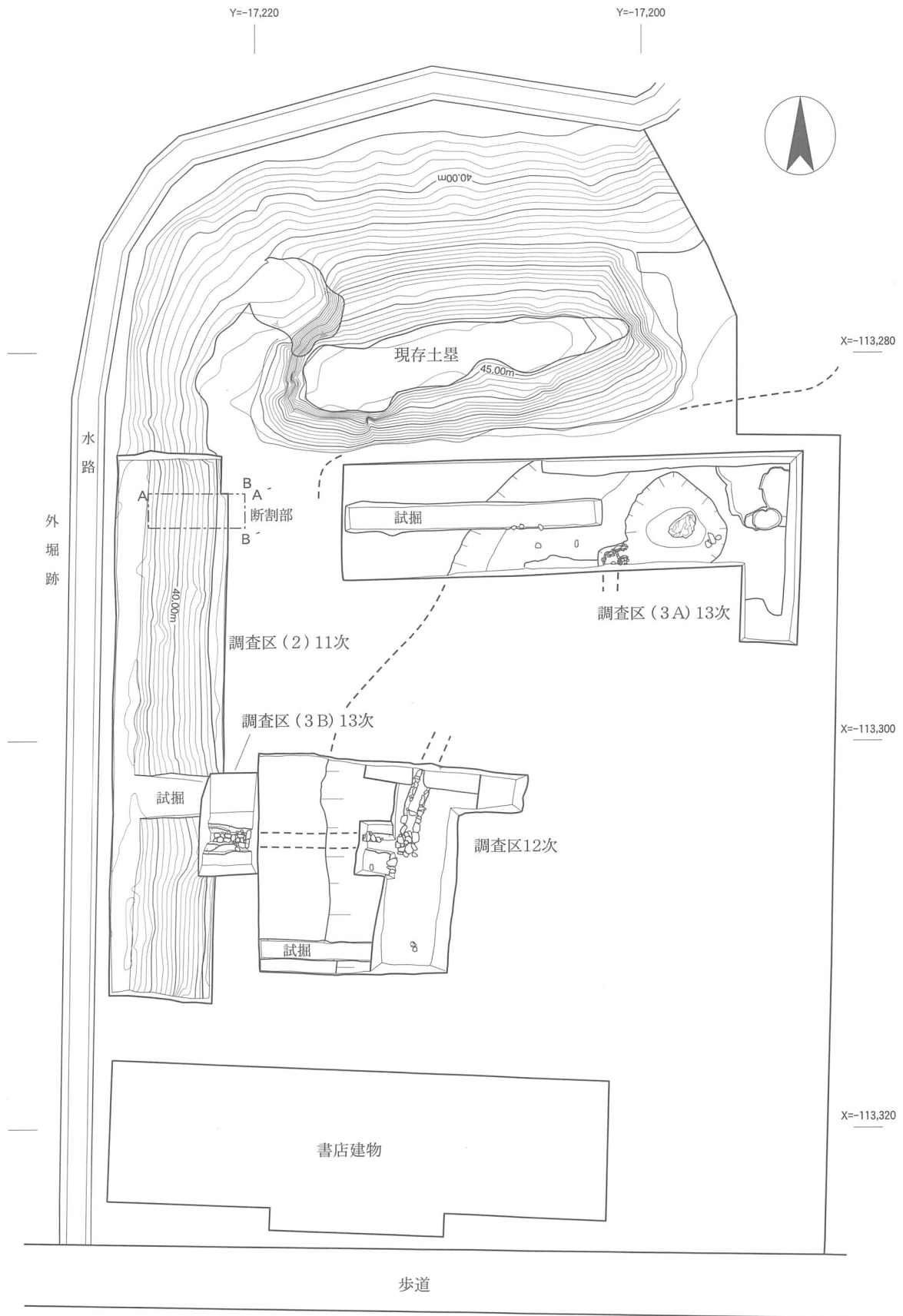


図58 地形測量図 (1 : 300)

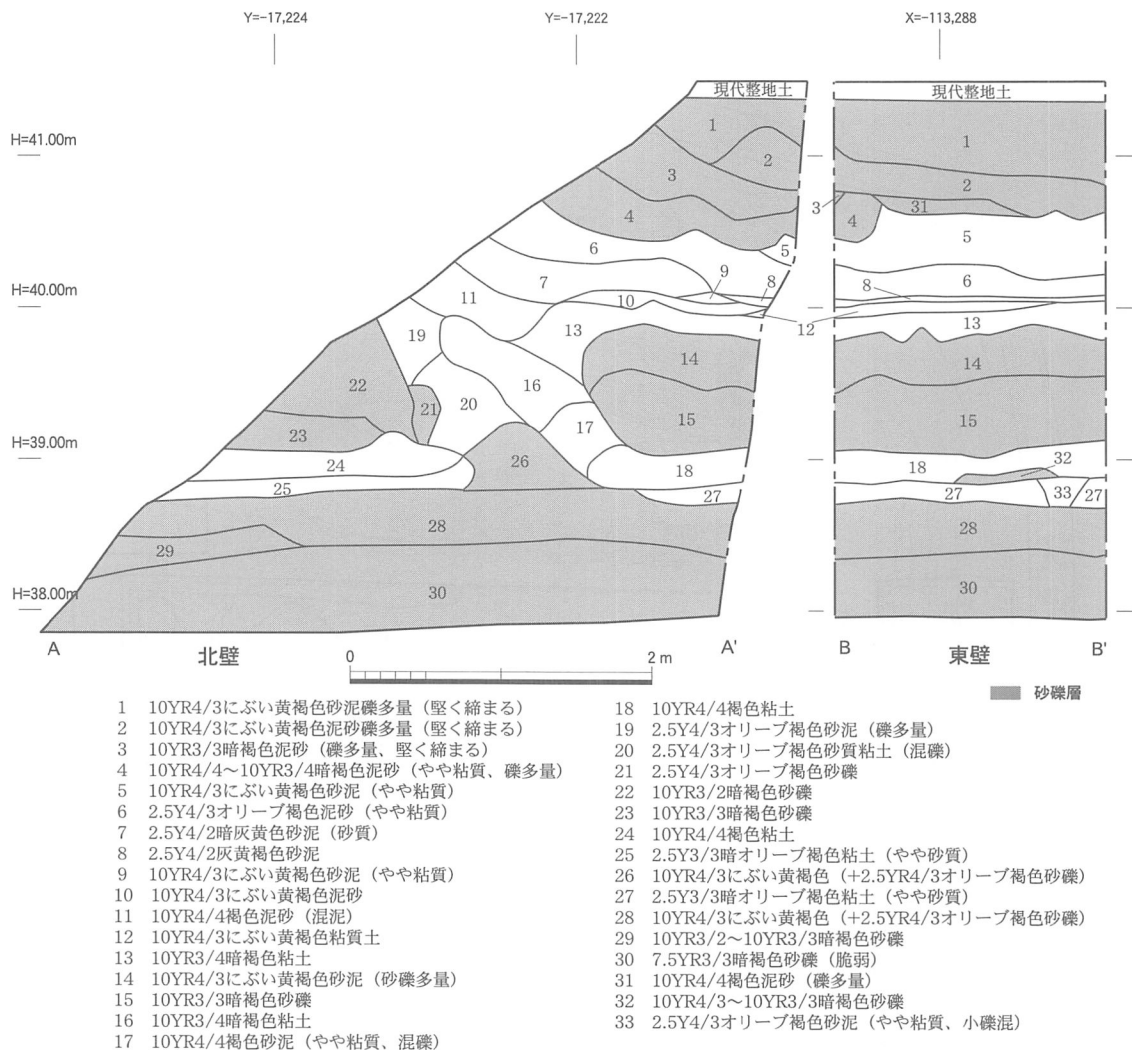


図59 断面図 (1 : 50)

部分にあたる。

土塁 規模は、上部が既に削平されているため調査区内に限ると、南北28m、東西5mで、西端と東端の比高差は3.5mであった。隣接する北側の土塁の高さが、地形測量で現地表面から3.7mであることが判明し、現状での土塁復元高は7.2mとなる。土塁斜面の傾斜角度は約35度であった。

基本層序 (図59) 調査区の層序は、駐車場側ではアスファルトと現代整地土が15cm、その整地土下はすぐ土塁の構築土となっている。斜面部分は現表土層が約50cm堆積しており、表土を取り除くと駐車場と同様、すぐ土塁の構築土となる。

北部断割り東壁で観察した土塁構築土の基本層序は、上からにぶい黄褐色砂泥・泥砂 (礫多量

表12 遺構概要表

時期	遺構
室町時代	土塁

混)層が70~75cm、にぶい黄褐色砂泥・オリーブ褐色泥砂 (やや粘質)層が50~60cm、灰黄褐色砂泥層・にぶい黄褐色粘質土・暗褐色粘土層が20~30cm、にぶい黄褐色砂泥 (礫多量混)・暗褐色砂

礫層が70～80cm、褐色粘土・暗オリーブ褐色粘土（やや砂質）層（土塁構築時の整地層）が30～40cm、オリーブ褐色・暗褐色砂礫層が70～80cmの主に砂礫と粘土の互層堆積となっている。北壁や南壁を観察すると、整地層下は、ほぼ水平堆積であるのに対して、上に行くにしたがって、緩やかではあるが、土塁内側に向かって土が積み上げられているのがわかる。ただその中、整地層上でちょうど砂礫層を切る様な形で、暗褐色の粘土や褐色砂泥層が堆積している部分があった。全体をみると、基本的には互層堆積であるので、一部堆積に乱れが見られるのは、施工段階における人為的な手順の乱れではないかと理解しておきたい。

整地層下の砂礫層は無遺物層であったので地山と思われたが、最下層の暗褐色砂礫層の堆積に締まりがないことから、古い時代の氾濫による堆積層と考えた。この堆積層は、試掘部分でも同様であった。ただ、この脆弱な最下層の砂礫層は雨水などによって、砂泥部分が浸食された可能性もあり、そうであれば、砂礫層上の整地層と考えている褐色粘土層までが、土塁を構築するにあたっての基礎的な整地土層とも理解できる。

3. 遺物

出土した遺物は5点で、ほとんどが小片であった。室町時代の遺物としては、白色系の土師器皿が3点、羽釜が1点出土している。(1)の土師器皿は、試掘トレンチ北壁の土塁構築土から、(2)の土師器皿は断割り断面南壁の土塁構築土から出土した。断面形態などの形式的特徴から、¹⁾いずれも15世紀後葉に相当し、ほぼ山科本願寺成立時期に一致している。

また小片ではっきりした時代確定はできないが、16世紀後半から近世にかけてとみられる焼締陶器が1点、検出面から出土している。

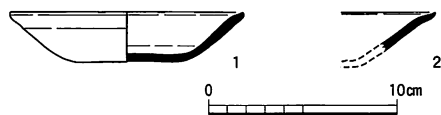


図60 遺物実測図（1：4）

表13 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
室町時代	土師器	1箱	土師器皿2点	0箱	少量
室町時代後半～近世	焼締陶器				
合計		1箱	2点（1箱）	0箱	0箱

※ Cランクの遺物は少量のため、Aランクのコンテナにまとめて収納した。

4. ま と め

今回の調査では、山科本願寺「御本寺」西辺にあたる土塁が、どのような状況で遺存しているかが課題であった。調査の結果、土塁の下半部の遺存状況はきわめて良好であることが判明した。地形測量は、この土塁斜面を記録するために実施したものであったが、同時に調査区北側に隣接する、現存土塁のコーナー部分の測量もあわせて実施することができた。結果として、土塁の状況を知る上での一つの手掛かりとなった。

調査区北部では、土塁の構築状況を確認するため、断面観察を行ったところ、主に砂礫・粘土層の互層堆積であることが判明した。その構築土からは土師器皿が2点出土しており、これらの土師器が土塁構築の上限年代を示しているものと考えている。15世紀後葉は、山科本願寺の成立時期とも重なり、当地点で調査した土塁については、山科本願寺の造営に伴って、ほぼ同時期に築かれたものであると言えよう。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 1996年

参考文献

- 1 西川幸治「都市史のなかの中世寺内町」、岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復元」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 1985年

VI 山科本願寺跡（3）

1. 調査経過

この調査は、駐車機械設置に伴い国庫補助事業によって実施したものである。山科本願寺跡関連では13次調査となる。

調査地は、国道1号線の北側に位置し、山科本願寺跡の西辺にあたる。光照寺に残る「野村本願寺古御屋敷之図」や、京都府立洛東高校所蔵の「山科古図」（図42）などの古絵図をもとにした復元図によると、現存する東西方向に走る土塁と、南に折れ南北方向に向きを変える、「御本寺」を囲む土塁屈曲部の土塁内側斜面と、一部は内側平坦部分に該当する。当調査前に実施された山科本願寺跡¹⁾11次・12次調査地の北側に位置し、東側では1974年に山科寺内町遺跡調査団による調査（2次）が行われて、石室や石組み溝が検出され、多量の土師器が出土している²⁾。また、昭和11年の都市計画図（図43）や、1997年撮影の航空写真（図44）では、最近まで当調査地付近には土塁が良好に残存していたことがわかる。

調査区は、屈曲する土塁のコーナー部および東西方向の土塁の内側裾を検出することを目的としたA区と、8次調査で検出された暗渠の出口部分を確認するためのB区の2箇所を設定した（図58）。A区、B区の調査面積は、合わせて160㎡である。2005年5月30日からまずA区の調査を開始し、第1面では東西方向の土塁の斜面から裾部を検出した。その下層の第2面では、土塁の内側で、炉跡・土取り穴・泉状遺構・排水溝などを検出した。これらは山科本願寺の「御本寺」に関わるものと考えられた。残存状況も良好なため、6月23日に広報発表を行った。記録写真および実測終了後、泉状遺構内に据えられた景石を取り上げて、6月28日にA区の調査を終了した。続いて、B区の掘削を開始し、暗渠の出口部分を検出した。6月30日に全ての調査を終了して、各調査区を埋め戻した。B区で検出した暗渠に関しては、残りが良く、重要な遺構であることから現状で保存することとし、周囲を土嚢で保護してから埋め戻しを行い、7月2日に全ての作業を終了した。



図61 調査前全景（南から）

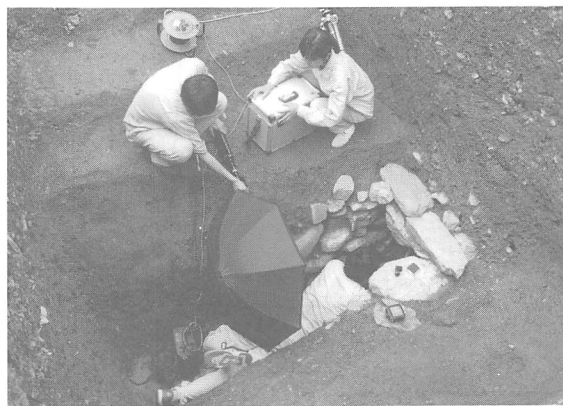


図62 B区暗渠写真撮影風景

2. 遺 構

(1) A区 (図63~67)

調査区西側では、アスファルトと碎石直下が、上部を削平された山科本願寺の土塁構築土であった。調査区東側では、駐車場造成のための盛土が約40~50cmあり、その下に駐車場造成前の竹藪であった時期の腐植土と盛土が約10~20cm堆積していた。さらに部分的に近世の遺物包含層が

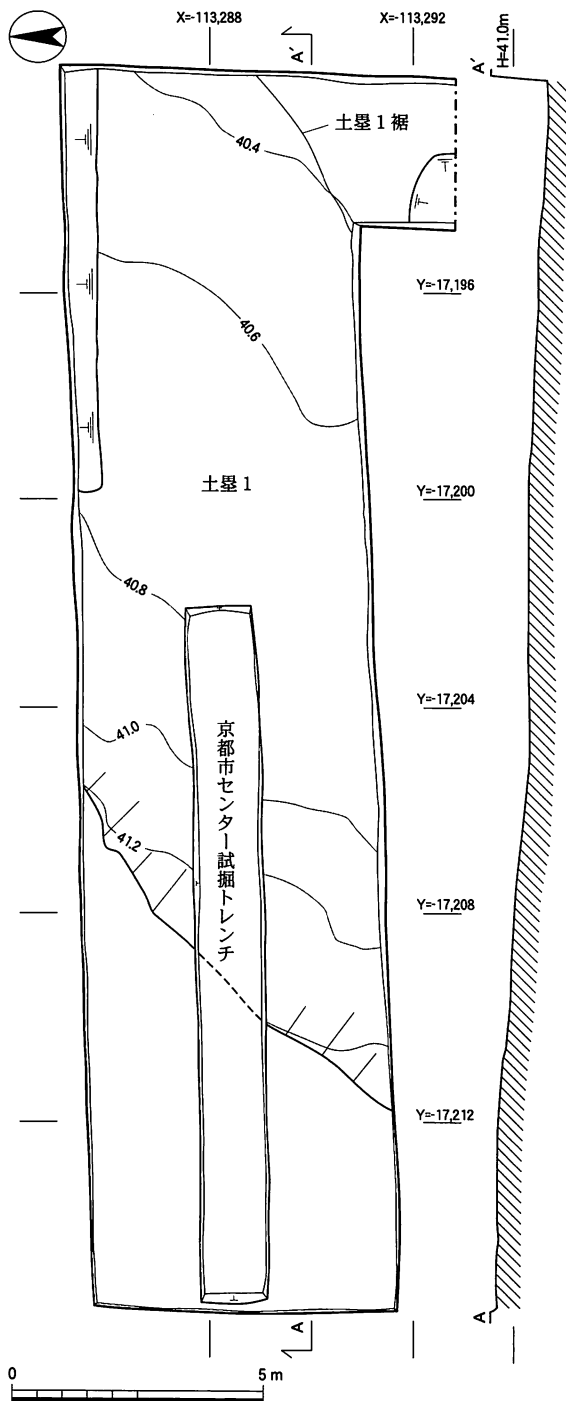


図63 A区第1面遺構平面図 (1 : 150)

約20~30cm堆積しており、それを除去した層から図65の25層の地山相当層の上面までの間は、山科本願寺の造営に伴う整地層である。この整地層は大きく3時期に分けることができ、第1面が北壁断面図(図65)6層上面、第2面が7層上面、第3面が12・13・14層上面となる。断面ではこの3つの面が認められるが、調査では14層上面で第2面と第3面の遺構を同時に検出したため、両者を合わせたものを第2面として扱う。

〈第1面〉

近世の遺物包含層を除去して第1面の土塁1を検出した。西側は上半部分が削平されているが、調査区中央付近で北西から南東に向かってなだらかに落ちる。標高40.4mの等高線が巡るあたりで明瞭な土質の違いが見られ、それより南は礫の多く混じる層となるため、その層界が土塁1の裾と判断される。これが絵図(図42)や昭和11年の地図(図43)に見られるクランク状に屈曲する土塁のコーナー部にあたると思われる。土塁1の表面は、竹林の影響でやや凹凸があるが、上層の土と比較して堅く締まる。

〈第2面〉

土塁1構築土を除去し第2面を検出した。第2面では、土塁2・土塙3・炉跡4・土取り穴群5・泉状遺構6・排水溝8の各遺構を検出した。また、泉状遺構6内部に土器集中

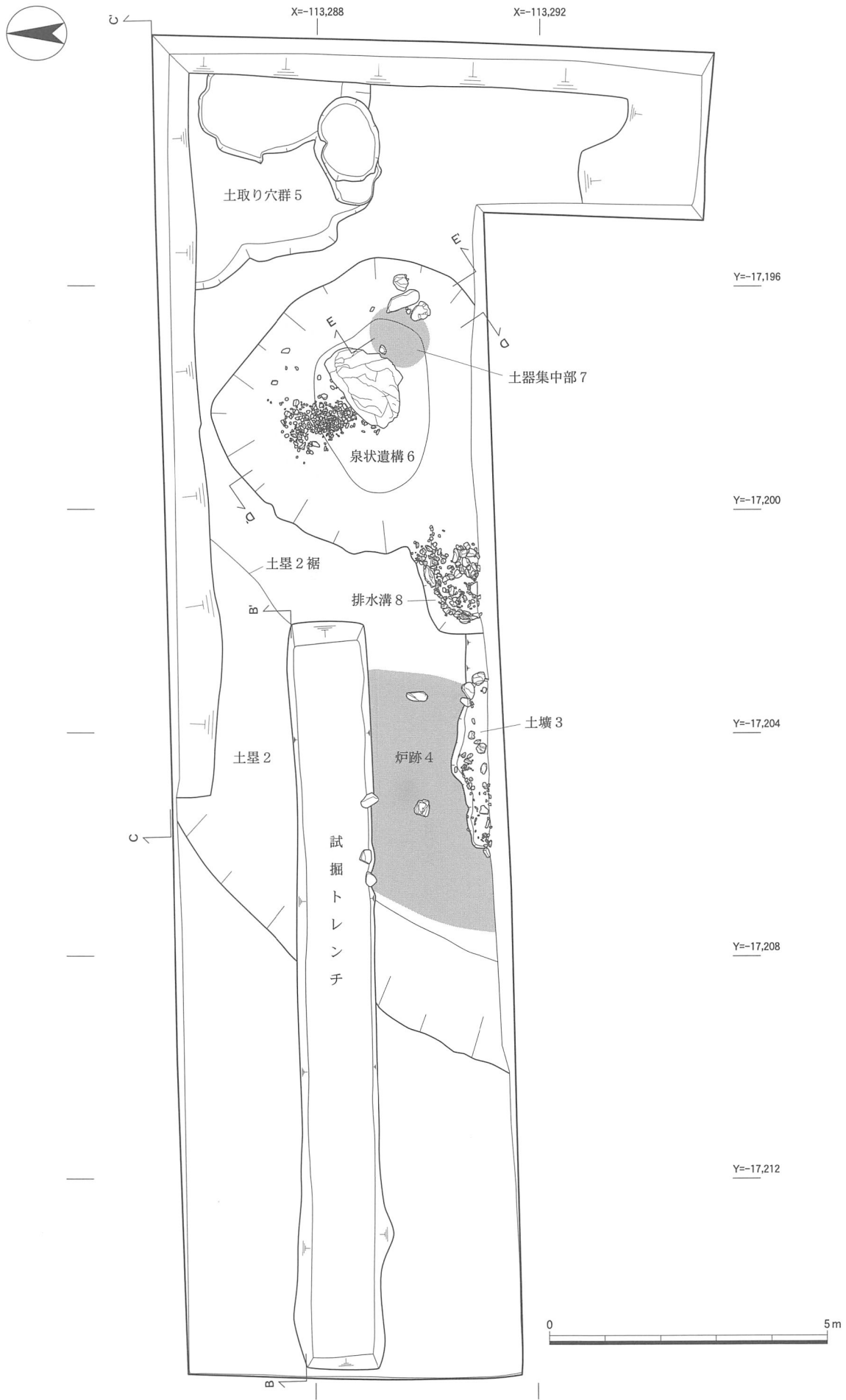


図64 A区第2面遺構平面図 (1 : 100)

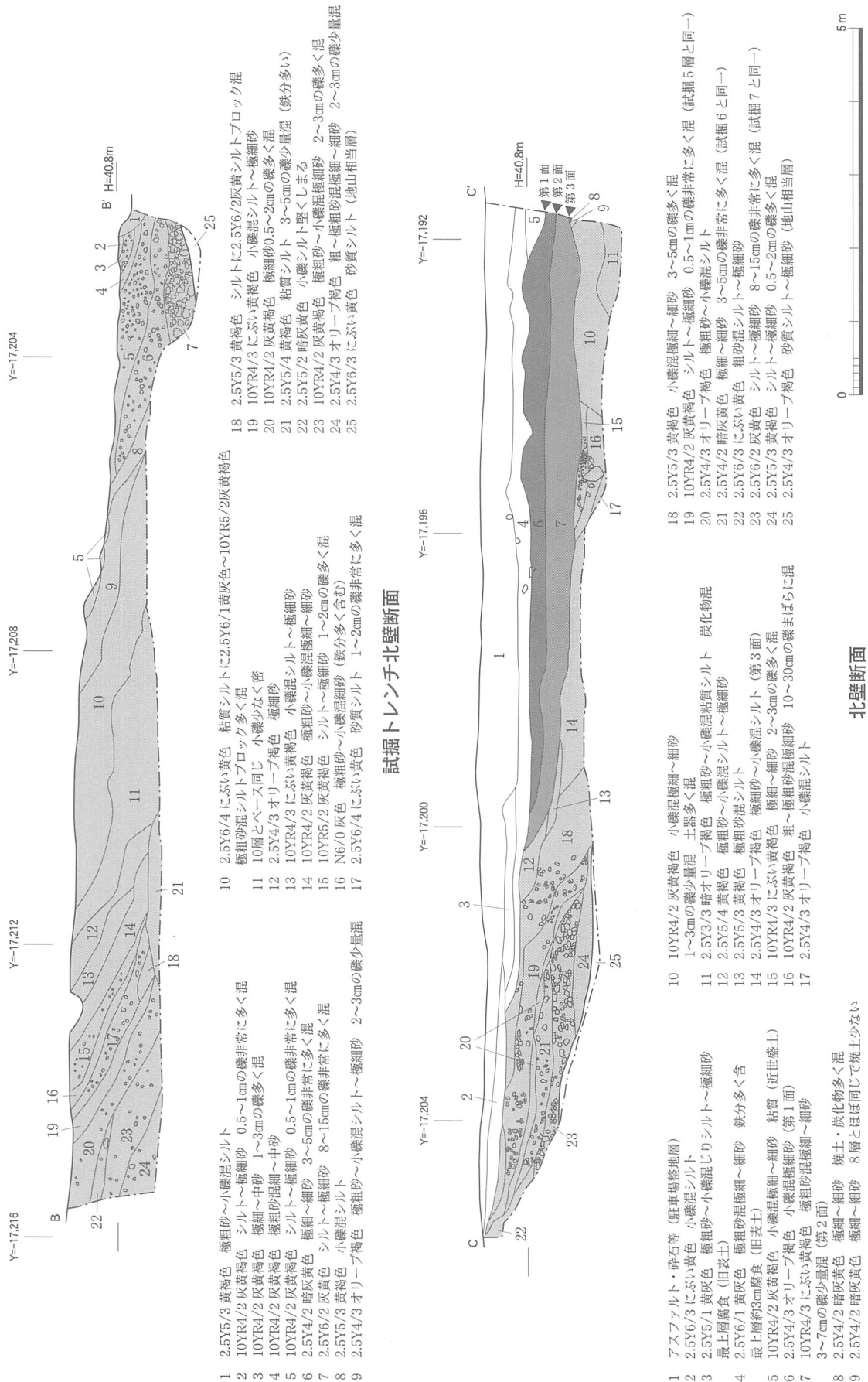


図65 A区試掘トレンチ北壁および北壁断面図 (1:80)

部7が認められた。これらの遺構は同一面で検出したが、それぞれの切り合い関係や断面の堆積状況の検討、遺構の性格などから2時期に分かれると考えられる。すなわち、土塁2が築かれ、炉跡4・土取り穴群5・土壙3が存在した時期と、これらの遺構を埋めてさらに整地し直し、泉状遺構6・排水溝8を作った時期である。以下に各遺構の概略を示す。

泉状遺構6（図66、67） 調査区北壁断面図7層上面から掘り込まれたものと考えられる。中央やや南寄りに、約1.5m×1.0mのチャートの景石を上面を水平にして据えつけている。その北側には拳大の礫が敷き詰められており、本来は全面に敷かれていた可能性が高い。景石の南東には人頭大の石3個が階段状に据えられ、その周囲に土器集中部7が認められた。この部分は図66の10・11・12・13層の上面にあたる。これらの層は、それぞれ粒度の異なる砂礫層で、粒度の粗い砂が巻き上げられており、湧水口であると考えられる。このことから池ではなく泉の可能性が高いと判断される。³⁾ 断割調査では掘削深度の関係から地山相当面まで掘り下げることができなかったが、現状で遺構成立面から1.5m以上掘り込まれており、それを嵩上げた後、景石を据え、礫を敷いたことが判明した。

土器集中部7（図版31-2） 泉状遺構6内部の階段状に据えられた石付近からまとめて、主に土師器の皿が出土した。その大半が図66の10層中からの出土である。出土状況から南西側から放り込まれたと推測される。遺物コンテナにして1箱以上あり、完形品も多い。明らかに他の埋土に含まれる土器とは出土状況が異なっており、意図的に投棄されたものと考えられる。

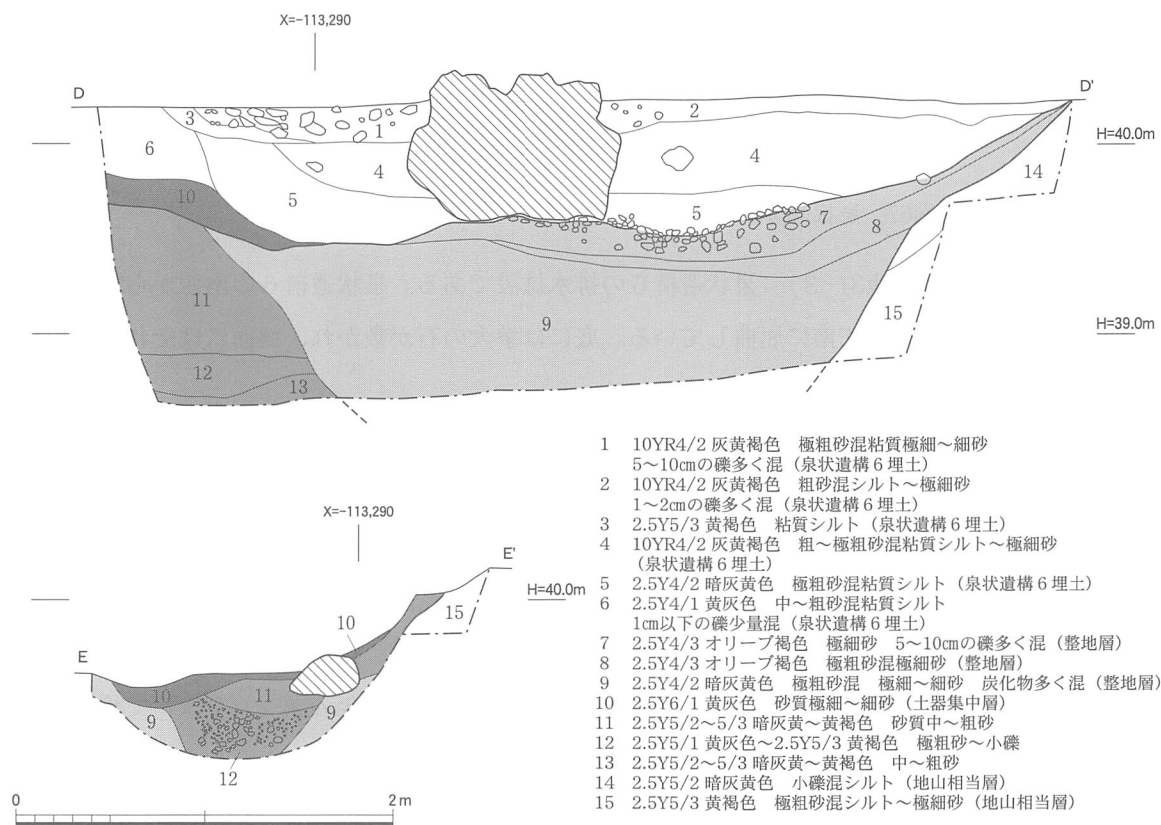


図66 泉状遺構6断割断面図（1：40）

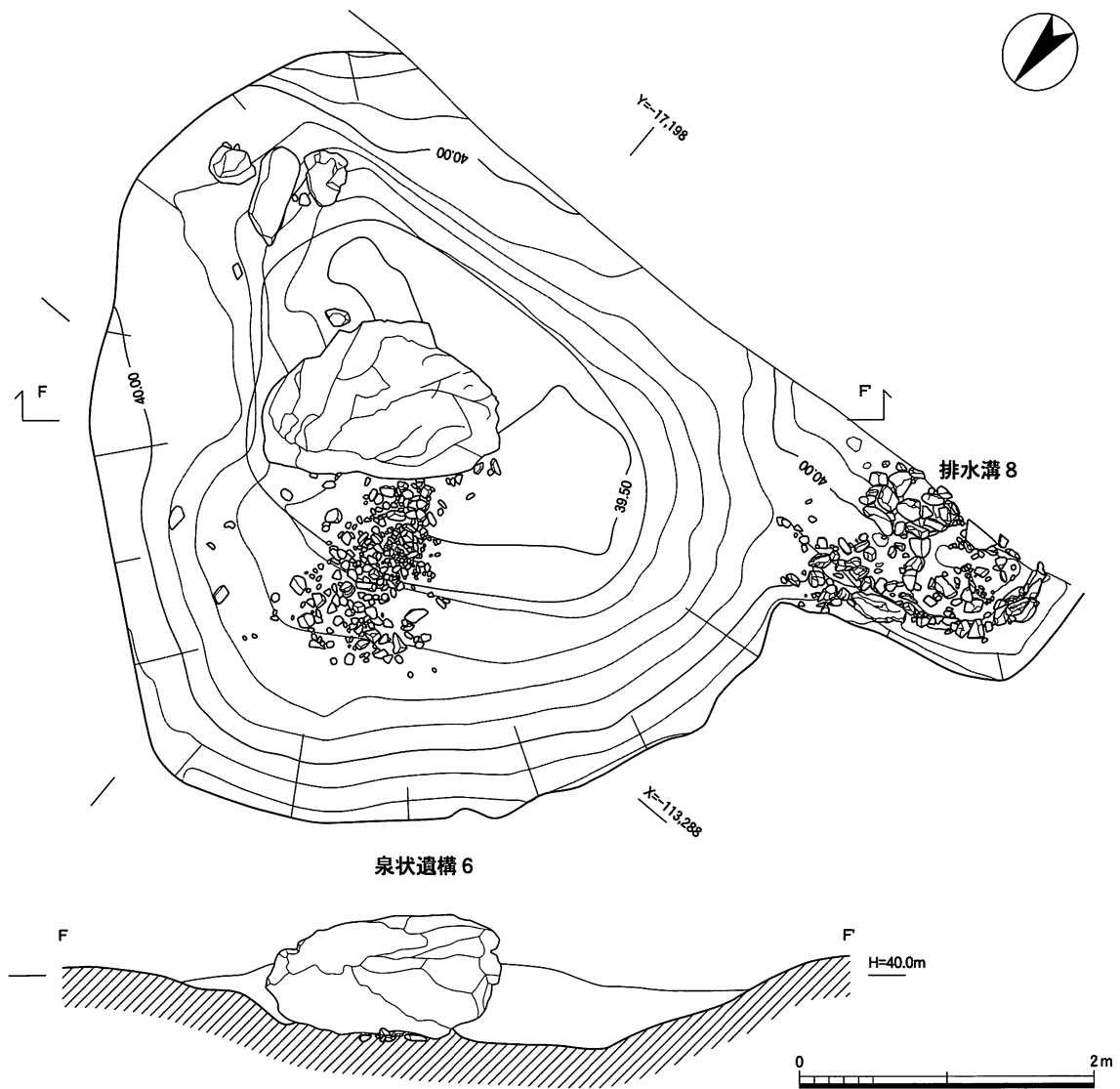


図67 泉状遺構6・排水溝8平面図および景石立面図（1：50）

排水溝8（図67、図版31-3） 泉状遺構6の排水施設である。泉状遺構6の南西から50cm程西に伸び、そこで一段下って南に屈曲している。底には拳大の石が敷かれ、側面にはそれよりやや大きい石が張られていた。

土壌3 調査区北壁断面14層上面から掘り込まれたと考えられる。南側は調査区外へと続いたため、全体の形状は不明である。深さは約20～30cmで壁土や鉄釘、土器、瓦などが出土しており、廃棄土壌の可能性も考えられる。埋土には焼土が混じり、炉跡4を切っている。

炉跡4 土塁2の裾部に位置する。南北2m、東西4mの範囲に粘土が焼け固まっており、その上に薄く焼土が堆積していた。焼土層からは焼けた壁土や鉄釘、鉄滓、瓦類が多く出土した。出土遺物から鍛冶に関する炉跡であると推定される。これは1997年の調査（7次）で検出された炉跡とされる遺構と同様の⁴⁾特徴を示す。また炉床部分には礎石状の扁平な石や人頭大の石がまばらに見られた。炉を構築する基礎部分になるものであろう。

土取り穴群5 炉跡4・土壌3と同一面から掘り込まれており、ほぼ同時期と考えられる。粒

度が細かく均質な粘質シルト層を掘り込んでおり、土壌の壁を抉り込むように掘り込んでいること、また土壌の底部が礫層の上面で止まっていることから土取り穴であると判断した。またこの遺構の壁の土を採取して分析した結果、AT火山灰を含む均質な土で、壁土に適した土質であることが判明した。

土塁2 断面図25層（図65）の地山相当層の上に盛り上げられている。東側では地山が落ち込んでいるため、整地を行っている。試掘断面の12層から24層までは斜面にそって礫を多く含む層と含まない層が比較的細かい単位で交互に積まれており、南北方向土塁の構築土と考えられる。12層より東側では1層の単位が大きくなり、西側のように明瞭な傾斜堆積ではないことから、この試掘トレンチでは東西方向の土塁の南斜面を切っていると推測した。これらのことから、まず南北方向の土塁が築かれ、その後東西方向の土塁の土を盛っていったと考えられる。また裾部の下層にあたる部分の試掘北壁断面7層は拳大の礫が詰められていた。排水などの機能を考慮したものだろうか。

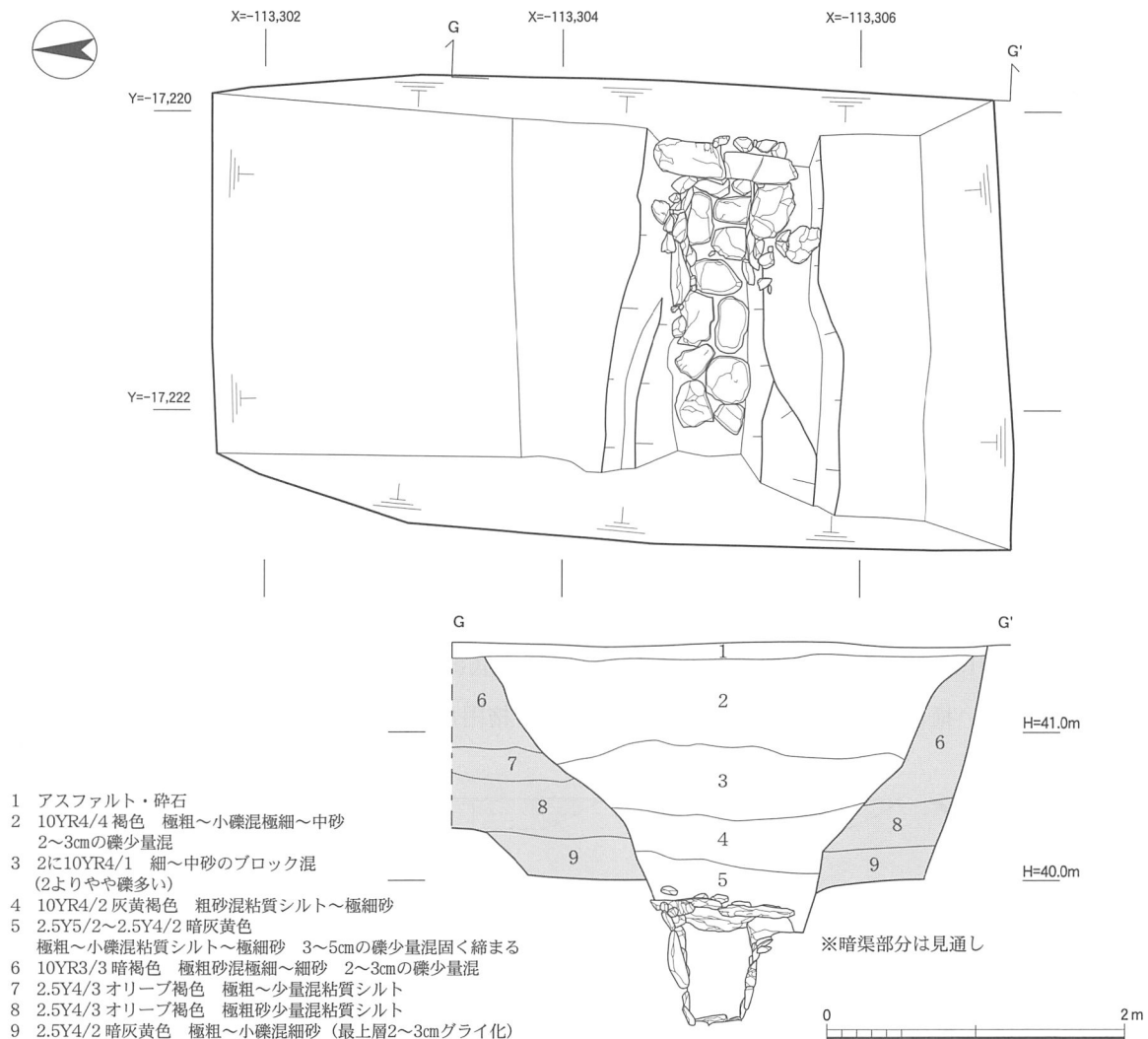


図68 B区暗渠平面図および東壁断面図（1：50）

(2) B区 (図68)

アスファルトと碎石直下が全て、南北方向に走る山科本願寺の土塁構築土である。暗渠の検出を目的としたため、遺構の直上まで重機で掘り下げて12次調査で検出した暗渠の出口部分を検出した。12次調査の土塁内側部分では、入り口から約1mは石が抜き取られていたことが確認されているが、同様に堀側から約1mは石が抜き取られている状況であった。抜き取った際に転落したと思われる石を除去して掘り下げたところ、暗渠が良好な状態で残存していることが判明した。平らな底石を南北に2石並べて敷き、側石を4石から5石積み上げて、その上に板状の天井石を3石組み合わせて積んでいる。底石の上端から天井石の下端までの高さは約60cmで、幅は約30～40cmである。調査区内では、石を抜き取った時に崩落した土で埋まっている状態であったが、東側は全く崩れておらず、空洞となっている様子が窺え(図版32-2)、8次調査で検出した入り口に近い部分までほぼ完全に残存していることも確認した。またこの暗渠の構築方法については、東壁断面観察の結果、礫を多く含む層と含まない層が交互に水平に積まれた土塁の構築土の上から掘り込んで築いていることが確認できた。このことから土塁を築いていく過程で計画的に暗渠が作られたわけではなく、土塁の完成後に、排水のために構築したと理解できる。

3 遺物

遺物は、遺物コンテナにして9箱出土した。8割が土器類で、そのうちの9割を土師器皿が占める。その他、瓦類や金属製品、壁土などが出土している。

(1) 土器

土塁1構築土(図69)(1～7)は土師器皿で、平安京編年のX期古～中段階に位置づけられる。(1～3)は小型で口径9cm、丸みを帯びた底部から体部が内湾ぎみに立ち上がる。(4)は中型で、平らな底部から体部が直線的に立ち上がる。口縁端部はやや強い横なでにより尖る。(5～7)は口径13.8～14.7cmで大型のものである。平底の底部から体部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は強い横なでにより外反する。(8)は口縁に楕円形透かしを有する瓦質土器火鉢である。

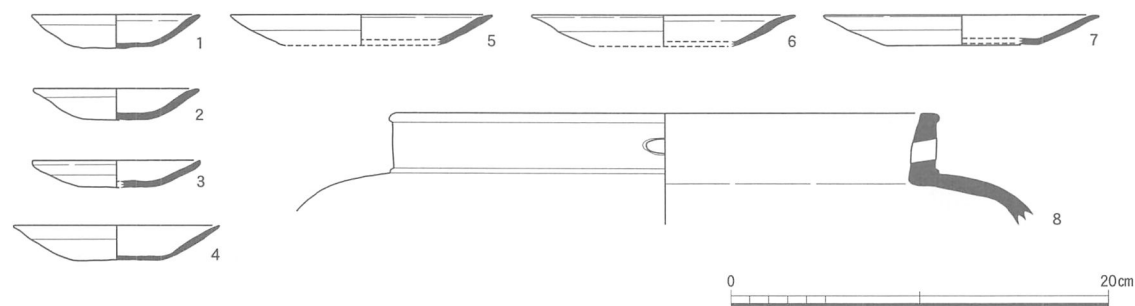
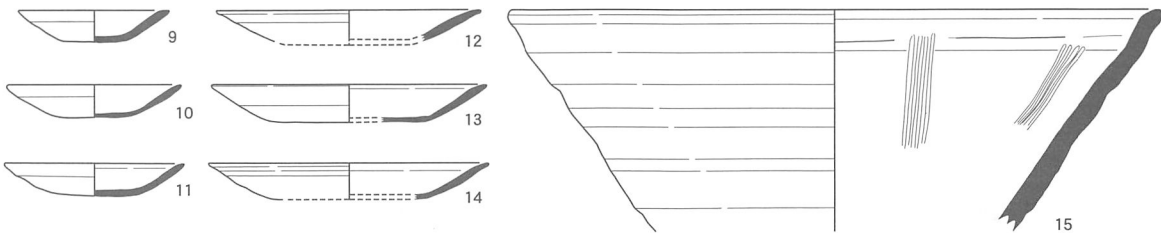


図69 土塁1構築土出土土器実測図(1:4)

排水溝 8 (図70-9~15) (9~14) は土師器皿である。(9) は平底で体部はやや内弯ぎみに立ち上がる小型のものである。(10・11) は中型で平底、体部は直線的に立ち上がる。(12~14) は大型で、平底の底部から体部がやや内弯して立ち上がり、口縁端部は強い横なでにより外反する。(13・14) は、底部から体部の屈曲部になでによる凹状圏線がめぐる。X期古段階に位置づけられる。(15) は信楽焼の播鉢である。復元口径は34.6cmで、白褐色で焼きがややあまく軟質である。4条1単位のクシ描きの播り目を施す。15世紀末頃に位置づけられる。

泉状遺構 6 (図70-16~45) (16~40) は土師器皿で、中型の(16~26)と、大型の(27~40)に分けられる。中型のものには、丸い底部から連続して体部が内弯して立ち上がるタイプの(16・19・20)と、それ以外の平底で内弯ぎみに立ち上がるタイプがある。大型のものは薄い平底の底部からやや内弯して立ち上がる体部を持ち、口縁端部は強い横なでにより外反して尖る。(35・37)は底部内面と体部の屈曲部に凹状圏線がめぐる。X期古~中段階に位置づけられる。(41)は15世紀後半から末頃の信楽焼の片口播鉢である。白褐色を呈し、クシ描きによる4条1単位の播り目を施す。焼締陶器の壺(42)は肩部に交差するカキ目を施し、口縁は丸みを帯びる。備前焼か。同じく焼締陶器の壺(43)は、口縁は直線的に短く立ち上がり外反して、端部に平坦な面

排水溝 8



泉状遺構 6

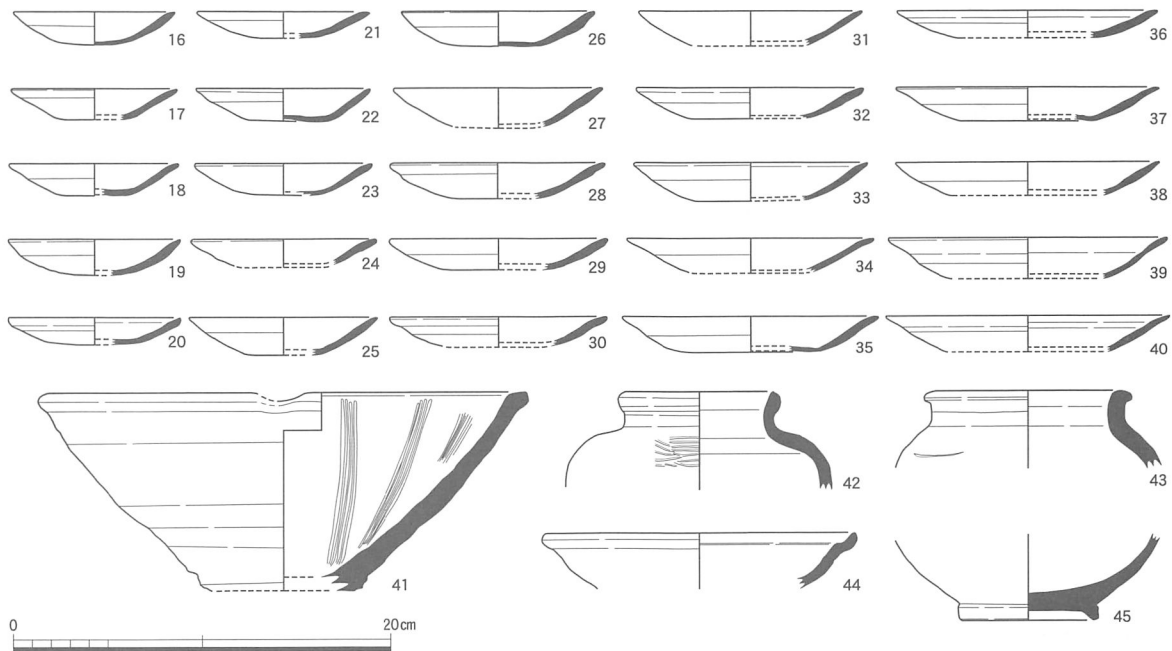


図70 排水溝 8・泉状遺構 6 出土土器実測図 (1 : 4)

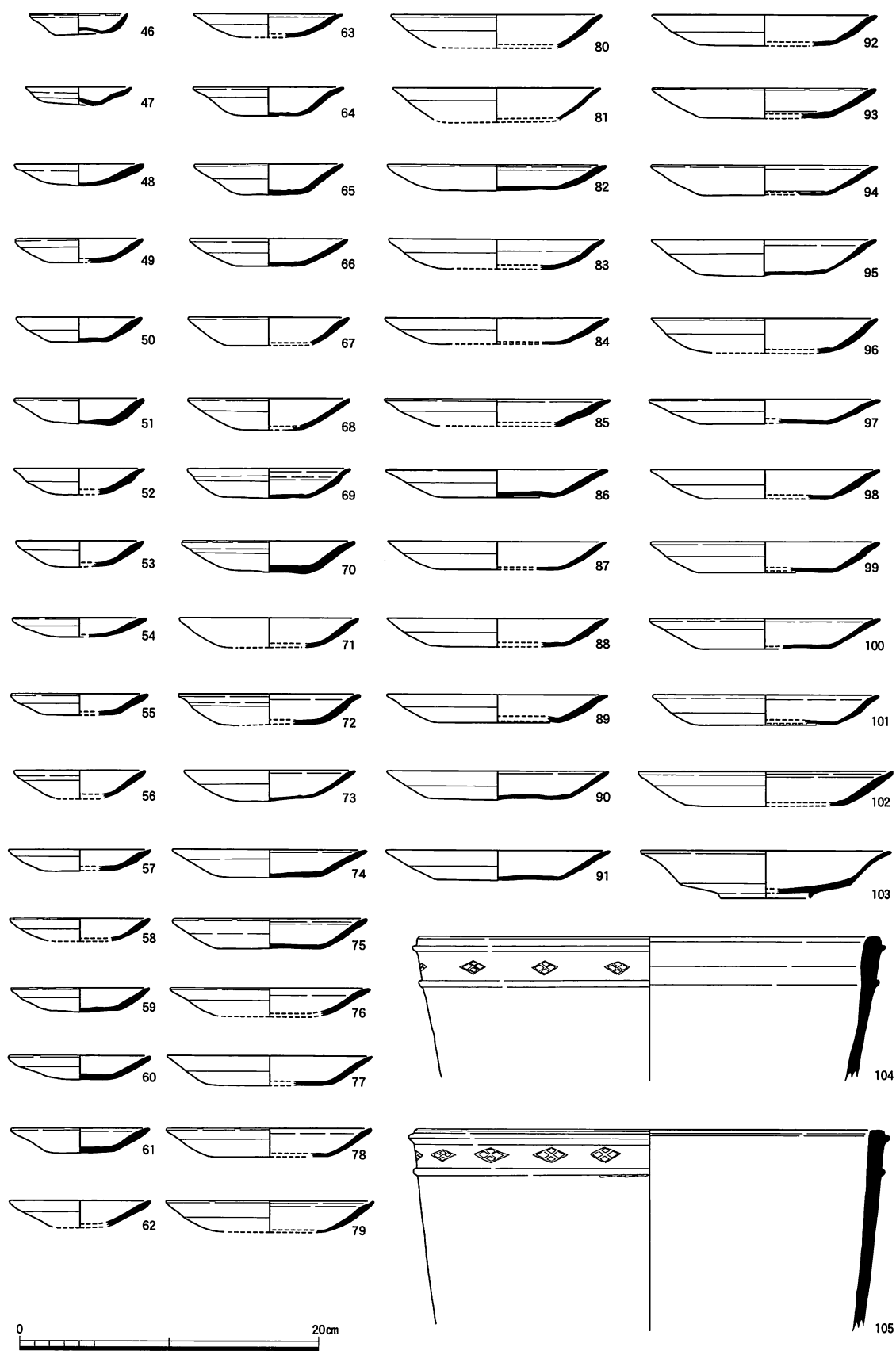


图71 土器集中部7出土土器实测图（1：4）

を持つ。外面には粘土紐継痕が残る。丹波産か。(44)は瀬戸・美濃焼の灰釉陶器卸目皿である。(45)は東海産山茶碗で、断面三角形の貼り付け高台が付き、底部外面には糸切り痕が残る。12～13世紀頃のもので、混入品である。底部内面が他の部分と比べて平滑であることから、硯として使用されたものと思われる。

土器集中部7(図71、表14)(46～102)は土師器皿である。各部位の形態の組み合わせに様々なバリエーションが認められ、個々に説明する煩雑さを避けるため、口径・器高・底部形態・体部形態・口縁端部形態・圏線の有無について表14にまとめた。口径と器高に関しては、歪みなどによりその正確性が問題となるため、原則として口縁部が1/4以上残存しているものを採り、底部が残存せず器高の計測が不可能なものについては表中に「不明」と記した。その他、底部形態は内側に凸状に窪むものと丸みを持つもの、平底の3形態が認められ、体部形態は内弯するものと直線的に立ち上がるものがある。口縁端部形態は強い横なでにより外反するものを分類した。圏線は底部内面と体部の境目をなでることによって生じるもので、なでた内側が凸状の圏線になるものと、なでた部分が凹状の圏線になるものがあり、凸状から凹状のものに変化していくとされている⁷⁾。(46・47)はいわゆる「へそ皿」である。(48～56)は口径8～9cmで小型、9.4～12cmの(57～73)は中型、12.9～15.2cmの(74～101)は大型、17cmの(102)は特大型である。大型のものに関しては口径15cm・器高2cm前後にまとまりが見られるが、小型・中型

表14 土器集中部7出土土師器形態分類表

番号	口径	器高	底部形態	体部形態	口縁端部	圏線	その他
46	6.6	1.4	凸	内弯			
47	7.0	1.1	凸	内弯			
48	8.4	1.4	丸	内弯			
49	8.4	1.6	丸	内弯			
50	8.4	1.6	平	直線			
51	8.4	1.6	平	内弯			
52	8.6	1.6	丸	内弯	外反		
53	8.6	1.8	丸	内弯			
54	9.0	1.2	丸	内弯			浅
55	9.0	1.4	丸	内弯			
56	9.0	1.8	丸	内弯			
57	9.4	1.4	平	内弯			
58	9.4	1.4	不明	内弯			
59	9.4	1.6	丸	内弯			
60	9.4	1.6	丸	直線			
61	9.4	1.6	丸	直線			
62	9.4	1.8	丸	内弯			
63	10.0	1.6	丸	内弯	外反		
64	10.0	1.8	平	内弯	外反	凸	
65	10.0	2.0	平	直線		凸	
66	10.4	1.8	平	直線		凸	口縁煤
67	10.6	不明	不明	直線	外反		
68	10.6	2.0	平	直線	外反		口縁煤
69	10.8	2.0	平	直線	外反	凸	
70	11.4	2.0	平	直線	外反	凸	口縁煤
71	11.9	2.0	丸	内弯			
72	12.0	2.0	丸	内弯			
73	12.0	2.0	平	直線		凸	
74	12.9	1.8	平	直線		凸	
75	12.9	1.9	平	直線		凸	
76	13.2	不明	不明	直線			
77	13.6	2.0	平	直線		凹	
78	13.6	2.0	平	直線	外反	凸	
79	13.8	2.0	平	内弯			
80	14.0	不明	不明	内弯			
81	14.0	不明	不明	内弯			
82	14.6	1.8	平	直線			浅
83	14.6	2.0	平	直線		凸	
84	14.8	1.7	平	直線			
85	14.8	1.8	平	直線	外反		
86	14.8	1.8	平	直線			
87	14.8	1.9	平	直線		凹	
88	14.8	1.9	平	直線		凸	
89	14.8	1.9	平	直線	外反	凹	
90	14.9	1.9	平	直線		凸	
91	14.9	2.0	平	直線		凹	
92	14.9	2.0	平	直線	外反	凸	
93	14.9	2.0	平	直線		凸	
94	14.9	2.0	平	直線	外反	凸	
95	14.9	2.4	平	直線	外反	凸	
96	15.0	2.4	平	直線	外反	凸	
97	15.1	1.6	平	直線	外反	凸	
98	15.1	2.0	平	直線	外反	凸	
99	15.1	1.9	平	直線	外反	凹	
100	15.2	2.0	平	直線	外反	凹	
101	15.2	2.0	平	直線	外反	凹	
102	17.0	2.2	平	直線		凸	

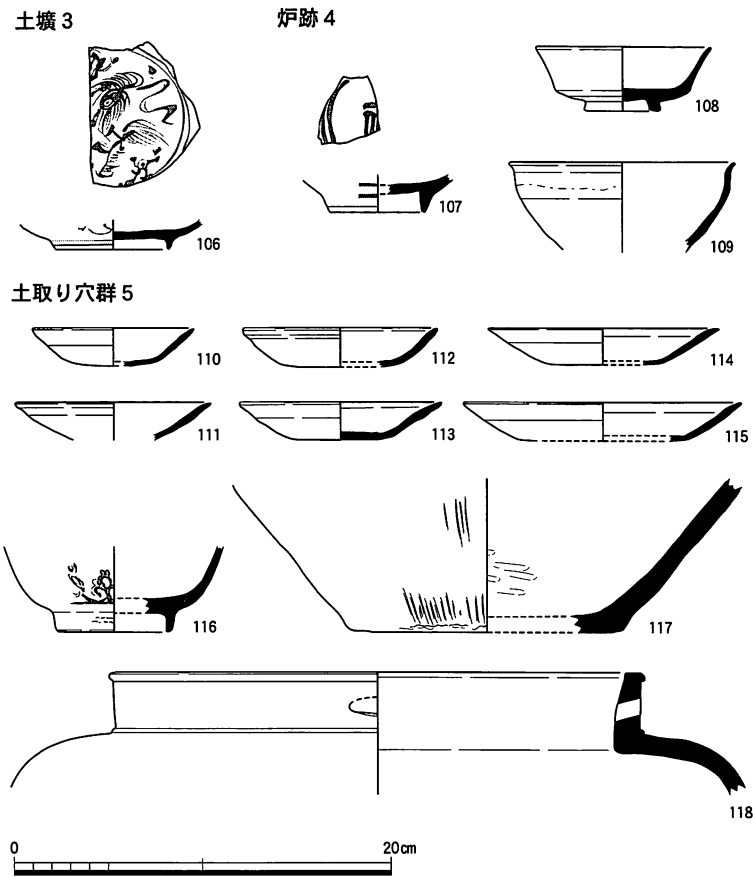


図72 土壙3・炉跡4・土取り穴群5出土土器実測図(1:4)

のものに関してはややばらつきがある。また同法量でも例えば(49)と(50)のように一方は丸底で内弯する体部、もう一方は平底で直線的な体部といった形態差が見られる。口径15cm前後のものについても、平底で直線的な体部である点は共通するが、圏線に関しては凹状、凸状、全くないものが同数程度存在し、口縁端部も外反するものとしいないものが半々である。全体的に胎土に明瞭な差は認められず、精良で白褐色系の胎土、焼きが良く硬質なところは共通している。(66・68・70)は口縁の内外面に煤が付着し、灯

明皿としての用途が考えられる。全体としてはX期古段階に位置づけられるが、古い様相と新しい様相が混在しているため、やや幅を持つと考えておきたい。

(103)は中国製白磁坏で器壁は薄く、低い高台が付き、端反り口縁である。(104・105)は瓦質土器の火鉢である。口縁端部に幅のある平坦な面を持ち、外面に2条の凸帯をめぐらし、間に四菱文のスタンプを押す。内外面ともにヘラ磨きを行っている。

土壙3(図72-106)(106)は中国製の染付皿である。低めの高台が付き、畳付と高台内にも

表15 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
室町時代	土師器・瓦質土器・施釉陶器・焼締陶器・輸入陶磁器	13箱	土師器102点、瓦質土器5点、施釉陶器2点、焼締陶器5点、輸入陶磁器5点	8箱	0箱
	埴・道具瓦		埴4点、道具瓦5点		
	鉄釘・鉄滓・壁土		鉄釘7点、壁土5点		
江戸時代	土師器・磁器・施釉陶器・焼締陶器	1箱		0箱	1箱
合計		14箱	140点(5箱)	8箱	1箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、ランク分けをしたため、出土時より5箱多くなっている。

釉を施す。見込み部分にいわゆる「玉取り獅子」の文様が描かれる。

炉跡4（図72-107~109）（107）は中国製の染付碗で、見込み部分に文字が描かれる。高い高台が付き、暈付はヘラケズリ、高台内は無釉である。（108）は中国製の白磁の坏である。口縁は端反りの形状をもつ。

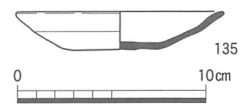


図73 B区暗渠掘形出土土器実測図（1：4）

（109）は瀬戸・美濃産の天目茶碗である。いずれも15世紀末から16世紀初頭頃に位置づけられる。

土取り穴群5（図72-110~118）（110）は小型の土師器皿で、平底からやや内湾ぎみに体部が立ち上がる。（111~114）は中型で、そのうち（113）は口縁端部に煤が付着しており、灯明皿であろう。（115）は大型の土師器皿である。平底で直線的に立ち上がる体部を持つ。底部内面になでによる凹状圏線がめぐる。（110）はⅨ期新段階、それ以外はⅩ期古~中段階に属するか。（116）は中国製染付碗で、高い高台が付き、高台内にも釉を施す。（117・118）はともに瓦質土器火鉢である。（117）は底部で、外面にハケ目が残る。（118）は口縁端部に平坦な面を持ち、楕円形の透かしを入れるもので、頸部に凸帯がめぐる。

B区暗渠掘形（図73）暗渠の掘形埋土から完形の土師器皿が1点出土した（135）。平底で体部は直線的に開く。口縁端部は横なでにより外反し、底部内面に凸状圏線がめぐる。Ⅹ期古段階に位置づけられるか。

（2）瓦類（図75）

瓦類は各遺構から出土したが、軒瓦や平瓦、丸瓦は1点も認められず、塼と道具瓦のみである。

（119~122）は塼である。（119）は表面の剥離が激しいが、両側端面が残存しており、約24cm×25cmのほぼ正方形に復元できる。厚さは2.5~3.0cmで他のものに比べて薄い。文様は認められないが、磨かれている面を表面、なで調整のみの面を裏面とした。側面もなで調整のみである。表面側に凸状にやや隆起する。（120）も約25cm四方の正方形になるものと思われる。厚さは約3.0~3.5cmで、表面は磨き調整、側面はなで調整、裏面には板なで調整の痕跡が残る。表面側に隆起する。（121）は厚さ約3cmで、磨滅により調整は不明。（122）は厚さ約2.5cm、表面と側面は磨き調整、裏面はなで調整である。（123~127）は棟に葺かれる道具瓦で、（123~125）は棟の最上部に葺かれる雁振瓦、（126・127）は棟込瓦の一種の「輪違い」である（図74参照）。（123）には玉縁が付く。凸面は布目を磨き調整で消しているが、磨きが不十分で布目が残る。側面はなで調整で、凹面には糸切り痕、布目残り、一部なで調整が行われている。（124・125）はともに、凸面と側面は磨き調整、凹面側の側端面は面取りを行い、糸切り痕と布目を一部なで消している。

「輪違い」（126・127）は、端面を観察すると、凹面側から5mm程度切り込みを入れ乾燥時に分割しており、凸面側には分割破面を残す。1本の丸瓦を成形した後、4等分ないし



図74 雁振瓦・輪違い使用例

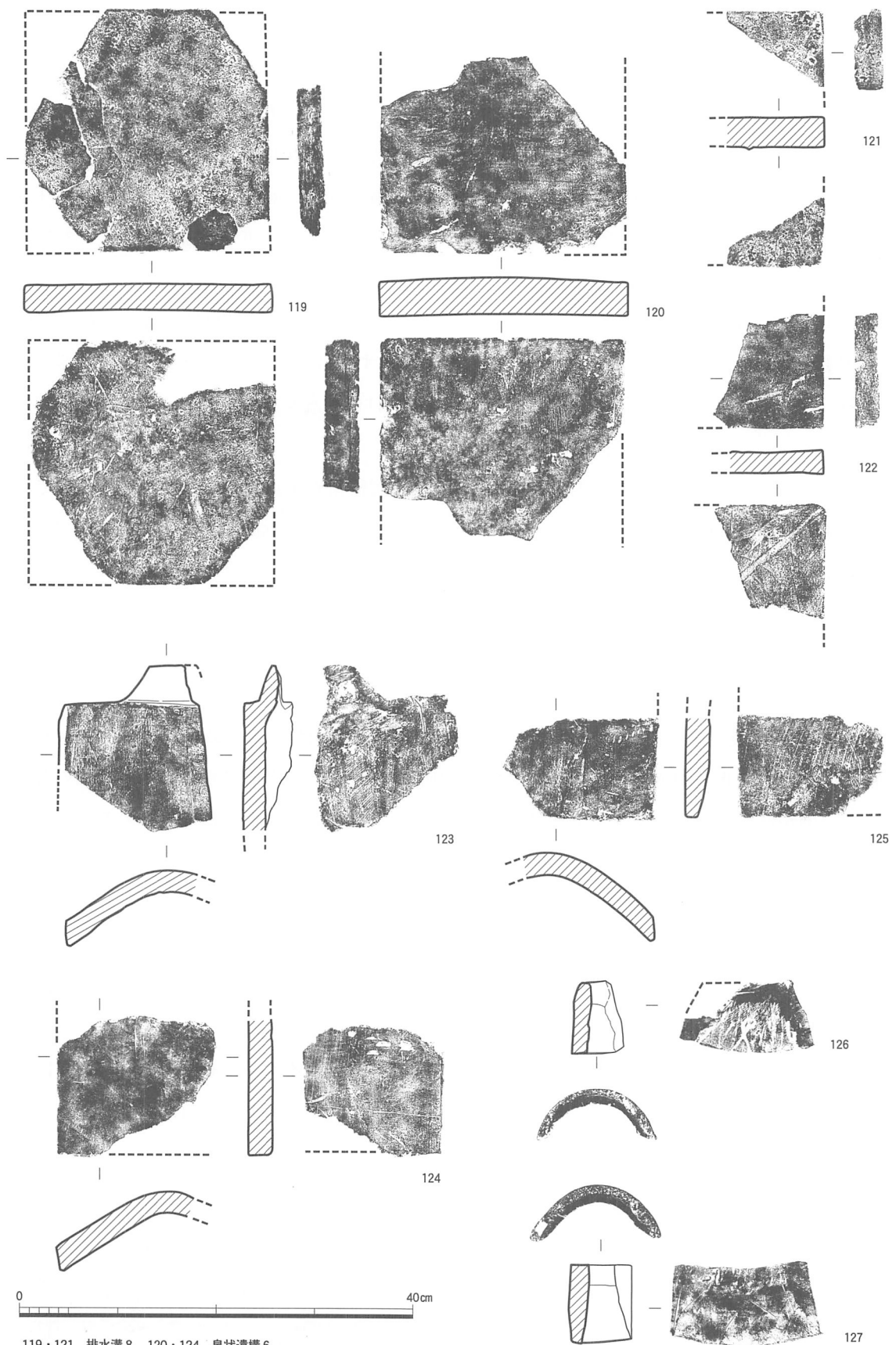


図75 埴・道具瓦拓影および実測図 (1 : 6)

は5等分して成形されたものと考えられる。(126)は玉縁の部分で、凸面は磨き調整、凹面には布目とループ状になった吊り紐痕が残る。(127)は丸瓦の広端部で凸面は磨き調整、凹面は面取りがされ、布目が残る。

(3) 金属製品・壁土・その他 (図76、図版35-2・3)

(128~134)は各遺構から出土した鉄釘で、全て断面は四角形である。(128・131・133)は先端まで残存するが、それ以外は先端を欠く。

(136~140)は、炉跡4と土壙3から出土した壁土である。スサが粗く、鋭角な面を持つものがあるため、建物の壁土とは考え難く、

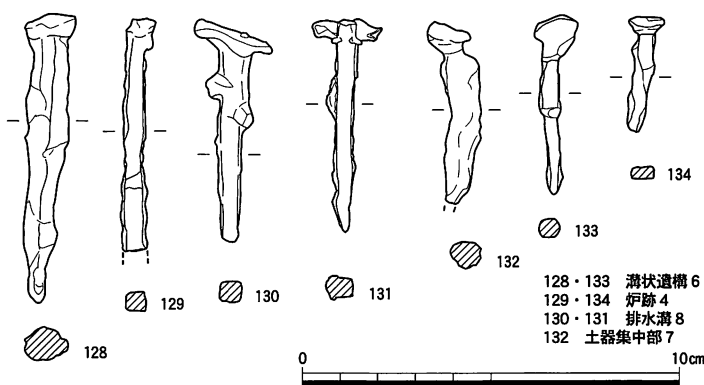


図76 鉄釘実測図 (1:2)

焼けていることから炉壁と考えられる。周辺から炭や鉄滓などの炉に関係する遺物も出土している。その他に、泉状遺構6から海水性のアカニシの貝殻が多く出土している。アカニシは日本海や瀬戸内海で採れる古くから食用とされた一般的な貝である。⁸⁾

4. まとめ

今回の調査では、山科本願寺に関して新たな知見が得られたと同時に、いくつかの問題点も明らかとなった。それらに触れる前に、今回検出した遺構の変遷についてまとめておく。

まず、東側に落ち込む地山を整地して平坦にした後、土塁を構築している。その後、その土塁の内側に炉を作り、同時に土取りを行っている。次にそれらの施設を壊すあるいは埋め戻すなどして整地し直し、泉状遺構6や排水溝8、B区の暗渠が作られる。炉のような火を扱う施設と泉状遺構や溝のような水を扱う施設は性格を全く異にしており、その観点からもこれらの遺構は同時並存とは考え難く、時期差があると考えるのが妥当であろう。そして、最終的にはこれらの遺構も埋められ、景石や溝を被うように新たに整地をして土塁を拡張している。以上のように3時期の変遷が考えられ、少なくとも2回にわたって土塁を改修もしくは拡張していることが確認できた。これまでも、山科本願寺の土塁や内部施設に関して改修が行われた可能性が高いことが指摘されていた⁹⁾が、それを裏付ける結果となった。

次にこれらの遺構の性格について検討してみたい。土塁は山科本願寺の「御本寺」を囲うものであることに疑いの余地はない。ただ、12次調査で検出した南北方向の土塁と復元合成した場合(図58)、出隅のコーナー部分が内側に張り出し、幅の広いものとなる。土塁上に物見櫓等の構造物が存在した可能性も否定できない。炉跡4は、出土遺物から鉄釘等製作のための鍛冶を行って

いたと思われ、土取り穴群5は建物の壁土を採取するためのものであろう。つまり、これらの2つの遺構は、「御本寺」内部の建物の造営に関わるものと考えられるのである。これまでも7次調査で炉が検出されており、造営に必要となる釘や壁土を自家供給していたと推測される。そしてその役目を終えた後、埋め戻されたのであろう。その後には作られた泉状遺構6と排水溝8は、位置関係から12次調査で検出された石組み溝に続く可能性が高く、最終的には今回B区で検出した暗渠から土塁の外堀に排水される仕組みになっていたと考えられる。また、泉状遺構6の内部には巨大な景石が据えられるなど、これら一連の遺構は、景観を意識して作られた園池の一部であると考えられる。これに関しては、蓮如の述作である『御文章』の中で、文明十一年（1479）に寝殿と庭を作ったという記述が見られ、また蓮如の隠居所である山科本願寺南殿跡にも庭園跡が残っており、土塁のすぐ内側という防御性を低下させる要因を除けば、この地に園池が存在しても不自然ではない。また、園池であるとすれば、この東側にはこれと対になる建物が存在した可能性が高い。

そして、これらも再び埋められ土塁がさらに拡張される。この埋められた時期が問題となる。1974年の調査（2次）では、石室が焼灰層に覆われていたことから、これが天文元年の焼き討ちで埋まったものとして認識された。¹⁰⁾これにより、それ以降の調査においても、焼土層が焼き討ちの鍵層として捉えられてきた。しかしながら今回の調査では、焼土層の面的な広がり認められず、部分的に整地層の中に焼土が混じる箇所は認められるものの、それを切り込んで遺構が存在することから、焼き討ちに伴う焼土とは考え難く、炉に伴う焼土とも考えられる。同様の状況が12次調査でも確認されている。¹¹⁾これは必ずしも全ての焼土混じり層が焼き討ちを示すものではないことを表し、また遺物に関しても火を受けた痕跡の見られるものはほとんど認められない。焼き討ち後に埋められた可能性も考えられるが、泉状遺構6の埋土や土塁1構築土からは新しい時期の遺物は出土していない。以上のことから推論を述べると、法華宗などとの緊張関係が高まる中で、本願寺側が防御を固めるために意図的に埋めた可能性が考えられる。先にも述べているように山科本願寺は3重の堀と土塁に囲まれていたのであるが、古絵図でも確認できるように、調査地部分に関しては「御本寺」を囲う1重の堀と土塁のみで、防御としては最も手薄な部分であったと思われる。1974年の調査報告においても「…略…もっとも場所によっては遺構面と灰層との間にも遺物を包含する一層を認めうることもあり、それは寺内町焼亡直前までの堆積である。」と報告されており、¹²⁾焼き討ち以前に遺構を被う包含層が存在したことが確認されている。これは今回の調査結果とも矛盾しない。

さらに、時期の問題として今回の調査で出土した土師器はほとんどすべてが平安京編年のX期古～中段階に位置づけられるものである。このX期古～中段階には16世紀初頭から半ば頃の実年代が与えられており、これに従えば今回検出した遺構は、遺物の出土のない土塁2を除いて、1478年の造営開始から20年以上経てから作られ、1532年の焼亡までの短期間に埋められたことになる。しかし、この実年代に関しては、1974年の調査（2次）で石室から出土した土器が天文元年の焼き討ちで埋まったものであるということを前提として、これらの土器群の年代を1532年前

後にもとめ、編年の指標の一つにしたものである。先述したように、今回の調査で全ての遺構が焼き討ちで一度に埋まったわけではないと判明したことから、その実年代に関しては再考の余地があると考えられる。ただ、今回の調査区では、15世紀以前や桃山・江戸時代に入ってからのものであるがほとんど認められないため、やはり山科本願寺が営まれた1478年から1532年の間に収まるものであることは間違いない。

またその土器の問題と関わって、今回の調査では土器集中部7からまとまった量の土師器皿が出土している。法量のばらつきと形態差があることはすでに述べたが、この要因について1974年調査の石室出土資料と比較して少し考えてみたい。1974年の調査報告では、4つの石室が検出され、そのうち土器出土量の多い3つの石室資料についてそれぞれ法量と形態の差で4種類の規格が存在するとしている。さらに各石室でその規格は少しずつ異なっており、各石室に収められる規格にかたよりのあることが指摘されている¹³⁾。その規格性やかたよりは、今回の土器集中部7の資料の法量のばらつきや形態差とも密接に関係していることは間違いなく、それが何に起因するものであるかが問題となる。用途の差や、供給元の違いは大きな要因となるであろうが、今回のように同じ法量でも形態差が見られるものがあり、一概に判断はできない。時期差や工人差など複数の要因を複合的に考慮しなければならない。今回はそこまで検討を加えることができなかったが、今後同時期の他遺跡の資料とも比較して、検討しなければならない課題である。

最後に、瓦類の特殊性についても触れておきたい。通常の瓦葺建物であれば圧倒的に多いはずの軒瓦や丸瓦・平瓦が全く出土せず、塼と雁振瓦、「輪違い」といった道具瓦に限られるということは、大棟の部分にのみ瓦を葺き、塼を敷いた建物が付近に存在したと考えるのが妥当である。1974年の当調査地東側の調査（2次）でも同様に雁振瓦のみが出土したと報告されている¹⁴⁾。「御本寺」内部には御影堂や阿弥陀堂、寝殿などの主要堂舎の他に、向所や御上、常屋、馬屋、香部屋、太鼓魯などの建物があったとされる¹⁵⁾。このうち『御文章』の記述により、御影堂は桧皮葺であり、阿弥陀堂は総瓦葺であったことがわかる。それ以外の建物に関しては位置も含めて詳細は不明であり、どの建物に使用されていたものかを特定するのは今後の調査を待たなければならないが、いずれにしろ山科本願寺が造営された期間を考慮すれば、葺かれた時期をかなり細かく特定できる資料である。これまでも、城郭建築が発達した中世末期に道具瓦の種類が大量に増え、屋根景観が変化するという画期は指摘されているものの、個々の道具瓦の出現時期や、この時期の屋根景観の変遷についてはほとんど明らかにされていない。今回出土した、丸瓦を分割する「輪違い」の製作技法からは、棟込瓦が定着化する前の姿といえるだろう。今後の類例の増加を期待する。

以上、推論を交えながら今回の調査で得られた知見と問題について述べてきた。昨今の開発の進展により山科本願寺の遺構が姿を消しつつある今、これら多岐に渡る問題を踏まえて、さらに山科本願寺跡の調査、研究を進めていく必要がある。

註

- 1) 2005年5月に(財)京都市埋蔵文化財研究所が調査した。2006年調査報告刊行予定。
- 2) 岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集1985年
- 3) 湧水層となる砂礫層まで掘り込まれているものと思われる。京都市内で、これと同様の特徴を示し、泉とされる遺構が数箇所検出されており、このこともこの遺構が泉状遺構であると判断する根拠となった。また、泉状遺構については京都造形芸術大学教授尼崎博正・仲 隆裕両氏に助言をいただいた。
堀内明博・木下保明「平安京右京三条二坊」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989年
高橋 潔『史跡木嶋坐天照御魂神社(蚕ノ社)境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-15 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
鈴木廣司・網 伸也『平安京右京三条二坊十五・十六町一「齋宮」の邸宅跡一』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 4) 近藤知子「山科本願寺跡2」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 5) 前掲註1) 文献に同じ
- 6) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 7) 前掲註6) 文献に同じ
- 8) 京都大学大学院人間・環境学研究科博士過程の丸山真史氏に御教示いただいた。
- 9) 山科本願寺・寺内町研究会を中心に様々な検討がなされており、それについては山科本願寺・寺内町研究会編『戦国の寺・城・まち 山科本願寺と寺内町』法藏館1998年、同編『掘る・読む・あるく 本願寺と山科二千年』法藏館2003年に詳しい。
- 10) 前掲註2) 文献に同じ
- 11) 前掲註1) に同じ
- 12) 前掲註2) 文献p63
- 13) 前掲註2) 文献p68～p74
- 14) 前掲註2) 文献に同じ
- 15) 草野顕之「創建時山科本願寺の堂舎と土塁について」『中世の寺院体制と社会』吉川弘文館 2002年

Ⅶ 山科本願寺跡（４）

1. 調査経過

この調査は、木造2階建共同住宅建設に伴い国庫補助事業によって実施したもので、山科本願寺跡関連では14次調査となる。

調査地は、国道1号線の北側に位置し、「御本寺」の中心部分にあたる（図41）。13次調査地からは約50m東にいった地点となる。当調査地の西に隣接する敷地では、1974年に山科寺内町遺跡調査団によって発掘調査が行われ、石室や石組み溝、柱穴などの遺構が出土しており¹⁾（図94）、今回の調査との関連が深いものと推測された。調査は、2005年11月11日から開始した。まず開発予定範囲である敷地北側に南北2m、東西15mの試掘トレンチを設定し、建設予定建物の基礎工事範囲のG.L.-0.52mまでに遺構が存在するか確認した。11月14日から重機掘削を開始し、G.L.-0.3～-0.5mのところで、焼土や礎石状の石を検出したため、トレンチを南北10m、東西15mの範囲に広げて掘削を行い、調査区のほぼ全域で焼土層が認められた。そのため、11月15日より本調査に移行し、人力による掘り下げを開始した。その結果、焼土層の下から、庭園遺構や焼成土壌、柱列などの遺構とともに多量の輸入陶磁器やガラス玉、木製品が出土した。遺物の内容や、遺構の立地条件からみて、寺の中枢部に関連する施設が存在したと考えられ、12月10日に現地説明会（参加者約200名）を行い、成果の公表に努めた。

また、調査途中で検出した遺構を地中保存することが決定し、極力遺構を遺すよう京都市埋蔵文化財調査センターの指導を受けたため、調査は第1面のみとし、主要遺構の土層確認のための壁も残すこととなった。記録写真および実測終了後、真砂土や土嚢を用いて遺構を保護して埋め戻しを行い、12月16日に全ての調査を終了した。



図77 調査前全景（南から）

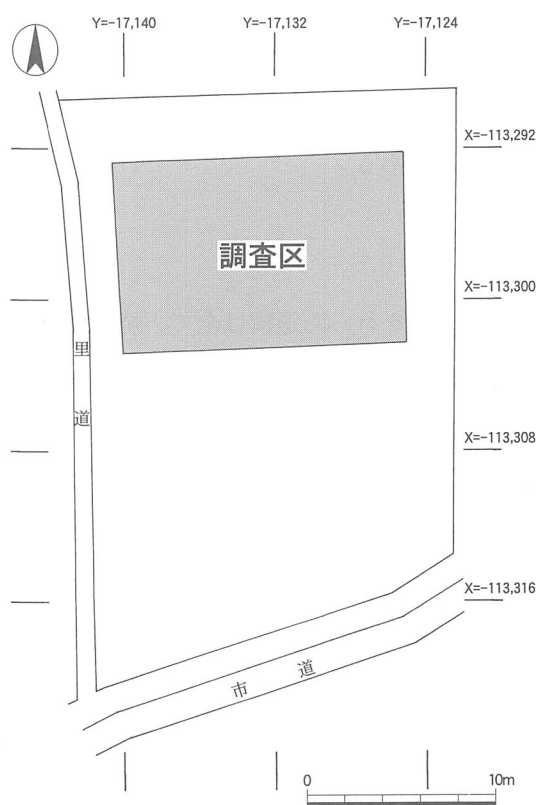


図78 調査区配置図（1：400）

2. 遺 構

(1) 基本層序 (図80)

調査地は、調査開始前までは駐車場として利用されており、さらにそれ以前は畑地であったことがわかっている。調査前の地表面は北から南に傾斜していたが、断面観察の結果、駐車場造成のための整地によるものと判明し、それ以前の地表面はほぼ水平であったことが確認できた。北側では駐車場造成のための盛土が約40cmあり、それが南側では約10cmとなる。その下に土壌化した耕作土が約10cm堆積し、さらにその下に耕作の床土となる17～18世紀代の遺物を含む近世の整地層が約10cm堆積する。その直下で広い範囲に焼土層が認められた。厚いところでは5cm以上堆積しており、15～16世紀代の輸入陶磁器が大量に含まれる。また二次被熱を受けたものが多いことから、1532年の山科本願寺焼き討ちに伴う焼土層と考えられる。この焼土を除去した面が今回検出した遺構面となる。この焼土層はほぼ全域で認められるが、元の遺構面が高い部分では焼土層がなく、耕作土直下が遺構面となり、本来は広い範囲で存在した焼土層が耕作により削平された可能性が考えられる。遺構面の高さは標高41.5m前後である。今回は遺跡保存のため1面のみしか調査を実施していないが、一部下層確認のための断割調査では、調査面から約10～20cm下でさらに遺構面を確認した。この面で成立していたと考えられる遺構としては、西壁断面図16層の溝、21層の土壌がある。さらに、20層のように上面に薄く炭化物が堆積する箇所も認められる。この遺構面の成立時期は、21層の土壌埋土と考えられる層から山科本願寺の時期の丸瓦が1点出土していることから、山科本願寺が造営された時期に収まるものと考えられる。この面を成立させる整地層には少量の炭や土器片が混じるが、それより下の29層から32層は遺物の混じらない地山相当層である。

(2) 遺構

今回調査を行った遺構は全て、焼土層を除去した段階、もしくは耕作土直下で検出した。出土状況と出土遺物からみて、数条の耕作に伴う近世の溝を除いて、山科本願寺に関連する遺構である。多数の礎石や柱穴を検出したが、耕作土直下で検出した部分に関しては削平を受けている可能性が高く、建物配置の復元には至らなかった。しかし、調査区東寄りで検出した南北方向の柱列180を境にして、それより西側の遺構は、柱列や井戸、溝や池からなる庭園遺構など、何らかの建物とそれに付随するものと考えられるが、東側は焼成土壌1や土壌3が単独で存在しており、遺構の性格に違いがみられる。以下に主要な遺構の概略を示す。

土壌3 (図版1-2、図81) 耕作土直下で検出した調査区の東に位置する南北約3m、東西約1.5m、深さ約0.7mの土壌である。焼土と炭化物で埋まっており、多量の埴が含まれる他、ガラス玉等が出土したため、埋土の水洗篩別を行った。その結果、大量のガラス玉や金属製品、漆製品の破片などが出土した。完形品はほとんどなく、二次被熱を受けた遺物も見受けられる。これ



X=-113,296

X=-113,300

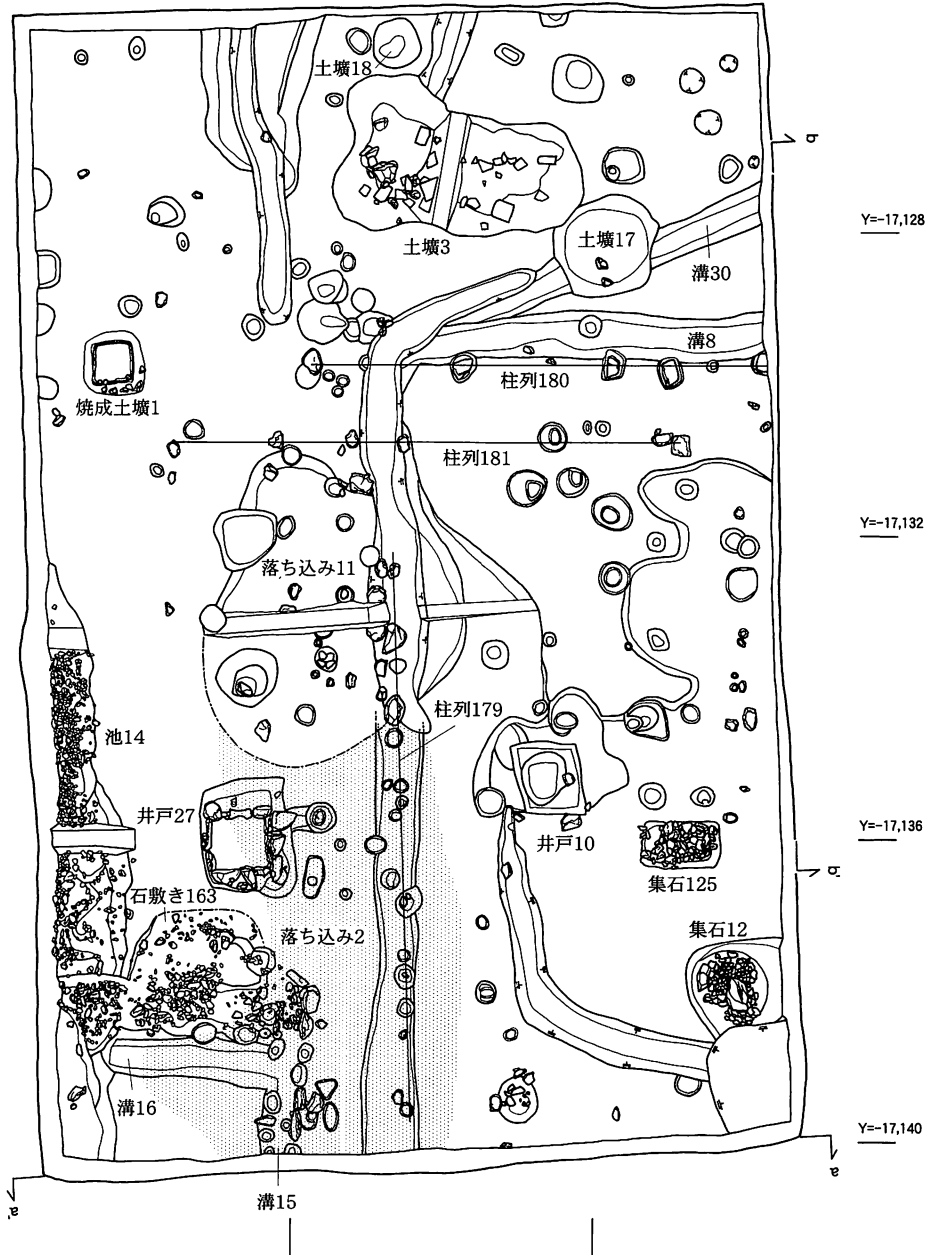


図79 調査区遺構平面図 (1 : 100)

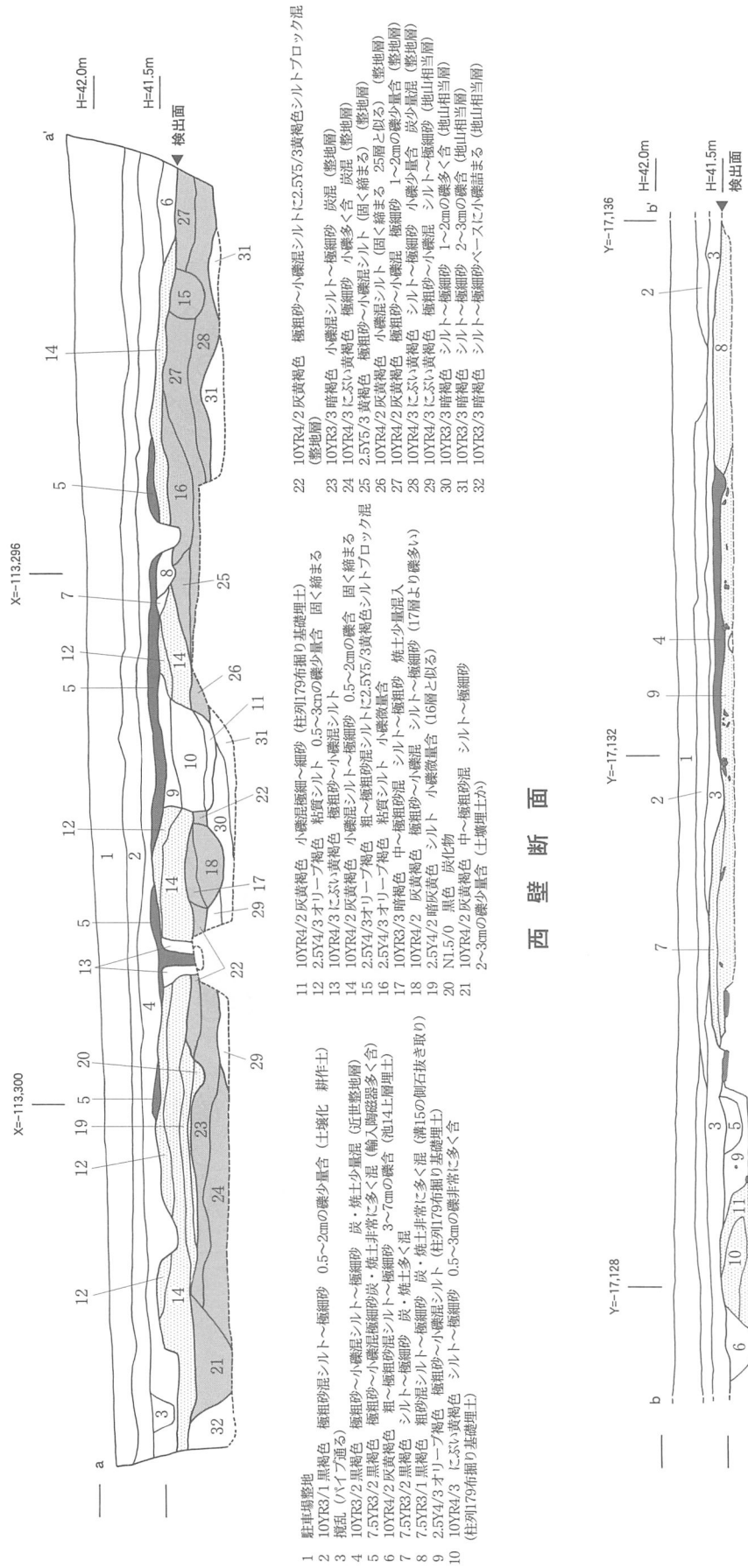


図80 西壁および南壁断面図 (1 : 50)

らの遺物が多量に混じる焼土層と、炭化物層、遺物を全く含まない均質なシルト層の互層になっており、炭化物層とシルト層は3~5cmの厚さで面的な広がり認められた。分析の結果この炭化物層には、スギ・ヒノキ・ケヤキ・クリなどが含まれることが判明した。クリ・ケヤキ等の広葉樹の炭化

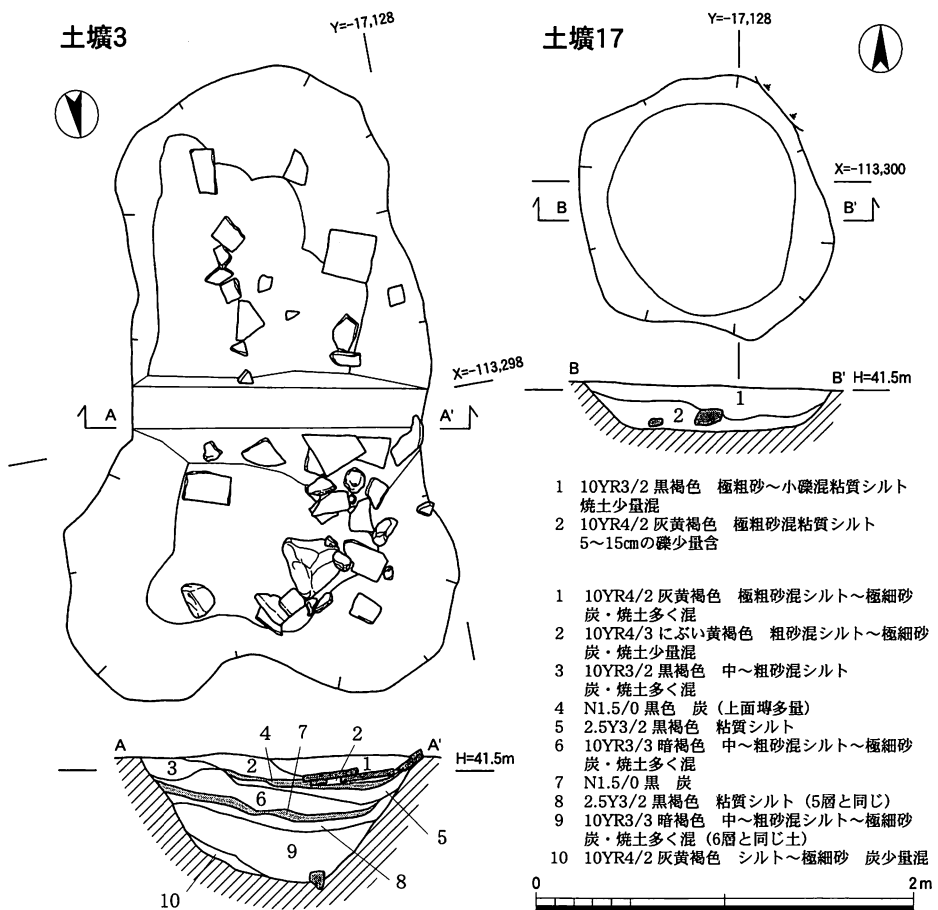


図81 土壌3・土壌17実測図(1:40)

物には、表面に漆膜が確認できるものもあり、漆製品の部材の焼痕と思われる。この炭化物層とシルト層は断面図の4・5層と7・8層で確認できることから、少なくとも2回に分けて投棄されたと考えられる。しかし、その上層と下層での遺物の混じり方や種類には差が見られないため、時間差があったとしてもわずかなものであろう。

土壌17(図81) 土壌3に切られる平面円形の土壌である。土壌3と同様に埋土からガラス玉や埴、焼土が出土していることから、土壌3とそれほど時間差がなく埋められたものと考えられる。

焼成土壌1(図版36-1、図82) 調査区の北東に位置する。耕作土直下で検出した一辺約50cmの平面正方形で、検出面からの深さ約15cmの土壌である。壁は垂直に立ち上がり、床面はほぼ水平で、壁と床面に厚さ2~3cmの灰白色の粘土が貼られている。壁・床面ともに貼られた粘土が赤く焼け締まっていることから、火を使用した焼成土壌と考えられる。内面に釉薬の付

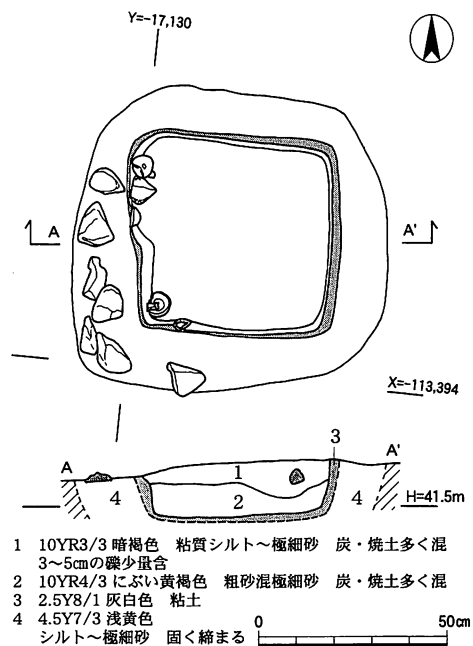


図82 焼成土壌1実測図(1:20)

着したいわゆる土師器の「へそ皿」も出土しており、このことから高温で使用されたものと推測される。その他の出土遺物を見ても、完形に近い土師器の「へそ皿」や「耳皿」、瓦質土器のつまみ付き蓋など、この時期には出土例の少ない遺物が出土しており、特異な様相を示す。また、埋土には壁土状のものも多く含まれる。周囲はシルト～極細砂の固く締まった土で固められており、西側には拳大の石が埋め込まれていた。土器類も土壌の西側で集中して出土している。

落ち込み2（図79） 調査区の北西で幅約6m×3mの範囲で落ち込みが見られた。深さは最も深い部分で約5cmあり、輸入陶磁器を大量に含む焼土で埋まっていた。この部分は、下層に柱列179の基礎となる布掘掘形や、石組みの溝15があることから、他の部分と比して地盤が緩く、低まっていた所に焼土が堆積したものと考えられる。

柱列179（図版36-3・4、図83） 落ち込み2の焼土層を除去して検出した東西方向の柱列である。布掘掘形をもつ柱列で、この柱列に沿って焼けた壁土が固まって倒れこんでいたことから、土壁の基礎と考えられる。西側は調査区外へ延び、東側は攪乱を受けるが、礎石の並びから考えて、Y = -17.132ラインまでは確認でき、調査区内では約8m分を検出した。西壁断面図（図80）9・10・11層がこの布掘掘形の埋土で、壁が垂直に立ち上がり、床面は水平であることがわかる。遺構保存のため、西側のみ部分的に掘り下げを行い、検出段階で認識した直径約10cmの焼けた柱痕跡の直下で根石を確認した。柱間が不規則で礎石や柱穴底の高さが一致せず、埋土も3層あることから、修築の可能性が考えられる。

柱列180（図83） 調査区東に位置する南北方向の柱列である。耕作土直下で検出した。柱間は約2mで、南北3間分を検出した。柱の間にもやや小さい礎石や柱穴が認められる。この柱列に関しても北から1つ目や2つ目の柱穴では、根石を据えるための掘形が確認できなかった。攪乱の断面等で確認したが柱列179のように布掘掘形を持つものではないことがわかった。南壁断面図からは、この辺り一帯に見られる固く締まったシルト層（7層）の下に根石が据えられている状況が確認できる。このシルト層上面で検出したこれらの根石を基礎とする柱穴は焼土で埋まり、このシルト層自体も火を受けて赤く焼け締まっていることから、これらは焼き討ち時の遺構面であったと考えられ、修築ではなく、布掘や直接礎石を据える工法以外の別の工法により構築されたものであろう。

柱列181（図83） 耕作土直下で検出した、柱列180の1m西に位置する南北方向の柱列である。南壁断面図（図80）7層のシルト層の上に礎石が直接据えられていた。柱間は不規則であるが、耕作土直下で検出したため、後世の抜き取りや移動も考えられる。最も南の礎石は逆L字形に2石並べて据えられていた。

池14・溝15・溝16・石敷き163（図版37、図84） 一連の庭園遺構と考えられる。東西方向の石組みの溝15とそれにつながる素掘りの溝16、その東に石敷き163、さらに調査区北壁に沿って底に小石を敷き詰めた洲浜状の落ち込みが見られ、これを池14とした。池14以外の溝15、溝16、石敷き163は焼土で埋まるため、最終的な埋没時期には差があるものと考えられる。石組みの溝15は直径30～40cmの扁平な石を側石に用い、東端では直径約5cmの底石が敷き詰められていた。深

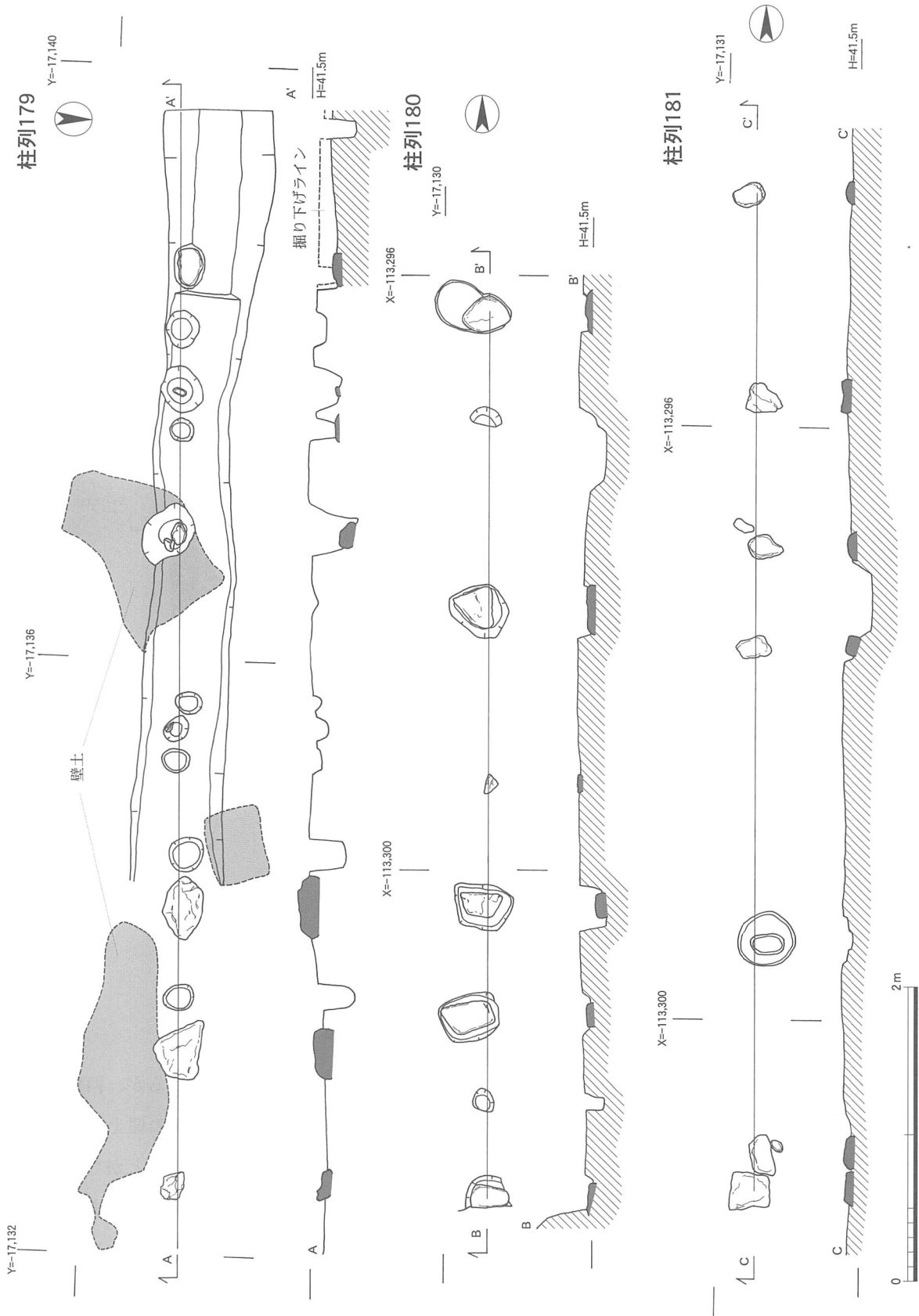


図83 柱列179・180・181実測図 (1 : 40)

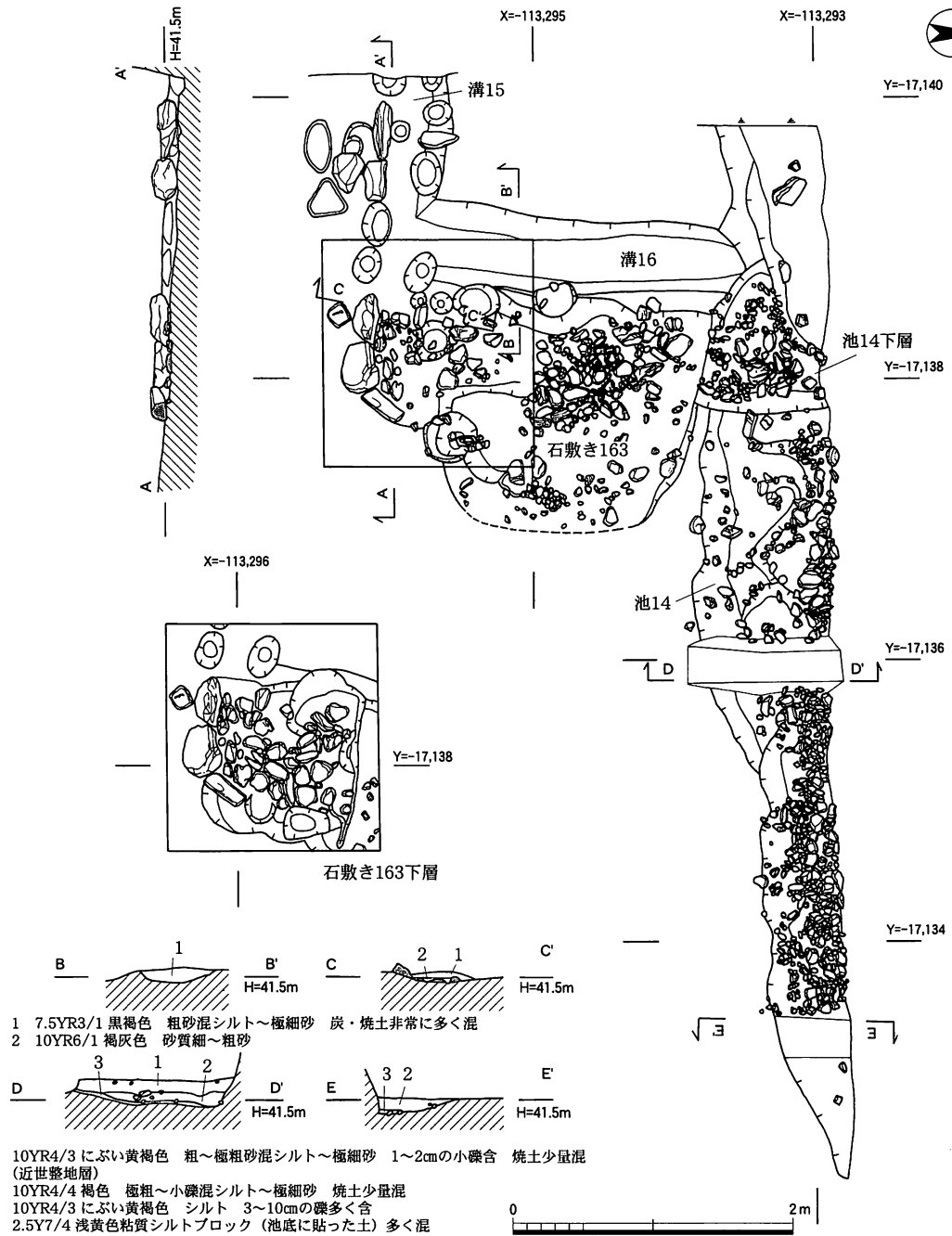


図84 溝15・溝16・池14・石敷き163実測図 (1 : 50)

さは約15～20cmで、底面は東から西に傾斜している。側石は所々抜き取られているが、西壁断面(図80)にかかるとの抜き取り穴の埋土を比較すると、北側の側石抜き取り穴の埋土は近世整地層と同様の土で、南側の抜き取り穴の埋土は落ち込み2と同様の焼土層であることから、焼き討ち後に焼土で埋まる以前に抜き取られたものと、後世の耕作時に抜き取られたものがあることがわかる。素掘りの溝16は、溝15と直角に接続する南北方向の溝である。深さは約10～15cmで底面は北から南に傾斜する。北側の池14からの排水溝であろう。このことから池14→溝16→溝15という水の流れが考えられる。池14は洲浜の一部を検出した。北に向かって緩やかに傾斜しており、調査区外に広がっているものと考えられる。底には粘質シルトが貼られ、直径3～10cm程度の河

原石を敷き詰めていた。またこの池14の西側の攪乱を受けた部分では下層の洲浜を検出し、修景されていることがわかった。西壁断面では上層の池の埋土しか確認できなかったため、下層の池は一回り小さいものであった可能性が考えられる。この池14と溝16の間に石敷き163がある。池14の底に貼ったものとよく似た粘質シルトに直径10cm程度の黒色の扁平な石を並べて貼り付けている箇所や、同様に直径3cm程度の扁平な石を貼り付けている箇所があり、意図的に敷かれたものと思われる。またこの石敷き163を部分的に掘り下げたところ、土師器皿の小片を多く含む厚さ約3cmの砂層の下から、北に屈曲する溝15の底石の延長と、側石の抜き取り穴を検出した。この砂層は、溝15の底に堆積していた褐灰色砂層と同じもので、本来は石組みの溝15が池14まで続いていたものを、砂が堆積して流れが悪くなったために修景して石を敷き、その西側に新たに排水のための溝16を掘削したのではないかと考えられる。また状況から、この石敷き163下層と池14下層が対応すると推測される。

さらに、一面下の遺構面でも、溝15とほぼ同じ位置に溝があったことが西壁断面で確認できた。図80の16層がそれにあたる。石の抜き取り痕等が確認できなかったため、この溝は素掘りであったと思われるが、溝15はそれを踏襲して作られた可能性も考えられる。

井戸27 (図版38-1、図85) 上記の庭園遺構の東に位置する。落ち込み2の焼土層を除去して検出した一辺約1mの正方形の石組み井戸である。深さは約70cmと浅く、底に粘土状の土を貼っていることから、湧水するものではなく、水を溜める施設であろう。壁面の石組みは直径30cm前後の石を用いて堅固に組まれており、青色系や赤色系の石も使用されていることから景観を意識したもので、位置関係からみて、庭園遺構と一連のものであろうか。

井戸10 (図85) 井戸27の約3m南に位置する。焼土層を除去して検出した。一辺約1mの正方形の掘形をもつ

井戸で、壁が垂直に落ちることから、本来は木枠が組まれていた可能性が高い。深さは約50cmで、中央部分に円形の窪みがある。その部分にシルト～極細砂の砂が堆積しており、井戸27と同様に水を溜める施設であろう。埋土には、輸入陶磁器や焼けた壁土

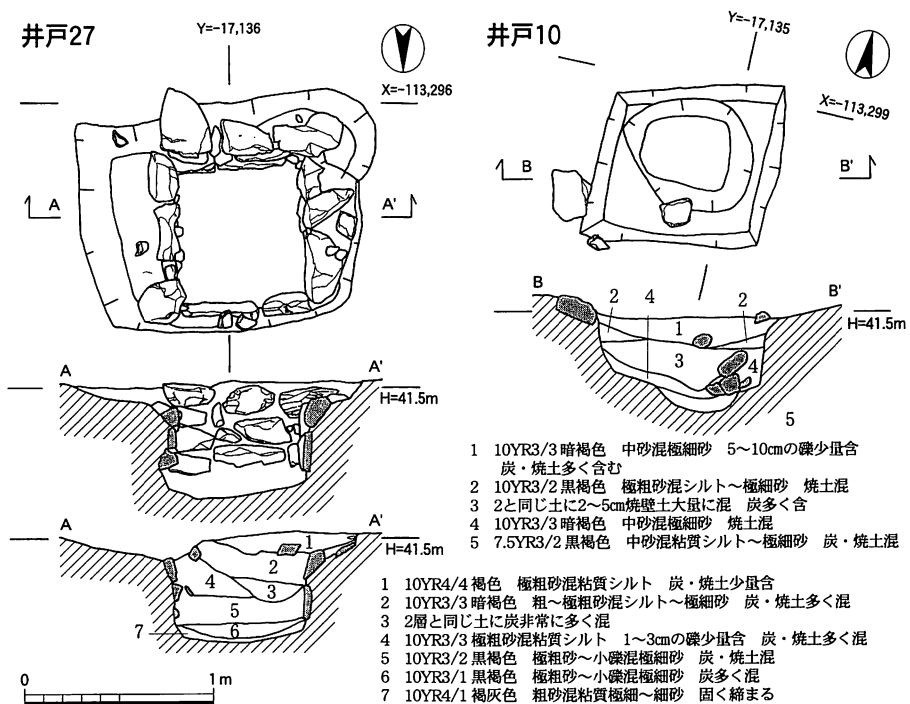


図85 井戸10・27実測図 (1:40)

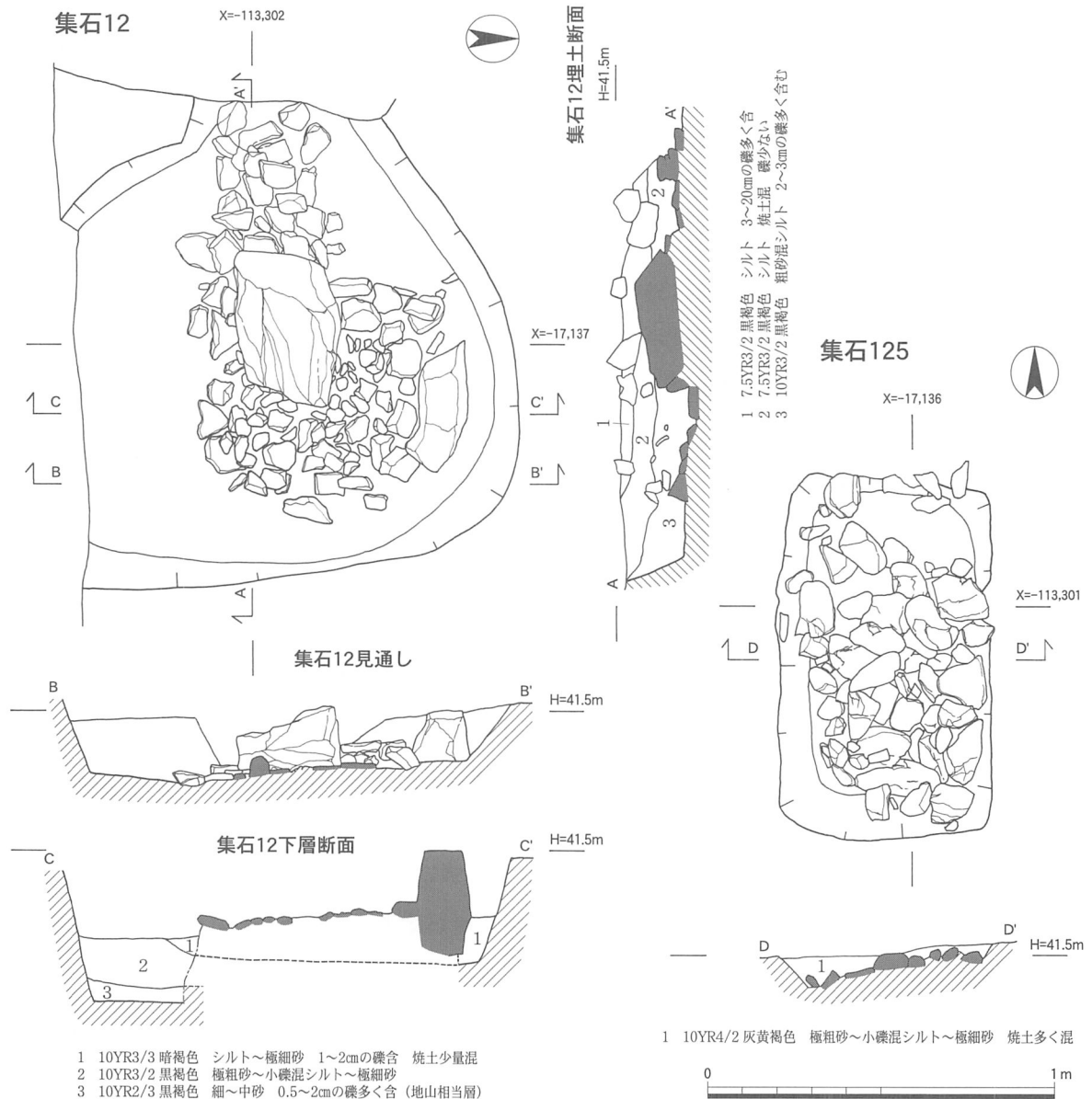


図86 集石12・125実測図 (1:20)

が大量に混じる。

集石12 (図版38-3、図86) 耕作土直下で検出した調査区の南西隅に位置する遺構である。南側は調査区外へと延び、西側は攪乱を受けるため正確な規模は不明であるが、直径約1.3mの円形の掘形を持ち、西側に溝状に延びる。その中に、L字状に直径5cm程度の石を敷き詰め、さらにその中心には約30×40cmの結晶片岩が、北には約15×30cmの泥板岩が据えられていた。また、下層確認のため部分的に断割調査を行った。下層断面図の1・2層は集石12の掘形埋土で、3層は細～中砂の地山相当層である。この第3層は西壁断面図32層と同一の砂礫層である。

集石125 (図版38-2、図86) 集石12の東に位置する。焼土層を除去して検出した。0.6×1mの平面長方形で深さは約5cmである。中に直径5～15cmの河原石を敷き詰める。赤色系や青色系の石が混在する。

3. 遺物

遺物は、遺物コンテナにして16箱出土した。耕作土中に近世の遺物が少量含まれるが、それ以外は全て山科本願寺の存続時期に該当する遺物である。特に天文元年八月（1532）の焼き討ちに伴うと想定される焼土層や、焼土層で埋まる遺構からは大量の輸入陶磁器が出土した。また土壙3からはガラス玉などが出土したため、埋土を全て持ち帰り、水洗篩別作業を行った。その結果、大量の玉類、彫漆や金蒔絵等の漆器片、金銅製品などの特殊遺物を抽出することができた。玉類は、一部について蛍光X線分析と顕微鏡写真の撮影を依頼した。また漆器に関しては極小破片で、通常の写真撮影が不可能なため、スキャナーで取り込み、拡大する方法を用いた。³⁾ また一部に関しては顕微鏡写真を併用した。

(1) 土器類

出土した土器の中で、山科本願寺の存続時期に該当する土器の種類別の破片数と、破片総量に対する比率を表17に示した。また、各陶磁器類の個別詳細は表18の通りである。同一個体の破片が複数の遺構から出土するため、出土地点は表中に明記し、ここでは種類ごとに概要をまとめる。

多彩磁器(図版2-2) 多彩磁器が破片にして17点出土した。そのうち7点が(1)の五彩磁器・碗の破片である。白磁素地上に、青・緑・黄・白色の上絵具で鳥、芭蕉、竹などの絵を描いており、国内では出土例が知られていない。15世紀代に中国景德鎮で製作されたものである。(2～5)も同じく五彩の磁器で、二次被熱のため上絵具が変色している。(6)は全面に緑釉がかり、外面に陰刻で蝶を描いている。器形は不明。(7・8)も全面に釉薬がかけられたもので、(7)は蓋、(8)は破片である。二次被熱により変色している。ともに15世紀代の中国製のものと思われる。

表16 出土遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
室町時代	土師器・瓦質土器・施釉陶器・焼締陶器・輸入陶磁器	23箱	土師器皿10点、瓦質土器6点、施釉陶器22点(輸入含)、焼締陶器13点、輸入陶磁器(特殊磁器8点、青磁18点、染付24点、白磁22点)	16箱	0箱
	埴・平瓦・丸瓦		埴4点		
	鉄釘・壁土・ガラス玉・金属製品・木製品・石製品・その他		鉄釘5点、ガラス玉370点、水晶玉2点、漆器片44点、数珠玉4点、櫛2点、金属金具8点、石製硯1点、石英塊4点、ガラス種3点、銅付着壁土3点、金属滴2点		
江戸時代	土師器・磁器・施釉陶器・焼締陶器	1箱		0箱	1箱
合計		24箱	575点(7箱)	16箱	1箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、ランク分けをしたため、出土時より8箱多くなっている。

表17 土器種別破片数・出土比率

	種類	破片数(個)	比率(%)
国産	土師器	465	23.5
	瓦質土器	35	1.8
	施釉陶器	49	2.5
	焼締陶器	39	2.0
輸入	多彩磁器	17	0.9
	青磁	356	18.0
	染付	517	26.2
	白磁	229	11.6
	施釉陶器	121	6.1
不明	焼締陶器	146	7.4
	合計	1974	100.0

られる耳が2箇所に取り付く。獣面の口部分に孔が開くため環を吊り下げていた可能性が高い。(22・23)は同一個体と思われる鬼面脚付きの盤で、(24)は三足香炉の脚である。(25・26)はいわゆる「酒会壺」と呼ばれる壺の蓋と身である。青磁釉の発色が異なるため、それぞれ別個体の蓋と身になると思われる。

染付(図版4) 破片数にして517点出土した。種別では最も多く土器出土総数の26.2%を占める。全て中国製のものと思われる。(27~36)は皿で、口径13cm前後のものが多い。口縁部の残存するものでは、内弯口縁の(36)を除いて全て端反り口縁である。(37~45)は碗である。口径13cm前後、高台径5cm前後のものが多い。(46)は輪花口縁の鉢で、内外面ともに四方禪文を描き、厚さ約3mmと薄く、呉須の発色も鮮明である。(47)は底部が平らな小型の壺、(48・49)は体部下半で屈曲する坏である。(50)は外面に獅子とラマ式蓮弁文を描く壺で、染付類の中では唯一中型品に属する。

白磁(図版5-1) 破片数で229点出土した。(51~60)は皿である。口縁が残存するものは全て端反り口縁である。口縁径12cm前後のものが多いが、(58~60)は高台径が12cm以上あり、大型の皿になると思われる。(61~66)は碗である。口縁部の残存するものでは、(61・62)は端反り口縁、(65)は直線的な口縁を持つ。(66)は焼成土壌1から出土した小口径で深さのある小型の碗である。このタイプはこの一点のみ出土した。(67~72)は輪花の皿で、(70)を除いて、大きさや見込み部分の蛇ノ目釉剥ぎが共通しており、セットになるものであろう。

施釉陶器(図版5-2・図版6) 施釉陶器は輸入品と国産品がある。(73~79)は、朝鮮半島製の小型の壺である。厚さは5mm前後と薄く、内外面ともに釉薬がかかる。タタキ整形によるものと思われ、(78・79)では、内面に同心円の当て具痕が認められる。(80・81)は共に中国製の口縁径に比して胴の強く張るタイプの壺である。二次被熱で外面の釉薬はかなり融解している。(82~86)は中国産天目茶碗である。特に(82)は、中国南宋時代の建窯で生産されたもので、表面に細く流下する筋がみられる、「禾目天目」あるいは「建盞」とも呼ばれるものである。胎土・釉薬ともに黒色を呈しており、12~13世紀頃に製作された伝世品であらう。(83・84・86)も同様に表面に流下する筋がみられるが、胎土が(82)に比べやや灰色がかかる。建窯の近郊で製作さ

青磁(図版3) 青磁は破片数にして356点出土しており、輸入染付、土師器に次いで多く、土器出土総数の18%を占める。また大型品の破片が多いのも特徴である。ほとんどの破片が二次被熱を受けており、特に(12)は高温により釉薬が溶け、碗の口縁と高台の破片が溶着している。(13)は外面が青磁釉で内面が染付の碗で、高台部の特徴や厚みから中国製と思われるが、この時期には類例の少ないものである。(21)も類例のない器形で、蓋受けのある脚付き鉢である。おそらく獣面と思

表18 陶磁器概要表

番号	器種・器形	口径	器高	高台径	文 様 構 成	その他技法・特徴	出土地点
1	五彩磁器 碗	(13.0)	<5.6>	(5.2)	外面：おしどり・鳥・芭蕉・竹・太湖石・果実	・二次被熱 ・破片数7点 ・白磁上に青、緑、黄、白で文様描く	落ち込み2・井戸10・落ち込み11・井戸27
2	五彩磁器 蓋	4.1	<1.8>	—	外面：蓮弁か	・白磁上に色絵描くが二次被熱で元の色不明 ・内面は露胎 ・つまみが付く	落ち込み2
3	五彩磁器 不明	—	—	—	外面：唐草文、他	・白磁上に色絵描くが二次被熱で元の色不明 ・(5)と同一個体か	落ち込み2
4	五彩磁器 不明	—	—	—		・厚さ0.5mm ・(3)(5)と同一個体か	落ち込み2
5	五彩磁器 壺	(3.5)	—	—	外面：呉須の界線の間を上絵で唐草文、花	・胴部最大径7.2cm ・上絵は緑、その他色あるが二次被熱で不明	落ち込み2
6	緑釉磁器 不明	—	—	—	外面：陰刻で蝶	・厚さ0.5cm ・内面の緑釉二次被熱で変色	井戸27
7	施釉磁器 蓋	(10.5)	—	—		・厚さ0.85cm ・二次被熱で変色 ・直径5mmの穿孔あり。いわゆる「蟋蟀壺」の蓋か	ピット121
8	施釉磁器 不明	—	—	—	外面：陽刻で蝶	・厚さ0.4cm ・二次被熱で変色	井戸27
9	青磁 皿	(15.6)	<1.8>	—		・口縁端反り ・厚さ0.6cm	落ち込み2
10	青磁 碗	(14.4)	<4.8>	—	外面：蓮弁文	・二次被熱 ・鎊で蓮弁描く	井戸27
11	青磁 碗	(12.0)	<4.0>	—		・輪花碗 ・二次被熱	落ち込み2
12	青磁 碗	(12.0)	<3.9>	—		・高温で釉薬が溶け、2つの破片が溶着	溝15
13	青磁 碗	(11.0)	6.4	(3.6)	内面：口縁に界線、見込み二重内に文字	・二次被熱 ・外面青磁釉、内面は染付 ・厚み約0.3cm ・高台が内側に入り込む ・畳付露胎	落ち込み2・井戸10
14	青磁 碗	(11.2)	6.2	(4.6)	外面：蓮弁文 内面：見込み圓線と花	・二次被熱 ・蓮弁文は線刻、菊花文は印判か ・高台内露胎	落ち込み2・井戸27
15	青磁 碗	—	<4.7>	4.6	外面：線刻が交差	・二次被熱	井戸10
16	青磁 鉢	(35.0)	<10.3>	—	外面：牡丹唐草文か 内面：牡丹唐草文か	・大鉢 ・激しく火を受け文様不明瞭	土壌3
17	青磁 盤	(15.8)	<1.7>	—	外面：鈿部分輪花 内面：見込み草花文		近世整地層
18	青磁 盤	(36.8)	<3.5>	—	外面：蓮弁文 内面：草花文		ピット22
19	青磁 盤	(19.0)	<2.75>	—	内面：鈿部雷文、見込み花文	・外面底部蛇ノ目釉剥ぎ	落ち込み2・井戸10
20	青磁 盤	—	<3.4>	(19.6)	外面：蓮弁文 内面：蓮弁文	・二次被熱 ・外面高台内蛇ノ目釉剥ぎ	井戸10
21	青磁 鉢	(19.8)	<9.7>	—	外面：上半牡丹唐草文、 下半界線	・二次被熱 ・蓋付鉢 ・獣面と思われる耳が2つ付き、環を吊り下げる穴が開く。 ・口縁部露胎 ・体部下半で外側に屈曲	落ち込み2・池14・溝15・溝16
22	青磁 盤	(22.3)	<6.5>	—	外面：口縁播磨、体部算木文	・(23)と同一個体か	土壌3
23	青磁 盤脚	—	—	—	外面：鬼面文	・(22)の脚か ・二次被熱	土壌3
24	青磁 香炉脚	—	—	—		・二次被熱	落ち込み2
25	青磁 壺蓋	(30.3)	<5.2>	—	外面：花文か	・内径18cm ・いわゆる「酒会壺」の蓋 ・内面甲の内側のみ施釉、他は露胎 ・二次被熱	落ち込み2・池14
26	青磁 壺	—	<18.5>	(17.6)	外面：胴部草花文、 胴下部蓮弁文	・二次被熱 ・いわゆる「酒会壺」 ・内面畳付から上方3cmの部分に落とし底が剥がれた痕跡あり ・畳付露胎	落ち込み2・井戸27・ピット127
27	染付 皿	(22.0)	<2.6>	—	外面：界線、花文 内面：界線		土壌3

※ ()は復元数値、< >は残存数値、単位はcm

番号	器種・器形	口径	器高	高台径	文 様 構 成	その他技法・特徴	出土地点
28	染付 皿	(13.0)	<2.7>	—	外面：界線、アラベスク風唐草 内面：界線、花文	・二次被熱	井戸10
29	染付 皿	(13.0)	2.9	(7.4)	外面：界線、山水 内面：界線、玉取獅子	・二次被熱	落ち込み2・井戸10・井戸27
30	染付 皿	(12.0)	2.7	(7.2)	外面：界線、牡丹唐草文 内面：界線、十字花文	・二次被熱	落ち込み2・井戸10
31	染付 皿	—	<1.4>	6.8	外面：唐草文、界線 内面：十字花文	・二次被熱	井戸10・落ち込み13
32	染付 皿	—	<1.7>	8.5	外面：密な唐草文、界線 内面：アラベスクと梵字	・二次被熱	落ち込み2・井戸27
33	染付 皿	(13.0)	3.3	(7.2)	外面：界線、渦状唐草文、界線 内面：界線、蓮弁文、花文	・二次被熱	落ち込み2・落ち込み11・井戸10・井戸27
34	染付 皿	—	<1.7>	(12.4)	外面：渦状唐草文、界線 内面：唐草文	・二次被熱 ・呉須の発色鮮明	落ち込み2・井戸27・溝44
35	染付 皿	—	—	—	内面：花文に「長命富貴」か	・二次被熱	落ち込み2
36	染付 皿	(18.0)	3.6	(8.8)	外面：渦状唐草文、界線 内面：結合した渦文	・二次被熱 ・口縁部内弯する	落ち込み2
37	染付 碗	(13.2)	<4.0>	—	外面：波涛文帯、芭蕉文 内面：界線	・二次被熱	池14
38	染付 碗	(12.0)	—	—	外面：波涛文帯、アラベスク風唐草文 内面：界線		落ち込み2
39	染付 碗	(13.8)	<3.6>	—	外面：波涛文帯、芭蕉文 内面：界線	・二次被熱	井戸10
40	染付 碗	(12.4)	<3.0>	—	外面：界線、草花文 内面：界線、唐草文		落ち込み2
41	染付 碗	(13.4)	6.5	(5.7)	外面：雷文帯、アラベスク風唐草文、界線 内面：界線、文字	・畳付露胎	落ち込み2・溝15・井戸27
42	染付 碗	—	—	(5.5)	外面：芭蕉文、界線 内面：ほら貝		落ち込み2
43	染付 碗	—	<1.5>	(3.8)	外面：界線 内面：唐草文	・畳付露胎	落ち込み2
44	染付 碗	—	<3.0>	(4.6)	外面：唐草文、界線 内面：ほら貝		落ち込み2・溝15
45	染付 碗	—	<3.2>	(5.8)	外面：アラベスク風唐草文、界線 内面：ほら貝		落ち込み2
46	染付 鉢	(15.0)	<5.2>	—	外面：四方禪、雲文 内面：四方禪、樹木	・輪花鉢	落ち込み2・井戸10
47	染付 壺	—	<2.9>	(2.8)	外面：界線	・畳付露胎 ・小型壺	落ち込み2
48	染付 坏	—	<2.5>	(5.0)	外面：花文、界線	・二次被熱	上げ土内
49	染付 坏	—	<2.2>	(4.4)	外面：界線 内面：十字花文	・畳付露胎	落ち込み2
50	染付 壺	—	—	—	外面：獅子、界線、ラマ式蓮弁文	・二次被熱 ・胴部最大径12.5	落ち込み2・井戸27
51	白磁 皿	(12.0)	<1.9>	—		・口縁端反り ・二次被熱	井戸10
52	白磁 皿	(12.2)	<0.9>	—		・口縁端反り ・二次被熱	井戸10
53	白磁 皿	(12.2)	<1.8>	—		・口縁端反り ・二次被熱	落ち込み2
54	白磁 皿	(10.4)	2.3	(8.4)		・口縁端反り ・二次被熱	溝15
55	白磁 皿	—	<1.3>	(6.2)		・二次被熱 ・畳付露胎	落ち込み2

番号	器種・器形	口径	器高	高台径	文様構成	その他技法・特徴	出土地点
56	白磁 皿	—	<2.3>	(6.4)		・二次被熱 ・畳付露胎	落ち込み2
57	白磁 皿	—	—	—		・激しく二次被熱	井戸10
58	白磁 皿	—	<1.4>	(12.2)		・畳付露胎	落ち込み2
59	白磁 皿	—	<2.1>	(14.2)		・二次被熱 ・畳付露胎	落ち込み2
60	白磁 皿	—	<1.2>	(12.0)		・二次被熱 ・畳付露胎	井戸10
61	白磁 碗	(12.6)	(6.3)	5.0		・口縁端反り	落ち込み2・井戸27
62	白磁 碗	(12.6)	<4.9>	—		・口縁端反り ・二次被熱	落ち込み2・落ち込み11・井戸27
63	白磁 碗	—	—	—		・二次被熱	落ち込み2
64	白磁 碗	—	<3.2>	(6.0)		・二次被熱 ・畳付露胎	井戸10
65	白磁 碗	(12.6)	<4.7>	—			落ち込み2
66	白磁 碗	6.6	<4.8>	—		・小型碗 ・二次被熱 ・高台付く	焼成土壇1
67	白磁 皿	—	—	—		・輪花皿 ・二次被熱	落ち込み2
68	白磁 皿	(7.6)	<1.5>	—		・輪花皿 ・二次被熱	井戸10
69	白磁 皿	(8.0)	2.4	3.0		・輪花皿 ・二次被熱 ・見込み蛇ノ目釉剥ぎ ・畳付露胎	落ち込み2
70	白磁 皿	—	<2.8>	(5.0)		・輪花皿 ・畳付露胎	土壇3
71	白磁 皿	—	<2.0>	(2.7)		・輪花皿 ・見込み蛇ノ目釉剥ぎ ・畳付露胎	落ち込み2
72	白磁 皿	—	<1.3>	(2.7)		・輪花皿 ・見込み蛇ノ目釉剥ぎ ・畳付露胎 ・二次被熱	溝15
73	施釉陶器 壺	(4.2)	<3.5>	—		・朝鮮系 ・二次被熱	落ち込み2
74	施釉陶器 壺	—	—	—		・朝鮮系 ・鶴首壺の頸部か ・二次被熱	落ち込み2
75	施釉陶器 壺	—	—	—		・朝鮮系 ・鶴首壺の頸部か ・内外面施釉 ・二次被熱	落ち込み2
76	施釉陶器 壺	—	—	—		・朝鮮系 ・内外面施釉 ・二次被熱	ピット127
77	施釉陶器 壺	—	<2.8>	(10.2)		・朝鮮系 ・外面底部近くに釉かける時の指の痕跡あり ・二次被熱	井戸27
78	施釉陶器 壺	—	—	—		・朝鮮系 ・内面同心円の当て具痕跡あり ・二次被熱	井戸10
79	施釉陶器 壺	—	—	—		・朝鮮系 ・内面同心円の当て具痕跡あり ・二次被熱	井戸27
80	施釉陶器 壺	(12.0)	<3.9>	—		・中国製 ・二次被熱で釉溶ける ・胎土に砂粒多く混	落ち込み2
81	施釉陶器 壺	(12.4)	<4.3>	—		・中国製 ・二次被熱で釉溶ける ・胎土に砂粒多く混	落ち込み11
82	施釉陶器 碗	(11.9)	<5.9>	—		・中国建窯産天目茶碗 ・表面に細く流下する筋あり。いわゆる「禾目天目」 ・釉N2/0黒、胎土10YR6/1褐色で、胎土緻密、焼成堅緻 ・二次被熱	土壇3
83	施釉陶器 碗	—	—	—		・中国建窯産天目茶碗 ・表面流下する筋あり ・二次被熱	ピット152

番号	器種・器形	口径	器高	高台径	文様構成	その他技法・特徴	出土地点
84	施釉陶器 碗	—	—	—		・中国産天目茶碗 ・内外面に流下する筋あり ・釉は黒いが胎土は灰白、焼成は堅緻	土壇3
85	施釉陶器 碗	—	—	—		・中国産天目茶碗 ・左回転削り	井戸10
86	施釉陶器 碗	—	—	—		・中国産天目茶碗 ・流下する筋あり ・焼成堅緻	土壇3
87	施釉陶器 壺	—	—	—		・中国産鉄釉小壺 ・焼成堅緻 ・二次被熱	土壇3
88	施釉陶器 壺	(9.0)	10.4	(7.2)	外面：肩と腰部にそれぞれ二条の沈線、その間に連弁文	・中国産鉄釉壺 ・口縁端部露胎 ・左回転削り ・内外面ともに施釉 ・二次被熱	落ち込み2・井戸10・ピット32
89	施釉陶器 碗	(13.0)	<4.7>	—		・瀬戸美濃産天目茶碗 ・胎土に砂粒混 ・色調灰白	1面精査中
90	施釉陶器 碗	(11.1)	<3.5>	—		・瀬戸美濃産天目茶碗 ・二次被熱	土壇3
91	施釉陶器 碗	(8.4)	<3.5>	—		・瀬戸美濃産小型天目茶碗 ・露胎部分に錆釉かける ・二次被熱	落ち込み2
92	施釉陶器 碗	(11.5)	6.2	3.8		・瀬戸美濃産天目茶碗 ・露胎部分錆釉かける ・高台脇切り回し仕上げ ・二次被熱	落ち込み2・池14
93	施釉陶器 壺	(6.0)	<2.9>	—	外面：櫛描文	・瀬戸美濃産鉄釉小壺 ・胴部最大径9.0 ・内面鉄釉、外面は錆釉 ・二次被熱	落ち込み2・溝15
94	施釉陶器 壺	(5.0)	<5.7>	—	外面：櫛描文	・瀬戸美濃産鉄釉小壺 ・胴部最大径8.3 ・内面鉄釉、外面錆釉 ・二次被熱	落ち込み2・池14・溝15
95	焼締陶器 壺	—	—	—		・二次被熱 ・口縁端部水平な面 ・口縁部強い横なでにより肩が直角に強く張る ・胎土緻密、焼成堅緻	土壇3
96	焼締陶器 壺	—	—	—		・二次被熱 ・口縁端部水平な面 ・口縁部強く折り返し内面鋭い稜を持つ ・胎土緻密、焼成堅緻	ピット28
97	焼締陶器 壺	(22.1)	<4.9>	—		・二次被熱 ・口縁内面を持ち、端部は丸く仕上げる ・体部から強く折り返し内面口縁と体部の境に鋭い稜を持つ ・胎土緻密、焼成堅緻	落ち込み2
98	焼締陶器 壺	(11.0)	<2.6>	—		・二次被熱 ・口縁水平な面を持つ ・体部から強く折り返す口縁 ・胎土緻密、焼成堅緻	井戸27
99	焼締陶器 壺	(8.9)	<4.3>	—		・二次被熱 ・口縁端面を持つ ・体部から強く折り返す口縁 ・(98)と同型 ・胎土緻密、焼成堅緻	井戸10
100	焼締陶器 壺	(13.5)	<4.6>	—		・二次被熱 ・口縁直立し端部は強く折り返し、水平な面を持つ ・胎土緻密、焼成堅緻	池14・溝15
101	焼締陶器 壺	(11.2)	<4.4>	—	外面：肩部に櫛描沈線	・二次被熱 ・口縁直立し端部は水平な面を持つ ・胎土緻密、焼成堅緻	落ち込み2
102	焼締陶器 壺	—	—	—	外面：肩部上方に6条の櫛描沈線	・二次被熱 ・胎土緻密、焼成堅緻	落ち込み2
103	焼締陶器 壺	(8.4)	<8.1>	—		・二次被熱 ・口縁短く直立し強く折り返す ・胎土緻密、焼成堅緻	落ち込み2
104	焼締陶器 壺	—	—	—		・二次被熱 ・胴部に粘土紐で文様貼り付け、その下に突帯めぐらせる ・胎土緻密、焼成堅緻	落ち込み2・ピット26・ピット127
105	焼締陶器 壺	—	<3.3>	—		・二次被熱 ・底部径5.7 ・内外面指なで仕上げ ・胎土やや粗い、焼成堅緻	溝15
106	焼締陶器 壺底部	—	—	—		・二次被熱 ・底部外面に砂付着 ・底部外面線刻あり ・底部内面強い轆轤目残る ・胎土緻密、焼成堅緻	井戸27
107	焼締陶器 不明底部	—	<10.1>	—		・二次被熱 ・底部径10.9、胴部最大径14.2 ・外面粘土紐接ぎ痕残る ・胎土緻密、焼成堅緻	落ち込み2・井戸27

れたものか。(88)は中国産の鉄釉壺で、内外面ともに施釉され外面には蓮弁文が描かれる。(89～92)は、瀬戸・美濃産の天目茶碗である。(91・92)は露胎部分に錆釉がかかる。(93・94)は瀬戸・美濃産の内面鉄釉、外面錆釉の小型壺である。外面は頸部以下に櫛描沈線がめぐる。

焼締陶器(図版5-2) 焼締陶器は国産品と産地不明品が出土しているが、ここで報告する(95～107)は全て産地不明の一群である。共伴する備前産や常滑産の焼締陶器と比較して、胎土が非常にきめ細かく、黒～暗赤褐色の色調を呈し、焼成が堅緻であることがこれらに共通する特徴である。また、口縁は体部から強く折り返し、端部には面を持つものが多く、同時期の国内産焼締陶器には一般的でない特徴を示す。(95～101・103)は壺の口縁部、(102・104)は壺体部で、(104)は粘土紐で文様を貼り付け、その下に突帯を巡らす。(105～107)は、壺底部である。(106)は底部外面に砂が付着し、内面には轆轤目が明瞭に残る。(107)は、平底の底部から粘土紐巻き上げ、指で調整により体部を製作しており、粘土紐継痕跡が明瞭に残る。

土師器・瓦質土器(図版39、図87・88) 土師器は土器出土比率では23.5%を占めるが、図化できたものは少ない。その中で、焼成土壙1からは完形に近い土師器皿類が出土した。(108～111)は底部が内面に突出するいわゆる「へそ皿」で、口径は6.4～6.9cmである。(110)は内面に釉が付着しており、分析の結果、後述する青色系鉛ガラスの成分とほぼ同一と判明した。(112)は口径6.7cmの土師器皿で、口縁端部を強く横なでする。(113・114)は口縁を内側に

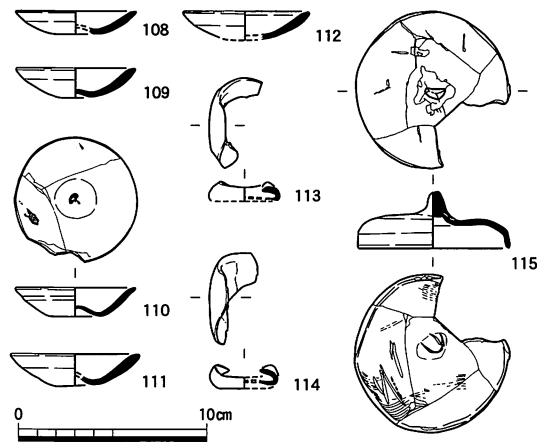


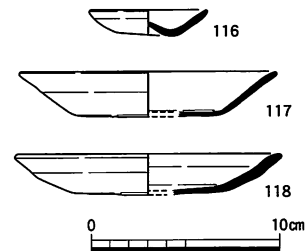
図87 焼成土壙1出土土器実測図(1:4)

折り曲げるいわゆる「耳皿」である。この焼成土壙1からは、(115)の瓦質土器の蓋も出土した。外面は指で調整で、中心につまみを貼り付ける。外面に整形時の痕跡かと思われる放射状の刻み目が残る。内面は幅1mm程度の横方向の雑なへら磨き調整を行い、その下に布目が残ることから型作りであろう。

(116～118)は、その他の遺構から出土した白色系の土師器皿である。(116)は、土壙3の東に位置する小土壙18から出土した。口径6.2cmの「へそ皿」である。

井戸10出土の(117)は、口径13.4cmで口縁部が直線的に開く。(118)は池14から出土した。口径14.8cmで、口縁端部を強く横なでする。これらは平安京編年⁴⁾のX期古～中段階頃に位置づけられるか。

(119)は土壙3から出土した瓦質土器の蓋付き壺である。厚みは2～3mmで、肩部に削り出しの段が付き、その下に2条の沈線をめぐらせる。体部は縦方向に凹みを入れ南瓜形にしている。底部は平底で、内面には明瞭な轆轤目が残る。体部外面には縦方向のへら磨き調整を行う。



116 土壙18 117 井戸10 118 池14

図88 各遺構出土土器実測図(1:4)

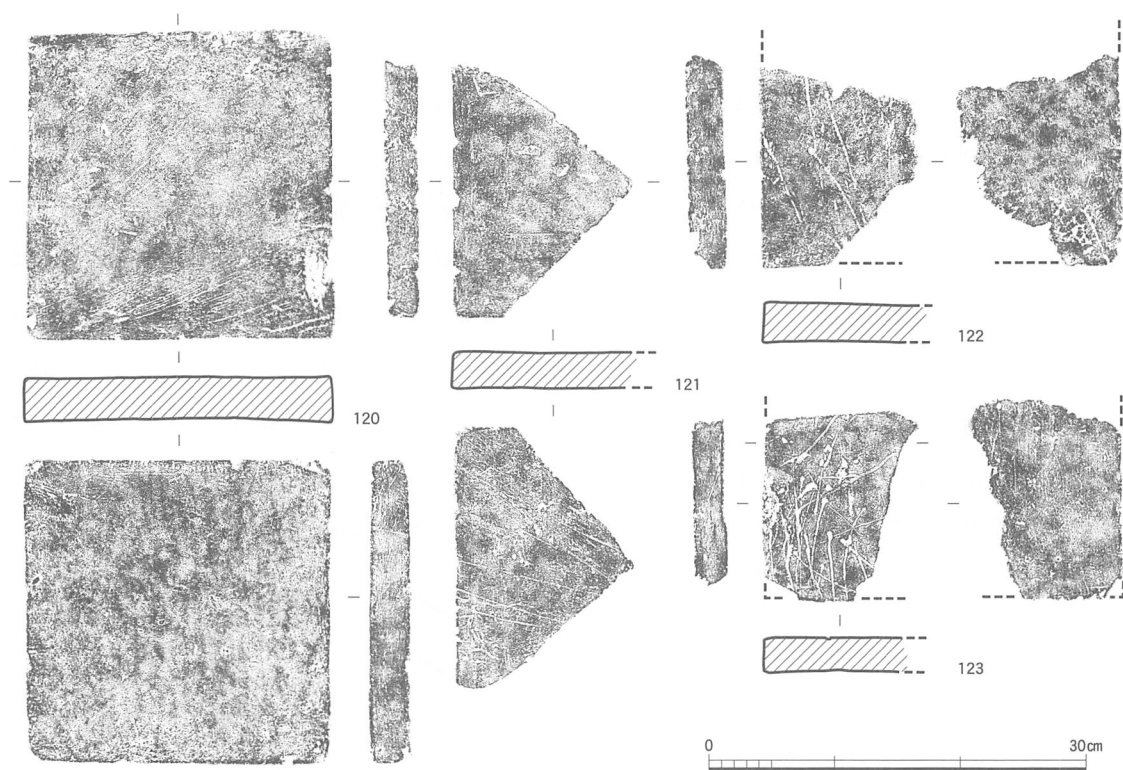


図89 磚拓影および実測図（1：6）

（2）磚（図89）

土壙3から遺物コンテナ2箱分の磚がまとまって出土した。全て文様がないため表裏の判別は難しいが、13次調査で出土した磚と同様に凸状に隆起した面を表面とする。ほとんどが割れて出土した中で（120）はほぼ完形である。一辺24cmの正方形で、厚さは3cmである。全面で調整で、表面には糸切り痕が明瞭に残る。（121）は焼成後に1側面を残して、90度になるように意図的に打ち欠かされている。磚を目地が45度になるように並べるいわゆる四半敷に敷き詰める場合、両側端部分の磚は平面三角形となることから、これはその部分に使用されたものであろう。（122・123）は共に全面板で調整で、表面に焼成後に付けられた無数の筋状の傷がみられる。

（3）玉類（図版2-1・図90・表19）

土壙3、土壙17、溝30から各種玉類が総数で372点出土した。ガラス玉が370点、水晶玉が2点である。全て中心に穴が開くいわゆるビーズタイプのもので、内訳は表19の通りである。肉眼で色の違いが観察できたため、一部に関して蛍光X線による成分分析を行った。その結果、原料に混ぜる色の定着剤に違いがあることが判明した⁵⁾。色別では青（124）、緑（125）、白（126）、黄（127）、紫（128）がある。なお、二次被熱により黒く変色したものに関しては、全て分析することが不可能であったため、色不明としてまとめた。また、大きさの違いが顕著なため、特大・大・中・小に分類した。さらに分析の結果、色・大きさの違い以外に、鉛ガラスとアルカリガラスがある

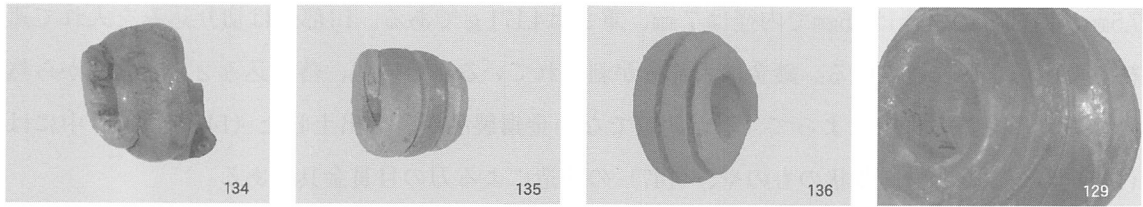


図90 ガラス玉拡大写真

ことがわかった。分析した中では鉛ガラスが多いが、(129~131)の特大タイプのものがアルカリガラス、また青系や色不明のものにもアルカリガラスのものが含まれることがわかっている。またこれらのガラス玉の中には、(133・134)のように2つの玉が連なっているように見えるものも多く見受けられた。これは針金に、溶かしたガラスを巻

表19 出土玉類分類表

遺構	大きさ	色							計
		青系	緑系	白系	黄系	紫系	無色(水晶)	不明	
土壙3	特大	3	0	1	0	0	2	0	6
	大	109	11	2	1	1	0	45	169
	中	59	15	14	2	1	0	23	114
	小	32	0	13	0	0	0	2	47
	計	203	26	63	3	2	2	70	336
土壙17	特大	0	0	1	0	0	0	0	1
	大	10	0	0	0	0	0	1	11
	中	7	5	0	0	0	0	0	12
	小	9	0	0	0	0	0	0	9
	計	26	5	1	0	0	0	1	33
溝30	大	1	0	0	0	0	0	0	1
	中	2	0	0	0	0	0	0	2
	計	3	0	0	0	0	0	0	3

※特大…5~8mm、大…3.5~4.9mm、中…2~3.4mm、小…2mm未満

き付けてガラス玉を製作する巻き付け技法による製作の痕跡と推測される。また、巻き付けたガラスを切断する際に付いたと思われる傷が確認できるものや、端が未処理のもの(135・136)も多く見られる。無色の(132)は水晶製である。

(4) 金属製品 (図版40、図91)

鉄釘、刀装具、金銅製飾金具などが出土した⁷⁾。図91の鉄釘は全て釘の頭部分が潰れておらず、鉄錆も全く付着していないことから未使用品であろう。(138~141)は広端部を叩いて平らに伸ばし、それを内側に巻き込むか、あるいは折り曲げて頭を作っている。それに対して(137)は、広端部を叩いて伸ばしてはいるが、折り曲げていない。(142)は土壙3から出土した刀子の鯉口である。分析の結果、比重16.74で金銀の割合が7:3と金の割合が高く、ほぼ純金に近いことがわかった。長さ2.95cm、幅0.65cmで、切り込み部分から推定される身の幅は1.45cm、厚さ0.3cmである。(143)は金銅製の飾金具である。土壙3から出土した。先端は欠けており、残存長2.6cm、幅2.1cm、重さは1.267gである。表面には毛彫で唐草文が彫られているが、この唐草の配置から見て、大型の製品を加工し直して瓔珞に転用したものである。鍍金はほとんど残存していない。(144)は溝15から出土した⁸⁾華籠の付属金具である。金銅製で筒状になっており、頭部分の外径は

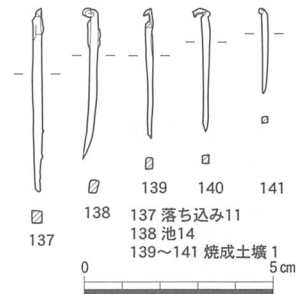


図91 鉄釘実測図(1:2)

7.5mm、口部分の外径は7.5mmで内径は7mm、重さは4.171gである。口部分は切り込みを入れて連続した山形を形作っている。鍍金は大部分が剥がれている。その他、落ち込み2・土壙3から熱による変形や錆の付着によって、形が明瞭でない金銅製品が多数出土した(145~149)。中には、(145)のつまみが付く蓋状のものや、(147)の鑄造による刀の目貫金具がある。

(5) 木製品

漆器(図版7・8)土壙3からは、漆製品の破片が多数出土した。これらは全て小破片のため3倍に拡大して掲載した。(150~174)は、金蒔絵の破片である。(156・158)は、金粉を密に蒔き詰め、表面全体を仕上げる地蒔きの沃懸地、もしくは文様を漆で描きその上に金粉を蒔き付ける平蒔絵の文様の一部である。(151)も剥離⁹⁾しているが平蒔絵であろう。(150・154・158・163・165)は、平蒔絵の文様の隙間に梨地粉を蒔いたもの、(167・169)は、文様部分全体に漆を塗って金粉を蒔いた後に針などで粉を搔き落として線を表現する「針描」と呼ばれる手法を用いたものと思われる。この手法は、室町時代末から桃山時代に隆盛する。(153・157)も、この「針描」手法、もしくは葉脈などを残して漆を塗り、金粉を蒔きつけて細線を表現する「描割」手法を用いたものである。「描割」は、金粉の上から漆を塗り、金粉が表面に出るまで研ぎ出す、研出蒔絵で多用される手法であり、漆表面が剥がれているが、この(153・157)は研出蒔絵の可能性が考えられる。さらに文様の隙間に上から梨地粉を蒔いており、文様粉と梨地が重なる部分が確認できる。(170)は、平蒔絵の上に切金を貼り付けている。切金は金箔から切り出した方形の板を文様の中に貼り付けていく室町時代に隆盛した手法で、岩や雲、土坡などの部分の表現に多く見られる。(152・160・171)も同様の手法によるものであるが、切金が剥離し、地の部分が露出している。(155・162・164・166)は梨地粉が蒔かれている。(172)は漆が剥がれ、地に張られた布目が見えている。(173・174)はやや大きい破片で、表面の剥離が著しいが、平蒔絵もしくは、金箔を貼り付けた製品の可能性も考えられる。これら(150~174)の蒔絵は、金粉の発色が良いことから、純度の高い金を用いていると思われる。小片であり、元の形を復元することは困難であるが、同時代の蒔絵技法を用いた製品には、硯箱や手箱、経箱などがあり、そういった製品の一部であろう。

(175~191)は「堆黒」の破片である。「堆黒」は、彫漆の一種で、木地に黒漆を何重にも塗り重ねて作った漆層を彫刻して文様とするものを指す。13~17世紀頃の中国製の盆や合子、天目台などの「堆黒」が伝世品として日本にも多く伝わる。¹⁰⁾「堆黒」でも、間に朱漆層が挟まれるもの

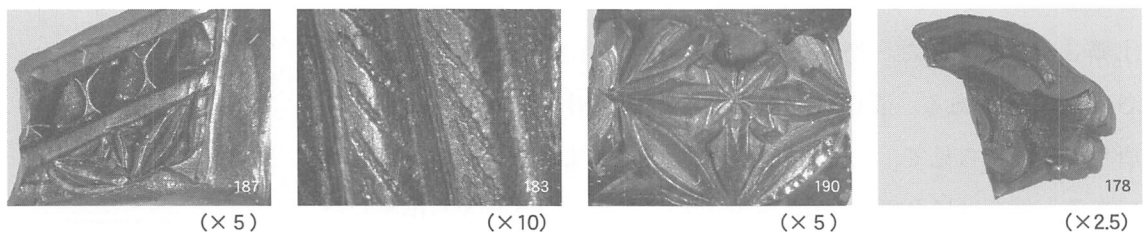


図92 堆黒顕微鏡写真

が多いが、今回出土したものは黒漆層しか認められない。(157~177)は葉脈を表現しており、牡丹もしくは山茶花の葉と思われる。(178)は花卉を表現している。拡大すると(図92)、深く彫り出され、漆層が厚いことがわかる。(179)は細かい斜め格子文で、伝世品では花芯あるいはライチ(荔枝)など果実の表現に似たものが見られる。(180)は花芯である。(181)は霊芝を表現したものと思われる。他にも1点出土している。(182)は尾長鳥の羽、(183)は尾長鳥の尾羽の部分であろう。直線的に見える羽の表現も、拡大してみると(図92)、非常に細かな彫りによるものとわかる。(184・185)も鳥の羽を表現したものと思われる。彫漆では、盆や合子などに花鳥文が彫刻されることが多く、これらの葉、花、鳥は同一個体の破片である可能性が高い。(186)は直線的な線が組み合わされており、柱や屋根など建物を表現したものであろう。(187)は太い柱状の線から斜めに派生する平行した2本の直線の間に花入菱の文様がある。欄干などに見られる表現である。(188・189)は何らかの部品で、(188)は直角、(189)は鈍角の角度をもつ。花入菱文の(190)は、曲面をもち、盆の縁になると思われる。(191)も、断面形がほぼ直角の角度になる縁の部分である。以上の「堆黒」破片は、文様構成や、彫刻の精緻さから見て、14世紀頃¹¹⁾の中国製のものと考えられる。多種の文様や、部品の形態から、複数個体の破片が混在している可能性が高い。

(192・193)は、布が扱じられているもので、漆を濾過して精製するための絞り布である¹²⁾。

数珠玉・櫛(図版40) 土壙3から、中心に紐通しの穴が開く木製数珠玉が出土した。(194)は、直径1.1cm、厚さ0.3cmである。材質は不明。(195)は直径1.2cm、厚さ0.4cmで材質は竹。(196)は材質不明で直径0.9cm、厚さ0.3cm。(197)は直径0.7cm、厚さ0.2cmで材質はクリである。(198・199)は、横櫛である。(198)は土壙18出土で、材質はツゲ、残存長3.2cm、厚さ1cm、棟部分の断面は五角形になる。歯の目は約0.5mm間隔である。土壙3から出土した(199)は、材質はイスノキ、残存長2.2cm、厚さ1cm、棟部分の断面は四角形で、歯の目は粗く、約2mm間隔である。数珠玉、櫛ともに炭化しているが、表面に漆膜が認められることから、漆が塗られていたと思われる。

(6) その他

(200)は、井戸10出土の石製硯である(図版40)。残存長12.5cm、幅9.5cm、厚さ0.6cmで大型の硯になると思われる。材質は頁岩~粘板岩で、裏面には加工時の鑿痕跡が明瞭に残る。(201~207)はガラス玉製作に関連すると思われる遺物である(図版40)。落ち込み2からは、(201~

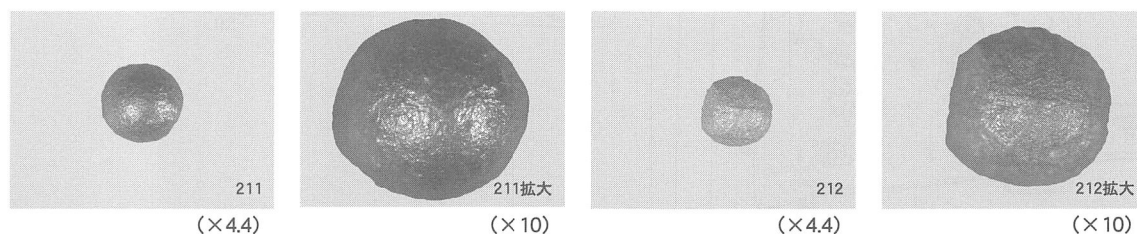


図93 金属滴頭顕鏡写真

204) のガラス原料となる石英塊が出土した。大きさは直径3～5cmで、鉍脈からの剥離面が確認できる。(205～207) は土壙3出土のガラス塊である。分析の結果、出土したガラス玉と同じ鉛ガラスの成分が検出された。ガラス原料を混ぜ合わせる過程の粗煮¹³⁾によってできるガラス種と思われる。大きいもので直径は4cm程度である。同じ土壙3からは、銅成分の付着した壁土(208～210)や、金属滴(211・212)も出土している(図93)。金属滴は直径2.5～3mmで、(211)は金と銅の成分が、(212)は金と銀の成分が検出された。いずれも表面に皺状のものがみられることから製品ではなく、¹⁴⁾ 鑄造工程でできる滴と判断した。

4. まとめ

今回の調査では、1面だけの調査であったにも関わらず、遺構・遺物ともに多種多様なものが出土した。山科本願寺の多面性を表すものであり、様々な問題を孕んでいる。以下、史資料を参考にして、調査で明らかにできた点と問題点について遺構・遺物それぞれについてまとめる。

(1) 建物について

今回検出した遺構の成立面は、標高41.5m前後である。これは約50mしか離れていない13次調査の泉状遺構検出面より約1m高い。さらに、「御本寺」の中心部に位置すること、輸入陶磁器類の出土比率の高さ、ガラス玉、漆芸品といった出土遺物の特異性から考慮して、重要な建物あ

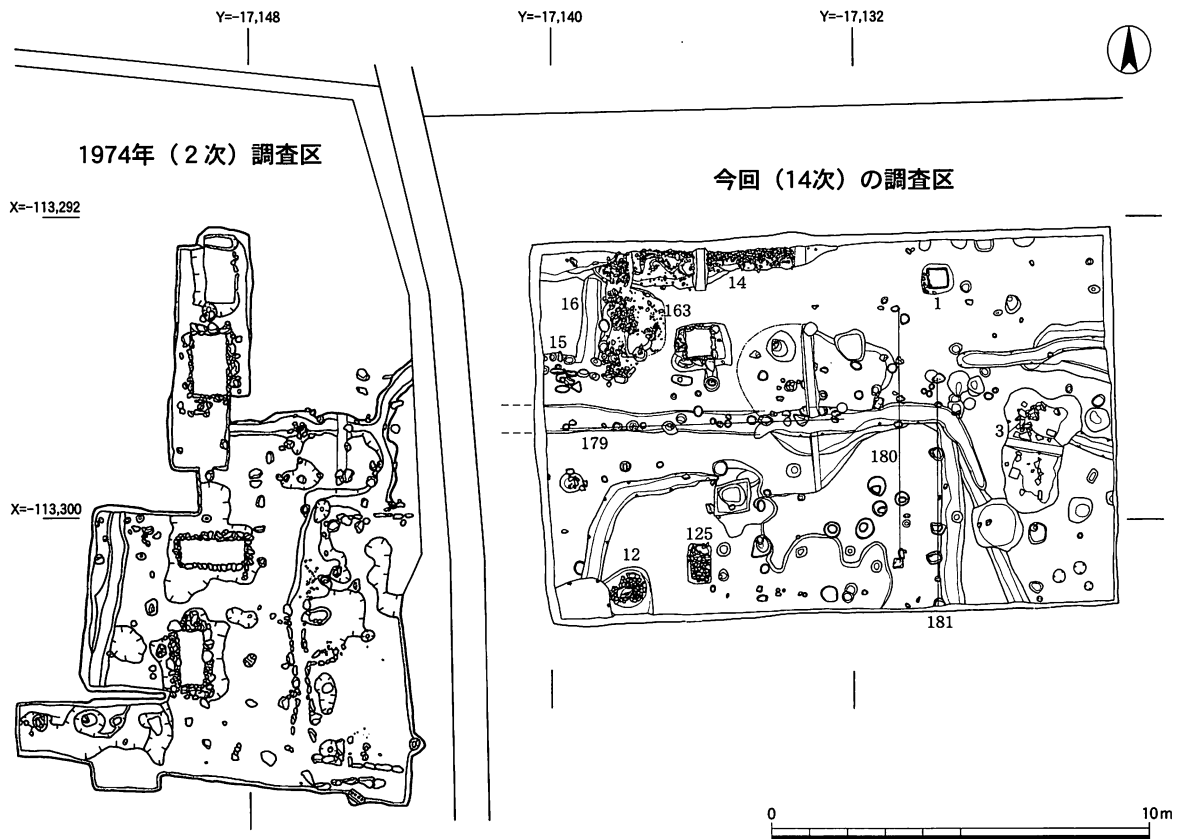


図94 1974年調査地合成平面図(1:200)

るいは、施設が存在した可能性が高い。先に述べたように、柱列181を境に、西と東では遺構の性格に違いが見られる。西側は何らかの建物に伴う遺構、東側は後述する生産に関わる遺構である。さらに、西側においても、柱列179の土壁は、それより北と南を区画するもので、溝15・溝16・池14・石敷き163からなる一連の庭園遺構は調査区のさらに北側に位置するであろう建物に付随するものと考えられる。柱列179より南側については、柱穴、礎石が密集し、建物跡と推測されるが、当調査区内での復元は困難であった。そこで、1974年に調査された隣接する敷地の資料を用いて、建物の復元を試みたい。図94は、1974年調査時（2次）の平面図と今回の調査地とを合成したものである。¹⁵⁾ これをみると柱列179はさらに西へと続いているように見て取れる。

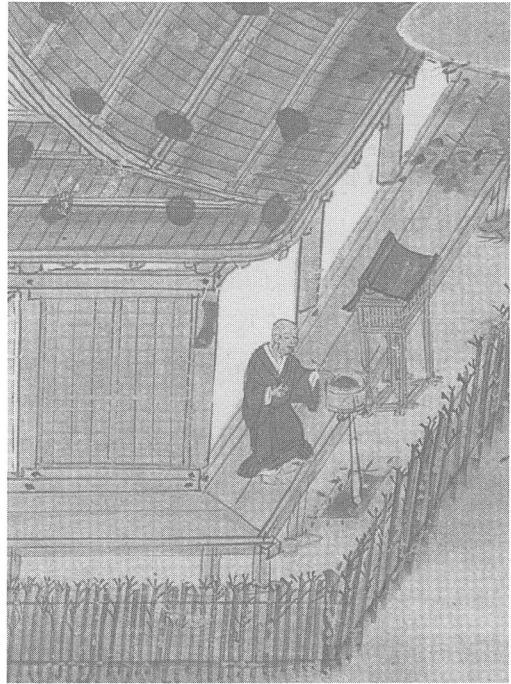


図95 『法然上人絵伝』卷十四（二十紙）の一部（知恩院所蔵）

また、1974年調査区の南東に南北幅7mの石組みの溝がコの字状に巡り、その内側には礎石や柱穴が確認できる。これは、報告でも触れられているように、¹⁶⁾ 建物の雨落ち溝になる可能性が高い。この溝は調査区外へと続いているが、今回の調査区ではその延長は検出されなかった。間で南に屈曲する可能性も考えられる。そこで関連すると思われるのが、集石12と集石125¹⁷⁾である（図86）。集石125は、長方形の掘形に河原石を敷き詰めた遺構であるが、これとよく似たものが14世紀前半頃に成立した『法然上人絵伝』の中の一場面¹⁷⁾に描かれている（図95）。僧が縁先から台木の付いた桶で手を洗っている様子が描かれたもので、桶の台木は石が敷き詰められた長方形の囲みの中に据えられている。この長方形の囲みは手洗い後の水をここへ流すものと考えられ、この形状が集石125に近い。集石125がこれと同様の性格と考えれば、赤色系や青色系の石は、景観を意識して意図的に混入させたものとして理解でき、縁先の手水場の可能性が高い。その観点からみて、集石12に関しても、掘形底部が水分の浸透性の高い砂礫層まで掘り抜かれていることや、青色系の結晶片岩、赤色系の泥板岩を据えていることから考えて、集石125と同様に水を使用する施設ではないかと思われる。ただ、集石125と異なり、集石12の結晶片岩と泥板岩は大きさや形から明らかに他の石と違い景石として使用されており、2石の配置から考えてこの上に直接桶もしくは鉢を据えていたと思われる。これは、後の茶室などに見られる「蹲踞」に繋がるものとして捉えられる。以上のことから、雨落ち溝は検出されなかったものの、これら集石に沿うように建物の縁がめぐっていたと推測される。柱穴や礎石の大きさからは小規模な建物が考えられるが、この建物の性格について、「御本寺」内の建物との関連で捉えたとすれば、「御亭」と呼ばれる建物¹⁸⁾があったことが文献から明らかになっている。この建物の性格に関しては櫻井敏雄氏の研究に詳しい。¹⁹⁾ それによれば、仏事と遊興を行う、公的と私的な2つの側面があり、将軍家や禅宗寺院に

おける会所的役割をもつ建物であるとされる。庭や会所飾りとしての青磁や硯、漆器に相当する遺物、茶事を行う茶道具、日常雑器ではない輸入陶磁器類の出土からみて、この建物は、「御亭」に関連する施設である可能性を考えておきたい。

また、1974年調査（2次）の雨落ち溝の西側には、多くの土師器皿が出土した石室群がある。さらに50m西には、13次調査で検出された泉状遺構が存在する。今回検出した庭や建物跡とこれらの遺構との関係は時期差も含め、今後の検討課題である。

（2）輸入陶磁器類について

今回の調査では、輸入陶磁器類が多く出土した。青磁・染付・白磁・施釉陶器の各種が揃って出土し、その多くが1532年の焼き討ち時に被災したものと考えられる。土師器皿も共伴しており、下限年代を押さえられる貴重な資料である。また、特に注目すべきは、全体の土器出土量に対する輸入陶磁器の比率の高さである。輸入陶磁器は全体の土器出土量の62.8%を占める（表17）。当時の供膳形態としては、土師器が一般的で、同時期の京都市内の遺跡をみても土師器と輸入陶磁器の比率が逆転することは極めて異例である。これまでの山科本願寺の調査でもまとまった輸入陶磁器の出土は報告されていない。こうしたことから、調査地周辺は日常生活空間ではないことが推測されると共に、当時の本願寺の財力を示す資料といえる。当時の山科本願寺の権勢を物語る史料に公家鷲尾隆康の日記『二水記』²⁰⁾がある。それには、

天文元年（1532）八月

二十四日 …略…抑本願寺者、及四五代富貴、誇榮花、寺中広大無辺、莊嚴只如仏国云々、在家又不異洛中也、居住之者各富貴、仍家々嗜、随分之美麗云々、今日一時滅亡、併天道也、可思々々、晩頭京勢帰洛、甲乙人每手有取物、財寶誠以如山欵奢者不久謂也。

二十五日 …略…本願寺焼痕至今日取財宝、未尽云々。

二十六日 …略…焼痕今日如昨日尚求之。剩掘出黄金数十^{百兩}枚有之云々。諸郷人為之及死者数十人云々。可笑々々。

と記されている。これによれば、栄華を誇り、仏国のようであった本願寺が、焼き討ちで滅亡した。焼き討ちの晩に京に帰るものは皆、手に財宝を持ち、それは次の日になっても獲り尽くせず、さらに次の日には焼け跡から黄金が出て、それを獲り合う者の中に死者も出た、ということがわかる。今回出土した、輸入陶磁器類や高級漆器等の遺物は、まさしくこれに記された財宝の一端であろう。焼亡時期に近い年代に製作されたと考えられる五彩磁器から伝世品の天目茶碗、彫漆品等は、室町将軍に仕える同朋衆が編纂した『右台観左右帳記』に記された、中国伝来品に対する当時の価値観を反映したものと言えるだろう。

また、土器類に関して、今報告で産地不明とした焼締陶器群は、胎土がきめ細かく、焼成は非常に堅緻で、口縁部の形態にも同時期の国産焼締陶器に一般的でない特徴を持つ。こうした特徴はタイ・ベトナムなどの東南アジア系とされる陶器と類似しており、特に（図版5-98・99）の口縁端部の形状や体部からの折り返しは、ベトナム産長胴壺とされるものによく似る。九州各地

や、畿内では堺環濠都市遺跡、やや時代は下るが京都市内でも同様の特徴を示すベトナム産とされる土器が出土している。さらに、これら東南アジア系陶磁器は花入や水指など茶道具として多く使用されている²¹⁾。今回の調査では、天目茶碗や、茶入、あるいは茶壺として使用されたと思われる中国製の陶磁器類が多く出土しており、それらと共に東南アジア系の陶器が輸入された可能性は考え得る。現状では産地の特定は困難だが、現地での窯跡や遺跡の調査事例も増加してきていることから、今後の研究の進展によっては今回出土した産地不明の一群も、一部については東南アジア産である可能性が高まると考えられる。

(3) ガラス玉について

今回の調査で出土したガラス玉は、その大半に、2つが連なる・端が未調整・切断の際の傷が残るといった特徴が見られた(図90)。こうした調整の粗雑さから、製品が廃棄されたものではなく、製作途中のもの、もしくは失敗品である可能性が考えられる。これらのガラス玉と、ガラス原材料となる(図版40-201~204)の石英塊、製作過程で生成されるガラス種(205~207)と思われる遺物も出土している。このようなことから、ガラス玉に関しては、山科本願寺内部で生産されていた可能性を指摘したい。さらに、その生産は今回検出した焼成土壙1で行われた可能性が高いと考える。焼成土壙1はガラス玉が大量に出土した土壙3のすぐ北に位置し、内面にガラス玉と同成分の釉が付着する土師器の「へそ皿」(110)が出土している。この土器自体は二次焼成を受けておらず、溶けたガラス質が付着したものと考えられ、この土壙でのガラス溶解を示唆するものである。時代は遡るが、「富本銭」の生産で知られる奈良県の飛鳥池工房遺跡においてもガラス玉が生産されていたことが判明している²⁴⁾。炉の構造や規模は焼成土壙1と類似しており、この規模でも十分にガラスを溶解させ得ることがわかる。原料の石英塊やガラス種の出土も共通している。埴塙や轆の羽口などの出土はみられないが、これらの資料からみても、焼成土壙1あるいはその周囲で生産された可能性が高い。また、飛鳥池工房遺跡では同じ谷に位置する工房内で、金・銀・ガラスなどの宝飾品と鉄・銅・漆などの建築資材が生産されている。今回の調査でもガラス玉以外に、銅成分の付着した壁土や漆絞り布、未使用の鉄釘、金属滴、金銅製金具などが出土していることから、さらに周囲に工房が拡がる可能性も考えられる。寺域中心部における生産活動には疑問も残るが、ガラス玉や金銅製金具はおそらく瓔珞など仏具に使用されたものであり、そうした特殊品の生産に関しては寺の中心に取り込まれる形で行われていたと想定しておきたい。これまで、中世における日本のガラス生産の実態はほとんど明らかにされていなかったが²⁵⁾、今回の成果により、古代とほぼ変わらない方法で生産されていた可能性が高まった。今後の調査例の増加を期待する。

以上のように、今回の調査成果で、山科本願寺は中心堂宇の置かれた「御本寺」内部においても、細かな空間の使い分けが行われ、複雑な様相を示すことが明らかとなった。今年度だけでも5次にわたる調査が実施され、これまでの調査も含めデータが蓄積されてきている。それらを再

検討して全体像を解明していく必要がある。

最後になりましたが、今調査および報告にあたり下記の方々の御教示・御協力を得ました。記して感謝申し上げます。(五十音順/敬称略)

伊東史朗、尾野善裕、久保智康、小池富雄、肥塚隆保、櫻井敏雄、多比羅菜美子、永島明子、西川幸治、浜崎一志、広瀬時習、村上隆、弓場紀知

註

- 1) 岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 1985年
- 2) これに似た布掘掘形を持つ塀の遺構は、市内の上京遺跡や新町校地遺跡でも検出されている。
吉崎 伸『上京遺跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-9』(財)京都市埋蔵文化財研究所2004年
- 3) 漆器のスキャナーでの取り込みについては京都市考古資料館 原山充志氏に依頼した。
- 4) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 5) 詳細は5. ガラス玉の定性分析結果報告を参照
- 6) 塩見 浩『図解 技術の考古学』有斐閣 1988年、大田区立郷土博物館『ものづくりの考古学』東京美術 2001年
- 7) 金属製品については、京都国立博物館 久保智康氏に御教示いただいた。
- 8) 華籠とは、散華供養の際に僧侶が花を盛り捧げる籠のことである。『仏具大事典』鎌倉新書 1982年
- 9) 蒔絵については、徳川美術館 小池富雄氏、京都国立博物館 永島明子氏、根津美術館 多比羅菜美子氏に御教示をいただいた。また、蒔絵の手法に関しては、小松大秀・加藤 寛『漆芸品の鑑賞基礎知識』至文堂 1997年を参考にした。
- 10) 『宋元の美—伝来の漆器を中心に—』根津美術館 2004年、東京国立博物館・京都国立博物館・朝日新聞社編『南禅寺』朝日新聞社 2004年、徳川美術館編『徳川美術館名品集2 唐物漆器—中国・朝鮮・琉球—』徳川美術館 1997年、『中国の漆工芸』渋谷区立松濤美術館 1991年、『彫漆』徳川美術館・根津美術館 1984年
- 11) 「堆黒」については、徳川美術館 小池富雄氏、京都国立博物館 永島明子氏、根津美術館 多比羅菜美子氏に御教示いただいた。
- 12) 北野信彦氏に御教示いただいた。
- 13) 棚橋淳二「江戸時代の技法によるガラス素地の製造」『研究紀要』第31号 松蔭女子学院大学 松蔭女子学院短期大学 学術研究会 1989年
- 14) 奈良文化財研究所 村上 隆氏、京都国立博物館 久保智康氏に御教示いただいた。
- 15) 今回の調査にあたり、当時山科寺内町遺跡調査団の調査員であった現当研究所理事西川幸治氏には有益な御教示を得た。また、現滋賀県立大学教授浜崎一志氏には快く図面を提供していただいた。なお図94は、1974年調査時の平面図に記載された隣地境界線からおおよその位置を復元したもので、

国土座標に基づいた正確な位置関係ではないことを断っておく。

- 16) 前掲註1) 論文 p64
- 17) 宇治市白川金色院、奈良市大乘院などでこれと似た集石遺構が見つまっている。宇治市歴史資料館杉本宏氏、奈良文化財研究所高瀬要一氏はじめ日本庭園学会の方々に有益な御教示を得た。
- 18) 草野顕之「創建時山科本願寺の堂舎と土塁について」『中世の寺院体制と社会』吉川弘文館 2002年
- 19) 櫻井敏雄「第四章 本願寺の御亭に関する研究」『浄土真宗寺院の建築史的研究』財団法人法政大学出版社 1997年
- 20) 東京大學史料編纂所『大日本古記録 二水記 四』岩波書店 1997年
- 21) 金武正紀「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」、有島美江「博多出土のタイ・ベトナム陶磁」、以上『貿易陶磁研究』No.11 1991年、續伸一郎「堺環濠都市遺跡出土の貿易陶磁(1) - 出土陶器の分類を中心として」『貿易陶磁研究』No.10 1990年、續伸一郎「ベトナム製焼締長胴瓶・四耳壺について - 堺環濠都市遺跡の出土品を中心として」『貿易陶磁研究』No.13 1993年、能芝 勉「京都市内出土の東南アジア陶磁について - 柳馬場通竹屋町出土のベトナム陶磁を中心に -」『研究紀要』第4号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 22) 西田宏子「南蛮・島物 - 南海請来の茶陶 -」『東洋陶磁』23・24 1993年
- 23) 森本朝子「ベトナムの古窯址」『南蛮・島物 - 南海請来の茶陶 -』根津美術館 1993年、『昭和女子大学国際文化研究所紀要Vol.4 ベトナム・ホイアン考古学調査報告書』昭和女子大学国際文化研究所 1997年
- 24) 奈良県立万葉文化館常設展示図録 飛鳥藤原宮跡発掘調査部編『飛鳥池工房』財団法人奈良県万葉文化振興財団
- 25) 土屋良雄「日本のガラス小史」『日本のガラス』紫紅社 1987年

5. ガラス玉の定性分析結果報告

(1) はじめに

今回の山科本願寺跡の発掘調査では、調査区東側の焼成土壌1から仏具の一部と考えられる大小のガラス製小玉が多数検出された。中世段階の室町期に年代観が与えられるガラス製品例は、伝世品・出土品ともに稀少である。さらに、これら出土ガラス製小玉の資料群には、巻き付け法によるガラス加工が為された痕跡が明確に観察された。本報では、この大小の出土ガラス製小玉について資料非破壊による観察および分析調査を行ったので、その結果を報告する。なお、今回の発掘調査では内面に緑釉系のガラス質が融着した土師器皿1点(110)も検出されたので、これについても同様の調査報告を行なう。

(2) 調査方法

一般にガラス製品の製作は、珪石原料とアルカリ硝石、着色材料などを溶解混合して基本的なガラス種を作成する粗煮～精煮工程と、このガラス種を再度加熱して柔軟化させ、(a) 芯材に巻き付けて小玉成形し、表面研磨の調整を行ない小玉の製品に仕上げる、もしくは(b) 型吹き成形や切子カットなどを行ないガラス製品に仕上げる、などの成型工程から成り立っている。

本報では、まず器形や色系統分類のためのガラス色相などを表面観察した後、(1) 個々の資料の基本的なガラス色相と加工調整の工程を知るための実体顕微鏡による微小部観察、(2) 原材料や着色材料などのガラス組成を知るための蛍光X線分析装置による資料非破壊の定性分析、にわけた観察および分析調査を行った。以下、項目別に調査方法を記す。

出土ガラス製小玉の微小部観察

基本的な個々のガラス製小玉の色相・色系統の把握と、ガラスの加工調整に関する微小部観察には、(株)島津製作所STZ-40TBIT型デジタルマイクロスコープを使用して10～100倍の拡大観察を行った。さらに、必要箇所については、同機器接続の(株)ミノルタ製デジタルカメラで撮影記録した。

ガラス原材料や着色材料などの定性分析

ガラス製小玉の定性分析は、個々の資料を専用の分析試料セル内に装着させ、(株)堀場製作所MESA-500型の蛍光X線分析装置に非破壊で設置して、電子線(X線)を照射し、特性X線を検出した。

検出される元素のうち、Na(ナトリウム)、Mg(マグネシウム)、Al(アルミニウム)、Si(ケイ素)、S(硫黄)、K(カリウム)、Ca(カルシウム)、Ti(チタン)、Mn(マンガン)、Fe(鉄)、Co(コバルト)、Cu(銅)、Zn(亜鉛)、As(砒素)、Sn(スズ)、Pb(鉛)の二次電子線強度をカウントした。なお、分析設定時間は600秒、試料室内は真空状態、励起電圧は15kV、管電流は300 μ A、検出強度は10,000～100,000cps、定量補正法はスタンダードレスの設定条件である。

なお、各種ガラスの色相部分が融着して固化したブロック資料1点については(財)元興寺文化財研究所の(株)リガクSEA-5230型の微小領域測定用蛍光X線分析装置を使用させていただいた。試料像でブロック資料内の分析箇所を確認しながらの分析設定時間は300秒、試料室内は大気状態、コリメータ1.8mm径、励起電圧は50kV、管電流は25~50 μ Aの設定条件である。

(3) 調査結果 (図96・97)

今回調査を行った出土ガラス製小玉は、表面観察により基本的なガラス色相の色系統分類がなされた、(a) 乳白色 (White) 系 2点、(b) 乳濁した青色 (Blue) 系 5点、(c) 透明感がある紫色 (Purple) 系 1点、(d) 透明感のある緑色もしくは萌黄 (Green) 系 8点、(e) 透明感がある黄色 (Yellow) 系 4点、(f) 黒色 (Black) 系 5点の25点、大型の玉類では (g) 透明感がある無色 (Color less White) 系 1点、(h) 透明感がある青色 (Color less Blue) 系 2点、の計3点の28点、さらに各種ガラスの色相部分が融着して固化したブロック資料1点とガラス種と考えられる小塊片資料1点を加えた合計30資料である。これらの調査対象資料について一連の観察および分析調査の結果、以下の知見を得た。

(1) 基本的なガラス製小玉の色相・色系統は、事前の表面観察でも確認された、白色もしくは乳白色 (White) 系、乳濁した青色 (Blue) 系、透明感がある紫色 (Purple) 系、透明感のある緑色もしくは萌黄色 (Green) 系、透明感がある黄色 (Yellow) 系、透明感がある無色 (Color less White) 系、透明感がある青色 (Color less Blue) 系の少なくとも7種類であった。

(2) 黒色 (Black) 系のガラス製小玉には、2つの小玉が比熱を受けて癒着した状態の資料や、細部観察では黒色の部分と本来の色相であると考えられる青色や黄色、紫色が島状態で観察される資料もあり、いずれもオリジナルの黒色ではなく、何らかの比熱を受けてガラス表面が黒色化しているものと理解した。

(3) 主に乳濁した青色 (Blue) 系の小型のガラス製小玉を中心として、加工調整の痕跡であるガラスの芯棒への巻き付けや小玉を切り出すためにつけられたと考えられる鋭利な溝のカット面が観察された。一方、大型で透明感がある青色 (Color less Blue) 系小玉の穿孔内面には、芯棒からの引き抜き痕跡なども観察された。

(4) 各種ガラスの色相部分が融着して固化したブロック資料は、発泡痕跡を多く含む白色もしくは乳白色 (White) 系、透明感がある無色 (Color less White) 系、透明感のある緑色もしくは萌黄 (Green) 系のガラスとともに、ガラス製小玉では未確認の赤褐色もしくは紅色 (Reddish Brown) 系の色相を呈するガラス質部分も確認された。これと同様の色相は、ガラス種と考えられる資料にも見出された。

(5) 蛍光X線分析によるガラス原材料の定性分析の結果、ガラス製小玉はPb(鉛)元素の検出量の有無により、アルカリ珪酸塩ガラス(カリガラス)と、鉛珪酸塩ガラスの大きく2種類に分類された。前者は大型の小玉3点と黒色を呈する小型の小玉1点の計4点、残り26点の小型のガラス製小玉は後者の鉛珪酸塩ガラスであり主体を占める。なお、ガラス種およびブロック資料

は、いずれの色相部分も鉛珪酸塩ガラスであった。

(6) 色相別のガラス製小玉のガラス成分組成は、それぞれ大きく異なる特徴を有する。これは着色材料の違いによるものであろうが、同色相系統の資料群内ではほぼ同一の分析結果となった。今回、分析に供した小型のガラス製小玉資料はあくまでも各色相別グループ内からランダムに抽出している。そのため、それぞれのグループ別のガラス製小玉の加工に際して、ほぼ同一の原材料である粗煮～精煮のガラス種を起源としている可能性を積極的に否定する材料は見出されなかった。

(7) 通常、近世以降の白色もしくは乳白色系ガラスの着色材料には、石灰；カルシウム (Ca) やスズ (Sn) が使用されるが、今回の資料では積極的にこれらの元素は確認されず、若干の鉄 (Fe) 元素の混入が見出された。これらは、ガラス生産過程の鉄坩堝由来と考えられる (図97-1、2)。

(8) 乳濁した青色 (Blue) 系ガラスでは、やや強い銅 (Cu) 元素のピークにやや弱い鉄 (Fe) 元素のピークが共存する特徴を有するが、これは着色材料である酸化銅由来と考えられる。同様の成分分析の結果は、同じ色相を有する中世段階の相国寺跡出土ガラス玉や、色ガラス復元実験でも得られている (図97-3)。

(9) 透明感がある青色 (Color less Blue) 系ガラスでも、乳濁した青色 (Blue) 系ガラス同様、着色材料には酸化銅を使用したと考えられるが、アルカリガラスである点が大きく異なる (図97-4)。

(10) 透明感がある紫色 (Purple) 系ガラスでは、マンガン (Mn) 元素が特徴的に検出された。これは着色材料である紫呉須 (酸化マンガン) 由来と考えられる。この点も、近世以降の出土ガラス製品や色ガラスの復元実験の成分分析結果でも裏付けられる (図97-5)。

(11) 透明感がある黄色 (Yellow) 系ガラスでは、強い鉄 (Fe) 元素のピークが検出された。これは、着色材料である酸化鉄由来と考えられる。この点も、近世以降の出土ガラス製品や色ガラスの復元実験の成分分析結果でも裏付けられる (図97-6)。

(12) 透明感のある緑色もしくは萌黄 (Green) 系ガラスでは、強い鉄 (Fe) 元素のピークに若干弱い銅 (Cu) 元素のピークが共存し、カリウム (K) よりカルシウム (Ca) 元素が優勢である特徴を持つ。これは、酸化銅由来の青色の色相と鉄由来の黄色の色相が混合して緑色を呈するためと考えられる (図97-7)。

(13) 各種ガラスの色相部分が融着して固化したブロック資料で確認された赤褐色もしくは紅褐色 (Reddish Brown) 系ガラスでは、強い鉄 (Fe) 元素のピークと、若干弱い銅 (Cu) 元素のピークが共存して検出された。通常、赤色系のガラスの着色材料には、ベンガラである酸化第二鉄もしくは銅コロイドを使用することが知られる。本資料の場合、前者の酸化鉄系のベンガラ由来の可能性も高いが後者の銅コロイドも共存する可能性も否定できない (図97-8)。

なお、ガラス種と考えられる小塊片資料も同様の分析結果であった。

(14) 黒色 (Black) 系ガラスは、それぞれ異なる状況が見出された。今回分析した5点は、それぞれ乳濁した青色 (Blue) 系、透明感がある紫色 (Purple) 系、透明感のある緑色もしくは萌

黄色 (Green) 系、透明感がある黄色 (Yellow) 系の4種類の小玉が比熱を受けて黒変化した結果であろう。

(15) 焼成土壙1から検出された土師器皿(110)の内面に融着した緑釉系のやや透明感がある緑色系の色相を呈するガラス質の成分分析を行った。分析の結果、シリカ(Si)元素とともに、鉛(Pb)元素の強いピークが見出されたことから鉛珪酸塩ガラスであることがわかった。さらに、比較的強い銅(Cu)元素のピークとこれに付随すると考

えられる鉄(Fe)元素のピークが並存して確認された。そのため、緑色系色相を獲得するための着色材料には、やや銅成分の含有量が高い酸化銅(CuO)が使用されたものと推定した。

[スペクトル]

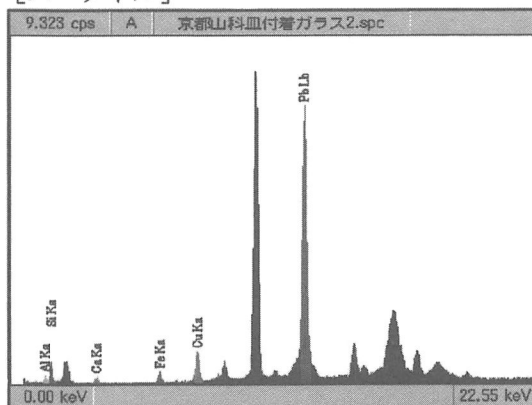
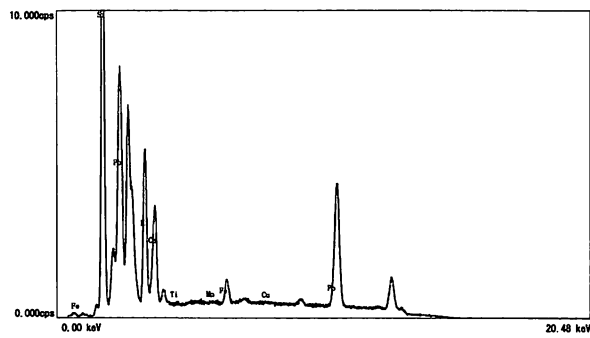


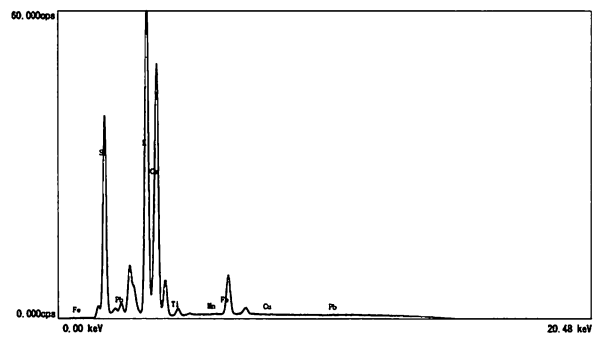
図96 土師器皿(110) 蛍光X線分析グラフ

引用文献

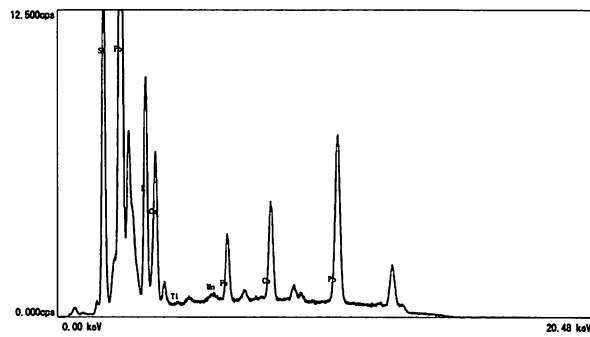
- 1 土屋良雄『日本のガラス』紫紅社 1987年
- 2 山崎一雄『古文化財の科学』思文閣出版 1987年
- 3 棚橋淳二「江戸時代の技法によるガラス素地の製造」『研究紀要 第31号』松蔭女子学院大学・松蔭女子学院短期大学 学術研究会 1989年
- 4 肥塚隆保『日本で出土した古代ガラスの歴史の変遷に関する科学的研究』東京藝術大学 1997年
- 5 北野信彦「出土ガラス製品の定性分析と保存に関する基礎的調査『平安京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所 2004年



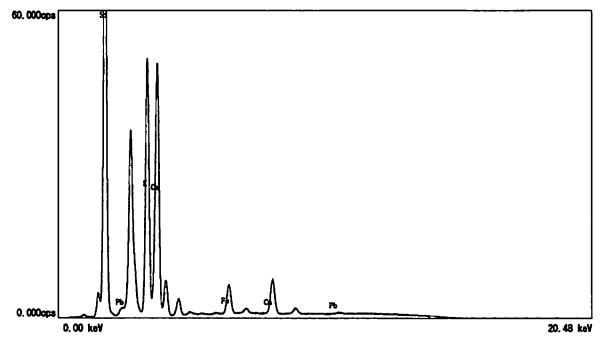
1.白色 (White)



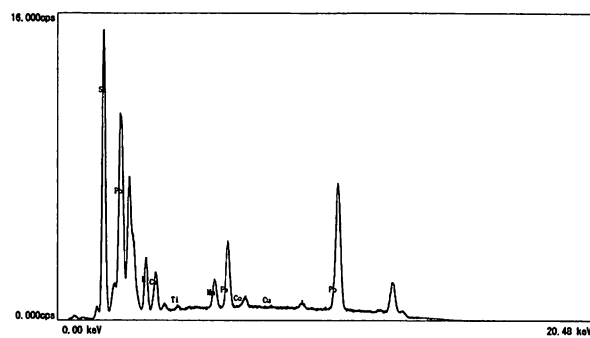
2.白色 (Color Less White)



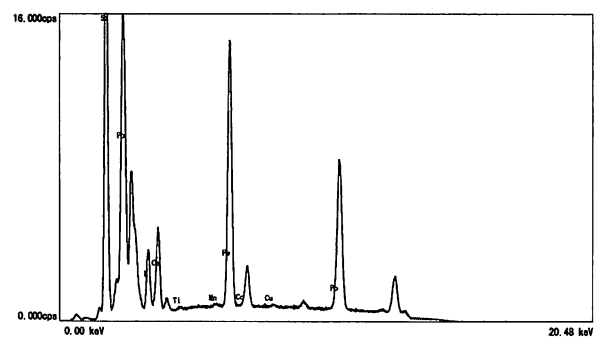
3.青色 (Blue)



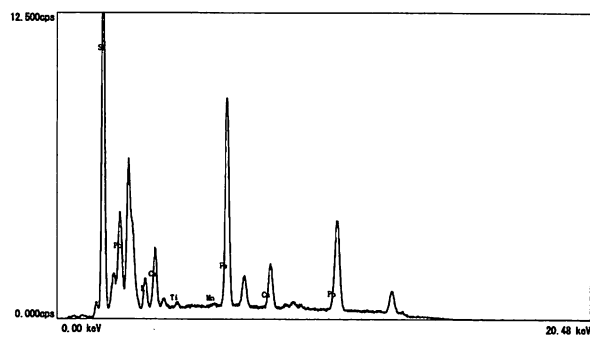
4.青色 (Color Less Blue)



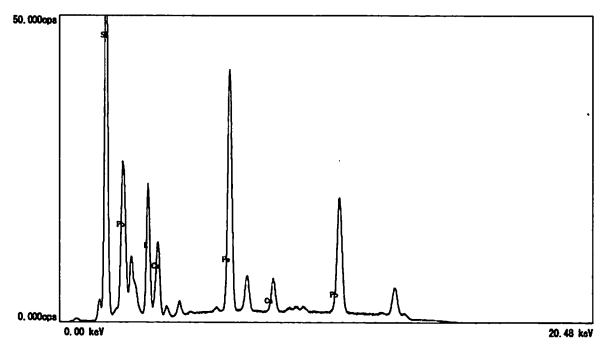
5.紫色 (Purple)



6.黄色 (Yellow)



7.緑色 (Green)



8.ガラスブロック赤色 (Reddish Brown)

図97 ガラス玉蛍光X線分析グラフ

報告書抄録

ふりがな	きょうとしないいせきはつつちょうさほうこく							
書名	京都市内遺跡発掘調査報告 平成17年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	南出俊彦・布川豊治・北野信彦・長戸満男・小椋山一良・清藤玲子・柏田有香							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	〒602-8435 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1 TEL 075-415-0521							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-0925 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488 TEL 075-222-3108							
発行年月日	西暦2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんぐうなかつかさしょうあと 平安宮中務省跡	きょうとしかみぎょうくたけやまちどおり 京都市上京区竹屋町通 せんぼんひがしひるしゅげいちよう 千本東入主税町 1127-4	26100		35度 00分 53秒	135度 44分 48秒	2005/6/6～ 6/24	44m ²	小規模共同 住宅建設
きたしらかわはいじあと 北白川麿寺跡	きょうとしききょうくきたしらかわ 京都市上京区北白川 だいどうちよう 大堂町55-1他	26100	397	35度 01分 49秒	135度 47分 42秒	2005/11/10～ 12/8	108m ²	共同住宅 建設
かみぎょういせき 上京遺跡	きょうとしかみぎょうくおがわどおり 京都市上京区小川通 てらのうちあがるほんぼうじまちよう 寺之内上る本法寺前町 613	26100	224	35度 01分 54秒	135度 45分 23秒	2005/7/11～ 8/8	92m ²	個人住宅 建設
やましなほんがんじあと 山科本願寺跡(1) 10次調査	きょうとしやましなくにし 京都市山科区西野 さぎちようちよう 左義長町13-2	26100	626	34度 58分 39秒	135度 48分 41秒	2005/1/17～ 3/18	320m ²	個人住宅兼 共同住宅 建設
やましなほんがんじあと 山科本願寺跡(2) 11次調査	きょうとしやましなくにし 京都市山科区西野 さんかいちよう 山階町30	26100	626	34度 58分 42秒	135度 48分 41秒	2005/3/1～ 3/15	140m ²	擁壁工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安宮中務省跡	都城跡	平安時代	掘立柱建物・土壇・ 築地遺構	土師器・須恵器・緑釉陶器 ・瓦		中務省西面築地を検出		
北白川麿寺跡	寺院跡	奈良時代	回廊・瓦溜	土師器・須恵器		北白川麿寺の西面回廊 と南面回廊を検出		
上京遺跡	都城跡	室町時代	溝・土壇・井戸	土師器・茶陶・石製品		室町時代の区画溝を検 出		
山科本願寺跡(1) 10次調査	寺院跡	室町時代	礎石建物・塀・堀	土師器・石仏		堀の掘り直しと建物・ 塀を検出		
山科本願寺跡(2) 11次調査	寺院跡	室町時代	土塁	土師器		土塁基底部の構築状況 を調査		

ふりがな	きょうとしなにいせきはつつつちょうさほうこく							
書名	京都市内遺跡発掘調査報告 平成17年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	南出俊彦・布川豊治・北野信彦・長戸満男・小檜山一良・清藤玲子・柏田有香							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	〒602-8435 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1 TEL 075-415-0521							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-0925 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488 TEL 075-222-3108							
発行年月日	西暦2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やましなほんがんにあつと 山科本願寺跡(3) 13次調査	きょうとし やましなくにしの 京都市山科区西野 山階町30	26100	626	34度 58分 43秒	135度 48分 42秒	2005/5/30~ 7/2	160㎡	駐車機械 設置
やましなほんがんにあつと 山科本願寺跡(4) 14次調査	きょうとし やましなくにしの 京都市山科区西野 さんかいちやう 山階町28-5、28-6	26100	626	34度 58分 43秒	135度 48分 44秒	2005/11/11~ 12/16	150㎡	木造2階建 共同住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
山科本願寺跡(3) 13次調査	寺院跡	室町時代	土塁・泉状遺構・暗渠	土師器・輸入陶磁器・国産 陶器・瓦		土塁の変遷や泉状遺構 ・暗渠を検出		
山科本願寺跡(4) 14次調査	寺院跡	室町時代	礎石建物・井戸・土壌 ・庭園遺構	土師器・輸入陶磁器・国産 陶器・埴・金属製品		山科本願寺焼き討ちに伴 う焼土層を検出、輸入陶 磁器やガラス玉など出土		

版 圖



1 調査区前景 (東から)



2 土壙3 焼土堆積状況 (北から)



1 玉類



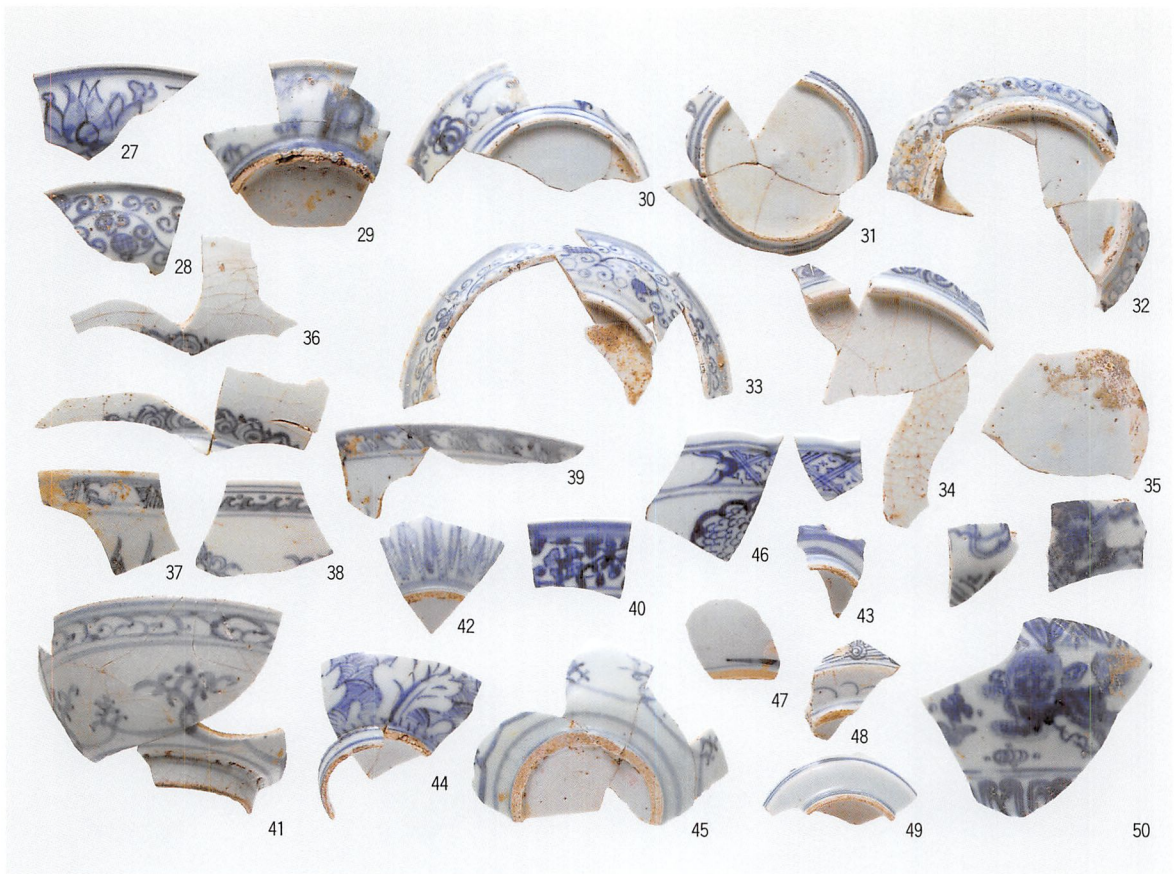
2 多彩磁器



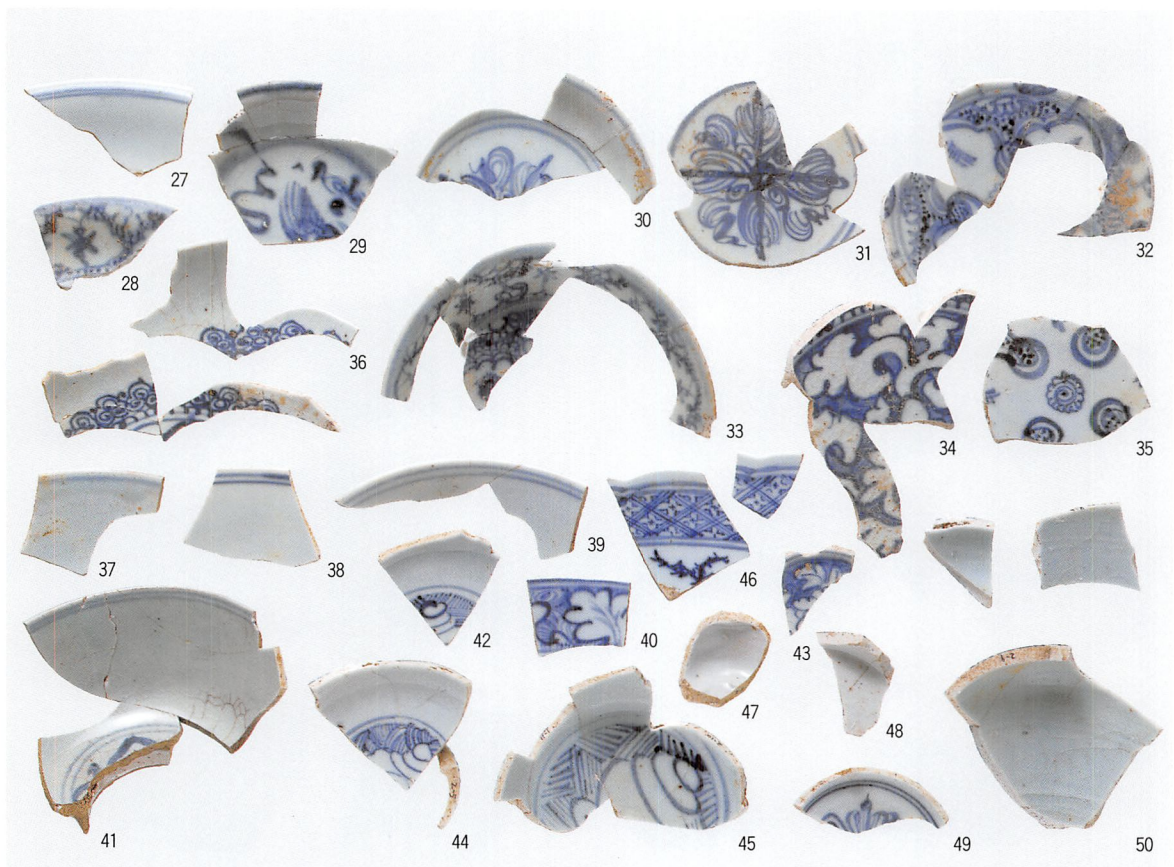
1 青磁外面



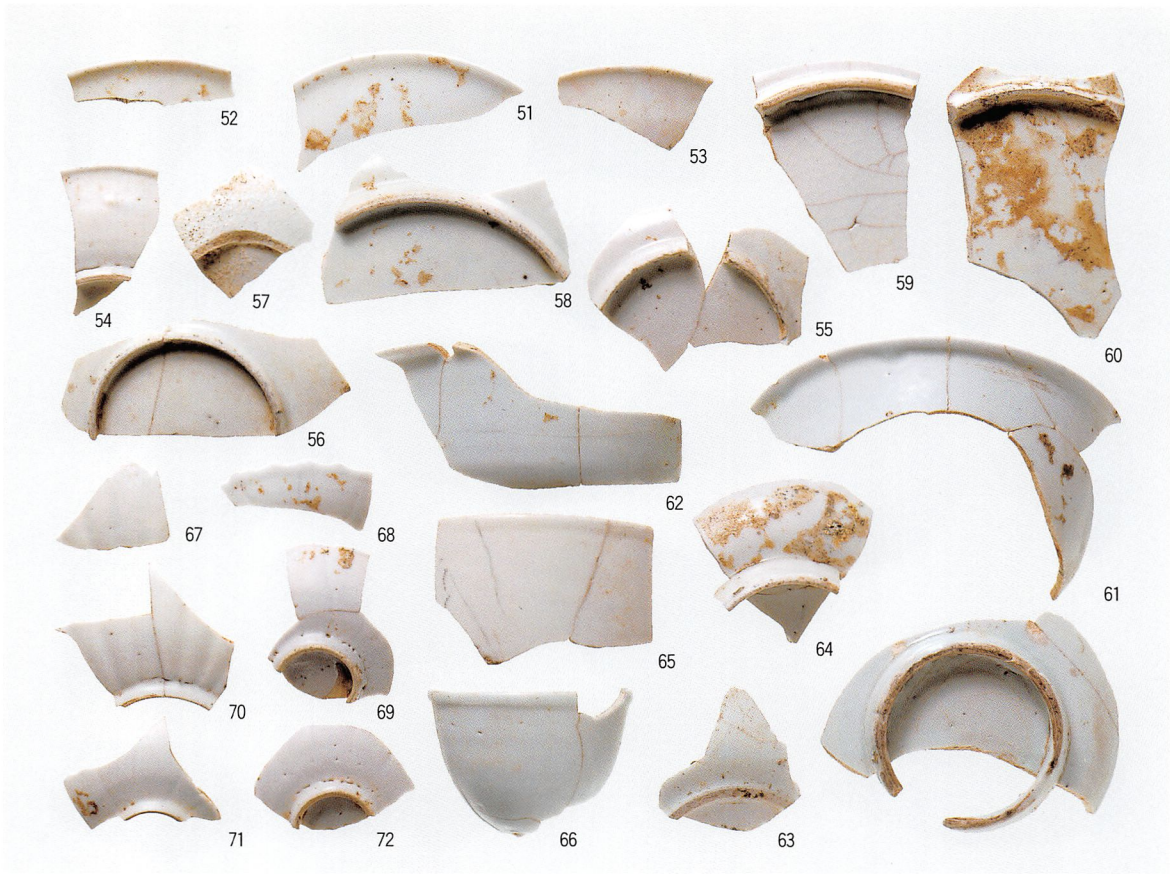
2 青磁内面



1 染付外面



2 染付内面



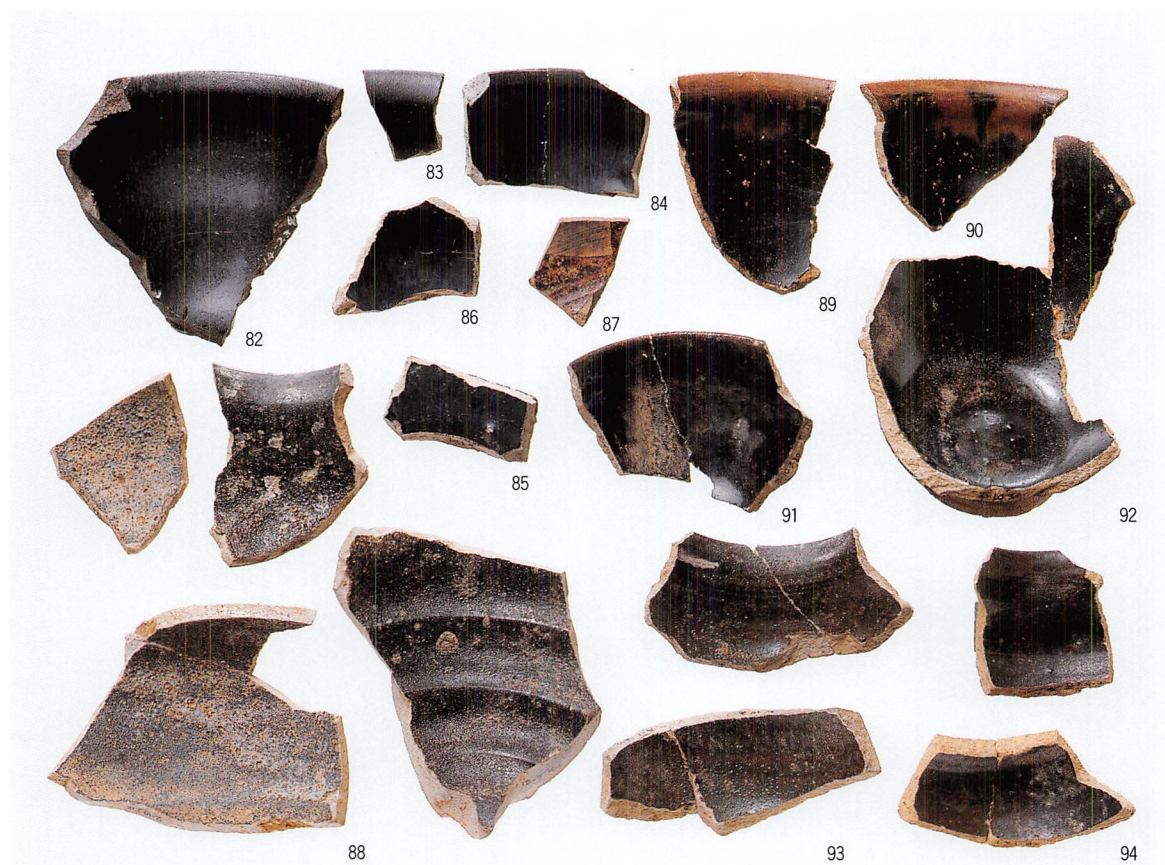
1 白磁



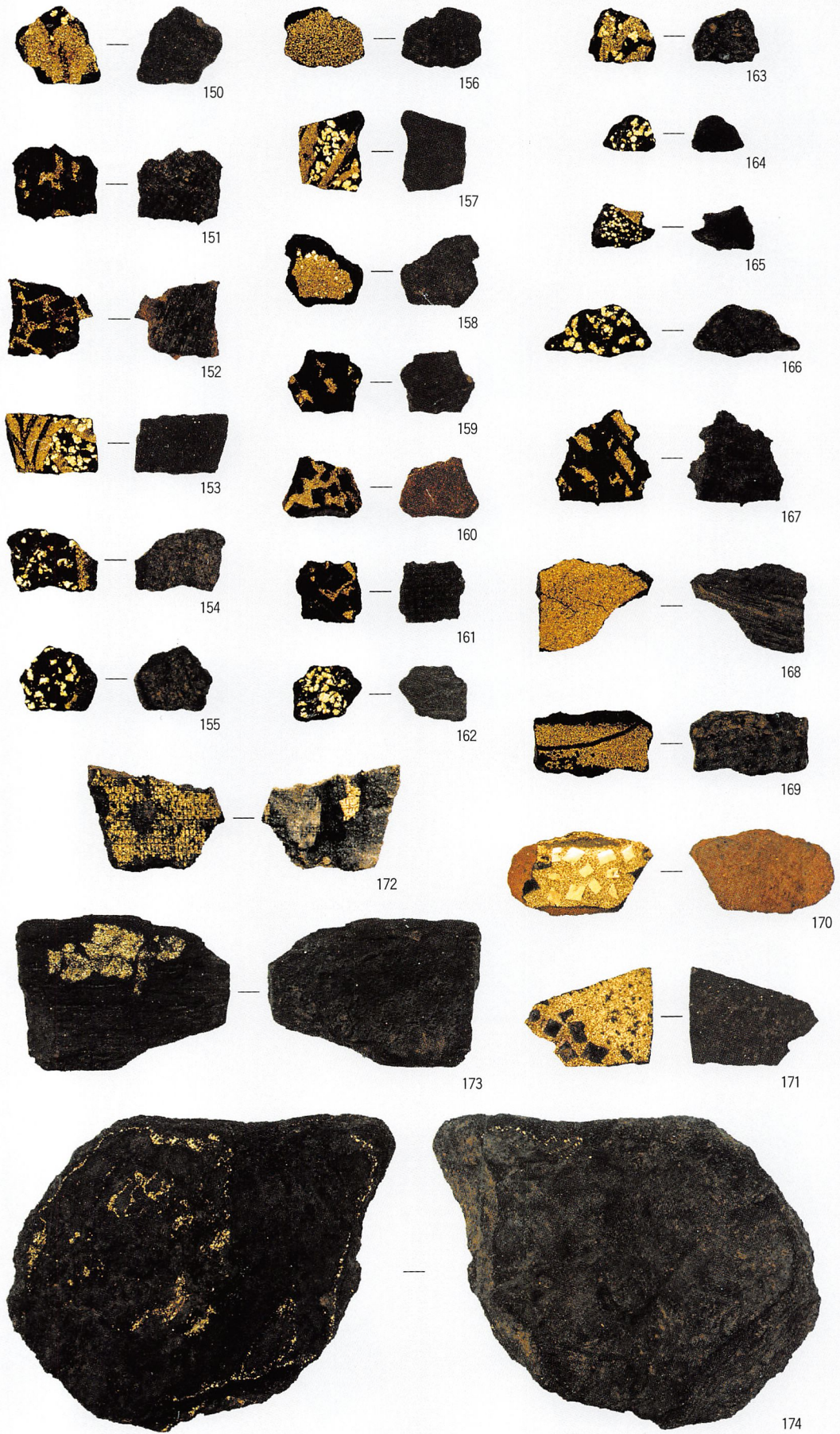
2 焼締・施釉陶器



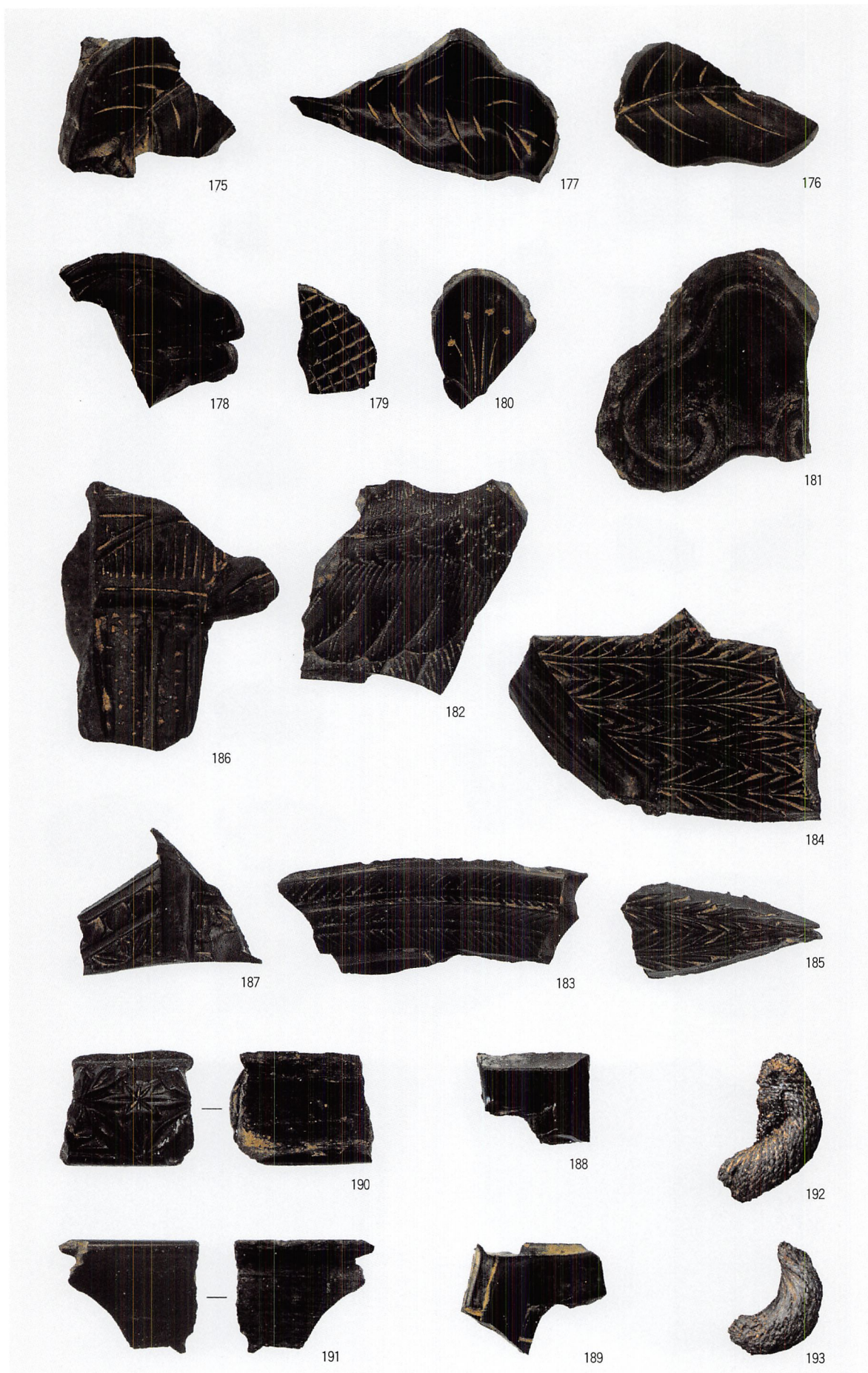
1 鉄釉陶器外面



2 鉄釉陶器内面



蒔絵 (× 3)



堆黒・漆製品 (× 3)



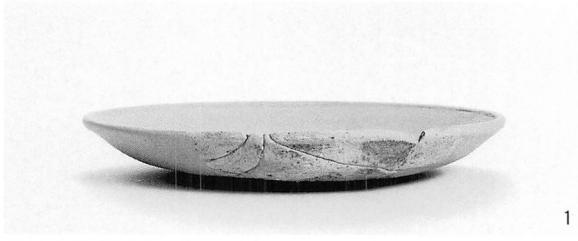
1 1区平安時代建物全景（北から）



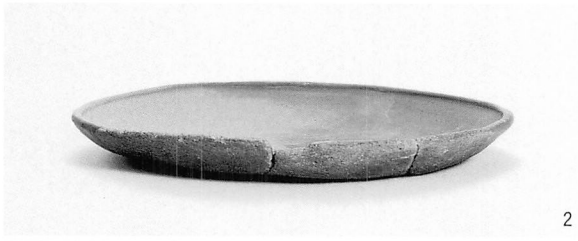
2 1区平安時代前期土坑群（北から）



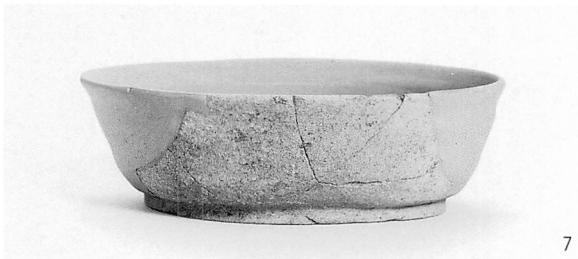
3 2区平安時代遺構面全景（東から）



1



2



7



9



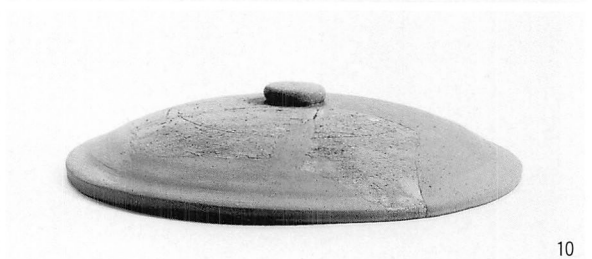
14



15



3



10



13



18



19



20



1 第1面全景（東から）



2 南面回廊北端検出状況（東から）



3 礎石据付穴検出状況（北から）



1 第2面全景（手前は未掘、東から）



2 南拡張区全景（東から）



1 礎石根固め検出状況（北から）



2 東壁断割断面（北西から）



3 セクション断面D-D'（西から）



1 北壁西半断面（南東から）



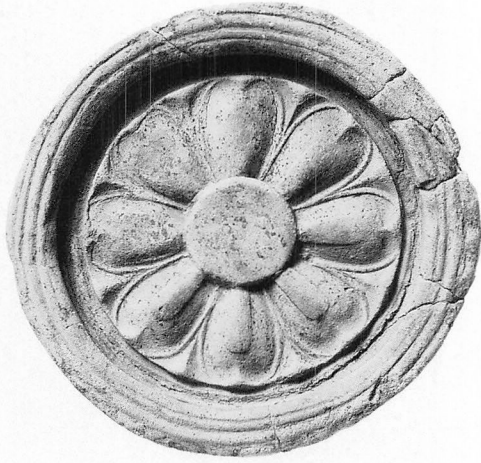
2 北壁西面回廊基壇断断面（南東から）



1 南壁南面回廊・西面回廊基壇断割断面（北東から）



2 南壁南面回廊・西面回廊基壇版築状況（北から）



1



3



4



5



8



7



9



10



14



11



13



12



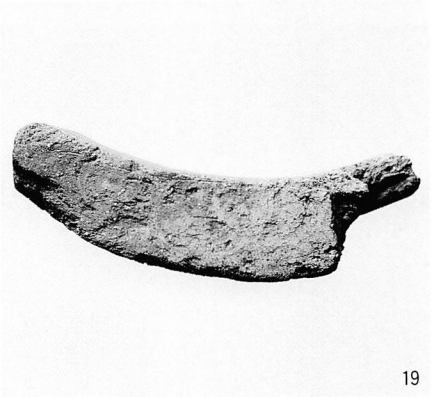
16



15

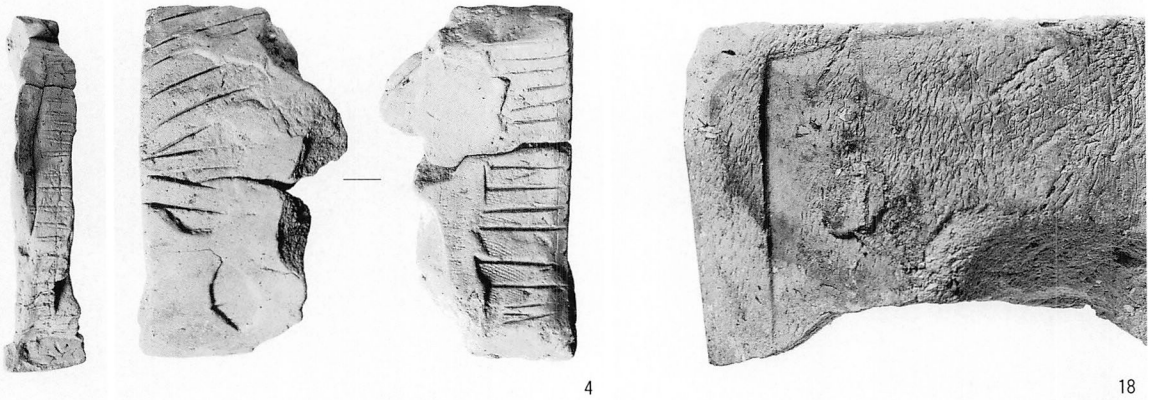


18



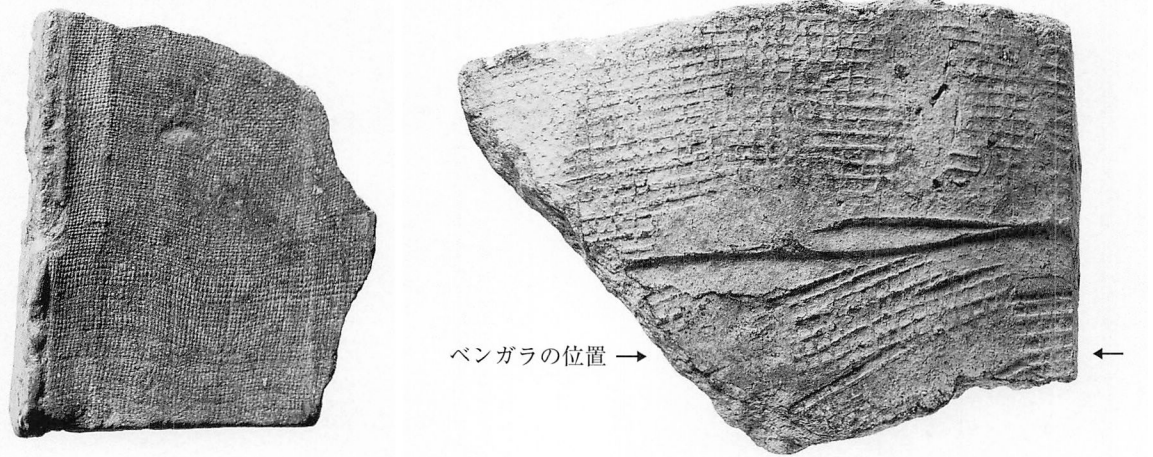
19

軒平瓦



4

18



ベンガラの位置 →

10

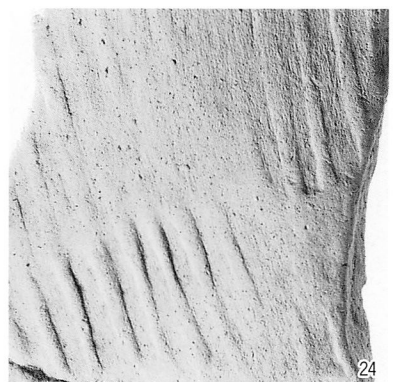
8



22



23



24



25

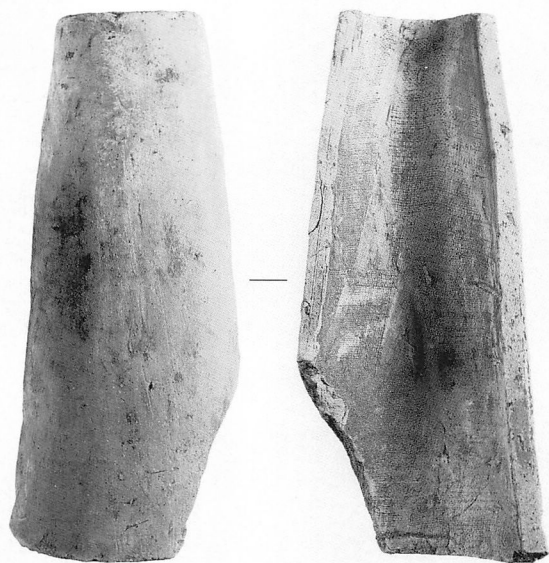


26

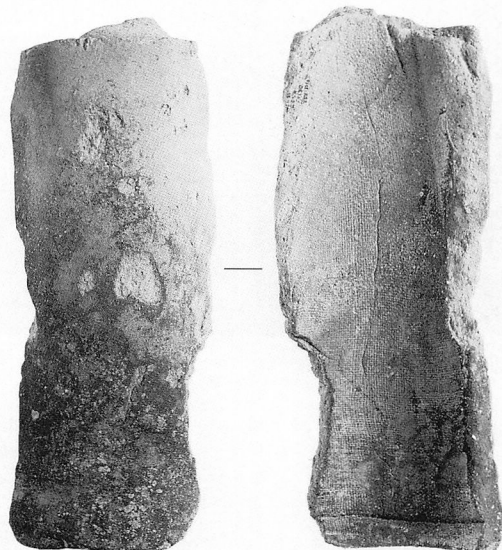


27

軒瓦の技法・平瓦の叩き



20



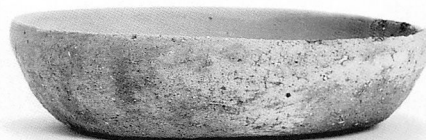
21



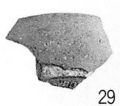
28



37



34



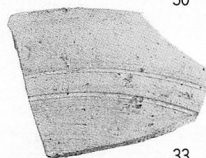
29



30



32



33



36



35



31



40



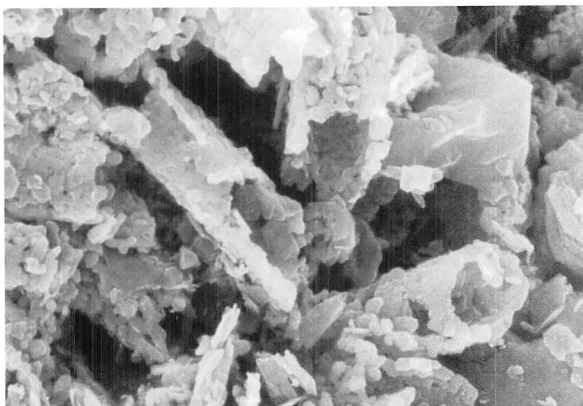
39



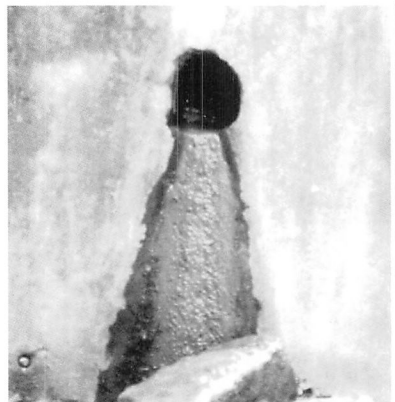
38



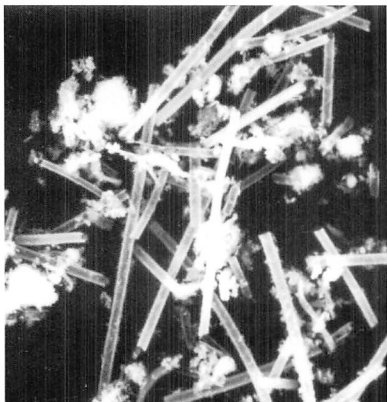
1 パイプ状ベンガラ



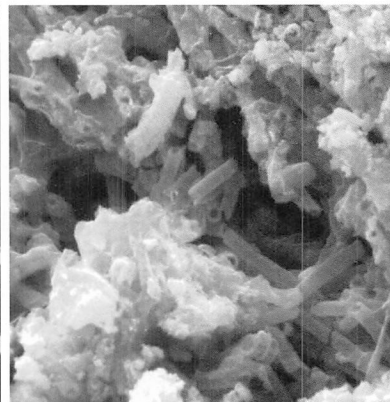
2 パイプ状ベンガラ拡大



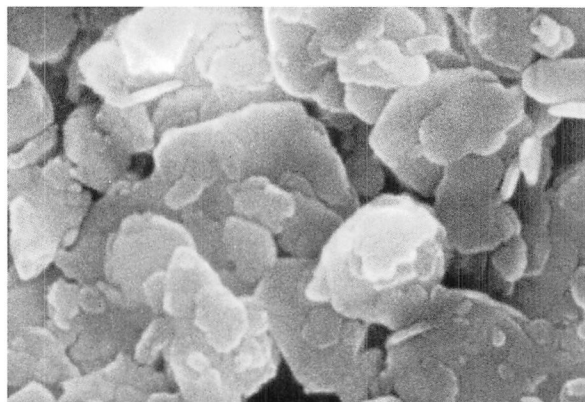
3 現代の鉄バクテリア



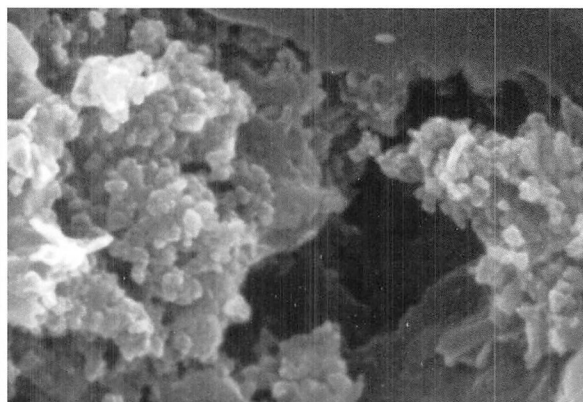
4 鉄バクテリア拡大



5 パイプ状ベンガラ



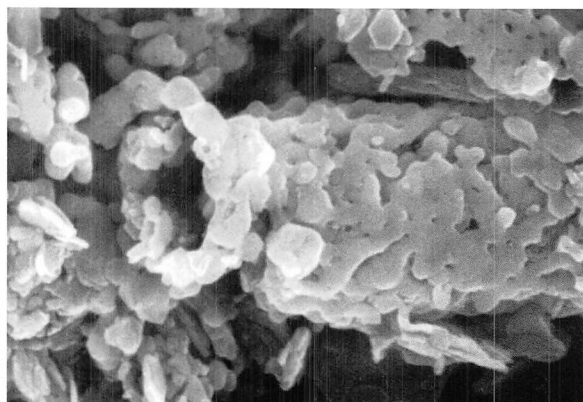
6 赤土ベンガラ



7 丹土ベンガラ平等院鳳凰堂



8 尼寺廃寺心礎



9 尼寺廃寺心礎の拡大



1 調査区全景（西から）



2 溝9（北から）



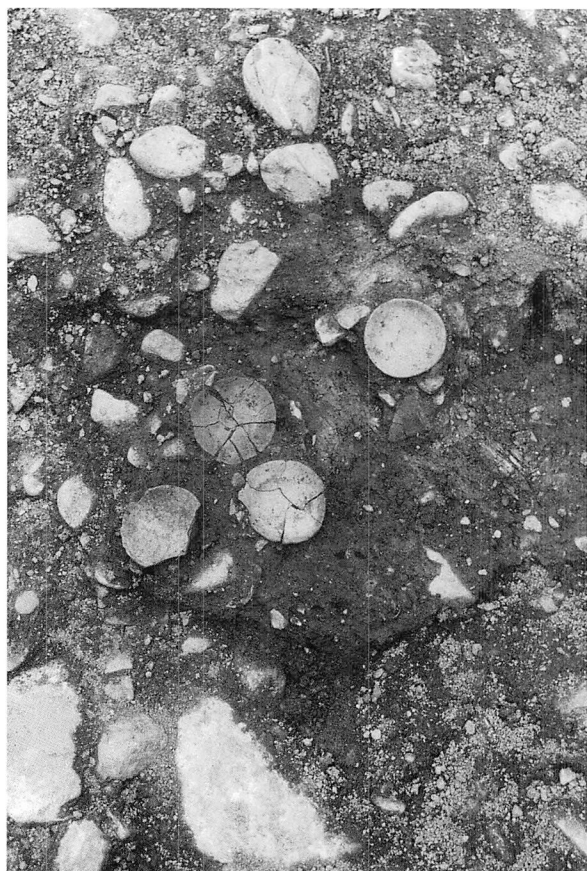
3 土壙5 土器出土状況（東から）



1 石組43 (西から)



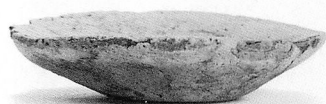
2 石室6 (北東から)



3 落込1 土器出土状況 (南東から)



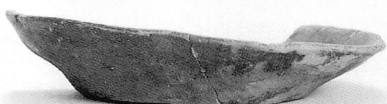
4 埋納遺構7 土器出土状況 (東から)



1



18



2



29



3



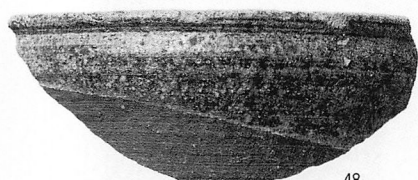
34



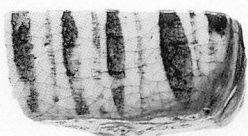
44



45



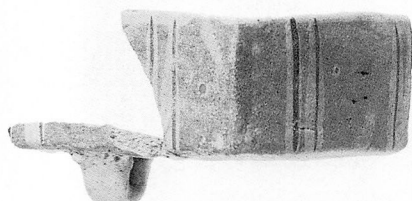
48



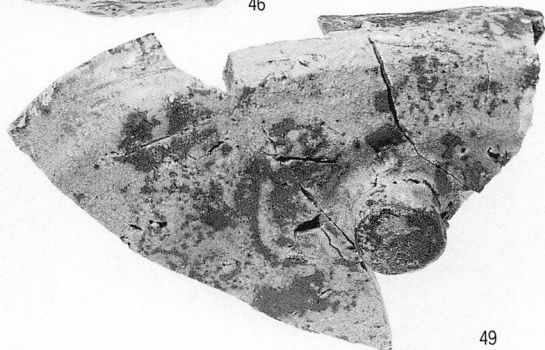
46



50



47



49



51



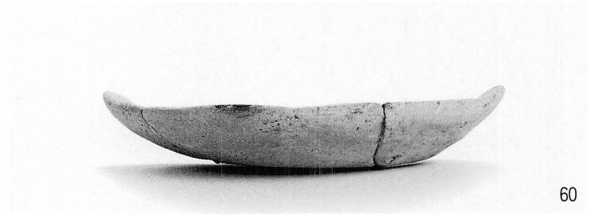
52



77



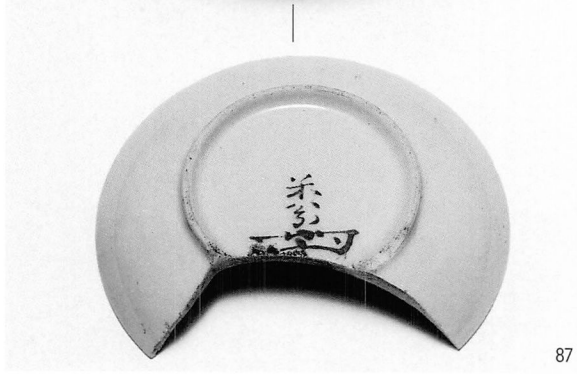
54



60



88



87



78



86



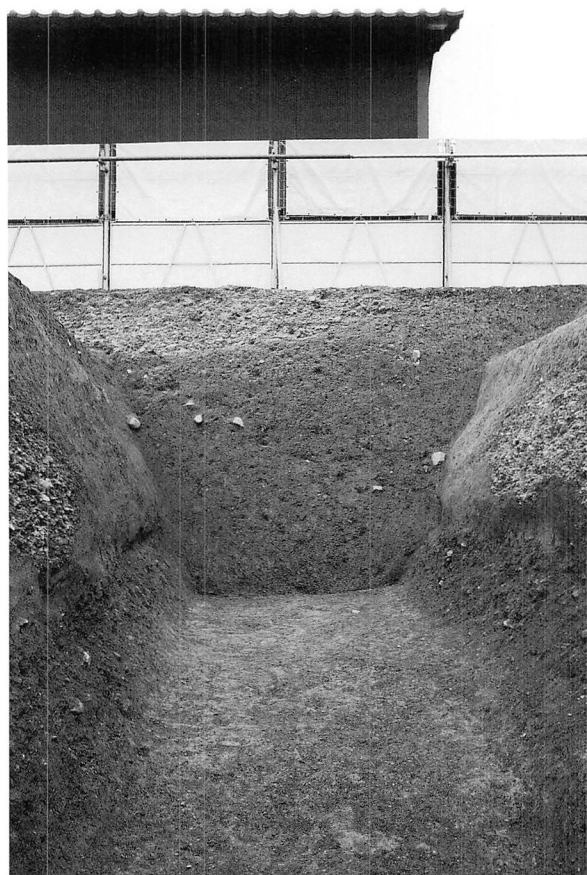
85



1 1区全景(北東から)



2 2区全景(北から)



1 1区堀8断面(東から)



2 1区堀9断面(北から)



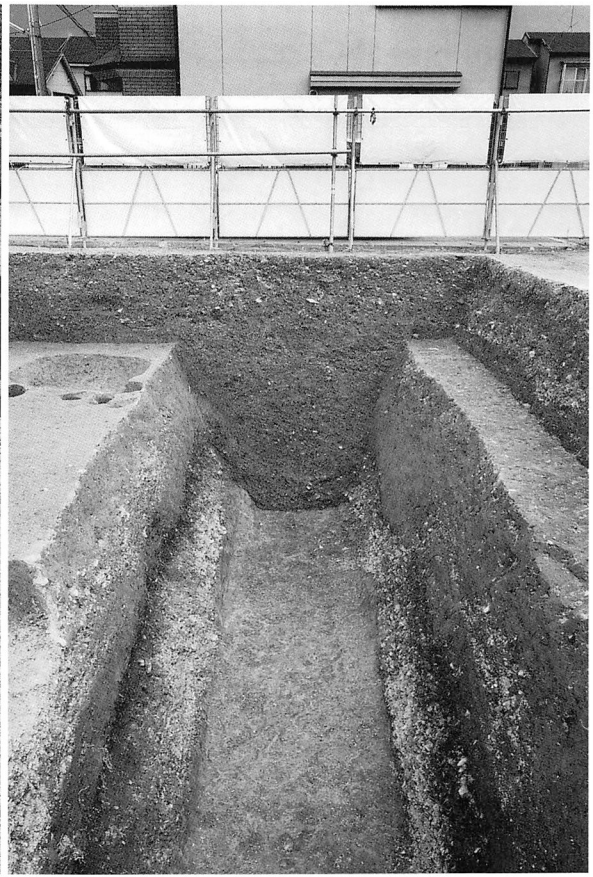
3 1・2区堀7断面(西から)



4 1区堀22(西から)



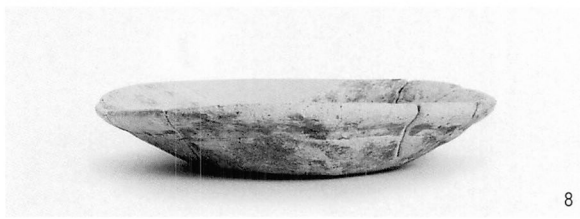
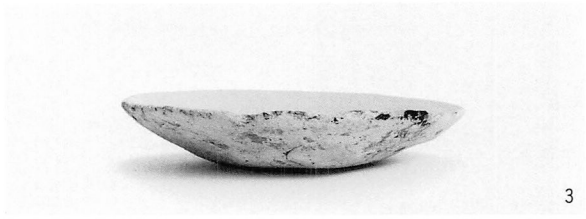
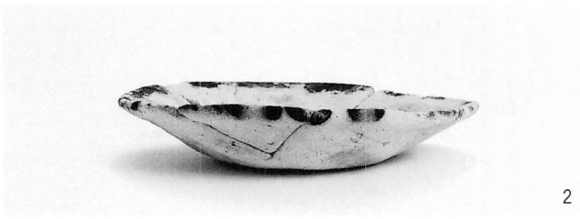
1 1区建物23(北西から)



2 2区堀9断面(北から)

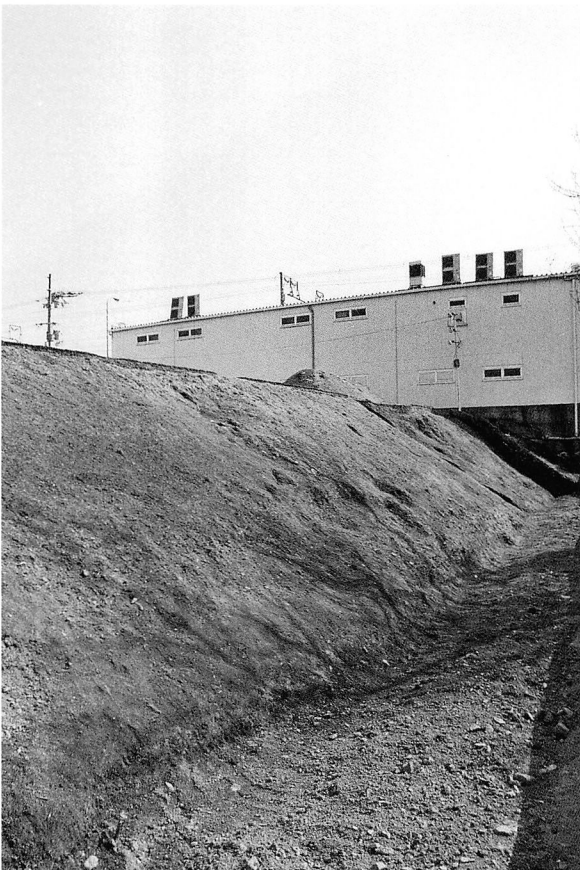


3 2区磔敷き92(南東から)





1 調査区全景 (南西から)



2 土塁 (北西から)



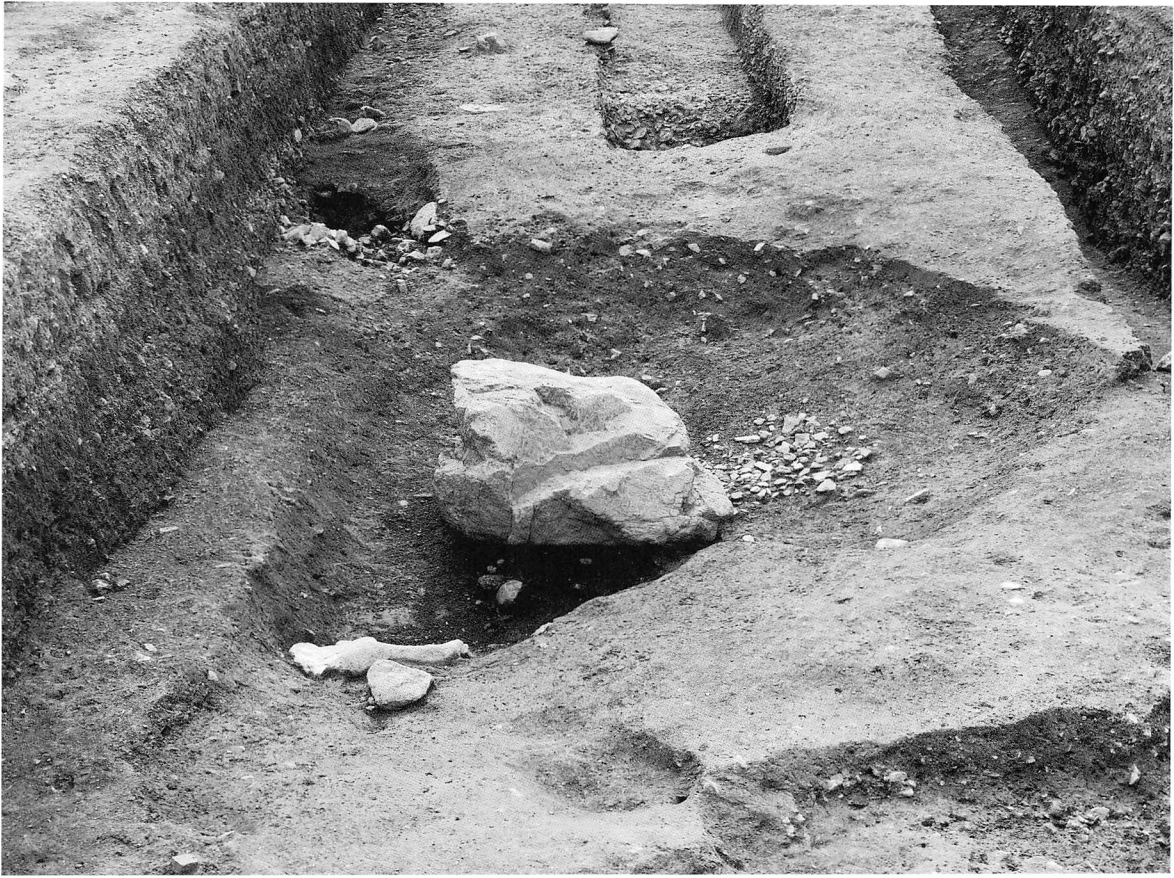
3 断割り北壁断面 (南西から)



1 A区第1面全景(南西から)



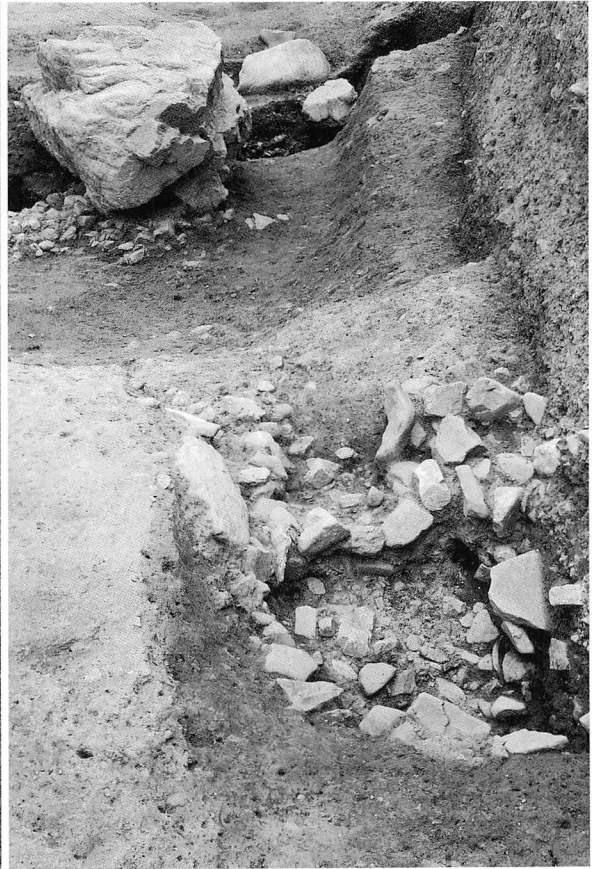
2 A区第2面全景(東から)



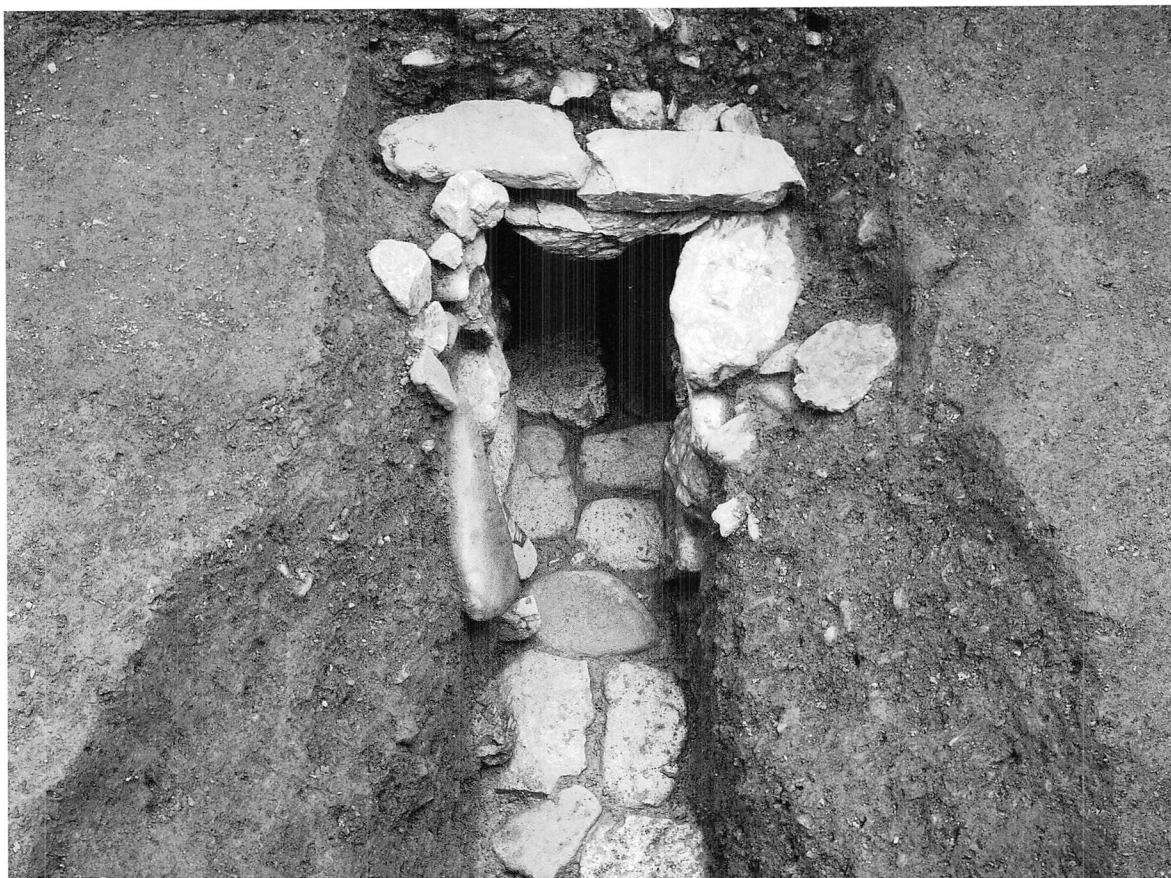
1 泉状遺構 6 (東から)



2 土器集中部 7 (北から)



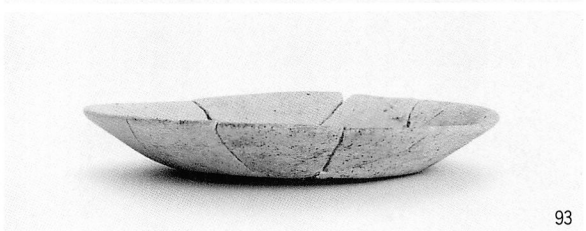
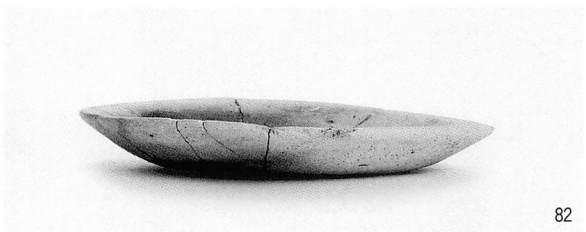
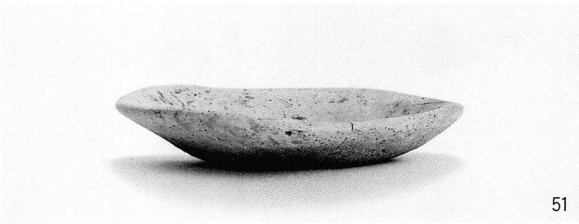
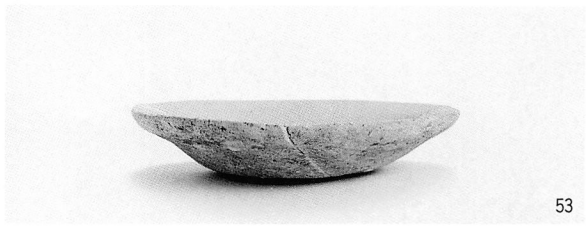
3 排水溝 8 (西から)



1 B区暗渠 (西から)



2 B区暗渠内部 (西から)





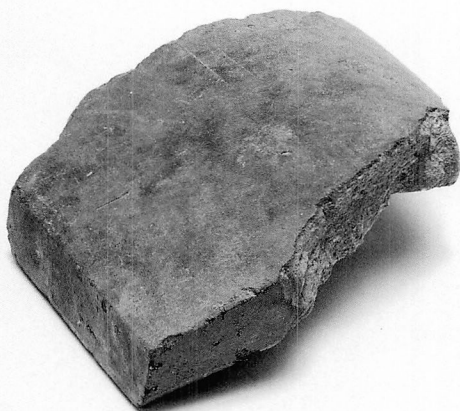
119



120



123



124



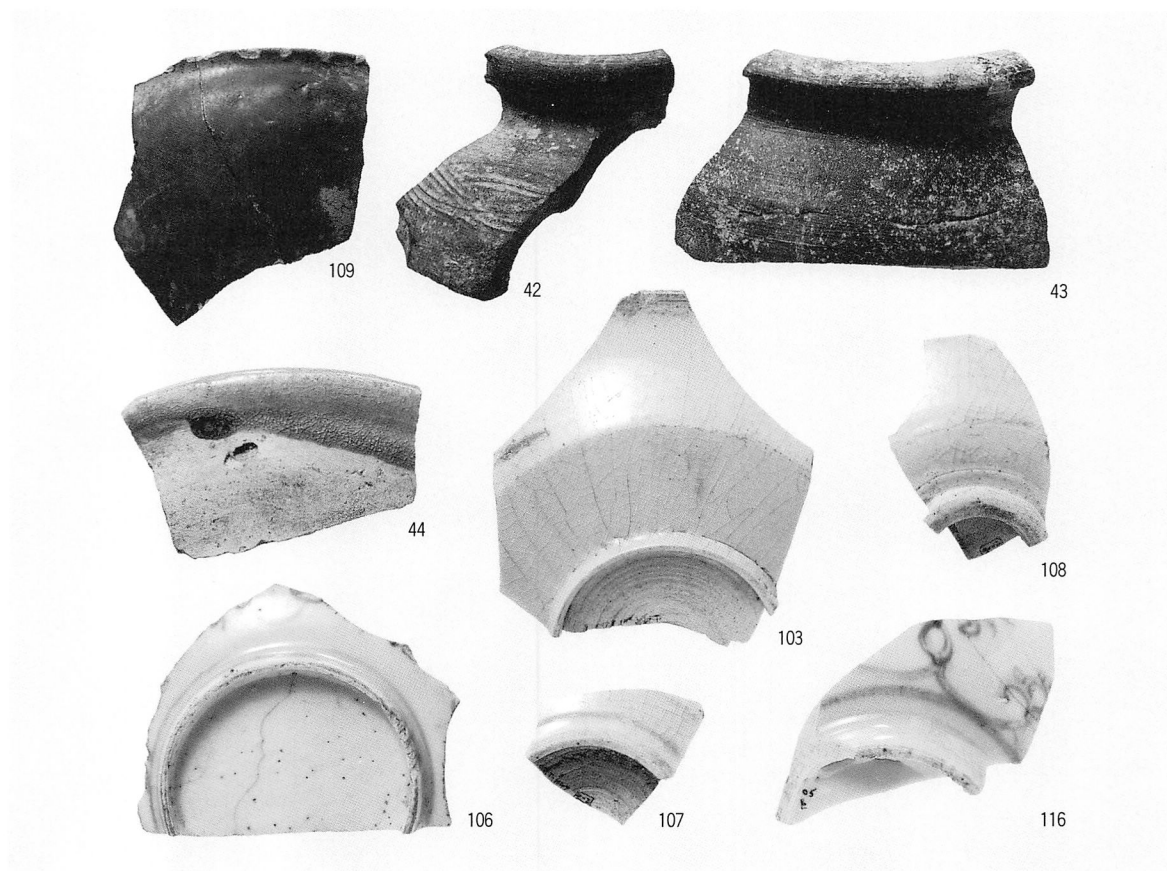
125



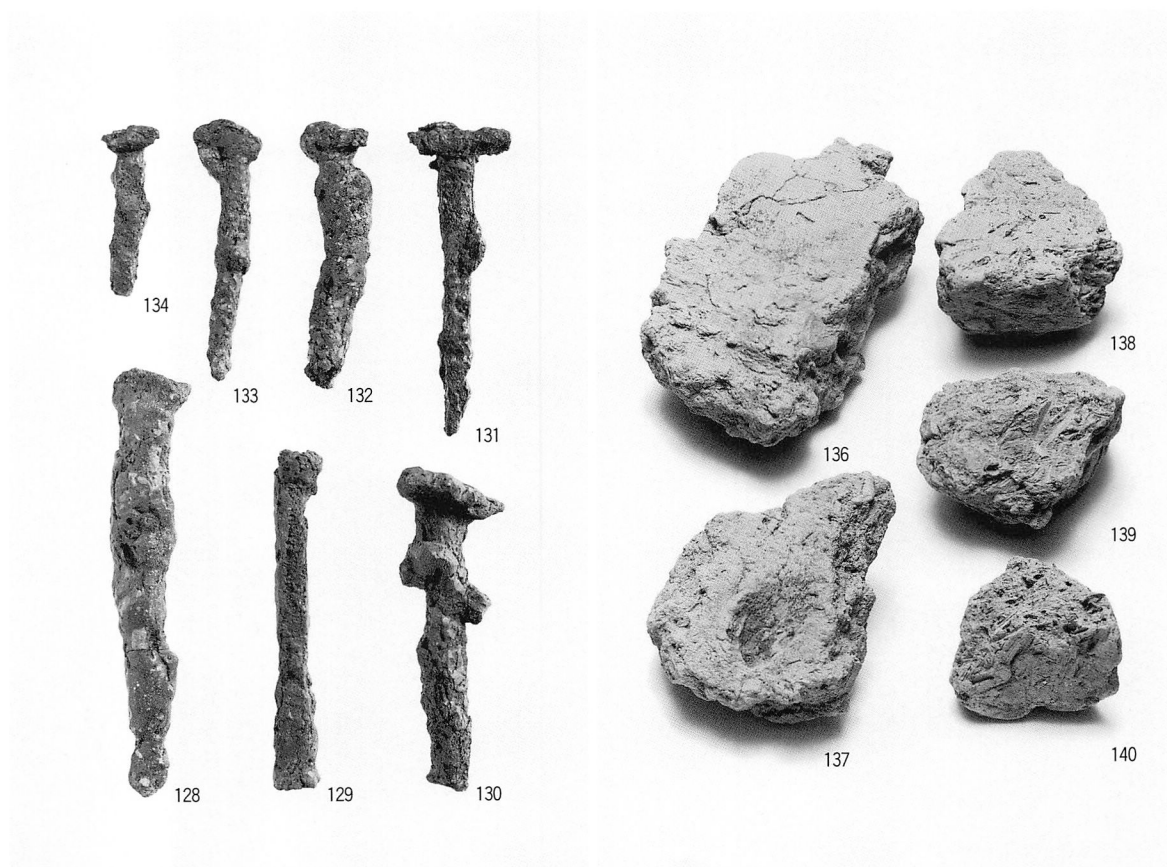
126



127

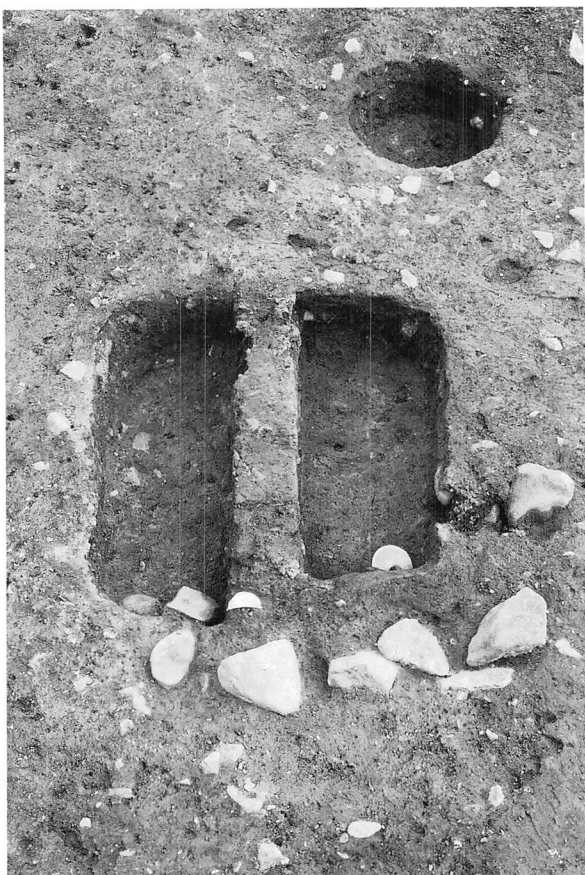


1 陶磁器



2 鉄釘

3 壁土



1 焼成土壙1 (西から)



2 倒れこんだ壁土 (北西から)



3 柱列179布掘掘形 (西から)



4 柱列179布掘掘形掘り下げ (西から)



1 庭園遺構全景 (東から)



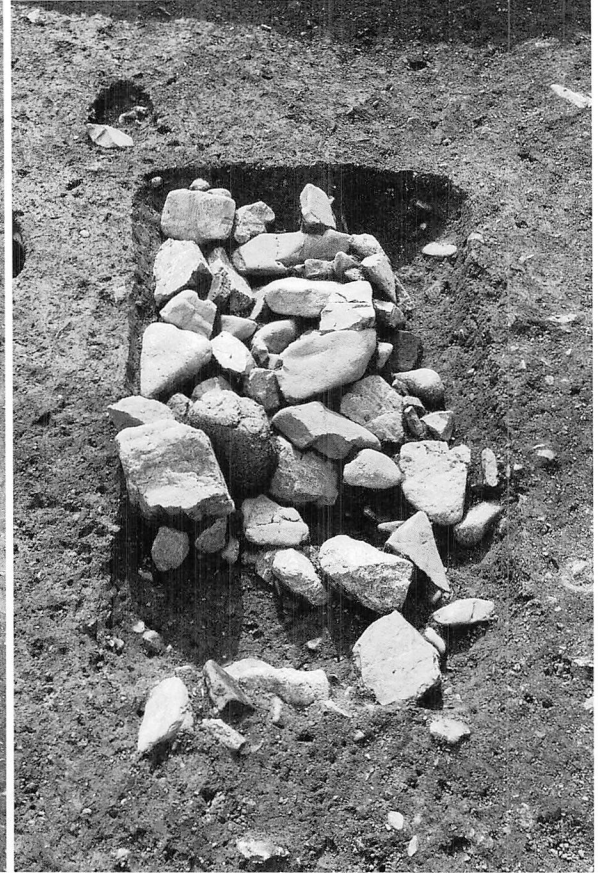
2 石敷き163 (北東から)



3 石敷き163下層 (南西から)



1 井戸27 (北から)



2 集石125 (北から)



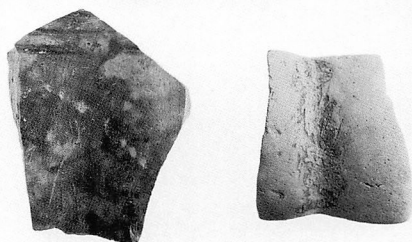
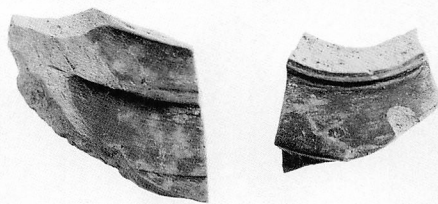
3 集石12 (西から)



115



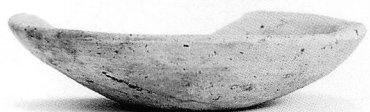
110



119



111



109



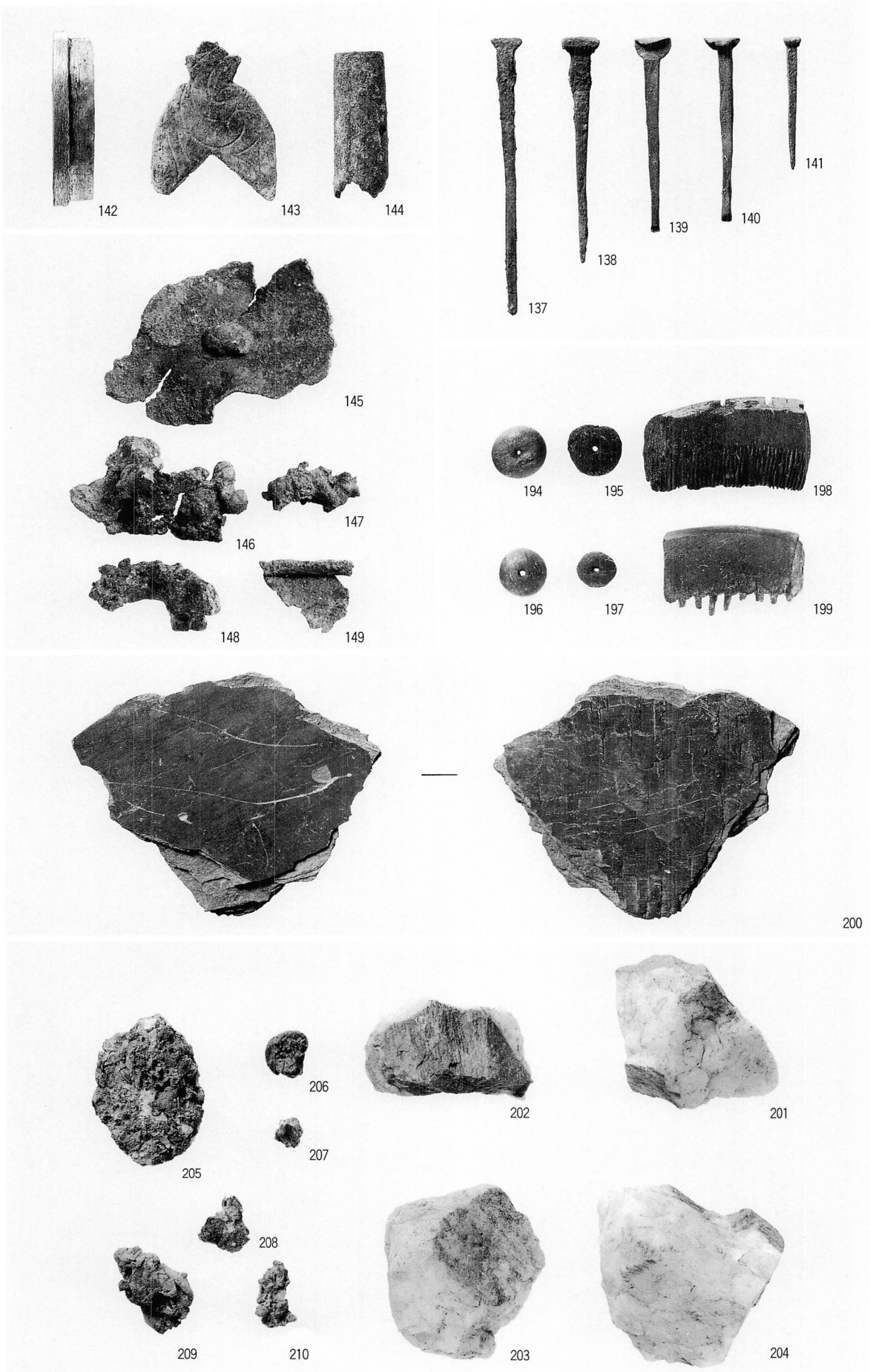
116



120



121



京都市内遺跡発掘調査報告

平成17年度

発行日 2006年3月31日
発行 京都市文化市民局
住所 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488
編集 (財)京都市埋蔵文化財研究所
住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>
印刷 真 陽 社